

---

# 狛闇師 ～ 刹那の魔 ～

雷紋寺 音弥

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

猟闇師 〽 刹那の魔 〽

### 【Nコード】

N1919X

### 【作者名】

雷紋寺 音弥

### 【あらすじ】

本当にあつた呪いの館。

新春特番として行われた怪奇番組の生放送中、番組プロデューサーの眼球が破裂して死亡するという怪事件が起きた。

事件の報を耳にした外法使い犬崎紅は、欲望渦巻く東京へと足を急がせる。

だが、そこで彼を待っていたのは、様々な陰謀の渦巻くテレビ業界の裏の顔や、陰陽師の末裔を名乗る青年、公安警察内部に存在する謎の機関であつた。

獵闇師シリーズ第八弾。

心霊映像に隠された恐るべき呪いの裏で、終末へのカウントダウンが始まる！！

ゝ 逢魔ヶ刻 怪死 ゝ (前書き)

目の前に映し出されたものが、全て真実とは限らない。  
闇はときに、一瞬の隙間を縫うようにして、日常の中に紛れ込む。

## く 逢魔ヶ刻 怪死 く

本当にあつた呪いの館。心霊ブームも下火になりつつある昨今、そんなサブタイトルが冠せられた番組があつたら、果たして人はどこまで興味を持つのだろうか。

オカルトマニアにとっては懐かしいと感じる人もいるかもしれないが、殆どの人は、そこまで興味も示さないはずだ。せいぜい、ちよつと怖い映像や、いかにもな演出溢れる再現映像を見て、その場だけキヤーキヤーと騒ぐだけだろう。

番組の収録が始まつたスタジオで、篠原まゆは、ふとそんなことを考えた。既に本番が始まつてはいるものの、自分は所詮、二流のタレント。怖い映像が流されるシーンで適当に震えて、後は質問を振られた際に、「怖いです」と涙目で訴えていればよい。そんな風に思いながら。

まゆにとって、芸能界という場所は一般人以上に日常の一部だった。

子役として、この業界に入つたのは小学校二年生とき。まだ、右も左もわからない中、将来はテレビの中で歌っている歌のお姉さんみたいになりたいという夢を叶えるため、両親がオーディションに連れて行ってくれた。

結果、まゆは無事にオーディションを通過し、それ以降は芸能界に身を置くこととなった。が、所詮まゆはどこにでもいる普通の子ども。子役といっても端役ばかりで、気がつけば中学生になっていた。

演技も平凡、歌など現役のアイドルには到底及ばない。これでは何のために自分が芸能界に入ったのかわからない。そして、高校生になった現在も、特に看板番組さえもらえずに今に至るというわけである。

今回の出演も、まゆにとっては棚ぼたのようなものだった。なんでも、本来であれば出演を予定していたレギュラーの女の子が、急遽出られなくなったとのことで、急に代役の仕事を回されたのだ。

要するに、穴埋め要因として呼ばただけということだ。なんとも情けない話であるが、まあ、仕事が来ないよりはマシであろう。それに、普段は端役しかもらえない自分が、こうしてバラエティ番組のゲストとして呼ばただけでも奇跡に等しい。

司会者の台詞を横に聞きながら、まゆはふと隣の席に座っている男の方へ目をやった。

そこにいたのは、まゆよりも一回りほど年齢を重ねていると思われる、長身で長髪の男だった。歳は、二十代後半か三十歳になったばかりだろうか。妙に軽薄そうな表情で、服装もホストクラブに似そうな感じの男である。使っている男性物の香水の匂いが、先ほどからまゆの鼻先に漂ってきて仕方がない。

初め、スタジオの裏で会ったとき、まゆはこの男もゲストのタレントだろうと思った。なにしろ、ここまで露骨に周りを意識して格好をつけているのだ。大方、元男性アイドルグループの一員か、まゆの知らないイケメン俳優の一人ではないかと思っていた。

だが、そんなまゆの考えは、スタッフから説明を受けた瞬間にひ

つくり返された。

まゆの隣にいる男の名は、御鶴木魁<sup>みつるぎかい</sup>。あんな格好をしているが、なんと今を生きる陰陽師の末裔ということらしい。その軽薄そうな顔とホストのような服装からは想像できないが、この業界では比較的名だそう。最近では様々な心霊番組に顔を出し、かなりの金を稼いでいるという噂もあった。

心霊番組にはお約束の、現代を生きる霊能力者。なんと胡散臭い男であるが、番組としては、こういう男がいた方が盛り上がるのだろう。とりあえず、イケメンが出ていれば良いという視聴者がいる限り、寺の坊さんや自称霊能力者の婆さん、単に怖い話が好きなだけの中年男などを置いておくより、視聴率が取れるのかもしれない。

もっとも、そんなことは、頭では思っても決して口には出せない。魁の隣にいる男の存在が、まゆにそうさせている。

先ほどから、始終無言のまま微動だにしない無愛想な男。陰陽師である魁の弟子ということらしいが、その格好は師匠よりもさらにいかげわしい。

癖のある短い髪の毛を赤に近い茶色に染め、ド派手な色のアロハシャツに身を包んでいる。スタジオの中でもサングラスは外さず、その目がどこを見ているのかさえわからない。そんなヤクザ者のような外見から、まゆは魁の弟子というよりは、男がボディガードかなにかではないかと勘繰ったほどだ。

男の全身から発せられる無言の威圧感。それは、魁を挟んで反対側にいるまゆにもはつきりとわかった。苛立っているのとは少し違

う。しかし、他人を容易に寄せ付けない何かはある。まるで、自分の師匠の側に、穢れた者が近寄らないよう見張っているかのようにして。

（つと、いけない。いくら下らない心靈番組でも、少しは真面目にやらないとね……）

代役とはいえ、まゆにとっては初めてのバラエティ番組出演。しかも、実はこの番組、生放送の真っ最中なのだ。よほどの無茶ぶりをされない限り、ヘマをやらかすことはないだろうが、あまりぼうつとしているのも考えものだった。

気を取り直し、まゆはスタジオの大画面に映し出されている再現映像に目をやった。どうやら視聴者から寄せられたはがきの内容を元に、恐怖体験を再現したものを流しているようだ。

暗い廃病院を、懐中電灯の灯り一つで進む男女のグループ。恐らく、廃墟探検にやってきた大学生だろう。怖がる者、辺りを散策しながら冷静に分析する者、わざとふざけて騒ぐ者、色々という。

なんというか、まあお約束の展開だとまゆは思った。どうせ、この先で何かよからぬことをして、霊を怒らせた結果、怪奇現象に遭遇するのだろう。

案の定、先ほど悪ふざけをしていた者の一人が、廃病院に残されていた患者のカルテを持ち出した。帰り際、怯える女の子の前でも余裕の態度を取っていたが、しばらくして様子がおかしくなってきた。

病院から持ち出したカルテを、戦利品として家にまで持ち帰って



しまったお調子者の男。だが、深夜、男が寝静まった際に、なにやら幻聴のようなものが聞こえてきた。そして、最後は男の枕元に、顔面蒼白な気味の悪い病人の霊が現れて再現映像が幕を閉じた。

観客席の女性たちが、わざとらしい悲鳴を上げて怖がっている。まゆも、一応は怖がっている素振りを見せるものの、内心はそのままで怖いとは思っていないかった。

廃墟から戦利品を持ち出して祟られるなど、今やどこにでもある怪談話の一つだ。まゆも、初めて聞いたときは怖くて眠れなくなつた記憶があるが、今となつては馬鹿らしい子ども騙しの話だとは思っていない。

だいたい、病院からカルテを盗んで、なんで病人の幽霊が男の枕元にやってくるのか。カルテは患者の物ではなく病院の物なのだから、普通は医者や看護士の霊が現れるのが筋ではないか。もっとも、病院内では医者が死ぬことはなくとも患者が亡くなることはあるため、患者の幽霊が出ると言われれば納得せざるを得ないが……それでも、やはりアイテムと幽霊の組み合わせが上手くない気がする。

生放送でやっているとはいえ、こんな低レベルな怪談話で盛り上げられるとは、かなりお目出度い連中だ。隣の男、御鶴木魁が本物の陰陽師かどうかは置いておくとしても、わざわざ霊能力者の類まで呼ぶほどの番組なのだろうか。

映像が終わり、ふと、まゆがそんなことを考えた時、司会を務めている女子アナが怯えた表情でマイクを握った。

「いや、怖かったですね……。でも、今日はこれだけでは終わリません。なんと……今日、この場に、我らが ミラクルゾーン のス

タッフが決死の思いで撮影した、本物のお化け屋敷探索映像があるんです！ 今からそれを、皆さんにも特別にお見せしましょう！」

司会者の声に合わせ、再び画面に映像が映し出される。真黒な背景に、血の様な赤い色で、 恐怖！ 本当にあつた呪いの館！！ という文字が書かれている。

いよいよ、本日の番組のメインが始まったのだ。ちなみに、司会者の言っていた ミラクルゾーン とは、このバラエティ番組のタイトルである。正しくは、 奇跡空間ミラクルゾーン 。今日は心霊物を特集しているが、それ以外にも様々な怪奇、超常現象などを、幅広く扱っている番組でもある。

映像は、曇天の空の下に置かれた一件の屋敷の前から始まった。先ほどのような再現映像ではなく、どうやら本当に現地に行つて、実際に撮影を敢行したもののようだった。

ボロボロの、今は使われていない和風の家。木造の日本家屋というにしては、妙に小ぢんまりしていて格式がない。どちらかと言うと、あれは昭和の初期に建てられた、木と土壁によって造られた家といった方が正しかった。

戦争で焼け残ったのか、それとも戦後の物資の無い中で、高度経済成長期以前に建てられたものなのか。そのような難しいところまで、まゆの頭は回らない。ただ、家の中に広がるじめじめとした陰鬱な空気と、壁に染みついたカビの香りだけは、画面越しにも感じられた。

調査班に同行してレポートを行っているのは、まゆと同じくらいの年齢の少女だ。どうやら、いつもはこの番組にレギュラーとして

登場しているらしく、今のまゆは彼女の代役だった。腰まで垂らした黒髪に、なぜかゴシックロリータ風の服装に身を包んでいる。なぜ、そんな格好で幽霊屋敷のレポートを行うのかはわからないが、あれが彼女の芸風ということなのだろうか。

染みの残る天井、崩れた土壁、そして埃だらけの畳。それらを通り抜け、家の最深部と思われる部屋まで来たところで、スタッフが少女に押入れの襖を開けるように指示を出した。怯えながらも、少女はそつと襖に手をかけ、それを横に動かそうとする。

開かない。なぜだか知らないが、襖は少女が全身の力を込めても、まったく微動だにしていない。

画面に映し出された映像を見ながら、さすがのまゆも、これはおかしいと思った。普通、何かがつかえているのであったとしても、襖は少しだけ揺れ動くはずだ。ところが、映像から確認する限りでは、襖はまったくといっていいほど動いていない。まるで、空間ごと固定されてしまったかのように、しっかりと枠に貼り付いてしまっている。

結局、少女の力だけではどうにもならないとわかり、奥からスタッフの一人が顔を出した。恐らくはADの一人だろう。二人がかりで力を込めるが、やはり襖は開かない。

湿気が多く、建てつけも悪いからだろうか。それとも、何か超常的な力が働いて、襖を向こう側から押さえつけているのだろうか。

開かない襖に苛立ったのか、とうとうスタッフの男が乱暴に襖を蹴り飛ばした。瞬間、襖が大きな音を立てて破れ、中から錆びついた色の不気味な液体が溢れ出した。

悲鳴と絶叫。画面の中からだけでなく、それは会場にいた観客からも巻き起こった。あまりのことに、さすがのまゆも口元を手で覆って息を飲み込んだ。

下らないお化け屋敷探索だと思っていたのに、いったいこの展開はなんなのだろう。まさか、少し襖を蹴っただけで、あんなものが飛び出して来るなんて。いったい、なにがどうなって、押入れの中に液体などを閉じ込めていたのだろうか。

震える指で、画面の中の少女が赤黒い液体の中に散っていた何かを指差した。ADの男が拾い上げると、それはなんと人間の毛髪。細長く、それでいて決して干切れることのなさそうな、いやらしくまとわりついてくるような黒い髪。赤錆びのような液体の中に浸っていたにも関わらず、それは今もなお生前の艶を保ち続けているような気がして仕方がない。

薄気味悪そうな顔をして、ADの男が髪の毛を畳みの上に放り投げた。まさか、こんなことになるとは思っていなかったのだろう。慌てて洗面所に駆け込むと、他のスタッフからペットボトルに入った水をもらい、手についた液体を洗い流した。

漆黒の髪と奇妙な液体。それらを洗い流したところで、今度は男が妙なことに気が付いた。

水が流れていない。洗面台に溜まった水の上で、洗い落とされた髪の毛が静かに揺れている。

家が古く、何かが詰まっているのだろうか。本当は嫌だったが、男は再び水の中に手を入れて、排水溝の奥に詰まっているものを引

っ張り出した。

「うわっ!!」

男の声に合わせ、会場からも小さな悲鳴が聞こえてくる。男の指には、先ほどと同じような黒髪が、互いに絡まった状態で巻き付いていた。これが、排水溝の中に詰まっていたのか。しかし、なぜ、こんな場所に大量の髪の毛があるのだろうか。先ほどの液体といい、この家はやはりおかしい。

結局、最終的には満足な調査もできず、調査班は古びた家を後にした。映像を見ていたまゆの中に残されたのは、言い様のない不快感。得体の知れない者に対する、純粹なる恐怖心といった方が正しかった。

先ほどまでわざとらしい悲鳴で溢れていた会場は、いつしか静まり返っていた。再現映像などではない、生のテレビカメラで撮影された実録映像。その生々しさに、まゆも、他のゲストも、そして観客たちさえも、何も言えずに飲み込まれていた。

「はぁ………実に恐ろしい映像でしたねぇ………」

司会を務めている女子アナが、重苦しい溜息と共に言った。会場は未だ静まり返っており、唯一、まゆの隣にいる魁だけが、余裕の表情を浮かべている。

「さて、皆さん。これだけでも、かなり恐ろしい映像だったと思います………実は、この話には続きがあるんです。なんと、この映像の撮影後、撮影スタッフもまた奇妙な出来事に巻き込まれてしまったんです!!」

観客たちが、途端にどよめき始めた。

怪奇番組を作成中に、スタッフが怪現象に見舞われるという話は珍しくない。だが、まさかこのタイミングでこんな話が出て来るとは、誰が予想しただろうか。失敗の許されない生放送で、この流れ。普段は出来過ぎた話に首を傾げる者もいたかもしれないが、今日に限って、それはなかった。

「それでは、我々ミラクルゾーン調査班が遭遇した、世にも恐ろしい怪奇現象とはなにか!? 続けて、再現映像にてご覧ください!」

しばらく間を置くことで、いつもの調子を取り戻したのだろうか。司会の女性は再び普段の声で喋り出し、画面が再現映像のそれに切り変わった。

先ほどの映像とは明らかに異なる、いかにも作り物めいた再現ドラマ。だが、今度は誰もが無言のまま、画面に映し出された映像に見入っている。今や、観客たちは完全に場内の空気に飲まれ、その感情の一端は、番組を動かしている者たちの手中にあった。

番組の撮影会場となっている場所の裏、様々な機材が積まれた、決して視聴者の目には映らない場所で、室井徹雄は自分の関わった番組の出来に満足げな表情を浮かべていた。

通常、こういった心霊番組では、収録映像を流すのが常である。

ここだけの話になるが、心霊特集などは、俗に言う やらせ も多い。収録映像を流すのは、そのトリックを視聴者に見破られないようにするために、不要な部分をカットできる強みがあるからである。

だが、今回の放送は、正真正銘の生放送。決して失敗が許されない、一発勝負の現場である。

テレビ業界に少しでも通じた者であれば、こういった番組の生放送が、いかに綱渡りなのかわかるだろう。司会やゲストがヘマをしないかどうかは勿論のこと、音響や照明、ADの動きなど、様々なことに気を配らねばならない。

室井が見る限りでは、それらは今のところ、なんとか上手く機能しているらしかった。唯一の不安要素と言えば、代役でスタジオに入っている篠原まゆだ。彼女が妙なことをしてかして、番組そのものをぶち壊しにしかねないかどうか。それだけが不安だったが、思ったよりも大人しくしている。

どうせ、彼女は今日だけの代役なのだ。室井はまゆについてはあまりよく知らなかったが、大方、売れない二流のタレントだろう。枯れ木も花の賑わいということ、とりあえずは大人しく座ってくれてさえいればよい。そう思っていた。

「おう、室井。番組の方は、順調みたいじゃないか」

突然、後ろから声をかけられ、室井は思わず声のした方に降り返った。目の前に現れたのは、恰幅の良い眼鏡の男。この番組のプロデューサーを務めている、西岡悟にしおかさとるだった。

「西岡さん……。確か、昨日は酷い風邪だと言ってましたよね。ちゃんと寝てなくて、大丈夫なんですか？」

丸めた台本を片手に、室井が言う。その言葉の通り、西岡の口からは、時折湿った咳が漏れていた。

「なに言ってるやがる、この野郎。プロデューサーが、本放送の日に家で寝てられるか。それに……。そう言うお前だって、俺と同じ風邪ひきだろっが」

西岡が、負けじと室井に言い返した。かくいう室井もまた、実は数日前から体調が優れていない。西岡ほどではないが、やはり時折、喉の奥から湿った咳が這い上るようにして外に出て来る。

「ったく……。それにしても、嫌な時に風邪をひいたもんだな。例のお化け屋敷の映像、ちゃんと、あの陰陽師の若造に除霊させたつてのに……。まだ、なんか身体の中に残ってる気がするぞ」

眼鏡を取り外し、片目を擦りながら西岡が言った。室井も頷くと、再びスタジオの方に顔を向け、無言のままカメラマンや照明などのスタッフに指示を出す。大声を出すことはできないので、無論、身振り手振りを活用してのことなのだ。

ディレクターという仕事は、即ち現場の監督だ。ここで失敗すれば、その責任は全て自分が被らなければならない。否応なしに緊張してくるが、それも仕方ない。この生放送を成功させれば、周りからの自分に対する評価も上がるのだろうから。

どんなやり方でも、とりあえずは結果を出せばいい。そのためには、まずは目の前の仕事をきちんと片付けることだ。ふと、そん



な当たり前のことを考えながら、室井は隣に座っている西岡を見た。

「ちよつ……西岡さん！ そんなに目を擦ったら、変なバイキンが入りますって！！」

思わず、口から声が漏れていた。スタジオのマイクに拾われなかったか、一瞬だけ心配になったが、それ以上に室井は西岡の奇行に目がいった。

パイプ椅子に座ったまま、西岡は執拗に自分の右目を掻いていた。眼鏡を外し、まるで動物アレルギーに苦しむ子どものようになり、必死になって目を擦っている。その目は酷く充血していたが、西岡は自分の目が腫れることなどお構いなしのようなだった。

「ちよつと、西岡さんってば！ 目、擦り過ぎじゃ……」

忠告を受けてもなお、目を擦り続ける西岡に、室井は少々苛立った表情になって言った。が、次の瞬間、自分の方へ向いた西岡の顔を見て、室井は言葉を失い自分の息を飲み込んだ。

「ひいっ……！！」

そこにあつたのは、巨大な眼球だった。西岡の擦っていた右の目が、大きく膨らんで室井を見ている。その大きさは、既に顔の四分の一ほどまでに膨れ上がり、西岡の口から掠れた呻き声が漏れていた。

「あ……あが……がぁ……」

西岡の震える手が、そのまま室井に伸ばされる。だが、その手は

室井に届くことはなく、西岡は身体を仰け反らせて、そのまま椅子ごと後ろに大きくひっくり返った。

「目……目……」

辛うじて言葉になるものを発すると、西岡は右手で顔を、目を押さえながら室井に迫った。その手は酷く痙攣し、口からはだらしなく涎が垂れている。右目が大きく膨れ上がったその姿は、既に室井の知る西岡のものではなかった。

「大丈夫ですか！ なにが起きたんです！？」

さすがに、異常な事態が起きていることに気が付いたのだろうか。手の空いていた他のスタッフ達も集まり、西岡の周りを一斉に取り囲んでその顔を除きこむ。

だが、そうして集まった者たちは、直ぐに一斉に悲鳴をあげて動かなくなった。いや、動けなかったと言った方が正しかった。

泡を吹き、頭を抱えて苦しむ西岡の右目は、既に野球ボールよりも大きく肥大化していた。それは彼の頭蓋骨の中に収まりきらず、臉を押し上げて中から醜くはみ出している。

いつたい、これはなんなのだ。なぜ、プロデューサーの目が、いきなりこうも膨れ上がったのか。

誰も答えを出せないまま、無言の時間が流れていった。それは、時間にしてたった数秒のものだったが、その場に居合わせた誰も、数十分近い出来事のように感じていた。

バンッ！！

突然、風船の弾けるような音がして、周りにいたスタッフたちの顔に生温かいものが降り注いだ。生臭く、それでいて赤黒い。スタッフの一人が指で顔を擦ると、ぬるぬるとした感触と共に、その指先が赤く染まった。

「う、うわあああつ！！」

「いやあああつ！！」

自分たちの顔に、身体に降り注いだもの。それが碎け散った西岡の眼球と頭部の欠片だということに気がついた瞬間、スタジオは恐ろしいまでの悲鳴と叫び声の嵐に包まれた。

こうなると、もうパニックは止まらない。何が起きたのかわからないまま、観客席の方がわかにはざわつきだす。その間にも、身体に血や肉を浴びたスタッフの一人が錯乱し、他の一人は泣きながらその場にへたり込んでいた。

心霊番組の生放送会場で、突如として起きた恐るべきハプニング。しかし、その原因を答えられる者など、この場には存在しなかった。ただ一人、ゲスト席に座っている魁だけが、妙に訝しげな表情をしながら碎け散った西岡のことを睨みつけていた。

収録を終えたスタジオの脇にある洗面所で、まゆは今しがたスタジオで起きたことを思い出していた。

番組の途中、スタジオに入ってきたプロデューサー。名前は確か、西岡とか言ったか。その男が突然目を掻きむしり始めたかと思うと、次の瞬間、スタッフ達がわらわらと西岡の周りに集まってきた。そして、風船の弾けるような音と共に血飛沫が飛び、辺りは一瞬にして悲鳴と絶叫に包まれたのである。

生放送の本番中、突如として起きた謎のハプニング。スタッフからは、撮影機材の転倒によって、下にいたプロデューサーが重傷を負ったと説明された。

撮影中に起きた不慮の事故。そう片付けてしまえば、どんなに楽か。だが、まゆは自分でそうできないことを知っている。あのとき、再現映像から目を離して、たまたま別の方向を向いたまま考え事をしていたのが災いした。

彼女は見てしまったのだ。プロデューサーの西岡の顔が大きく腫れ上がり、その中から野球ボール大にまで膨れ上がった眼球が飛び出すのを。そして、何かの弾けるような音と共に、その眼球を中心に、西岡の顔が粉々に砕け散るのを。

（ううっ、気持ち悪い……。いったい、あれ、なんだったの……）

思い出しただけで、胃の奥から酸っぱいものが込み上げて来た。自分が直接血を浴びたわけでもないのに、鼻の奥にまでどす黒い血の臭いが漂ってくるような気がして仕方がない。

瞬間、胃の中から這い上がってきたものを、まゆは本能のままに便器の中にぶちまけた。止めようと思っても、あのときの西岡の姿が何度も頭の中で再生され、胃の中が空っぽになるまで吐き続けた。

「あつ……かつ……はぁ……」

気がつくとき、自分の頬を熱いものが伝わっている感触がした。知らずの内に、まゆは泣いていたようだった。

あれは、絶対に普通ではない。西岡は、恐らくは助からないだろう。あんな死に方を目の前で見て、普通でいるという方がおかしい話だ。

（だ、だめ……。また、戻しそう……）

もう、胃の中には吐く物など何もないというのに、吐き気だけがまゆの背中から喉の奥にかけて伝わってくる。吐きたくても吐けない。その苦しみだけが、何度も何度も押し寄せる波のようにまゆを襲う。

どれくらい、そうしていただろうか。

やがて、吐き疲れてしまったまゆは、便器にもたれかかるようにして倒れていた。遠くから、誰かの近づいて来る足音が聞こえてくる。

こんなみつともない格好を、できれば他人には見られたくない。そう思っても、立ち上がる気力が残されていなかった。何かを考えようとすると、それだけで先ほどの西岡の姿が頭に蘇りそうで、考えたくても考えられない。

やがて、聞こえてきた足音は、まゆの後ろでぴたりと止まった。そして、まゆが後ろを振り返ろうとした瞬間、こちらを気遣う様な優しい声がした。

「あの……大丈夫、ですか？」

声は、まゆが思っていたよりも若い。もしかすると、同年代くらいの少女かもしれないと思い、まゆは口元を拭きながらゆっくりと後ろを向いた。

「あ……」

果たして、そこにいたのは、まゆの想像した通りの相手だった。

飾り気のない服装に身を包んだ、自分と同じくらいの年齢の少女。スタッフの一人とは思えないが、それにしても地味だ。肩まで伸びた髪の毛はうっすらと茶色く染まっていたが、それ以外はどこにもいる、普通の女の子といった感じである。

「ご、ごめんなさい、変なところ見せちゃって……。なんか、ちょっと気持ち悪くって……」

自分の吐瀉物を隠すようにして、まゆはそろそろと立ち上がる。言いながら、咄嗟にトイレのレバーを倒し、自分の吐いたものを流して見えないようにした。

「本当に、大丈夫ですか？　ちょっと、外で休んだ方がいいかもしれませんよ？」

「う、うん……」

「だったら、途中まで私も一緒に行きます。また、廊下のどこかで具合が悪くなったりしたら、大変ですから」

「あ、ありがとう……」

むかつく胃を押さえながら、まゆは力なく頷いて言った。

初対面だというのに、目の前の少女は、なぜこうも自分に優しくしてくれるのか。いや、そんなことは、今はどうでもいい。このまま洗面所で倒れていても、この気持ちの悪さは収まりそうにない。

見ず知らずの相手に、それも自分と同じくらい歳の子に甘えるなど、本当はあまり好ましいことではない。それでもまゆは、今の自分がどうにもならないことを知っていたので、あえて少女の好意に甘えさせてもらうことにした。

少女にまゆが案内された場所は、建物の屋上にあるちょっとした庭のような場所だった。夜風に当てられて肌寒いかとも思ったが、春先の風は、そこまで意地の悪いものではなかった。

ビルの屋上と言えば、殺風景な室外機の森を想像する人も多いだろう。だが、昨今のエコブームによって、最近は屋上に緑を植えているビルも増えた。このビルも、そんな建物の一つであり、屋上は田舎の池を再現したかのような作りになっていた。

こういった物を、巷では果たしてなんと言っていたか。確か、ピオトープなどという名前で呼ばれていたような気がする。そう、とりとめもないことを考えていると、先ほどの少女がペットボトルに入った水を持ってやってきた。

「はい、お水です。外の空気を吸って、少しは落ちつきましたか？」

「うん……。なんか、ちょっとだけ気持ち悪いのも収まった気がする……」

「よかった。ここ、空気も綺麗ですし、眺めもいいですからね」

少女が屈託のない笑顔をまゆに向けてくる。演技のようなものは微塵もない、純粹にこちらの回復を喜んでくれている顔だ。今時、こんな笑顔で笑える人間など、なかなかどうして珍しい。

「なんか、色々と迷惑かけちゃったみたいね。ところで……パツと見じゃテレビ関係者に見えないけど……あなた、名前は？」

「ああ、ごめんさない。まだ、言ってませんでしたっけ」

自分で自分の頭を軽く叩き、少女が少しだけ恥ずかしそうにして言った。先ほどの様子からして、少々天然なところもあるようだ。見ず知らずのまゆを、ここまでして助けてくれるなど、面倒見だけはよいみたいだが。

「私、はせがわゆきの長谷川雪乃です。同じ事務所の子と一緒に、T・Driveというユニットでアイドルやってます」



「えっ、長谷川雪乃！？ ちょっと……マジで!？」

一瞬、まゆは自分の耳を疑った。

長谷川雪乃といえば、まゆとて知らないわけではない。それは彼女の口から出た、T・Driveという名も同じだ。

T・Driveは、今や国民的な人気を誇るアイドルグループの一つだ。昨今のアイドル達が好む、大勢で歌とダンスを披露する芸風とは異なり、彼女達は常に三人だけのメンバーで活動が続けている。

彼女達の出身は、元は業界内でも弱小として扱われていたプロダクションの一つだった。ところが、少し前から急激に頭角を現し始め、今では歌番組以外の出演も増えていると聞く。昨年の末にプロダクションの吸収合併が行われ、今では業界最大手であるj・mixに移籍していると聞くが、それでも人気は落ちることなく、確実にトップへの階段を昇り続けている。

子役から始まり、二流のタレントとして仕事を続けている自分とは大違いだとまゆは思った。

確かに、まゆとて自分の仕事を頑張っていないわけではない。ここ最近、昔に比べれば仕事も少しばかり回してもらえるようになった。子ども向け特撮番組の脇役や、学園ドラマのその他大勢の人など、決して目立つ役ではなかったが、そこでの頑張りがなければ、今日のように生放送の代役を任されることもなかったはずだ。

もつとも、その代役を引き受けた結果、あんなおぞましいものを見せられたのでは割に合わない。それに、やはり自分は雪乃とは違

い、まだまだ修行が足りないと思ってしまっ。

長谷川雪乃を名乗った目の前の少女は、実に地味な雰囲気をもっていた。およそ、国民的アイドルとは思えない、どこにでもいそうな女子高生のそれだ。

だが、まゆは知っている。ステージに立って歌っているときの雪乃が、時にT-Driveのリーダーである、鈴木夏樹すずもりなつきさえも凌ぐ輝きを持っていることを。生で歌っているところを見たことはなかったが、テレビ画面を通したもので、それは十分に伝わってきた。

その雪乃が、まさか素の状態ではここまで地味な少女だったとは色々なことが重なって、それらが次々に衝撃となってまゆに降りかかってくる。気がつく、まゆは自分の気分が悪いのも忘れ、しばし呆然とした顔で雪乃のを見つめていた。

「あの……どうしましたか？」

雪乃に言われ、ハッとした表情になって我に帰るまゆ。目の前には、不安そうにこちらを見つめる雪乃の顔がある。

「ああ、ごめんなさい。ちょっと驚いただけだから、気にしないで。まさか、私みたいな人間が、あの長谷川雪乃に会えたって思ったら、なんか驚いちゃって……」

「そんな……。私だって、まだまだですよ。それよりも、気分はどうですか？ まだ、どこか気持ち悪いとかありません？」

「うん、平気。でも……さすがに、このまま呼び捨てってのもマズイわよねえ……。業界では、そっちの方が売れてるんだし……長谷

川さん、とか呼ばなきゃだめかな？」

「あつ、別に構わないですよ。オフの時は、皆にも普通に名前ですんでもらってますし」

およそ、トップアイドルとは思えない、飾らない容姿と飾らない態度。不思議と好感が持てたまゆは、いつしか自分から雪乃に話しかけていた。

今日、あの撮影現場で起きた忌まわしい事件。スタッフは事故だと言つて聞かなかったが、まゆは自分の目が見たものが、決して間違いの類ではないと思つていた。

こんなことを言つて、果たして本当に笑われないか。一瞬だけ、そんな不安が頭をよぎったが、その時はその時として割り切ることにした。ここで誰かに話を聞いてもらわなければ、また、あの嫌な記憶が蘇ってきたときに、今度こそ耐えられなくなりそうで不安だった。

「ねえ、雪乃。これから話すこと……笑わないで、聞いてくれる？」

「えっ……。別に、構いませんけど……」

「実はね……。私、今日は心霊番組の生放送に出てただけ……そこで、凄い物を見ちゃったんだよね……」

「凄い物？」

雪乃の顔が、一瞬だけ曇った。まゆの表情を見て、これから語られることが、決して明るい話ではないということ悟ったのかもし

れない。

だが、ここまで来て話を止めるなど、今のまゆにはできなかった。一度、口が開いてしまうと、後は自分でも驚く程に多弁になっているのに気がついた。

生放送の本番中、プロデューサーの目玉が風船のように膨れ上がったこと。スタッフの影になってよく見えなかったが、確かにプロデューサーの頭が粉々に弾けたように見えたこと。そして、現場にいた関係者からは撮影機材の転倒と説明され、半ば強引にスタジオを退室させられたこと。最後に、生放送がぶち壊しになって終わったことを付け加え、まゆは自分の話を終えた。

「そつか……。それは、大変なことがあったんですね……」

きつと、こんな話は信じてもらえない。心のどこかでそう思っていたまゆだったが、雪乃の反応は至って真剣で真面目なものだった。

「あの……」

気まずい沈黙の後、雪乃が少しばかり遠慮がちにしてまゆを見た。

「実は、私の知り合いに、そういうのに詳しい人がいるんです。もし、迷惑じゃなかったらでいいんですけど……よかったら、その人に相談してみても構いませんか？」

「本当！？ でも……なんか、そこまでしてもらうのも、ちょっと悪いかなあ……」

「あつ、平気ですよ、それは。おかしい事件に巻き込まれて、誰も

信じてくれないっていう不安とか……私も、経験したことがありますから」

最後の方は、雪乃は少しだけ言葉を濁して言った。できれば、あまり思い出したくない。そんな顔をしながら、まゆから少しだけ視線を逸らして。

どちらにせよ、ここで悩んでいても仕方がない。これ以上は自分でも結論が出せそうになかったし、折角の好意を無下にするのも悪い気がする。

「だったら、ここは好意に甘えさせてもらっちゃおうかな？ どうせ、自分じゃ結論出せないだし……なんか、話したら少しスッキリしたしね」

本当は、完全にすっきりしたわけではない。あんな、スプラッタ―映画顔負けの死に様を見せつけられて、そうそう簡単に忘れられるはずがない。

それでもまゆは、大きく伸びをして雪乃に言った。それを見た雪乃にも、いつしか笑顔が戻っていた。

「よかったです。それじゃあ、私はこの辺で……」

「ええ、助かったわ。私、篠原まゆ。これでも、一応はタレントやつてるわ。雪乃ほど、売れてるわけじゃないけど……よかったら、また連絡頂戴」

「わかりました。私で力になれるかわかりませんが……まゆさんが見たものが本当だっていうのは、私も信じることにします」

そう言っで、雪乃は一足先に立ち上がると、まゆを残してその場  
に去った。その前に、互いに携帯電話を取り出して、軽く連絡先を  
交換して。なんというか、最後まで本当に絵に描いたような素直な  
子だとまゆは思った。

まゆの知っている情報では、雪乃は現在、高校二年生である。ち  
なみに、まゆは一つ上の高校三年。年下に励まされるというのも妙  
な気がしたが、今日のことに納得のゆかない自分のことを信じてく  
れただけで、今のまゆは満足だった。

> i 3 2 1 6 2 — 1 2 4 5 <

薄暗い、木造りの社の中で、九条照瑠は鉢植えの中にあるブナの木くじょうあきるの苗を撫でていた。

時折、根から昇って来る水の流れに耳を澄ますようにして、照瑠は指を止め、撫でる角度を変えてゆく。愛でるといよりは、自らが木に近づき、木のことをわかつてもらうように、照瑠は呼吸まで相手に合わせて意識を集中した。

実家が神社の照瑠にとって、これは修業の一環だ。今は亡き照瑠の母は、生前は地元でも名の知れた癒し手だった。俗にヒーリングと呼ばれる力の持ち主で、腰や肩の痛みを訴えるお年寄りを中心に、今を生きる神の使いとして知られていた。

触れただけで人を癒す。父から話には聞いていたが、照瑠も最初は半信半疑だった。そんな魔法のような力があれば、それこそ医者など要らない。オカルト漫画ではよくある話だが、現実になんな力が存在するなどは、照瑠も信じてはいなかった。

だが、そんな照瑠の日常は、昨年の六月に一変した。

盗掘者によって掘り起こされた遺物と、それに憑いていた太古の魔物。その魔物によって憑依された人間が、次々に凄惨な猟奇殺人事件を引き起こした。ハツ頭事件。それこそが、照瑠が霊的な存在の世界、向こう側の世界に関わった初めての出来事だった。

最終的には照瑠も巻き込まれ、怪物によって命を狙われる羽目に陥った。そんな彼女を助けてくれたのは、白金色の髪と赤い瞳、そ

れに雪のように白い肌を持った、不思議な少年だった。

犬崎紅。<sup>けんざきこう</sup> 照瑠の目の前に現れた少年が名乗った名前だ。彼は自分のことを、闇を用いて闇を抜う、赫<sup>あか</sup>の一族の末裔と説明した。そして、事件の解決後は、なぜか照瑠の住んでいる火乃澤町<sup>ほのさわ</sup>に住みついて、そのまま同じ学校に通っている。

紅が、いったい何を考えて照瑠の町に住んでいるのか。それは、照瑠自身もわからない。彼の説明では、この地は 八ッ頭事件の影響で、陰湿な気が集まりやすい場所になってしまったとのこと。それ故に、同様の心霊事件が起こりやすい土地柄にあり、紅はそれらの脅威から人々を守るために町に残っていると言っていた。

本当のところ、その話がどこまで真実なのか、今の照瑠には証明する術がない。ただ、紅の言っていることも嘘ではないようで、彼が町に現れてから、既に何件もの心霊事件が起きていた。その内のいくつかには、照瑠も自分の意思とは関係なく巻き込まれてしまったこともある。

中でも照瑠の心に未だ影を落としているのが、去年の晩秋に起きた 魄繋ぎ事件 だった。医学的には既に死亡している人間を、狂気の術で現世に生きながらえさせる儀式。その儀式によって仮初の生を与えられていた友人を、照瑠は救うことができなかった。

自分の中に、本当に不思議な力があるのなら。そして、自分が少しでもその力に目覚めていたのなら。まだ、彼女を救う術があったのかもしれない。否、彼女だけでなく、今までに関わってきた事件の犠牲者たちも、もしかすると救う手立てがあつたのかもしれない。

おこがましい、思い上がりのような考えであることは承知してい



る。それでも照瑠は、自分にも何かするための力が欲しいと願い、父に頼み込んで巫女としての修業をさせてもらうことにした。母と同じ、癒し手としての力。その力を手に入れるための、九条家に代々伝わる秘密の行を。

今、照瑠が行っているのも、そんな修業の一つである。鉢植えに植えられた木を、己の気力だけで癒し、育てる。自らの癒しの気で生命力を活性化させ、枯死させないように注意しながら。

その際に重要なのは、相手の気の流れを知ることだった。人間とは違い、植物は呼吸のリズムから身体の作りまで、全てが異なっている。気の流れもまた同様で、少しでも集中力を途切れさせれば、直ぐにつかめなくなってしまう。

最初の内は、照瑠もどうしていいかわからないことの方が多かった。だが、この数カ月で、随分とコツをつかめるようになったと思う。

現に、全盛期の母ほどではないにしろ、照瑠も確実に癒し手としては成長しつつあった。友人のちょっとした腹痛や頭痛程度であれば以前から治療することもできたし、今年の二月には、下らない騒動に巻き込まれ、その際に暴走する野球部員たちを鎮めて回ったこともある。紅ほどではないが、照瑠もまた霊能力者としての階段を、着実に昇っているところだった。

「ふう……。今日は、この辺で終わりにしようかな。葉っぱも随分、元気になったしね」

最後に、新緑の芽を軽く撫で、照瑠は鉢植えを抱えて部屋を出た。薄暗い本殿を抜けて拝殿に戻ると、そこには父である九条穂高くじょうほたかが待

っていた。

「やあ、照瑠。今日の修業は、終わったかい？」

「ええ、勿論よ。それよりも、これ見て、お父さん。とうとう、全部の枝に芽が出るようになったのよ」

「おお、これは凄いね。この分なら、後少し修業を積みめば、照瑠も癒し手としての仕事が本格的にできるようになるかな？」

「うーん……そうだいいんだけど……。なんか、今一つ実感が湧かないのよねえ……。凄い力を使えるようになってるのはわかるんだけど、別に私自身に変化があるわけじゃないし……」

自分の掌をまじまじと見つめながら、少しばかりの不安を漏らす照瑠。確かに、癒し手としての力は、修業前とは比べ物にならないほどにまで上がっている。だが、それで自分の中に何かの変化があるかというと、別にそういうわけでもない。

修業を終えた後は、普段通りに朝食を摂り、学校へ行く。そしてこれまた普段通りに学校生活をこなし、帰ってきたら、また修行。その繰り返しだ。霊能力者として覚醒しつつはあるのだろうが、その過程で霊的なパワーのような物が降りて来て……それこそ、いきなり頭がよくなったり、人格が変わってしまったりするような、妙なことは起きてはいない。

まあ、起きたら起きたで困るのだが、それでも照瑠は未だ自分の力に半信半疑だった。犬崎紅のような戦う霊能力者と比べると、どうしても今の自分に納得ができなくなってしまう。

「どうしたんだい、照瑠。いつになく、難しい顔をして？」

照瑠の微妙な気持ちの変化に気づいてか、穂高が気遣うような声をかけた。その声に引き戻され、照瑠もまた現実に戻って首を振った。

「あつ、なんでもないの。それよりも、早く朝ご飯食べないと、学校に遅刻しちゃうわ。お父さん、悪いけど、この子をお願いね」

そう言つて、手にした鉢植えを父に押しつけ、照瑠は巫女の衣装のまま社務所に続く廊下を走って行った。こうして見ると、格好こそ巫女の姿だが、照瑠はどこにでもいる普通の女子高生だ。父である穂高から見ても、そう思える。

本当は、このまま静かに普通の女の子として育てて欲しい。時折、穂高は照瑠の姿を見てそう思う。もっとも、この九条家に生まれた以上、いつかは癒し手として覚醒して後を継がねばならない。願わくば、凶暴な向こう側の世界の住人たちを、己の力で払いのけるだけの力を身につけて。

自分の手に残された植木鉢に目を移しながら、穂高はそんなことを考えた。よくよく見ると、鉢植えに根付いた小さな木からは、若々しい黄緑色の葉があちこちから顔をのぞかせていた。

学校に到着し、いつものように教室のドアをくぐった照瑠は、その先に見慣れた少女の姿を見た。

「照瑠〜！ おっはよ〜！！」

照瑠の姿を見つけるや否や、その少女が手を振って叫ぶ。照瑠と同じ制服を着ていながら、その身長は小学生ほどしかない。照瑠の友人であり、都市伝説オタクで有名な少女、嶋本亜衣だ。しまもとあい

「相変わらず、朝から元気ねえ……。なにか、特別にいいことでもあったの？」

訝しげな表情を浮かべつつ、照瑠は見降ろすようにして亜衣に訊いた。

亜衣が上機嫌になるとき。それは、新しい都市伝説のネタを仕入れたときか、おいしい物が食べられる店を見つけたときが殆どである。後者であれば喜ばしいが、前者であれば、願わくばご遠慮願いたい。

「ねえ、照瑠。昨日の夜にやってた、奇跡空間ミラクルゾーン見た？」

机の上に手を置いて、亜衣が身体を前のめりにして尋ねてきた。いきなりわけのわからない話を振られ、しばし困惑する照瑠。時折、亜衣はこうやって、周りの空気を読まずにいきなり話を始めることがある。

「ちょっと、いきなり何よ。その、あなたが言う奇跡なんたらつての……私は全然知らないんだけど……」

「えっ、そうなの？ 私はいつも、録画までして見ているお勧め番

組なんだけどね。今度、照瑠も見てみるといいよ」

「なるほど、テレビ番組か。それだったら、悪いけど遠慮しておくわ。歌番組ならまだいいけど……あなたの勧める番組じゃ、大方、下らないオカルト番組の類に決まってるからね」

「むうう、失礼な！ こう見えても、私だって、日夜照瑠の力になろうと、都市伝説研究に力を入れてるんだからね！ 照瑠こそ、今までになんどもお化けや幽霊なんかに会ってながら、なんで自分から情報収集しようとしらないのさ！！」

わざとらしく、顔をふぐのように膨らませながら亜衣が言った。確かに、照瑠は神社の巫女で、今までも霊的な存在に関わる事件に巻き込まれて来た経験がある。が、それと亜衣の言う都市伝説の研究が、いったいどうやったら結びつくのか。どうも、個人的な趣味を強引にこじつけただけのような気がするが、照瑠はあえて黙っておいた。

ここで正論を言っても、亜衣はますます気を悪くしてしまうだろう。こういう場合、一通り話を聞いて、相手を満足させてしまった方がよい。昨年からの付き合いで、照瑠は自然と亜衣の手懐け方を身に着けていた。

「まあ、私が番組を見るかどうかは置いておいて……その番組で、何か面白いことでもあったの？」

とりあえず、相手の話を聞く姿勢に入る照瑠。すると、今しがた不貞腐れていた亜衣の目に、再び先ほどの輝きが蘇った。なんといつか、実に調子のいい人間である。

「うん、まあね。昨日は心霊特番ってことで、生放送やってたんだけど……その放送が、途中でとんでもないことになっちゃてさ」

「とんでもないこと？ まさか、放送中に本物のお化けでも出たの？」

「うーん……。そこは、私にもわからないんだけど……。なんか、途中でアクシデントがあったみたいで、放送が一時的に中断されちゃったんだよね。で、普通だったら直ぐに復旧するはずなのに、その後も全然駄目でさ。結局、特番は中止になっちゃって、なんか最後は謝罪会見みたいなので終わっちゃった」

「なによ、それ。でも、生放送中に放送を急遽中止するなんて……そんなこと、本当にありえるの？」

「本当だったから、こうして言ってるんじゃない。嘘なんかついたって、何の意味もないよ」

片手を腰に当て、まるで当然のことのようにして口にする亜衣。確かに、彼女がここで照瑠に嘘をつく理由はないが、それにしても、いったい何の意味があってこんな話をするのだろう。

生放送中のテレビ番組に、予定を急遽変更せざるを得ない事態が発生した。番組を楽しみにしていた亜衣にとつて、これは愚痴の一つでも言いたくなる事態なのはわかる。が、それが亜衣の話だったことかと訊かれると、素直に首を縦に触れない。

亜衣は、照瑠の学校でも有名な都市伝説オタクなのだ。それだけでなく、人脈の亜衣ちゃんを自称しては、妙な人間との関係を自慢する変人でも有名である。

そんな亜衣が、わざわざ朝から照瑠に話を振ってきた。今までの経験からして、これは確実に何かある。

そう、照瑠が思った矢先に、亜衣が再び口を開いて話し出した。やはり、話の本題はこれからだったのだ。覚悟を決め、照瑠は自分の拳に力が入っているのを感じた。どうも、気がつかない内に、自然と身構えてしまっていたらしい。

果たして今日は、どんな突拍子もない話が飛び出すのか。決して期待はしていないが、少しばかり気になってしまうのも事実だった。

「えっと……それで、さっきの話の続きなんだけどね。実は、生放送が大失敗してから、私のところにメールが来たんだよね。それ、誰からだと思う？」

「さあ？ 私には、皆目見当もつかないけど……」

「ふっふっふっ……。相変わらず、想像力が今一つですぞ、照瑠どの。私の異名が、人脈の亜衣ちゃん ってことをお忘れか？」

「なによ、気持ち悪い笑い浮かべて。で、その異名と今回の話、なんの関係があるわけ？」

「なんの関係って……あるもなにも、大ありだよ。テレビと言えば、芸能界。そして、芸能界と言えば、それは私とゆっきーの関係以外にないでしょーが」

にやりと笑い、携帯電話を照瑠の目の前に突き出す亜衣。その画面に映し出されている相手の名前を見たとき、照瑠も亜衣が何を言

わんとしているのかを理解した。

「これ……雪乃からのメールじゃない！　そう言えば、あの子、今頃はお仕事頑張っているのかな？」

「まあ、あのゆっきーのことだから、間違いはないと思うけどね。それよりも、問題はメールの内容だよ。久しぶりにメールを貰ったと思ったら、なんだかまた、変な事件に巻き込まれているみたいなんだよね、これが」

「変な事件……。まさか、去年のクリスマスみたいなことが、また……」

亜衣の言葉に、照瑠の頭を嫌な記憶が掠めた。

国民的アイドルの一人、長谷川雪乃。そんな彼女と嶋本亜衣は、実は旧知の仲である。なんでも二人は幼馴染の関係らしく、雪乃の出身も、何を隠そう照瑠の住んでいる火乃澤町。

ちなみに、雪乃はあくまで芸名で、本名は蓮<sup>はすなぎゆき</sup>薙有希という。こんなことを知っているのも、亜衣が雪乃の幼馴染だからこそだ。昨年末に起きた事件では、この本名も事件解決の鍵の一つとなり、彼女を陥れようとしていた真の黒幕を暴くのに役立った。

そんな雪乃が、何の前触れもなしに亜衣にメールを送ってきた。それも、昨晚に放送されていた生放送番組で、なにやらトラブルがあつた翌日にある。

一時は、向こう側の世界に関わって、生死の境まで彷徨った雪乃。そんな彼女からのメールだからこそ、照瑠は絶対に何かあると予想



していた。そして、亜衣の携帯電話を受け取って中身を見た際、その予想は瞬く間に確信へと変わった。

相談したいことがあります。

犬崎君とお話したいので、連絡取れませんか？

雪乃

たった三行のメールだったが、照瑠にはこれだけで十分だった。

怪奇な事件の当事者としての経験を持つ雪乃が、あの犬崎紅を呼ぶ。それだけでも、雪乃か、もしくはその周りの人間に、何かがあったということだけは確実だ。

「どう、照瑠？ 昨日の心霊特番で生放送中にトラブルがあった、その次の日にこんなメールが来たんだよ。見るからに、なんかヤバそうじゃない？」

「そうね……。雪乃だって、自分が怖い体験したことくらい、そう簡単に忘れないと思うし……。それなのに、わざわざ犬崎君に相談するってことは、相当のことなのかも」

「だろうね。で……。その犬崎君なんだけどさ。最近、あんまり学校に来てないみたいだけど、照瑠は知らない？」

「えっ……。！？ そう言えば……。確かに、ここ最近は学校を休みがちだったわね」

亜衣に言われて、照瑠はふっと先週のことを思い出した。

四月になり、照瑠たちも無事に高校二年への階段を昇ることができた。が、そんなことなどお構いなしに、ここ最近の紅は学校を休みがちだった。

別に、身体の具合が悪いわけでもないだろうに、一年の時と比べても学校に来る日数が減った。まあ、仮に来たところで居眠りばかりしているため、あまり変わりはない。ただ、携帯電話に連絡を入れても、ほぼまったく言っていないほどに返信がないのだけは気になったが。

「ねえ、照瑠。なんだったら、今日は帰りに犬崎君の家に寄って行かない？ 先生から、プリント預かったとかなんとか言って、口実作ってさ。そこで、ついでにゆっきーからのメール見せて、相談に乗ってもらおうよ」

「犬崎君の家に！？ まあ、私は構わないけど……。でも、亜衣。あなた、犬崎君の家、どこにあるか知ってるの？」

「えっ……。そ、それは……」

照瑠の言葉に、亜衣はしばし視線を上の方に逸らし、わざとらしく頬を指でかいた。ここまで話が進んでいて、結局はこういうオチか。相変わらず、最後の最後で亜衣は詰めが甘い。

「はあ……。どうせ、そんなことだろうと思ったわよ。まあ、私も犬崎君の家がどこなのか、実は良く知らないんだけど……。亜衣の言う通り、プリント届けるのを口実にして、一緒に行ってみましょう。」

先生に頼めば、住所くらいは教えてくれると思うしね」

全身の力が抜けて行くのを感じながら、照瑠は自分が早くも厄介事に巻き込まれたのを感じていた。

アイドルグループの一員であることを抜きにした場合、雪乃は照瑠にとっても大切な友人の一人だ。その友人を助けるためであれば、苦労を惜しむつもりはない。問題なのは、亜衣が後先考えず、役にも立たない提案をしてくるくらいである。

だが、それ以上に、照瑠は紅の住んでいる家に興味があつた。

昨年の六月に火乃澤町にやって来てから、照瑠は紅と一緒に様々な心霊事件を解決してきた。が、照瑠が紅と話をするのは、決まって駅前の甘味屋か照瑠の家というのがお約束だった。連絡は常に携帯電話を使って呼び出す形で、照瑠や亜衣が紅の家を訪れたためしはない。

ぶつきらばうで口が悪く、周りの人間とは必要最低限の関係しか望まない。それでいて、普段は金に意地汚い側面を見せながら、向こう側の世界の住人が絡んだ事件が起きると、なんだかんだで無償の奉仕をすることも多い紅。

はつきり言って、紅は亜衣とは別方面での変わり者だと照瑠は思っていた。そんな紅の住んでいる家とは、果たしてどんな場所なのだろう。

（犬崎君の家か……。犬神なんてものを操るくらいだし……。まさか、犬小屋ってことはないわよね）

少しばかり失礼だと思いながらも、照瑠は犬小屋から頭を出した紅の姿を想像し、思わず軽く嘖き出した。あの、無口で冷静な紅の頭が、犬小屋の穴から飛び出している様。自分で考えたことなのに、それを頭に思い浮かべると、どうにも笑いが込み上げてきて止まらなかった。

街外れの雑木林の近くに、その屋敷はあった。建てられたのは、恐らく数十年近く前だろうか。一見して、そこまで古びた印象は受けないが、近づいて見るとかなり年季が入っているということがよくわかる。

屋敷を覆う鉄柵は、雨と風にやられてボロボロだった。塗装は剥げ落ち、赤錆びも酷く、その下にあるブロック塀もひびが入っている。それは小さな門も同様で、既に壊れてその用途を果たさなくなった門の欠片が、風にゆれてきいきいと音を立てている。

誰もいない、忘れられた家。埃の積もった窓ガラスと、痛みの激しい屋敷の壁。誰がどう見ても、まともな人間の住んでいる場所とは思えない。が、そんな屋敷の一室には、古びたソファーに一人の少年が腰かけていた。

白金色の髪の毛と赤い瞳。犬崎紅だ。

先天的な白子障を持ちながらも、日中の陽射しの強さに弱いことを除いては、特に日常生活に支障は見られない。いや、むしろ、こんな廃屋同然の家に住めることからして、精神的にも肉体的にも、

かなりタフな方だと言えるだろう。少なくとも、同年代の少年たちに比べても、紅の体力や精神力、それに運動神経などは、明らかに標準のそれを越えていた。

天井の脇に張られたクモの巣に目をやりながら、紅は手にした鏡を弄ぶようにしていじっていた。赤と青。二枚の鏡はそれぞれが、実に美しい錦模様で染められている。かなり年季の入った物であるらしく、骨董品屋に持ち込めば、それなりの値段で引き取ってくれるかもしれない。

もつとも、紅にとって関心があるのは、この鏡の値打ちなどでは決してなかった。彼にとっての関心の対象。それは、鏡の持っている呪力とも呼べる、不思議な力についてのことだった。

今年に入ってからすぐ、まだ雪も溶けていない季節のこと。二月の初頭に起きた怪事件、鏡さま事件のことが、どうしても頭から離れない。

鬼門の方角に備え付けられた大鏡の前で、古来より大切にされてきた鏡を用いて、夜中の二時に合わせ鏡を行う。すると、異界への扉が開かれて、術者の魂は常世の一つである鬼の世界、鬼界へと導かれてしまうという儀式。

向こう側の世界の事件に数多く携わってきた紅でさえ、こんな術を目にしたのは初めてだった。実際、最後には自らも鬼界へと乗り込んで戦う羽目になったため、術の信憑性に関しては疑いようがない。が、問題なのは、いったいどの誰が、こんな術を生み出したのかということだ。

自らは直接に手を下さず、呪いの道具を配ることで世界に闇を広

める者。闇の死揮者と呼ばれる者の存在が、否応なしに紅の頭に浮かんでくる。

霊能力者達の間でも、死揮者の話は単なる噂に過ぎない。実際に死揮者と出会った者などいなかったし、その存在を証明するための証拠も見つかっていない。

現に、今、紅が持っている二枚の鏡も、単なる古びた鏡以外の何物でもなかった。術が行われた際には不思議な力を持っていたのかもしれないが、どうやら使い捨ての一回切符だったらしい。知り合いの退魔具師　　魔を祓う道具を作る職人のことであるに調査を頼んだが、やはりただの古い鏡でしかないとの返事しかもらえなかった。

自分の存在した証拠さえ残さず、常に影で暗躍する闇の死揮者。こうまでして尻尾をつかませないと、本当に死揮者などいるのかと疑わしくもなってしまう。

だが、それでなければ、昨年から立て続けに火乃澤町で起きている、不可解な事件の原因を説明できなかった。

この火乃澤町は、陰の気が流れ込みやすい地形にある。紅が来るまでは賽の結界さいによって阻まれていたが、その結界も、今は完全に破壊されてしまっている。応急処置的な対処はしておいたものの、それでも完全に気の流れを阻むことはできない。せいぜい、流れを弱めて街が完全に毒されないようにする程度が限界だ。

流れ込む陰の気によって、魑魅魍魎の類が街に集まって来ること。それは仕方のないことだと紅も思う。問題なのは、自分がこの土地にやって来てから起きた事件の、半数以上が呪いや禁術に関係する

ものだということだ。

霊的な存在に近づき過ぎたが故に惨事を招く祟りとは違い、呪いはあくまで人が人にかけるもの。禁術も同様であり、基本的には呪いの道具がなければ成立しない。

しかし、そういった道具を素人が簡単に手に入れていることなどが、そもそも不可解なことなのだ。例えば、呪いの藁人形一つにしても、素人が作った物では効果がない。霊的な存在に通じる者が、それ相応の手順を踏んで作った道具を用い、更に正しい手順で儀式を行わねば、そう簡単に他人など呪えない。

では、それにも関わらず、この火乃澤町で呪い関係の事件が多発しているのはなぜか。原因は、陰の気などではない。もっと、直接的な何かがあるはずだ。

火乃澤に降りかかる災厄の原因。それは、本当に闇の死揮者なのだろうか。だとすれば、その死揮者は、なぜこつも回りくどい方法を用いて、悪戯に闇を広めようとするのだろうか。

色々と、わからないことが多過ぎる。事件が起きてからしか動けないという分、こちらに不利があるのは百も承知だ。それでも、ようやく手掛かりを見つけたと思った矢先に、その可能性が雲をつかんだようにして消えてしまうやるせなさ。これでは、紅でなくとも苛立ちを隠しきれなくなってくる。

二枚の鏡を薄汚れた机の上に置き、紅はそつと立ち上がった。家の外で、何やら扉の軋むような音がする。いつもの風が家を叩き、揺らすような音ではない。紅にとっても珍しいその音は、この廃屋のような古い屋敷に、久方ぶりの客人が訪れたことを示していた。

「客か……。こんな時に、珍しいな」

自分の影に語りかけるようにして、紅は独り呟いた。その声に、影が一瞬だけ肯定の意思を示すようにして揺れる。

「誰だか知らんが、物好きなやつもいるものだ。とりあえず、害のない連中だったら、ここまで案内してやれ」

再び、影が揺れた。紅の言葉に、影は彼の足下からすつと離れると、まるでそれが一つの意思を持った生き物のようにして、そのまま扉の隙間から外へと抜け出て行った。

夕暮れ時、メモ用紙に書かれた住所へ向かった照瑠と亜衣は、自分たちの目の前に現れた屋敷に言葉を失った。

柵も壁もぼろぼろで、およそ人の住んでいる気配がしない。ほとんど立ち腐れの空き家であり、今にも中から幽霊が飛び出してきそうな感じである。もう春になって久しいというのに、妙に冷たく陰気な風が、錆びついた門を叩いている。

本当に、ここがあの犬崎紅の家なのだろうか。もしかすると、自分たちは学校の教師からもらったメモ書きを読み間違えて、まったく見当違いの場所に来てしまったのではあるまいか。

思わず互いに顔を見合わせた照瑠と亜衣。だが、メモ用紙に書か



れた住所と目の前の電柱にある住所を見比べると、確かにこの屋敷が紅の家と考えて間違いない。辺りには、他にめばしい家もなく、草むらと雑木林が広がっているだけだ。

仕方ない。とりあえずは、家の扉だけ叩いて、人がいるかだけ確かめよう。そう思い、照瑠が門の前に来たとき、その瞳の中に奇妙な物が飛び込んで来た。

「ねえ、亜衣。これって……」

「うん。木の板でできた表札だね。ちゃんと 犬崎 って彫ってあるよ」

「そうね。でも……これ、よく見ると、カマボコの台になっていた木で作られているようにも見えるんだけど……」

ぼろぼろだが、かつては格式の高そうな装飾が施されていた門とは、明らかに不釣り合いな安っぽい表札。それを見て、照瑠はしばし言葉に詰まったまま立ち尽くした。

普段の紅が、とかく金銭的な面で煩いこと。それは照瑠も知っていたが、まさかここまで酷いとは。こうなると、節約云々を越えて、もはや単なるネタだ。貧乏性、ここに極まれり。もしかすると、こんな酷いボロ屋に住んでいるのも、単に賃料が破格であるという理由だけかもしれない。

まったくもって、紅はいったい何を考えているのか。およそ、普通の人間には理解できない、彼なりの基準というものがあるのだろう。

半ば呆れた表情のまま、照瑠と亜衣は屋敷の門をそつとくぐった。すると、誰が触れたわけでもないのに、屋敷の扉が音もなく開いた。

ここから先へ、入って来いということなのだろうか。仕方なく、照瑠と亜衣は遠慮がちに、そつと家の中に入ってゆく。どうやらインターホンさえないようで、玄関を抜けると黄色いカステラのような色をした壁が彼女達を歓迎した。

「うへえ……。外から見たときもそうだったけど、中も相当にボロイですなあ。こうなると、ますますお化け屋敷って感じだね」

亜衣の言葉に、照瑠も無言で頷く。床は比較的綺麗に掃除がされているが、それでも家が古く傷んでいるのには変わりがない。見たところ、電気もまともに通っていないようであり、紅がどのような生活を送っているのかますます気になってくる。

（お化け屋敷か……。まあ、確かに、この家の中にいる犬崎君のことを夜に見かけたら、誰もがお化けと思うかもしれないわね）

暗闇の中に光る赤い瞳と、深雪のように白い肌。そんな容姿の間が、廃屋一步手前の屋敷の中に住んでいる。それを外から知らない者が見れば、間違いなく幽霊と誤認するだろう。

屋敷の奥にある扉が、音もなくすつと開いた。風はなかったが、照瑠はなぜか、何者かが自分を案内しているような気がして、そのまま導かれるように扉の奥へと歩を進める。

「ごめんください。誰かいますか？」

扉の影から顔を覗かせ、照瑠は恐る恐る訊いてみた。返事はない。

だが、その代わりに、彼女は部屋の中央に置かれたソファアの上に、見慣れた少年の姿を発見した。

「なんだ、お前達か。俺はてつきり、また物好きなアホが廃墟探検に来たのかと思ったぞ」

白金色の髪の毛をかきながら、少年が照瑠に言った。犬崎紅だ。初め、この家にやってきたときは自分が道を間違えたのではないかと思っただが、どうやら紅は本当に、このボロボロの屋敷に住んでいるらしい。

「犬崎君……。いるならいるで、返事くらいしてよね」

「悪いな、九条。だが、見ての通り、ここはこんな家だ。一応、表札は出しているが、それでも何を勘違いしたのか、たまに廃墟マニアなんかが不法侵入して来るんでな。念のため、警戒しておいた」

「廃墟マニアって……。まあ、確かに、こんな家じゃねえ……」

天井の隅に張られたクモの巣に目をやりながら、照瑠は改めて部屋の中を見回した。

紅が生活している空間は、最低限の掃除くらいはされている。が、それでも部屋がボロボロなのは相変わらずで、天井は色々な部分がしみだらけ。それは床も同様で、破れた窓ガラスはガムテープで補修してある。部屋にはソファアとテーブル以外の家財道具がなく、随分と殺風景な場所に感じられた。

「で、今日はいったい何の用だ？ わざわざ、俺の家を突き止めてまで押し掛けるなんてくだらね。よっぽどのがあったと

考えるのが普通だが？」

口元を隠すようにしたまま、紅が照瑠たちに赤い瞳を向ける。さすが、同年代の他の男子と比べても、紅は鋭い。無愛想な態度とぶっきらぼうな喋り方は好かないが、こういうときは話が早くて助かる。

「やっぱり、犬崎君に隠し事はできないわね。実は、ちょっと亜衣に頼まれて、相談事があって来たの。後、ついでに学校休んでたときのプリントの束、一緒に持って来たから」

「そうか。だったら、その紙屑の山は適当に置いておいてくれ。どうせ、俺は読まないからな」

「紙屑って……。犬崎君、あなたねえ……」

学校のことなど、まるで興味はない。そう言わんばかりの口調で言い放つ紅に、照瑠は自分の頭が痛くなってゆくのを感じていた。

やはり、紅の感覚は一般人のそれとは違う。不良というわけではないのだが、興味や関心の対象が、一般市民の日常生活におけるものとは大いかけ離れている。

長い間、向こう側の世界の住人と隣り合わせの生活をしていると、こうなるのだろうか。と、いうことは、神社の巫女として霊的な修業を続ける自分も、いつかは紅のような感覚になってしまうのだろうか。さすがに、それはないと思いたい。

呆れた顔をしたまま鞆からプリントの束を取り出すと、照瑠はそれを強引に紅に押し付けた。続けて、今度は亜衣に目配せすると、

彼女に携帯電話を取り出させて紅に見せる。あの、長谷川雪乃から送られてきた、メールの本文を画面に表示させて。

「ねえ、犬崎君。去年の暮れに会った、ゆっきーのこと覚えてる？ ほら、あの蟲がどーしたって事件のやつ」

「ゆっきー？ ああ、長谷川雪乃のことか。一応、覚えてはいるぞ。今、どうしているのかは興味ないがな」

「むう、なによそれ。そんなこと言ったら、ゆっきーが可哀想じゃん！」

「事実を言っただけだ。それよりも、相談の内容は何だ？ 俺としては、そっちの方にしか興味がない」

ほとんどひったくるようにして、紅は亜衣の差し出した携帯電話をもぎ取った。画面に映し出されている本文を見ると、しばし顔をしかめて難しそうな顔をする。

メールの本文には、依頼の内容まで書いてはいない。ただ、紅に相談したいことがあると、端的に綴られているだけだ。

だが、それでも紅は、そのメールが悪戯の類ではないことを知っていた。

紅の知る限り、長谷川雪乃は悪戯でこんなメールを送るような少女ではない。ましてや、アイドル歌手としての活動も忙しい中、単なる悪ふざけで紅のことを呼ぶとは考えにくい。

怪異の当事者として、一度はその命さえも落とした長谷川雪

乃。そんな彼女が、改めて紅を頼る理由はなにか。こればかりは本人に訊いてみないとわからない。

「とりあえず、このメールだけでは何とも言えないな。ただ、何か良くないことが起きているってことは確かだろう」

「えっ……それじゃあ!？」

「勘違いするなよ、嶋本。俺はまだ、こいつからの依頼を引き受ける」と決めたわけじゃない。ただ、長谷川雪乃が悪戯でこんなメールを送って来るとも思えない。まずは、お前が本人に確認をとって……全てはそれからだ」

はしゃぐ亜衣に釘を刺し、紅は淡々とした口調で言った。

長谷川雪乃は、いったい何を考えて、再びこちらに接触を測ってきたのか。もしか、また彼女の周りで、よくないことが起きているのではないだろうか。

本当は、こんなことに時間を割いている場合ではない。今は一刻も早く、闇の死揮者の存在を突き止め、その足取りや目的を判明させなければならぬ。

そう、頭ではわかっていたが、やはり紅には雪乃のことも気になった。

ここで自分が依頼を承諾しなければ、今度は照瑠が雪乃を助けるために勝手なことをし始めるかもしれない。巫女としての力を確実につけてきている今、照瑠が先走って暴走しないとも限らない。

面倒見がよいのも、時には考えものだと思つた。嶋本亜衣のようなトラブルメーカーとつき合うことが、果たして照瑠にとってプラスに働くのか。ふと、そんなことを考えてしまう。

もつとも、こんな話の展開は、今に始まつたことではない。それに、自分がこの土地に住まうことを決めたのは、なによりも九条照瑠を守るためという理由が強い。

生まれながらにして高い素質を持ちながら、その力を制御できない者は、いつしか闇に堕ちてゆく。陰の気が流れ込み、怪異が発生しやすい状況にある火乃澤町において、照瑠のような人間は闇の格好の餌食だ。巫女としての修業が終わっているならいざ知らず、半人前の状態では、逆に闇に取り込まれないとも限らない。

かつて、自分が救えなかった少女、くりよつあかね 狗蓼朱音のことを思い出し、紅はそつと目を瞑つた。あれから既に二年以上の月日が流れていたが、未だに彼女の存在は、心の奥深くで紅を縛り続けている。

彼女のような人間を、二度と再び生み出さないようにすること。それを自ら 贖罪 と称し、紅は今まで戦ってきた。九条照瑠を守るというのも、その使命感に起因する部分が大きい。

このまま亜衣の話を見殺しして、照瑠を事件に関わらせるのは気が引けた。長谷川雪乃が、果たして本当に再び怪奇な事件に巻き込まれているのかどうか。その真偽は定かではないが、手を引くにはあまりにも早過ぎる。

どちらにせよ、死揮者に対する情報がない以上は、一人で悩んでも無駄なだけだ。それならば、今はまず目先の問題を解決し、その上で死揮者の情報を探った方が賢明だ。

無償で働くのは、紅の本意ではない。だが、照瑠の性格を考えると、紅に選択肢というものは残されていなかった。



春先の東京は、東北よりもさらに温かい風が吹いていた。桜の季節は終わってしまい、そろそろ初夏になるつかという頃合。都心では、既に夏物の服を着て歩いている者の姿もちらほらと見受けられる。

新幹線から降りたところで、犬崎紅は思わず天を仰ぐようにして目元を覆った。

陽射しが強い。東北の涼しい風が吹く火乃澤町に比べ、ここは既に夏と言っても過言でない。

もつとも、本格的に夏を迎えたら、いよいよそんなことは言っていられなくなる。東北の夏は冬の寒さが嘘のような猛暑日になることも多く、紅の生まれ育った四国に至っては、毎年の如く水不足に悩まされる。東京も蒸し暑い場所ではあるが、熱中症で倒れる危険性は、地方の都市にいる方が高い。

先天的な色素欠乏に悩まされる紅にとって、これらの陽射しはまさに天敵と言っても過言ではなかった。強過ぎる陽射しは紅の雪のように白い肌を焼き、あまりに酷いときは火ぶくれのようになってしまう。向こう側の世界の者と戦うために身体は鍛えていたが、この体質だけはどうにもならない。

現に、この陽気の中であっても、紅は漆黒のコートで全身を覆い、強過ぎる太陽の光から身を守っていた。本当ならば、仕事着でもある修行僧のような服装が一番落ちつくのだが、この都会の中心で、さすがにそれは目立ち過ぎる。

「ねえ、犬崎君。そんなに着こんで、暑くないの？」

紅の顔を、下から覗き込むようにして亜衣が訊いてくる。心配しているというよりは、あまりに季節外れなその格好を、不思議に思っているような感じだった。

「問題ない。それに、俺はどうも真昼の陽射しが苦手だな」

「ふうん……。前から思ってたけど、なんか吸血鬼みたいだね」

「吸血鬼、か……。なるほど、確かに言い得て妙だな、それは」

亜衣の言葉に、自嘲気味な笑みをこぼしながら答える紅。げほっ外法使  
いとして、時に忌み嫌われて来た赫の一族の末裔としては、確かに  
吸血鬼のような存在と通じる部分もある。

そもそも小説に登場するドラキュラのイメージは、かつて串刺し  
侯爵と呼ばれて恐れられた、ルーマニアの貴族が元になっていると  
聞いたことがある。彼は一見して殺戮と拷問が好きなサディストに  
思われがちだが、彼をそこまでの凶行に走らせた原因は、その居城  
が絶えず隣国からの侵略に晒され続けてきた国境付近にあったから  
とも言われている。

他国の侵略から国土を守るため、あえて残虐な処刑を公開し、敵  
の戦意を削ぐことで母国を守った闇の英雄。殺された方からすれば  
たまったものではないが、闇を用いて何かを守ろうとしたという点  
では、確かに自分と共通する部分もあると紅は考えていた。

「ふう……。それにしても、東京駅は広いすなあ。あつ、あんな

ところに、東京バナナ 売ってますぞ、照瑠どの！」

口数の少ない紅を他所に、亜衣が一人で勝手にはしゃいでいる。目的はあくまで雪乃に会うためだというのに、早くも忘れてしまったのだろうか。

この辺り、照瑠からすると、まだまだ亜衣は子どもだ。もう、高校二年にもなるのだから、いいかげん少しは大人になって欲しい。まあ、その容姿からして小学生に見紛うような身長なので、傍から見れば精神と肉体のバランスが見事に合致しているということになるのだろうか。

「ちょっと、亜衣！ あんまり、勝手にふらふらししないでよね！ ただでさえ、身長も精神年齢も小学生並みなんだから……迷子になっても知らないわよ！」

「むう、失礼な！ 私だって、そのくらいは考えてるよ！！」

「そう？ だったら、まあ別にいいんだけど……」

口ではそう言いながらも、どこか不安を隠しきれない様子で亜衣を見る照瑠。その手前では、紅がいつもの無愛想な空気を振り撒きながら、少しばかり先を歩いている。

（それにしても……まさか、犬崎君が、いきなり東京に出るなんて言いだすとはね……）

昨日の夕方、亜衣と一緒に紅の家まで相談に行ったときのことが思い出される。

雪乃からのメールを見せた後、紅は照瑠と一緒に亜衣の家まで行くこととなった。亜衣がその場で雪乃に連絡し、運よく繋がったのが事の始まりだ。

雪乃が紅に相談したいと言っていた内容。それはやはり、昨日のテレビ番組のことだった。なんでも、生放送中に何かアクシデントがあったらしく、放送は突然の中止。その番組に出演していたタレントの一人と出会った雪乃は、彼女から奇妙な話を聞かされたという。

本番中に、番組プロデューサーの頭が砕け散った。

要約すると、そんな話だったらしい。実際に本人と話をしたわけではないので、照瑠にはどこまで本当の話なのかは知らない。ただ、亜衣と代わって電話をしていた紅も、いつになく真剣な表情になっていたのは記憶に新しい。

生放送の本番中に、人間の頭がはじけ飛ぶ。にわかには信じ難い話だったが、なぜか紅はさして疑うこともなく聞いていた。まだ、怪奇現象の類と決まったわけでもないのに、その日の紅はやけに物分かりが良さそうだった。

極めつけは、電話の後に、亜衣の家に録画してある 奇跡空間ミラクルゾーン のビデオを見せて欲しいと願い出たことだ。もっとも、彼女が今まで撮り溜めしておいた物ではなく、あくまで昨日の生放送の物だけだったが。

結局、紅の住居でもあるボロ屋を後にした照瑠たちは、そのまま

亜衣の家でビデオを見せてもらうことになってしまった。彼女の言っていた通り、ビデオに録画されていたのは心霊特番の生放送。途中、いくつかの再現映像を挟み、最後は問題の廃屋探索記録映像にさしかかった。

テレビ番組スタッフと思しき数名の男と、番組のレギュラーでもあるゴスロリ姿のアイドルが、誰もいない古びた家の中に入っていく。そして、ADの男が襖を蹴破ったところで、その向こう側から赤黒い血の様な液体が一度に溢れ出て来る。

はつきり言って、趣味の良い物とは決して言えない映像だった。それに、実録と称してはいるものの、やはりどこか胡散臭い。なんというか、怪奇現象が起きるタイミングが出来過ぎていて、作り物のような感じが否めないのだ。

やがて、映像が終わったところで、司会の女子アナが更なる再現映像があると叫んでいた。正直、これ以上は食傷気味だったが、まだこんなものに付き合わされるのか。そう、照瑠が思った矢先に、画面の向こう側がにわかに騒がしくなった。

悲鳴、絶叫、それに観客のどよめきなどが入り混じり、何と言っているのかよく聞こえない。続けて、画面が妙な音と共に切り替わり、しばらくお待ちください という文字が表示されてしまった。

どうやら、何かトラブルがあったようだが、なにしろあんな映像を見せられた後である。オカルトや都市伝説に夢中の亜衣ならばいざ知らず、照瑠はこれも、テレビの演出の一環ではないかと疑った。

こんな物を見せられては、紅もさすがに今回の件から手を引くのではないか。自分でさえ疑わしく思っているのだから、心霊現象に

詳しい紅ならば、尚更だろう。そう思った照瑠だったが、紅の口から出たのは意外な言葉だった。

土日の連休を利用して、東京へ行く。

それが、ビデオを見て紅が出した答えだった。

あのビデオから、紅がいったい何を感じ取ったのか。それは、照瑠にもわからない。人を癒すことはできても、それ以外の能力に関しては、照瑠はまだまだ素人だ。

霊能力者の中にも個性があり、照瑠のようなヒーリングが得意な者、何かを探すことに特化している者、未来を予知できる者など、実に様々な者がいるのはわかる。が、紅のように様々な能力に通じている者は、この日本を探してもそういないのではないのか。

彼の力は悪霊と戦うことに特化しているとはいえ、向こう側の世界の住人達に関する知識、外法や邪術を含めた禁断の儀式に関する知識は、照瑠よりも数段上だ。霊視などに関しても、恐らくは紅の方が上だろう。なんというか、実に万能な人間である。まるで、向こう側の世界の住人と戦い、常世と現世の橋渡しをするために存在している。そんな感じさえ抱いてしまう。

「おい、着いたぞ、九条。どうやら、あれが迎えの車だ」

突然、手前から声をかけられて、照瑠はハツとした顔をして我に返った。

「あ、ごめん……。それより、迎えの車ってどういうこと？ もしかして、既に誰かと約束していたの？」

雪乃から電話で話を聞いて、その翌日に強引に東京行きの手ケットを買って町を出た。そんな強行軍を行っておきながら、この手際の良さはいつたいたんだろう。

昨日の夜、亜衣の家を出た後にどんな魔法を使ったのか。照瑠はそれを紅に尋ねてみようと思ったが、彼女がそうするよりも早く、紅が目線だけで照瑠に伝えた。

紅の赤い瞳が示す先。そこにあつたのは、白く塗られた一台の車。その運転席から出て来た男の姿を見て、照瑠も紅が何を言わんとしているのかがわかった。

「あつ、あの人……。確か、雪乃のプロデューサーをやっていた……」

長谷川雪乃が、まだ移籍をする前に所属していた事務所で、彼女を含めたT・Driveのプロデューサー兼マネージャーをやっていた男。名前は確か、高槻たかつきとか言ったか。背ばかり高い優男のような印象が強烈で、照瑠も彼のことはしっかりと覚えていた。

「昨日、嶋本が長谷川に連絡を取ったとき、電話の向こうにあの男がいたんだ。だから、少し代わって話を聞いて……。それから、迎えに来てくれるように頼んでおいた」

頼まれてもいないのに、紅が照瑠に説明した。後から妙なタイミングで訊かれても迷惑だ。ともすれば、そう言わんばかりの口調だった。

「なるほどね。まあ、確かに雪乃だけじゃなくて、高槻さんとも話  
ができたんなら、犬崎君が東京まで来た理由もわかるわね。あの人  
が犬崎君に何かを頼むってことは、それなりに信憑性もありそうだ  
し」

昨年の暮れに起きた事件のことを思い出しながら、照瑠は改めて  
納得した。

高槻は、今時の芸能界に関わる人間にしては珍しく、自分の担当  
するアイドルを個人としても大切に作る人間の一人だ。こと、雪乃  
たちT-Driveに対する思い入れは強く、彼女達が芸能界の毒  
や、その他様々なトラブルに巻き込まれないよう、時に身体を張っ  
て守るだけの覚悟を持っている。

そんな高槻が、わざわざ犬崎紅と接触を試みた。これはいよいよ、  
きな臭い物が漂ってきたと言える。雪乃だけならばいざ知らず、あ  
の高槻までが動くとなれば、これは東京のスタジオで何か良からぬ  
ことが起きていると考えるのが普通だ。

「やあ、待たせたね。でも……まさか、本当に東京まで出て来てく  
れるなんてね。今さら、僕が言うのもなんだけど……ちょっと、色  
々と不安にさせ過ぎたかな？」

「問題ない。こっちも、今しがた到着したところだ。少し目を離す  
と、そこにいる小さいのが行方不明になりそうで心配だったがな」

「まあ、そう言わないであげてくれよ。彼女だって、雪乃のことが  
心配で、ここまで来てくれたんだろう？」



淡々とした口調で語る紅の毒舌を物ともせず、高槻はあくまで自分のペースで話を進めている。この辺り、照瑠から見ても高槻は大人の男だ。少々責任感が強く、雪乃たちのこととなると頭に血が昇り易いのが欠点だが、そこが帰って彼の人間臭さを強調していてよい。こんな男性に守られている雪乃たちが、少しだけ羨ましく思えてしまう。

案内されるままに車に乗り、照瑠たちは東京駅を後にした。車はどうやら高槻個人の所有しているものらしい。車内に飾り毛はないが、それなりに清潔にはしているようだ。彼がマネージメントを務めるT - Driveの面々も、送迎などはこの車で行っているのだろうか。

休日の東京は混雑しており、車はあまりスピードを出せなかった。この辺り、自分の住んでいる東北の田舎町とは違うと照瑠は思う。地元では信号にひっかかる以外、そこまで車が足を止められることはない。だが、この大都会のだ真ん中では、好き勝手に車を走らせるというわけにもいかないようだ。

「うげ……。なんか、ちょっと酔ったかも……」

後部座席にいる亜衣が、早くも腹を抱えて情けない声を出している。高槻の運転は決して荒くないが、慣れない東京の空気にやられてしまったのだろうか。

「おい、九条。その車酔い女、さつさとなんとかしろ。こんな狭い中で吐かれたら、臭くてやってられないからな」

助手席に座っている紅が、後ろも振り向かずと言う。相変わらず、口の悪い男だ。少しは心配の一つでもしてみろと言いたくなった照

瑠だが、隣にいた亜衣が口元を抑えて苦しんでいたので止めておいた。

確かに、こんな狭い車内で吐かれたらと思うと、隣にいる照瑠とて気が気ではない。それに、車を汚してしまったら、わざわざ迎えに来てくれた高槻にも失礼だ。

「もう、しょうがないわね。調子に乗って、新幹線の中で色々と買って食べ過ぎるからよ」

「むう……面目ない……」

「いいから、ちょっと動かないで。背中さすってあげるから……これで、目的地に到着するまでは我慢してよね」

そう言いながら、照瑠は自分の右手を亜衣の背中にかざし、深く息を吸い込んで意識を集中させる。そのまま背中をゆっくりと、上から下に撫でるようにしてさする。傍から見れば、単に友人の背中をさすっているだけにしか見えないが、これは列記としたヒーリングの一種だった。

相手の霊脈<sup>れいみやく</sup>、魂の呼吸そのものとも言える流れを探り出し、それに同調させるようにして気を送り込む。そうすることで、相手の魂の中心部分に活力を送り、病気や怪我の痛み、果ては霊的な存在によって傷つけられた魂そのものまで癒し、回復させる。それこそが、照瑠が修業の末に身に付けた、九条家に伝わる癒しの力だった。

癒し手として、自分はまだまだ未熟な部分が多い。それは照瑠も自覚しているが、亜衣の車酔いを治す程度なら既に朝飯前だ。

「どうやら、静かになったようだな。まったく……色々と、世話の焼ける女だ」

助手席では、相変わらず紅が亜衣に向かって悪態を吐いている。もつとも、普段ならばここで言い返す亜衣も、さすがに今は元気がない。照瑠の力が全身に行き渡るまでは、普段の調子も出せそうになかった。

「ところで……」

赤信号に差し掛かったところで、車を止めた高槻に紅が尋ねた。

「あれから、そっちの様子はどうか？　何か、特に変わったことはなかったか？」

「そうだねえ……。別に、これと言って進展はないよ。昨日、君に電話で話したことで、ほとんど状況は変わってない」

「そうか……。こうなると、後は長谷川に会ってみるまでは何も言えないか……」

昨日、亜衣の携帯電話を通じて雪乃と、そして高槻と話したときの記憶が紅の頭に蘇る。

心霊番組の生放送中に、番組プロデューサーの頭が砕け散った。これは、東京に来る前に照瑠や亜衣にも噛み砕いて話した話だ。

問題なのは、その事件の詳細を、局が隠蔽しようとしているのではないかということだった。

雪乃から話を聞いた際、高槻は高槻で事件の詳細を調べようと動いたらしい。同じテレビ局中で行われた生放送の収録が、よりにもよって本番でぶち壊しになる。高槻は番組と直接関係はなかったが、噂くらいは耳にしたのだろう。雪乃から相談されたことも相俟って、個人的な伝手を当たり、それとなく調べてみたらしいのだ。

ところが、そんな高槻の努力も虚しく、彼はいきなり高い壁にぶち当たった。

関係者の心情を考慮して、余計な情報は公開しない。

これが、局から高槻に出された返事だった。事故死したプロデューサーの周りにいたスタッフは、軒並み精神的な苦痛を訴えているとかで、会って話することさえも許されなかった。知り合いの関係者に話をして、よくわからない、もしくは知らないの一点張り。それ以上は、何も聞き出すことができなかった。

放送中に撮影機材が転倒し、それに巻き込まれてプロデューサーが亡くなった。結局のところ、わかったのはそれだけである。

これが、一年前の高槻であれば、「そんなこともあるか」と言っ  
て気にも止めなかっただろう。だが、彼は知っている。昨年  
の暮れ、雪乃と共に事件に巻き込まれたことで、この世には人  
間の理解の範疇を越えた、向こう側の世界というものが存在す  
ることを。中途半端な気持ちで霊的な存在に近づいたり、そ  
の力を物にしようとしたら、手痛いしっぺ返しを食らうとい  
うことを。

心霊番組の生放送中に、プロデューサーが示し合わせたよ  
うに変

死。しかも、その事実を微妙に捻じ曲げて、可能な限り表沙汰にならないようにしようと、何らかの力が働いている。なんだか随分ときな臭いものが漂っている気がして、高槻は雪乃の携帯を通じ、自分も紅に思っていることを打ち明けたのだった。

呪いの館を映した心霊ビデオと、奇妙な死に方をしたプロデューサー。そして、それらの事実を隠そうとする、未だ見えない謎の力。

紅も高槻から聞いた話なので、どこまでが本当かは知らない。ただ、これらのことを考えた場合、放っておいてよい事態ではないということだけは理解できた。他にも理由はあるのだが、高槻の言葉が紅を東京に向かわせる理由の一つになっていたのは間違いない。

信号が再び青になり、周りの車に合わせて高槻の車も動き出す。紅と照瑠、それに未だ車酔いから立ち直れない亜衣を乗せて、車はカフェやレストランが立ち並ぶ繁華街の方へと入って行った。

身体がだるい。

夕暮れ時を告げる鐘の音を聞いて、あおいりつ葵璃凍呼は静かに目を覚ました。

「うつつ……。頭、痛……」

まだ、全身の疲れが抜けていないのだろうか。どうにも全身に力が入らず、断続的に響くような頭痛が頭を襲う。

時計を見ると、時刻は既に午後五時を示していた。正午になる前に寝てしまったことを考えると、随分と長い時間に渡って眠っていたらしい。

ふらつく足取りで立ち上がり、凍呼はベッドから抜け出した。先日、体調不良を訴えて生放送の特番に出るのを止めたが、身体具合は一向によくなかった。

いや、本当は、体調そのものは快方に向かっているのだ。ただ、あまりに身体と心に受けたダメージが大き過ぎて、その回復に時間がかかっているだけだ。

パジャマの袖をそつとつかみ、凍呼はそれをゆつくりと下にずらしてゆく。袖の中から現れた腕は、驚くほどに細く、白い。テレビ映りを気にして体系には常々気を配っていたが、友人などからは痩せすぎだと言われる。もっとも、ゴスロリアイドルで売っている自分としては、不健康そうな雰囲気の方が調度よいと思うのだが。

まあ、それでも、さすがに本当の病気になって倒れてしまった話にならない。それは凍呼も理解していたし、なによりも今は、袖の中から現れた腕に残る生々しい痣の痕が気になった。

どこかにぶつけたわけではない。ましてや、誰かに殴られたわけでもない。白い肌にうつすらと残る痣は、何かで絞められたような痕にも見える。

今月に入ってから撮影に及んだ、幽霊屋敷の探索レポート。その後、自分を襲った怪現象のことを思い出し、凍呼は消えかけた痣が再び傷むのを感じていた。

秋葉原を中心に活動する、売れないゴスロリアイドルとして活動して、早数年。そんな自分に表舞台に立つチャンスが訪れたのが、昨年のことだ。超常現象や未解決事件の謎を探る心霊ミステリー番組、奇跡空間ミラクルゾーン。その出演者の一人に、突如として選ばれたのがきっかけだった。

一部の人間の間以外では、さしたる知名度もない自分が、なぜ。最初はそう思った凍呼だったが、みすみすチャンスを逃すつもりはなかった。番組の方からも、ミステリアスな雰囲気と可愛らしさの両方を持った女の子が欲しいと言われており、凍呼に白羽の矢が立ったのである。

はつきり言って、凍呼は心霊番組など好きではなかった。ゴスロリアイドルなど称しているが、凍呼は怖い話がてんで苦手だ。ゴスロリ道を邁進する人間の中には「私は魔女」などと公言している者もいるが、さすがにそこまではできない。それに、魔女は魔法を使うだけの人間として割り切ったお付き合いができるかもしれないが、幽霊や妖怪、モンスターの類となると、もはやその限りではない。

だが、それでも凍呼はめげることなく、番組のレポートを頑張った。ある時は、廃病院の潜入取材。ある時は、富士の樹海で自称霊能力者の先生と一緒に野営を敢行。また、ある時は、ゲストのタレントと一緒にこっくりさんをやらされて、スタッフの仕掛けたどつきりに泣かされたこともある。

正直なところ、辛いことの方が多かった。それでも、自分がこの業界で生きて行くには仕方がないと、半ば割り切った感情を持って頑張った。

そんな折、凍呼が今までの人生の中で、最も恐ろしい体験をしてしまうことになった取材。それが、先日の番組で放送された、呪われた館の潜入取材だった。

廃屋の潜入取材など、今さら珍しくもない。そう、初めの頃は思っていた。実際、ここだけの話、廃墟探索の取材はほとんどがやらせた。

廃墟や廃屋とはいえ、他人の持ち物である以上は持ち主が存在する。そんな場所に勝手に入っては、いくらテレビの取材でも、不法侵入で訴えられかねない。

それらの問題を解決するため、番組スタッフは事前に土地や家の持ち主ときちんと交渉を行っている。また、実際に潜入したスタッフやゲストに危険がないよう、先にADなどに下見をさせてもいる。当たり前と言えば当たり前の措置なのだが、まあ普通は気がつかないだろう。その結果、番組の取材の真似をして、日本全国で廃墟への不法侵入が後を絶たないのは問題だが。

今回の取材も、所詮は子ども騙しのお化け屋敷探索。何か、少しばかり驚けるように、スタッフが事前に仕込みをしている可能性はある。が、実際に身の危険を感じるようなことなど、絶対に起きるはずもない。

全てが仕組まれ、仕込まれた、予定通りの段取りで進む潜入取材。何も起こるはずがないし、起きてはならない。そう、信じていたのに。

腕についた痣を撫でながら、凍呼はディレクターの室井からあった電話の内容を思い出した。



プロデューサーの西岡が、収録中に亡くなった。

端的に言うならば、それだけを伝えられた。本当は、もっと詳しく聞きたかったが、電話の向こうの室井も体調が優れていないように、湿った咳をしていたので止めておいた。

恐怖は終わらない。そんな安っぽいホラー映画のキャッチコピーのような言葉を思い出し、凍呼は自分の肩を抱いて身体を震わせた。

あの日の取材は、確かに普通の取材ではなかった。レポートの撮影そのものは上手くいったが、その後に変な現象に悩まされたのは、記憶に新しい。

最終的に番組では、それらスタッフや凍呼が体験したことまでも再現フィルムで再現し、予定を変更して生放送のプログラムに組み込んだ。なんというか、転んでもただでは起きない。プロデューサーである西岡に、そんなイメージを抱いた矢先に彼の訃報を聞かされたのだ。

このままでは、自分も危ないのではないか。事件はまだ、何も解決していないのではないか。そんな不安が、凍呼の頭をふつと掠める。

「どうしよう……。今だったら、室井さんに連絡して繋がるかな……」

どうしても、不安が拭えない。思い出したくもない記憶が、先ほ

どから凍呼の頭の中で延々と回っている。

ベッドの脇に置いてあった携帯電話を握り締め、凍呼は室井の番号へと電話をかけてみた。

二度、三度、電話越しに無機質な呼び出し音だけが聞こえてくる。だが、肝心の室井は仕事で忙しいのか、一向に凍呼の電話に出ようとしなない。

やはり、室井は忙しくて駄目だ。ならば、自分の事務所のマネージャーにでも連絡するか。

いや、それも駄目だろう。彼は今回の事件には関与していないため、凍呼の話も半信半疑にしか聞いてくれそうにない。それに、もしも聞いてくれたとして、何の力も持たない彼が、本当に役に立つとは思えない。

こうなったら、残された頼みの綱はたった一つだ。可能性は低く、本当に頼りになるのかも疑わしかったが、今の凍呼には頼れる人間が他にいない。

再び携帯電話を開き、凍呼は素早くアドレスを呼び出して電話をかける。数秒の後、やけに軽い雰囲気、男の声が聞こえてきた。

はい、もしもし

「あつ、御鶴木さんですか……。私です。先日、お世話になった、葵璃凍呼です」

葵璃……？ あつ、もしかしてトコちゃん？

「はい、そうです。あの時は、本当にお世話になりました」

いや、別に構わないよ。こっちも、仕事だったしね。それよりも、霊傷の方はどう？ まだ、どこか傷むとかある？

「いいえ。でも、まだ少しだけ痣が消えなくて、身体もなんだか重たい感じがしますけど……」

おいおい、無理しちゃ駄目だよ。身体の傷は治っても、魂の傷つてやつは治りが遅いからね。まあ、くれぐれも痩せ我慢だけはしないことだね

相変わらず、軽いノリの言葉が電話の向こうから聞こえてくる。知らない者が聞けば、その軽薄そうな喋り方に嫌悪感を抱く者もいるだろう。実のところ、凍呼も最初はそうだった。もっとも、今となっては彼だけが、凍呼に残された唯一の頼みの綱なのだが。

それよりも、今日はどうしたの？ 俺、さっき収録が終わったばかりでさあ……。ちょっと、色々忙しいんだよね

「ごめんなさい。でも、今日はどうしても訊きたいことがあって……。それで、電話したんです」

訊きたいこと？ もしかして、この間の生放送が、途中でぶち壊しになったってやつ？

「はい……」

目の前に相手がいなくても関わらず、凍呼は携帯電話を片手に独

りで頷いていた。

御鶴木魁は、凍呼が代役を頼んで欠席した生放送の本番にも顔を見せていたはずだ。ならば、魁であれば、西岡の死の真相を知っているのではないか。自分たちに降りかかった災いが、本当に終わりを告げていたのか。それを、確かめたかったのもある。

それから凍呼は、魁に自分の疑問に思っていたことを一気にまくし立てるようにして話していった。番組の収録が終わったばかりで、本当は向こうも迷惑に思っているかもしれない。それでも凍呼は構わずに、西岡の死について何か知らないかと食い下がった。

程なくして、全てのことを話終わると、凍呼は思いの他に自分が昂奮していたことに気がついた。

息が荒い。微熱のせいで体温が上がっていることも考えられるが、それだけが原因ではないだろう。

電話の向こう側にいる魁は、未だに何も言ってくれない。やはり、怒らせてしまったか。そう思い、ようやく申し訳ないという気持ちで凍呼の頭をよぎったが、次の瞬間、再び魁の軽い雰囲気という言葉が聞こえてきた。

うーん、西岡さんの死の原因が……。実は、あれは俺も気になってたんだよね

「気になってた!? それじゃあ、やっぱり御鶴木さんは、西岡プロデューサーが亡くなる瞬間を見たんですね!？」

まあね。ただ、どんな死に方だったのかは、ここではあえて言わ

ないでおくよ。女の子の君に、あれはちょっとばかり刺激が強過ぎるだろうからね

肝心なところで、魁は言葉を濁してしまった。やはり、あの生放送で何あったのだ。それが何なのかまでは、凍呼も知らない。ただ、何か恐ろしいことが起こっているというだけは、魁の言葉を聞いた凍呼にもしっかりと伝わった。

それじゃあ、トーコちゃん。悪いけど……もし、外に出られるようだった、これから局の方に来てくれないかな

「えっ、これからですか……？」

そうだよ。俺の方でも話を整理しておきたいし、ちょっとばかり気になることもあるからね。まあ、具合が悪いんだったら、無理はしないでいいけどさ

「いえ、大丈夫です。これから行くと、そっちに着くのが六時半くらいになりそうですけど……構いませんか？」

ああ、問題ないよ。それじゃあ、俺は局のビルで待ってるから。こっちに着いたら、また電話しようだい

電話は切れた。なんというか、最後まで軽い雰囲気崩さない男だった。

しかし、これは同時に好機でもある。身体の具合は優れなかったが、ここで魁に会っておかねば、悪い想像ばかりが頭の中で膨らみそうだった。

パジャマを脱ぎ、凍呼はいつも自分が街に着て行くお気に入りの服を引っ張り出して着替えた。髪型まで普段と同じにするわけにはいかなかったが、今はとにかく急いでいるのだ。魁に会う際、失礼のない服装にさえなっていれば、それで以外はどうでもよかった。

照溜たちが高槻に案内された場所に着いた頃には、もう既に夕方になっていた。まあ、東京に着いたのが既に昼過ぎだったのだから、これは別に不思議なことではない。あの人と車の多さを考えれば、比較的スムーズに動けたと思う。

車を駐車場に止め、高槻は目と鼻の先に見える店へと照溜たちを案内した。どうやら大きなカフェのようで、夕食前なのに客で賑わっていた。

「さあ、着いたよ。この先で、雪乃たちが待ってる」

「雪乃たち？ ってことは、ゆつきー以外のT Driveの人も、来てるわけ？」

車酔いから完全に復活したのだろうか。亜衣が、高槻の顔を見上げるようにして尋ねていた。

「いや、そうじゃない。実は、僕や雪乃が例のテレビ番組で放送事故があつたのを聞いたのは、その番組に出ていた女の子から相談を持ちかけられたからなんだ。篠原まゆって言うんだけど……君たち、知ってるかな？」

「篠原まゆ？ うん……なんか、聞いたことあるような、ないような……」

高槻の言葉に、亜衣が珍しく難しい顔をして首を傾げている。怪談や都市伝説のことには詳しいが、芸能人の名前に関しては、亜衣はそこまで詳しくない。幼馴染である雪乃は別として、そこまで有名でない人物になると、顔と名前が一致しないことも多い。

「まあ、君が悩むのも無理はないけど。あまり、こんなこと言うとか哀想だけど……彼女、雪乃たちと比べても売れてないから。ただ、この間の ミラクルゾーン には、代役みたいな感じで出演していたらしいけど……」

「代役？ ってことは、ゆっきーはその子から、プロデューサーの顔面グチャグチャ破裂事件 を聞いたんだね」

「顔面グチャグチャって……。まあ、確かに、それはそうなんだけどさ……」

周りの目を気にしながら、高槻が亜衣の言葉を遠慮がちに反芻した。なんというか、ネーミングセンスが皆無だ。いや、それ以前に、こんな公衆の面前で大声を出して話すようなことではない。

確かに、相談を持ちかけたのはこちら側だし、この店に亜衣や照瑠、それに紅を案内したのも高槻自身。だが、それでも、ここには他の客もいるのだ。食事中の人間だっているだろうに、そんな中でいきなり顔面がグチャグチャだの破裂したのだという言葉聞けば、気を悪くする人もいるかもしれない。

「ちょっと、亜衣。頼むから、それ以上は大声で喋らないでね。皆が皆、あなたみたいな怪談好きってわけじゃないんだから。あまり騒いで、変な目で見られても知らないわよ」

「むう、失礼な！ 私は別に、事実を言っただけじゃん！」

「そういうところ、犬崎君に似てきたわね……。なんか、もう怒るのも馬鹿らしいから止めておくわ……」

車に乗っていたときは吐く寸前まで苦しんでいたのに、酔いが収まったらこれだ。紅も不用意な発言から周りの反感を買うことがあるが、亜衣と違って無口なので、まだマシか。

なんだが、本題にさえ入っていないのに、照瑠は早くも頭が痛くなってきた。こんなことで、本当に自分たちは、長谷川雪乃の力になってやれるのだろうか。

高槻に案内される形で、照瑠は店の奥にある席に向かって歩いた。席はかなり奥まった場所にあり、外から見てもわからない。国民的なアイドルとお忍びで会うには、調度良い場所であると言えた。

「やつほー、ゆつきー！ 久しぶりい！！」

奥の席に雪乃の姿を発見し、亜衣が手を振りながら近づいて行った。一瞬、そんなことをしたら雪乃の正体が周りにバレるのではないかと思ったが、照瑠は直ぐに、それが無用な心配であると気がついた。

テレビの画面に映っているときと比べ、普段着でいる際の雪乃はとかく地味だ。それこそ、どこにでもいる普通の高校生といった感



じで、特に人目を引くようなことはない。顔は間違いなく美少女の類に入るのだろうが、それでも雪乃は大人しい。服装が落ちついていることも相俟って、彼女のことをT - Driveの長谷川雪乃だと気づいている人間は、店の中にはいないようだった。

「あ、亜衣ちゃん。それに、犬崎君も……。本当に、東京まで来てくれたんですね」

サングラスを外し、雪乃がこちらに軽く会釈する。顔の半分ほどを覆い隠すような、大きなものだ。恐らく、変装のつもりなのだろうが、あれはあれで、変に目立つ。普段の雪乃の大人しさを考えた場合、あんな物は、返って無い方がいいのかもしれない。

「久しぶりだな、長谷川。それよりも、お前の隣にいる女。そういつが、今回の依頼人か？」

久方ぶりの再開を喜ぶ亜衣を押し分け、紅が間に割って入った。相手がトップアイドルであろうと、紅はまったく容赦がない。普段の尊大な態度を崩さずに、ややもすると不機嫌そうな態度のまま椅子に腰かけた。

「篠原まゆです。あなたが、雪乃の言っていた、霊能力者の人ですか？」

雪乃の隣にいる少女が、遠慮がちに紅に尋ねた。歳は、雪乃と同じか一つ上くらいだろうか。こちらは雪乃に比べ、格好も少々派手だ。芸能人として見ると華に欠けるのかもしれないが、学校にいれば、まず間違いなくモテる部類に入る。

もつとも、そんな今風の容姿に反して、まゆと名乗った少女は雪

乃と同じくらい静かだった。遠慮を知らない紅の態度に、萎縮してしまっただのではないかと思われた。

「霊能力者、か……。どっちかというと、俺はもう少しスレた人間なんだが……。まあ、今はどうでもいい」

相手の気持ちなど関係ない。そんな様子で、紅はまゆに一切の気づかいを見せずに話を進めようとする。この当たり、照瑠などは、もう少し処世術を身に付けた方がよいと紅に進言したくなる。悪気はないのだろうが、なんとというか、本当に愛想がない。接客のような仕事には、まず向いていないタイプの人間だ。

「とりあえず、お前が見た物とやらを、もう一度俺に話せ。実際に本人から聞いた方が、新しくわかることもあるからな」

「は、はい。わかりました……」

同年代の相手だというのに、まゆは紅の放つ威圧感のようなものに、完全に飲まれてしまっている。こんなことで、本当に話ができるのか。怪訝そうな顔をしてまゆを見る照瑠だったが、やがて彼女の口から、ぼつり、ぼつりと当日のことが語られ始めた。

あの日、まゆは番組レギュラーを務めるタレントの代役として、奇跡空間ミラクルゾーンの生放送に出演していた。自分が代役を引き受けることになったのは、確か葵璃凍呼とかいう少女の代わりだったか。あの、廃屋探索レポートに映っていた、ゴスロリ服を着ていたアイドルだ。

自分がなぜ、あの番組で葵璃凍呼の代役に抜擢されたのかはわからない。ただ、葵璃凍呼とは所属していた事務所が同じだったため、

適当に上の方で話がつけられていたのかもしれない。もっとも、まゆは凍呼とは直接話をしたことがなかったため、彼女がどんな人間なのかまでは知らなかった。

幽霊やオカルトなどに興味がないのに、心靈番組のゲストなど務まるのか。そんなことをぼんやりと考えていた矢先、あの忌まわしい事件が起きたのだ。

プロデューサーの西岡の眼球が膨れ上がり、その頭部もろとも、粉々に弾け飛んで死亡する事件。目の錯覚と言われれば、それまでのかもしれない。西岡の周りにいたスタッフたちが盾となり、まゆも、その全てを自分の目で見たわけではない。

だが、それでも、あの日に見た恐ろしい出来事が、単なる機材の転倒事故とは到底思えなかった。番組スタッフや事務所の方からは事故としか説明されなかったが、いくらなんでも不自然すぎる。

極めつけは、やはり雪乃のマネージャーである高槻が、こっそり調査した結果を聞いたことだった。なんでも、番組関係者は貝のように口を閉ざし、局もあくまで事故としてしか公表していない。下手に調べようにも手掛かりもなく、傍から見ても隠蔽工作の臭いが見え隠れするのがきな臭い。

「結局、私が見た物、なんだったんでしょ……。やっぱり、ただの見間違えだったんでしょか……」

最後の方は、少しばかり不安そうな口調でまゆが締めくくった。話を聞いている間、紅は始終無言のままだったが、やがてゆっくりと目を開き、その赤い瞳をまゆに向けた。

「なるほど、話はわかった。断言はできないが、何か厄介な事が起きているのは確かだな」

「厄介なことって……。それじゃあ、やっぱり!」

「勘違いするな。まだ、俺は何の結論も出していない。ただ……。この高槻マネージャーと電話で話した後、俺も俺なりに事件を探ってみた。例の、ミラクルなんたらとかいう番組を録画したビデオを、この小さいやつの家で見させてもらった」

紅が、亜衣の方を少しだけ見て言った。いつもなら、ここで亜衣が「そんな紹介の仕方ってないじゃん!」などと言って噛みついて来るのだが、今日は紅の方が少しだけ早かった。

亜衣が何かを言おうとした瞬間、紅の手が彼女の口元をつかんで抑えた。いったい何事かと目を丸くするまゆだったが、紅は「うるさい口を塞いだけだ」と言って、それ以上は亜衣に興味も示さなかった。

「はあ……。相変わらず、あなた達は二人して話が噛み合わないわね。それで、犬崎君。あなたの見立て、どうだったの?」

このまま亜衣に構っていても、一向に話が進まない。少々可哀想な気もしたが、照瑠は自分から紅に尋ねる形で話を戻した。

「すまないな、九条。一応、俺の見立てなんだが……恐らく、事件の原因は、あの廃墟探索の映像にはないな。霊視もしたから、それは間違いない」

「霊視? でも、私には、何も感じられなかったけど……」

「それは仕方ないだろう。霊視と言っても、本当に高度なやつは、それなりに修業を積みねばできないからな。それに、あの映像は、何者かが霊害封じに近い行いを施した可能性があった。一応、気を張って集中すれば、あの映像の中にも霊が見えたんだが……本体は完全に成仏していたのか、特に害のあるものでもなさそうだったな」

「ふうん……。でも、それじゃあ、番組のプロデューサーさんが亡くなった原因は？ 映像と関係ないんだったら、やっぱり事故かもしれないってこと？」

「さあな。そこまでは、俺もわからない。ただ、話を聞く限りでは、そのプロデューサーの死に方が普通ではないのは確かだ。テレビ局や番組関係者が事実を隠そうとしている辺り、幽霊なんかとは別に、何らかの力が働いている可能性もある」

「うーん……。私には、それでもいまいち、真相つてのが見えてこないけど……」

珍しく、照瑠は胸の前で腕を組み、両目を瞑って考え込んだ。

紅の言いたいことは、照瑠もわかる。心霊特番が放送事故で中止になり、しかも原因はプロデューサーの変死。更に、その事実を関係者が隠そうとしている節があるとなれば、妙な陰謀を疑いたくなる。

「あの……。ちょっと、いいですか？」

先ほどからずっと黙っていた雪乃が、ここに来て初めて口を開いた。相変わらず、テレビに映っていないときは控え目な印象が目立

つ。もつとも、以前に火乃澤町で初めて会ったときのような、妙におどとした雰囲気は払拭されていたが。

「犬崎君。そのプロデューサーさんが亡くなったのって、本当に幽霊が関係しているんですか？　もしかして……私の事件のときみたいに、誰かが呪いをかけていたって可能性とか……ないですよね？」

ほんの思いつきで口にした、些細な一言。たったそれだけのことだったが、紅の眉が微かに動いた。

「あつ、ごめんなさい。やっぱり、私みたいな素人が、変に口を出したらまずいですよね……」

不要な一言で、紅の気分を害してしまったか。そう思い、雪乃は咄嗟に謝った。

「気にするな。それに、お前の言いたいことも、もつともだ。今回の事件……俺も幽霊の仕業ではなく、もっと人為的なものではないかと疑っていたからな」

別に、怒ったわけではなかったのか。ほっとして胸を撫で下ろす雪乃と、それを見て申し訳なさそうにする照瑠。紅はあの通りの性格なので、誤解を生んでしまうことなど日常茶飯事だ。

「ねえ、犬崎君。雪乃はああ言ってるけど、本当なの？　今回の事件も、やっぱり呪いの類かなにかが関係しているとか……」

「断言はできない。だが、そう考えねば、何かと辻褃の合わないことも多いんでな。少なくとも、単に心霊番組を作って、その結果、霊の祟りに遭って死んだというわけではなさそうだ」

「だったら、仮にプロデューサーの人が呪われていたとして、誰が呪いなんて仕掛けたのよ。それも、人間の頭を吹っ飛ばしちゃうくらい、強力なやつを……」

「それはまだ、俺にもわからない。ただ、これが何らかの呪いの力である線は濃厚だ。その可能性を除外した場合……後は、念力で人間の頭を粉々にできるような、超能力者にお出ましもらうしかなくなるだろうからな」

最後まで真顔で、しかし知らない者が聞いたら一笑に伏しそうな話を、紅はさらりと言ったのけた。霊能力者が超能力者の存在を否定するのは矛盾しているとも思ったが、それでも、巫女としての修業を積んだ今であれば、照瑠も紅の言いたいことがなんとなくわかる。

なんでもありの超能力に比べ、霊能力とは、あくまで別の世界に住まう住人たちと関わりを持つための力だ。紅の言葉を借りるならば、向こう側の世界に触れるための力と言った方が正しいか。

霊の姿を見る。霊の声を聞く。霊を操り、時に霊と戦う。果ては、己の中に存在する霊的な力を用いて、病気などを治療する。様々な力の種類はあるものの、人間を玩具のように、簡単に壊してしまう力というものは照瑠も聞いたことがない。霊的な力の有無に関わらず、人を殺すということは、そう簡単にできるものではないのだ。

「とりあえず、後はこちらで情報を収集する他にないな。一応、現場に探りも入れておきたいが……今から、例の生放送が撮影されていたスタジオに向かうことは可能か？」

一通りの話を終え、紅が高槻に尋ねた。時刻は既に六時を周り、そろそろ日も暮れてきた。

「スタジオか……。まあ、僕や雪乃は構わないけど、君たちはどうするつもりなんだい？ 明日も日曜日で休日だと思うけど、どこか泊まる当てでもあるのかい？」

「問題ない。いざとなれば、俺はその辺の漫画喫茶でも渡り歩いて夜を明かすさ」

「漫画喫茶って……。そりゃ、君はいいかもしれないけど、残りの女の子たちはどうするんだよ……」

昨日の今日で、いきなり東京まで足を伸ばすという強行軍。かなりの無茶だとは思っていたが、高槻は改めて呆れたような声を出して紅に言った。

紅が独りで寝るのは可能でも、まさかこの大都会の真ん中で、高校生の少女を二人も連れて歩きまわるのは得策ではない。もし、何か事件にでも巻き込まれた場合、いろいろと面倒な事態も発生する。

やはり、ここは雪乃に頼んで、彼女の暮らしているマンションに泊めてやるのが理想だろう。年頃の少女が三人も寝るには少しだけ狭いかもしれないが、都会の真ん中に放り出すよりはマシだ。

「ふう、仕方ない。それじゃあ、悪いけど雪乃。今日は君の家に、お友達を泊めてあげるってことでいいかい？」

「はい。私は別に、構いませんよ。なんだったら、まゆさんも一緒にどうですか？」



言いたいことは、わかっている。そんな口ぶりで、雪乃が高槻に答えてみせた。長年、芸能界という特殊な環境で過ごして来ているからだろうか。こういった空気を読む力に、最近は雪乃も長けてきたと思う。

結局、その日は雪乃のマンションに女性陣を泊めるということで、一応の話はまとまった。後は、現場となった局のスタジオに、紅を連れて行って検証させるだけだ。

テレビ局の見学そのものは、一般人でもコネ次第でどうにでもなる。問題なのは、局が事件を隠すような動きに出ている以上、果たして事件の起きたスタジオに入れるかどうかということだ。

こればかりは、高槻も紅に保障する術がない。しかし、今、この場にいる全員が、今回の事件に不穏なものを感じているのは事実である。それを放って日常へと戻することは、高槻自身もまたできそうになかった。

葵璃凍呼が御鶴木魁の言っていたスタジオについたとき、既に辺りは暗くなっていた。

もうすぐ初夏とはいえ、さすがに六時を過ぎれば日も落ちる。六月近くになれば七時前でも明るいが、今はまだ、春分を過ぎて一カ月経つか経たないか。いくら冬に比べて明るくなったとはいえ、そこまで日が長いわけではない。

もつとも、昼夜を問わず人が動き回っているこの大都会では、そんなことは、あまり意味のないことかもしれない。現に、凍呼がスタジオに着いたときも、街はまだまだ眠ろうとはしていない。街灯やネオンに照らされた夜の街は、都会で暮らしている凍呼でさえ、その輝きに時に神秘的な何かを感じてしまう。

東京は、決して眠らない街だ。何かの小説で読んだ一節を思い出して、凍呼はなぜか、今になってその言葉に納得した。古来より闇を恐れ、闇に怯えていた人間の姿は、そこにない。

だが、それでも凍呼は知っている。この現代においてなお、人間の常識では測ることのできないものが存在するということを。自分が体験したからこそ、それらの出来事を始めて真実だと信じられるということ。

スタジオのあるビルの階段を昇り、凍呼は待ち合わせの場所へと足を急がせた。この時間、まだスタジオの殆どは撮影で使われている。魁が待ち合わせ場所として指定してきたのは、そんなビルの一角にある、休憩室の一つだった。

「あつ、弓削さん」

目の前に知り合いの男の姿を発見し、凍呼は思わず声に出して彼の名前を呼んだ。その声に、男は一瞬だけ肩を震わせると、ゆっくりと凍呼の方に顔を向けて振り返った。

ド派手なアロハシャツに、色の薄い癖のある髪の手。目元は大きなサングラスで隠され、どこを見ているのかさえわからない。腕も脚も程良く鍛えられ、服の上からでも頑丈そうな胸板の持ち主だとわかる。

傍から見ればヤクザ者にしか見えないような格好をしているが、彼が決してそうだった類の人間でないことは、凍呼が一番良く知っている。彼こそが、あの御鶴木魁の一番弟子。弓削総司郎ゆげそうじろうその人なのだから。

「どうも……。お待ちしましたっす……」

外見に反して気弱そうな声で、総司郎が凍呼に頭を下げた。他人と面と向かって会話することに慣れていないのか、彼は常に必要最低限の言葉しか発しない。それは何も目上の人間に対してだけでなく、凍呼のような少女に対してもまた同じことだった。

「もう、そんなに畏まらないですよ。私は別に、そこまで気を使ってもらわなくても平気だから」

本当は、その言葉の半分は嘘だ。未だに響く頭痛を薬で抑えて家を出たため、完全に本調子というわけではない。そんな凍呼の気持ちを知ってか知らずか、総司郎はやはり無言のままだった。

踵を返し、総司郎が目の前にあった扉をゆっくりと開く。きっとこの向こう側に魁が待っているのだろう。仕事は終わったと言っていたが、それでは、あの電話の後からずっと凍呼を待っていてくれたのだろうか。だとすると、少しばかり申し訳ない気分にもなってくる。

「失礼します……」

別に、遠慮する必要などない。そう、わかっていても、凍呼はそっと足音を忍ばせるようにして部屋に入った。部屋の中は空っぽで、中央に大きなテーブルが置かれている以外には、取り立てて見るような物もない。そして、そんな部屋の中央に、パイプ椅子に腰かける魁がいた。

「やあ、トーコちゃん。待ってたよ」

実に自然に、さらりと流すようにして魁が言った。女の扱いに慣れている男の態度だと凍呼は思った。

「すみません、お待たせして」

「いや、別に構わないよ。俺も、ちょうど仕事が終わって暇だったしね。それに、君の受けた霊傷が、どこまで回復しているかも気になったし」

茶色く染まった髪をかき上げるようにして、魁が探るような視線を凍呼に送ってくる。凍呼は返事をする代わりに頷くと、何も言わずに袖をまくって自分の腕にある痣を見せた。

「へえ、随分と薄くなつたじゃない。まあ、この分なら、もう一週間くらいすれば完全に治るよ。それまでは、ちよつとだけ身体が重たいかもしれないけどね」

「そうですか……。でも、こんなこと、あまり言いたくないんですけど……」

「なんだい？ 遠慮しないで、何でも言ってくれよ」

「はい。実は……例の、西岡プロデューサーの件なんですけど……収録中に亡くなつたって、本当なんですか？」

「ああ……。残念だけど、本当だよ。彼は収録中に、俺たちの目の前で亡くなつたんだ。それも、とてもこの世のものとは思えない、壮絶でむごたらしい死に方だね」

魁が、一瞬だけ凍呼から視線を逸らせる。陰陽師の末裔を名乗る時に大悪霊と戦ったこともあると豪語する彼でさえ、あの日の西岡の姿を直視したいとは思わなかった。あんなグロテスクで凄惨極まる最後など、できればあまり頭に残しておきたくない。

「あのう……。むごたらしい死に方って、具体的にはどんな……」

恐る恐る、凍呼は魁に訊いてみた。魁の様子からして、西岡の死に様は相当に酷い物だったということは凍呼にもわかる。そして、魁が凍呼にそれを伝えるのを、できれば避けたいと思っていることも。

しかし、凍呼にしてみれば、それらの真相を確かめるために魁の下へやってきたのだ。例え、ここでどれほど恐ろしい話を聞かされ

ようと、それを受け止めるだけの覚悟はできている。自分の頭の中にある靄を放っておいて、このまま恐怖に怯える生活をするよりはマシなはずだ。

永遠の恐怖よりも、一時の恐怖を選んだ方がいい。そんな凍呼の決意が伝わったのだろうか。重たく口を嚙んでいた魁だったが、やがて再び凍呼の方へ顔を向け、当日のことを少しずつ話し出した。

「あの日、俺は番組のゲストの一人として、総ちゃんと一緒にスタジオに入っていたんだ。いつもの席に座って、番組の最後に解説をする。普段通りの流れでやれば、よかったはずだったんだけどね」

「そうですね。幽霊関係の番組になるときは、いつも御鶴木さんが来て、最後に解説をするっていうのがパターンでしたし」

「だろ？ だから俺も、あの日はとっておきのトークを用意しておいたんだ。もつとも、それは番組が途中で中止になっちまったせいで、全部お流れになっちゃったけどね」

わざとらしく肩を竦め、魁は大きな溜息を吐いた。西岡が亡くなったこと以上に、自分の話したかったネタが話せなかったことが残念だ。そんな風にも受け取れる態度だった。

「まあ、プロデューサーが変死したのは事実だし、あんなんじゃない番組も続けられない。それは仕方ないことだと思うよ。問題なのは、むしろその後さ」

「その後って……。もしかして、まだ何かあるんですかあ……」

「おいおい、そんな泣きそうな顔するなよ。西岡プロデューサーが

亡くなったのは事実だけど、それから先は、怪談話ってわけでもないからさ」

凍呼に向けられた魁の口調が、幾分か優しいものになった。怪奇番組にレギュラー出演しているながら、凍呼が怖い話を苦手としていること。それは、魁も知っている。

「例の事件があった後、俺は総ちゃんに頼んで色々調べてもらったんだよ。でも、結果は駄目駄目。なんか、テレビ局の方でも、強引に事故死ってことにしちゃってさ」

「事故死って……本当に、事故だったんじゃないんですか？」

「確かに、事故死と言えば事故死だよ。もつとも、局側としては、スキヤンダルみたいなのを恐れてたつてもあるだろうね。ただ……殆ど緘口令みたいなやり方で関係者の口を封じたのは、俺も解せない部分があったけど」

「緘口令……。それじゃあ、御鶴木さんも、西岡プロデューサーの死の原因はわからないってことですかあ!？」

「残念だけど、そういうこと。普通じゃない死に方したのは確かだけど、それ以上は俺にもわからない」

「そ、そんなあ……。まさか、私や他のスタッフの人まで、プロデューサーみたいに死ぬってことはないですよねえ……」

もう、声が完全に震えている。魁は言葉を選んで話をしていたつもりだが、凍呼は泣き出す寸前だ。

これが心霊番組の収録であれば、凍呼の反応は番組を盛り上げるものとして歓迎されただろう。しかし、今はそんな場ではなく、魁としては凍呼にこんなところで泣かれるのは御免だった。

仕方ない。これ以上は、下手に凍呼を怖がらせても意味がない。そう思い、魁は少しばかり宥めるような口調になって、そつと凍呼に語りかけた。

「まあ、落ちついてよ、トーコちゃん。トーコちゃんは現場にいなかったかもしれないけど、俺がちゃんと、あの屋敷にいた霊を除霊したのは本当だから。現に、あ後はトーコちゃんの霊傷も収まって、変な夢も見なくなっただんたろ？」

「は、はい……。でもお……」

「だから、そう怖がらないでくれって。なんだったら、俺がどうやって屋敷の幽霊たちを除霊したか、ちゃんと教えてあげるからさ」

そう言いながら、魁は今まで隅の方で黙っていた総司郎の方へと目をやった。言葉にはしなかったが、そんな魁の瞳を見て、総司郎は静かに頷き服の袖をまくり上げた。

その日は、春先にしては妙に暗く、灰色の雲が空を覆っていた。

撮影を終えた古い屋敷から、葵璃凍呼はなんとも怯えた顔のまま外に出た。作り物とはわかっていても、やはりお化け屋敷の類は苦



手だった。

本当にあった呪いの館。それが、今回撮影された映像のタイトルだった。一見して何の変哲もない廃屋を、お化けの出る呪われた館と称し、スタッフと一緒に潜入取材を試みる。今までも何度かやったことのある、廃墟探検の撮影だ。

もつとも、単なる廃墟探検とは違い、今回は随分と手の込んだ仕掛けが施されていた。特に、屋敷の奥の部屋に仕掛けられていた襖のからくり。あれは、凍呼からしても見事なものだったと思う。

こちら側からは決して開かないように襖を固定され、さらには中に赤い水の入った水槽のような物が仕掛けられている。襖も特注品で、外から見ただけではわからないが、一部が異様に薄い作りになっている。そこを蹴り飛ばすと襖に穴が開き、中から水が飛び出すという仕掛けだ。

初め、スタッフから話を聞かされたとき、凍呼は比較的余裕の表情を浮かべていた。確かに、襖が破れて血のような水が溢れ出すというのは恐ろしいものがあるが、仕掛けがわかっていれば、別にそこまで怖くはない。どうせ、今回も下らないやらせなのだから、適当に怖がっておけば番組的にも盛り上がるだろう。

もつとも、凍呼のそんな甘い気持ちは、問題の家に入った途端に消え失せた。

薄暗い、電気さえ通っていない古びた廃屋。もう、何年も人の手が入っていないのか、至るところに埃が積もっている。木製の床は凍呼が歩く度にぎしぎしと嫌な音を立て、染みや割れ目の目立つ土壁からは、カビと埃の入り混じったような臭いが漂ってくる。

いつの間にか、凍呼はこれが やらせ であることも忘れ、家の空気に飲み込まれていた。もしかすると、打ち合わせにはなかった場所にも仕掛けがあり、いきなり驚かされるのではないか。そんな考えも頭に浮かび、余計に身体が強張ってしまう。

古びた床板を踏みしめながら、凍呼はスタッフと一緒に屋敷の奥へと入って行った。事前に見取り図は見せてもらっていたが、いざ入ってみると、その奇妙な作りを改めて実感した。

今回の撮影で使われることとなった廃屋は、単に古いだけの屋敷ではない。一階は普通の作りなのだが、問題は二階だ。

通常、二階に上がる階段というものは一つだけで、それを上げれば二階の廊下から各部屋へと行くことができるようになっていて、ところが、この廃屋に関しては、そういった常識が通用しない。

二階へ続く階段は、玄関前のものと屋敷の奥にあるものの二つ。それぞれが独立した作りになっており、奥の階段からは二階の北側、手前の階段からは二階の南側に上がることができる。そして、二階は北側と南側で完全に分断されており、上がってからそれぞれを行き来する手立てはない。

要するに、家の二階が完全に二つに分かれており、それぞれを行き来するためには、どうしても一階に降りねばならない作りになっているのだ。こんな不自然かつ不便極まりない作りをした家など、凍呼は今までに見たことも聞いたこともなかった。

今回、凍呼たちが撮影で使ったのは、そんな奇妙な家の最深部だった。屋敷の奥にある階段を昇った北側の部屋。その襖にあらかじ

め仕掛けがしてあり、A Dの一人が仕掛けを発動させるという手順になっていた。

（それにしても……）

撮影の終わった廃屋に降り返り、凍呼は改めて考えた。

屋敷の北側。今日の撮影で使われた、廃屋の最深部。あそこに近づけば近づくほど、周りの空気が湿ってカビ臭いものになったのは何故だろう。

家が古いと言われればそれまでだが、それにしても酷い湿気だった。玄関先とは異なり、床はあちこちが腐って黒ずんでいた。それは壁も同様で、北側に入った瞬間、朽ち果てた土壁一面に黒カビが生えていたのを見たのは記憶に新しい。その、あまりに酷いカビと埃の臭いに、スタッフが一時的にマスクを貸してくれたほどだ。

本当は、この屋敷には何かあるのではないか。ディレクターも、他のスタッフも心配ないとは言っていたが、それでもここは、地元では有名なお化け屋敷なのだ。スタッフの仕込んだやらせ以外には何もなかったが、もしかすると気がついていないだけで、撮影した映像には何かが映り込んでいるかもしれない。

自分の頭に恐ろしい考えが浮かんだことで、凍呼はすぐさま頭を横に振ってそれを打ち消した。

廃墟探検などを行っているのは、これが自分の仕事だからだ。本当は怖い話など好きではないし、もっと明るく華のある舞台にも立ってみたい。ただ、今の自分には、それを成すための実力が伴っていないというだけで。

これはあくまで、自分にとって過程に過ぎない。そう、割り切らねばやっていられないと思い、凍呼はそれ以上、今日の撮影について悪く考えるのを止めた。

撮影を終え、凍呼はスタッフに軽い挨拶を終えた後、早々と自分の住んでいるマンションへと帰宅した。疲れていたということもあったが、何よりも、あんな薄気味悪い家の建っている場所になど、あまり長くいたくはないというのが本音だった。

いつもより念入りにシャワーを浴び、凍呼は全身を擦るようにして何度も洗った。髪の毛に廃屋の埃やカビがついていると思うと、なんだかそれだけで気持ちが悪くなってくる。あの手のロケはやらせとわかっていても、どうしても身体が拒絶反応を示してしまう。

いつたい、自分はなぜ、こうまでして仕事を続けているのだろう。時折、ふっとそんな考えが頭をよぎる。

秋葉原で、売れないゴスロリアイドルとして、水面下で活動をする数年。ようやく日の目を浴びたと思ったら、よりもよってオカルト番組のレギュラーだった。

怖い話は、生まれつき苦手だ。本当は、あんな仕事などしたくない。廃墟の探検や心霊スポットの探検など、できれば少しでも減らしてもらいたい。

そう、頭では思っけていても、しかし凍呼は自分に言われた仕事を断ることなどできなかった。事務所に迷惑がかかるというのもそうだったが、なにより凍呼自身、下手に我俣を言っけて仕事を干されてしまっけるが怖かった。

この業界で成功するには、多少のことは我慢しなければやっけてられない。今は売れていても、流行というものは変わり易い。それに、今の事務所にだっけて、自分の代わりなどいくらでもいる。どんな仕事でもこなせねば、役立たずの烙印を押されて直ぐに捨てられてしまっけるだろう。

一度、芸能界に身を置いた者は、なかなか普通の生活を送れない。中には過去の栄光を忘れられず、どうしても業界から離れられない者も存在する。果ては、そのまま業界の闇の部分へと堕ちてゆき、アダルトビデオの類に出演して食いつなぐような人間もいると聞いたことがある。

自分の裸を売り物にするくらいなら、怪奇番組で心靈スポットに送り込まれている方がマシだ。自分はまだ、なんとか我慢できる範囲での仕事しかしていない。そんなことを自分自身に言い聞かせながら、凍呼はシャワールの栓を閉めてバスルームを出た。

「うっつ、寒っ！ ちゃんと、湯船につかった方がよかつたかな……」

バスルームから出ると、思っけたより冷たい空気が肌に触れて驚いた。もう季節は春だというのに、今日は妙に冷え込む日だ。雨が降っているわけでもないのに、いったいこの気候の変化はなんだろう。昼間、撮影のときでさえ、あの家の中に入るまではそれなりに温か

かったというのに。

なんだか言いようもない不安にかられ、凍呼は足早に布団の中に潜りこんだ。こんな日は、さっさと寝て嫌なことを忘れるに限る。明日になれば、またいつもと変わらぬ日常が始まり、お化け屋敷の話などは記憶の彼方に押し込めてゆくことができる。そう、信じて。

一度、布団に入ってしまうと、思ったより眠りに着くのは早かった。久しぶりのロケで、疲れていたのもあったのだろうか。凍呼は直ぐに軽い寝息を立てて眠り始め、後には傍らに置かれた目覚まし時計の針だけが、無常に時を刻み続けている。

一時間、二時間、そして三時間。どれほどの時間が過ぎた頃だろうか。

凍呼が目を覚ましたとき、辺りはまだ薄暗かった。夜明けとも夜中ともつかない微妙な時間。東の空が白み始めるには、まだ少しだけ余裕がある。

なんとも変な時間に目が覚めてしまったものだ。そう思って両腕を動かそうとしたとき、凍呼は自分の身体に妙な違和感を覚えて顔をしかめた。

手が、動かない。いや、手だけでなく、足も身体も、その全身が何かに押さえつけられたようにしてまったく動かない。

（これ……金縛り！？）

噂には聞いたことがあったが、自分が金縛りに遭うのは初めてだった。まさか、あの幽霊屋敷を探索したことで、何か変なものでも

連れ帰ってしまったのだろうか。嫌な想像が頭に浮かび、凍呼はなんとかして指先を動かそうと力を込める。

金縛りは、医学的にも解明されている、ごくありふれた現象の一つに過ぎない。頭は起きていても、身体が疲れて眠っている。そのアンバランスな状態が、一見して心霊現象のようなものを引き起こす。

何かの本で読んだ一節を思い出しながら、凍呼はなんとか手を動かし、声を出そうと頑張った。もともと、頭では理解していても、身体は言うことを効かない。まだ、心霊現象と決まったわけでもないのに、自然と焦りから額に汗が滲んでくる。

このまま自分は、身体の動かせない恐怖に耐えながら、朝が来るまで固まっていなければならぬのか。そんなことを考えた矢先、今度は凍呼の全身を、何かが絞めつけるような痛みが襲った。

「……………っ!？」

声に出して叫ぼうにも、それは声にならなかった。いきなり胸元が苦しくなり、全身を押さえつける力が強まった。

「あっ……………ぐあっ……………かつ……………」

全身を震わせながら、凍呼は両目を大きく開いたまま自分の胸元を見る。そこには何もなく、何か重たい物がのしかかっているというわけではない。だが、その間にも、凍呼の身体はさらに強く絞めつけられ、呼吸をすることさえまもなくなくなってくる。

(な……………なに……………これ……………)

薄れゆく意識の中で、凍呼は自分の身体の上を何かが這い回るような感覚を覚え、この金縛りの正体をうつすらと理解した。

パジャマと肌の間、自分の服と身体の間を、何かが這うようにして動き回っている。それは不快なぬめりを持ちつつも、妙にざらざらとした鑢やすりのような感触を併せ持っている。両手、両脚、それに腹から胸にかけてまで、その奇妙な力は容赦なく凍呼を絞めつける。

痛い。苦しい。気持ち悪い。得体の知れないものに全身を絞めつけられる恐怖から、凍呼はいつしか声も出さずに泣いていた。大きく見開かれた瞳はそのままに、大粒の涙が休むことなく溢れ出した。

身体を自由を奪われたまま、凍呼の口がぽっかりと開く。本人の意思とは無関係に、顎の力が抜けてゆく。

「うぐうっ!!」

一瞬、身体が絞めつけが収まったかと思うと、今度は口の中に異様な感触を覚えて呻いた。生臭く、なにやら細長いものが、凍呼の口から身体の中に入ってくる。目には見えないが、何か力のようなものが、ずるずると凍呼の中に入り込んで体内を侵食してゆく。

涙と鼻水と、それから涎を垂らしたまま、凍呼は見えない力に成す術もなく翻弄されていた。身体の中に妙な力が入り込んでくる度に、全身が小刻みに痙攣して悲鳴を上げた。

やがて、どれほどそうしていただろうか。

気がつくと、辺りは既に明るくなっていた。東の方から白い光が



射し込んで、凍呼は自分がようやく金縛りから解放されたことを知った。

「はぁ……。助かった……。の……？」

自分でも不思議なくらい、はつきりと声が出た。試しに両手に力を入れてみると、なんなく拳を握り締めることができた。

いったい、昨晚のあれは何だったのか。納得のいかない表情のまま、凍呼はゆつくりと起き上がる。

全身に残る、あの絞めつけるような不快な感覚。あれが気のせいだったとは、残念ながら思えない。夢にしては妙にリアルで、しかし現実にはあまりにも不可解。その、どちらとも言えぬ不気味さが、凍呼の恐怖心を否応なしにかき立てる。

「うつ……」

突然、妙な吐き気を覚え、凍呼は思わず自分の口に手を当てた。腹の奥から何かが這い上がってくるような感覚に加え、喉にも何かが詰まっている。金縛りのときとは別に、あまりの気持ち悪さに声を出すことができない。

洗面所まで走る余裕など、凍呼にはなかった。情けなくも、布団の上に胃の内容物を全て吐き出し、凍呼は肩で息をしながら自分の口から吐き出された物へと目をやった。

前触れもなく、いきなり吐き戻してしまうとは、何か変な病気にでもなってしまったのか。そう思って布団の上に撒き散らされた吐瀉物を見たとき、凍呼の瞳が再び恐怖に凍りついた。

「ひいっ!!」

軽い悲鳴を上げ、布団を跳ねのけて後ろに下がる凍呼。自分が吐き戻した物の中にあつたのは、乳白色をした薄い皮のようなものだった。

これはいったい何だ。なぜ、自分の身体の中から、こんな物が出てくるのだ。

吐瀉物の中に埋もれるようにして顔を覗かせている、一繋ぎになった奇妙な皮。気持ちが悪いとは思ったが、凍呼はそれを恐る恐る摘まみ上げた。

皮が、まるで今もなお生きているかのように、ぷるぷると震えて揺れた。そして、その皮をよくよく眺めたとき、凍呼は再び悲鳴を上げて、今度こそ部屋を飛び出した。

鱗のような表面をした、乳白色の薄い皮。それを見たとき、凍呼は理解してしまったのだ。自分の身体の中から出て来たものが、他でもない蛇の抜け殻であることを。

昨晚、目に見えない力が体内に入り込んだできた際のことを思い出し、凍呼は慌てて洗面所へと直行した。汚れたパジャマを着替えたかったというのもあるが、それ以上に、口の中をゆすがないと気持ちが悪くて仕方がなかった。

酸っぱい臭いの残るパジャマを脱ぎ棄てて、凍呼は洗面台の鏡に映る自分の姿と鉢合せた。なんのことはない、見慣れたいつもの自分の裸身。そうとばかり思っていた凍呼は、次の瞬間、マンション

中に聞こえんまでの悲鳴をあげて、その場にしゃがみ込んでしまった。

「い、いやあああつー!」

絶叫が、早朝の浴室に響き渡る。鏡に映った凍呼の身体には、蛇に絞められたような鱗の痕が、あちらこちらに青黒い痣となって残っていた。

凍呼がスタジオに姿を見せたとき、時刻は昼も少し過ぎた頃になっていた。

今朝、布団の上で成す術もなく吐き戻し、その中であつた物を見て悲鳴を上げたこと。その上、自分の身体に残った痣を見て、さらに絶叫してしまったこと。

およそ、馬鹿馬鹿しいことだとは思つたが、ここまで酷いと凍呼も信じざるを得なかった。この世には自分の頭では理解不能なことがある、お化けや幽霊といった類の者は、確かに存在するのだということを。そして、それらの存在に不用意に関われば、自分の寿命を縮めかねないということ。

こんな酷い目にまで遭つてしまつては、さすがに心靈番組のレギュラーなど務められそうにない。事務所には叱られるかもしれないが、しばらく休暇をもらうというのも手だろうか。仕事がなくなるのは怖かったが、こんな状態では満足に今まで通りの仕事さえこな

せそうにない。

なんとも言えぬ不安を抱えながら、凍呼は会議室の扉を開けた。今日は、ここでスタッフと一緒に番組の打ち合わせをすることになっている。新春特番として生放送で流される、奇跡空間ミラクルゾーンの演出をどうするか。細かい部分の調整含め、再確認することになっていた。

本当は、そんなことをしている余裕さえない。暗い面持ちのまま、凍呼は力なく会議室の中へと足を踏み入れた。

「お、おはようございます……」

返事はない。ディレクターもカメラマンも、誰もが目を下に落として俯いている。中には明らかに睡眠不足に陥っている者もあり、目の下に大きな隈を作っていた。

いったい、これはどうしたことが。昨日の夜から今朝にかけて、妙な現象に巻き込まれた者。それは凍呼だけでなく、他の人間も同じということだろうか。

疑問が次から次へと湧いて来る。このまま自分は、妙な世界に取り込まれ、最悪の場合はとんでもない死に方をするのではないだろうか。それこそ、ホラー映画の一幕のように、誰もが顔を背けるような結末で。

「あの……。皆さん、どうされたんですか？」

用意されたパイプ椅子に腰かけながら、凍呼は恐る恐る訊いてみた。だが、それに答える者はなく、ディレクターの室井が代わりに

目で合図するだけだった。

室井の向けた視線の先。部屋の中央に用意された椅子に、何やらホストのような格好をした男が座っている。両腕を胸の前で組み、傍らにアロハシャツを着たヤクザのような男を侍らせて、実に自信に満ち溢れた表情で笑っている。

「さて、と……。どうやら、これで役者は全部揃ったってところかな？」

凍呼の目の前に座っていた男が、唐突に口を開いた。彼の名前は、凍呼もよく知っている。この番組で心霊関係の話をする毎に呼ばれている、現代を生きる陰陽師。御鶴木魁、その人だ。

「今日、ここに集まってもらったのは、他でもない。俺がそのデイレクター、室井さんから依頼を受けてね。ちよつと、この間の撮影で関わった、幽霊屋敷について調べてみたんだよ」

誰も尋ねていないのに、魁は自分から喋り出した。この場の主役は自分だ。そんな主張に溢れた、やけに上から目線の口調だった。

「結論から言うと……とりあえず、ここにいる全員が、西岡さんを除いて取り憑かれているね。あんた達、あの家で撮影するとき、何か細工を仕込んだでしょ。そのせいで、家に溜まってた色々な霊が怒って……それで、現場にいた全員に取り憑いちゃったんだ」

「取り憑かれたって……。まさか、本当に幽霊なんてもんがいるって言いたいのか？」

真っ先に異論を唱えたのは、他でもない室井だ。オカルト番組の

ディレクターでありながら、彼はそういった類の話を基本的に信じていない。

今回、魁を呼んだのも、他のスタッフからの強い要望あつてのことだった。なんでも、あの幽霊屋敷の撮影の後、音響を担当していたスタッフが奇妙な体験をしたとか。まあ、霊の存在を単なる金儲けの材料としてしか見ていない室井からすれば、そんな話は単に荒唐無稽な与太話に過ぎなかったが。

「おいおい。幽霊番組なんか作ってるのに、お宅は幽霊の存在を信じてないってわけ？　だったら、俺の力も信じてないってことになるけど……そういう認識で、構わない？」

「いや、それとこれとは話が別だ。我々だって、そっちの力というやつは、信用しているつもりだ」

「随分と都合のいい解釈だね、それ。まあ、俺としては、別にあんた達に信じてもらおうともえまいと、大したことじゃないんだけどさ」

あくまで軽く流すようにして、魁は片手をひらひらとさせながら言った。こういった反応を示されることは慣れている。そう言わんばかりの態度である。なんというか、若い割には随分とふてぶてしい。

「とりあえず、その音響スタッフの人。確か、古澤さんだっけ？　あんたには、女の霊が取り憑いているね。昨日の夜、何か妙なことがなかったかい？　それこそ、変な女が枕元に立ったとか、女のすすり泣きが聞こえたとか……」

「ちよっ！！ な、なんでわかるんですか！？」

「どうやら、図星だったみたいだね。女の正体は不明だけど、君の後ろに、なんとなくそういった者の影が見えたんだよ。これ以上は、もっと詳しく調べてみないとわからないけど」

「ま、マジかよ……。昨日のあれ、本当に夢じゃなかったんだ……」

馬鹿みたいに口を大きく開けたまま、古澤正昭はそれ以上何も言えなかった。ふるさわまさあき

昨日、あれから仕事を終えた後、どうにも寝苦しくて夜中に目が覚めた。すると、何やら自分の足下に、白い足がぶら下がっているのがわかった。恐る恐る顔を上げて天井を見ると、そこから前髪で顔の正面を隠した不気味な女が吊り下がっていたのである。

当然、古澤は魁に、このことを直接話していない。それにも関わらず女の存在を言い当てるのは、やはり魁の力は本物だということか。

「次は、カメラマンの加瀬さんだね。あんた、問題の屋敷の映像を撮った張本人だろ？ 直接誰かが撮り憑いているってわけじゃないけど、ファインダー越しに、随分とたくさんの幽霊を見たね。中には凶悪なやつもいたみたいだから、そいつの放っていた負の波動を直に受けちゃってる。昨日は身体がだるい程度で済んだかもしれないけど、このまま編集まで関わっていたら、いつかは命が無くなっていたかもね」

古澤の隣に座っているカメラマン、加瀬順平かぜじゅんぺいへと目を向けて、魁が物騒なことを平気で言つてのけた。加瀬もまた魁の霊視に驚いて

いるようで、なにやら肩を回しながら、上に乗っている埃を払うようにして口を開いた。

「おいおい、俺もかよ……。まあ、でも……。確かに、あの屋敷に入ってから変だとは思ってたよ。なんだか昨日は身体が重たかったし、それは今日も変わらないし……」

「でしょ？ やっぱ、俺に霊視させといて正解だよ。それに、何も映像から影響を受けているのは加瀬さんだけじゃない。プロデューサーの西岡さんだっけ？ あんた、加瀬さんが撮った映像を、確か何かのために回して見たでしょ。霊害封じもしてない心靈映像なんて見たら……。それこそ、あんたの方が先にくたばりかねないよ」

「何を馬鹿な。だいたい、あんな映像一つで、どうして俺がくたばるなんて断言できる!？」

突然、自分の名前を出されたことで、西岡が驚きのあまりに目を丸くして言った。自分は屋敷に向かっていない。だから、何かが起きることもない。そう、高をくくっていたからだ。

「それは簡単だね。人間にも、霊の攻撃に強いやつと弱いやつがいる。バイキンに対する抵抗力みたいなもんか？ 俺みたいに修業を積んだ人間なら別だけど……。西岡さん、あんた、霊に対する耐性が特にないみたいだからさ。一応、死なれる前に警告しておいたってわけ」

「なんだか、随分と物騒な話だな。だが、そもそも、あれのどこが心靈映像なんだ？ こっちでも見てはみたが、これといって、幽霊の映っている場面なんて……」



「まあ、素人さんが見ても、ちょっとやそつとじゃ幽霊なんて見つかからないよ。俺みたいに、ちゃんとした力を持った人間が霊視すれば、あの家に色々な霊がうようよと漂っているのが見れたけどさ」

飄々とした口調で、魁は肩をすくめて言い放つ。なんだか小馬鹿にされているようで腹が立ったが、西岡はそれをあえて口に出さずに堪えた。

オカルト番組のプロデューサーではあるが、西岡もまた、幽霊だの超能力だのといった話は信じていない。魁を起用しているのも、あくまで視聴率が取れるためだ。そんなお飾りの若造に好き勝手言われるのは好かないが、ここで怒れば自分の尊厳が揺らぐことになる。それだけは、いくら西岡とて避けたかった。

「さて……残るはA Dの宮本さんと、ディレクターの室井さん。それに、トーコちゃんの方だね。宮本くんは、まあいいとして……室井さんとトーコちゃんの方は、ちょっと問題かな」

「も、問題って……。私、そんなに悪いんですかあ!？」

「正直に伝えると、かなりマズイね。他の連中には気まぐれで霊が憑いているような部分もあるけど、君に憑いているのは別格だ。憑依っていうよりは……むしろ、祟りに近い物が起きている可能性があるな」

「祟り……」

昨日の夜から今朝にかけての出来事が、走馬灯のように凍呼の頭の中を駆け抜けた。呪いや憑依ではなく、祟り。その違いなど凍呼にはわからないが、確かに思い当たる節はある。今朝、ベッドの上

で吐き戻した物の中身と、全身につけられた青い痣。あれらを祟りと言わずして、なんとさえいいのだろう。

先ほどから、魁の探るような視線が凍呼に向けられている。今まで見せていた、どこか人を食ったような感じは既がない。テレビに映っているときでさえ滅多に見せない、本気の意味が伝わってくるような眼差しだ。

「この中で、一番酷い霊傷を負っているのは間違いなくトコちゃんだ。なんだか知らないけど、一夜にして魂まで酷く損傷しているね。霊的な強い力で魂を絞め上げられて、更には内部からもボロボロにされたつてところかな。こんな酷いやられ方をして、よくもまあ無事だったと思うよ、俺も」

最後の方は、感心しているとも呆れているとも取れる言い方だった。魁の話が本当ならば、昨日、自分は金縛りに遭ったまま、あの世へ連れ去られていたとしてもおかしくはないのだ。そう思うと、凍呼の背筋を冷たいものが一気に走り、彼女は思わず両腕で胸元を隠すようにして抱き締めた。

「その様子じゃ、昨日の晩は随分と怖い思いをしたんじゃない？ まあ、言いたくないなら別にいいけど……このまま放っておいていいわけじゃないのは確かだね」

「そんな……。私……私、まだ死にたくありません!!」

魁の口から告げられた、絶望的な一言。昨日の件が現実だったというだけでなく、このままでは遠からず自分は死ぬ可能性もある。あの、奇妙な力に屈服し、身も心もボロボロにされて朽ち果ててしまうのか。そんな終わり方など、絶対に嫌だ。

自分は今まで、なんのために仕事をしてきたのだろう。辛いことも多かったが、それでもこの業界で、陽の目を見ることを夢見て我慢してきたのではないだろうか。大嫌いな心霊番組のレギュラーを務めていたのも、全てはその日のための下準備。そう、割り切っていたと言っのに、これではあまりに救いが無い。

こんなところで死にたくない。一度、そう思い始めると、涙が溢れて止まらなかった。何かを言葉にしたかったが、それさえも適わない。湧き上がってくる色々な感情を一度に処理できず、凍呼は本能のままにひたすら泣いた。

「あのう……」

凍呼の横で、先程から小さくなっていたやせ気味の男が手を上げた。

「なんだい？ えっと……君は確か、A Dの宮森君だったっけ？」

「は、はい。それで……他の人の話はわかりましたけど、俺にはいった何が憑いているんですか？ まさか、凍呼ちゃんと同じくらい危険なものとか……」

「あつ、それは心配要らないかな。君に憑いているの、あの家に巣食ってた古狸の霊だから。悪戯好きなだけで、特に害はないけど……ついででいいなら、まとめてお祓いしてやるよ」

「ついでって……勘弁してくださいよお、御鶴木先生……」

沈痛な面持ちのスタッフや泣いている凍呼を横目に、A Dの宮森みやもり  
りよった

良太が情けない声を上げた。しかし、そんな彼の叫びに耳を傾けてくれるような者は、当然のことながら、この部屋の中にはいなかった。

御鶴木魁が問題の屋敷を訪れたとき、既に時刻は入相の鐘が鳴りだそうとしている頃合だった。

逢魔ヶ刻。昼とも夜ともつかない中途半端な時間は、古来より魔と出会い易い時間だと言われている。普段であれば、こんな時刻に幽霊屋敷へ出向くなどは自殺行為なのだが、今回ばかりは話が違う。

連中の動きが活発になる時間は、一日の間でも、そうたくさんあるわけではない。この機を逃せば、後は夜中の丑三つ時まで機会を窺って待たねばならない。凍呼の身体に残った霊傷のことまで考えると、いつまでも悠長なことを言っている場合ではなかった。

「あれ、室井さん。そっちの方が、早かったみたいだね」

車から降りた魁が、問題の家の前に佇む室井を見て言った。対する室井は、こちらはまた随分と不機嫌そうな顔をして、車から降りたばかりの魁のことを睨み返した。

「おい、陰陽師。約束の時間より十分ほど遅いぞ。こんな薄気味悪い家の前で、いつまでも人を待たせるな」

「あれ、室井さん。俺と違って、そっちは幽霊なんて信じていない

んじゃなかったの？」

「やかましい。それよりも、お前……あの会議室で、俺だけ霊視をしなかったよな。あれはいつたい、どういう理由からなんだ？」

「おやおや。心霊現象否定派のくせに、自分に関係することは、随分と気になるみたいだねえ。まあ、俺としては、そういった人間臭い部分も嫌いじゃないけどさ」

「御託はいい。会議室で俺の霊視をしなかった理由。とりあえずは、それを教えてもらおうか？」

落ちつきなく、妙にそわそわした様子で、室井は魁に用件だけを告げた。もつとも、魁はそんな室井のことを半ば無視し、傍らにいた総司郎を連れて家の中へと入ってゆく。

「おい、何処へ行く！ 話はまだ、終わっちゃいないんだぞ！？」

室井の言葉など、魁には聞こえていないようだった。俺は、俺のやり方でやらせてもらう。その言葉を背中では語りながら、魁は躊躇うことなく廃屋の扉を開け放つ。

外の空気が入ると同時に、入れ違いで中にこもった空気が溢れて来た。暗く湿気でカビ臭い、嗅いだ瞬間、誰もが陰鬱な気分になり、そう不快な匂いだ。

魁の斜め後ろに立っていた総司郎が、一瞬だけ肩を震わせて歩みを止めた。この屋敷の中から溢れ出て来る、恐ろしいまでの陰鬱な気。それに躊躇いを覚えたのだろうか。

「どうしたの、総ちゃん？　もしかして、柄にもなくびびっちゃってる？」

「いえ、そんなことは……。ただ、あまりに酷い臭いだったので、ちよつと……」

「なるほど。まあ、感覚で言ったら、総ちゃんのそれは俺よりも敏感だからね。あまり緊張し過ぎると、返って毒気にやられちゃうかもしれないよ。その辺、ちゃんとコントロールしてよね」

「はい、先生」

その身に違わぬ無骨な声で、アロハシャツ姿の総司郎が答えていた。その様子を後ろから窺っていた室井は、今一つ話がかめぬ様子で二人の姿を見比べている。

そもそも、この番組にディレクターとして携わり、あの陰陽師を呼んだときから妙に思っていた。

弓削総司郎。魁の話では単なる弟子だということだったが、それにしては奇妙な男だ。どう見てもボディガードにしか見えない身体つきに、ヤクザを思わせる型破りな格好。その瞳を隠すようにして身につけているサングラスは、片時も外されることがない。まるで目元を見られては困るかのように、常に総司郎の身体の一部としてそこにある。

ホストのような外見の陰陽師に、これまたヤクザのような格好の弟子。なんとも珍奇な取り合わせだが、視聴率が取れるなら構わないと思っていた。少なくとも、今日になってスタッフの誰もが奇妙な体験をしたと転がり込んで来るまでは。

果たして、この男の力は本当に当てになるのだろうか。会議室では随分と饒舌に靈視をしていたが、あれだって、当てずっぽうに言っていただけの可能性もある。自分も含め、関係者の誰もが靈に憑かれているなどは、未だ信じられない部分がある。

魁と、それから総司郎に続く形で、室井も家の中へと足を踏み入れた。瞬間、その中の空気があまりに外とは違うので、室井は思わずそのまま家から飛び出しそうになった。

（なんだ、こりゃあ……。前に来たときは、こんなに薄気味悪い家じゃなかったぞ……）

お化け屋敷として地元では有名な家だったが、番組の仕込みをしに来たときでさえ、ここまで酷いカビと埃の臭いはしなかった。しかし、今はまるで、家全体が侵入者の存在を拒むようにして不気味な胎動を続けているような錯覚さえ抱きそうになる。それこそ、魁や総司郎の存在を、この家が全力で排除しようとしている。そう言っても差し支えないくらい、妙に張り詰めた空気まで漂っていた。

古びた廊下を抜け、まずは魁が一階の玄関先にある部屋へと入る。ボロボロに痛んだ畳のある、昭和の初め頃の家にあるような食卓だった。もつとも、無人となった今となつては、卓袱台の類は見当たらないが。

「さて……。まずは、ここで一仕事つてところかな？ 室井さんは、俺の肩につかまってくれ。何が起きてるのが見えないと、信じてもらえそうにないからね」

「お前の肩に？ それで、俺にも幽霊が見えるのか？」

「ほんの少し、俺が見ている映像を、頭の中にわけてあげられるっただけだけどね。ま、難しいこと考えず、今は言われたとおりにしてくれないかな？」

こんな気味の悪い家の中でも、魁は普段の調子を崩すようなことがない。テレビ局のスタジオも、幽霊の出る廃屋も、この男にとってはさしたる違いはないということか。

男にしてはやけに細い左腕を前に差し出して、魁が静かに目を瞑り、意識を集中し始めた。瞬間、部屋の中の空気が今まで以上に張り詰めて、その緊張感が魁の肩を通じて室井にも伝わってくる。

畳の臭い、カビの臭い、それに辺りを漂う空気そのものの臭い。様々なものが入り混じった臭気が一段と強くなり、なにやら風の音まで聞こえてきた。

ぎい、ぎい、という、木の軋むような音が室井の耳に響いてくる。どこか、立てつけの悪い扉でもあったのだろうか。それに隙間風が触れて、軋む様な音を立てているのか。

いや、違う。音は廊下からではなく、この部屋の中央から聞こえてくる。しかし、ガラス張りの窓しかないこの部屋に、そんな音を立てるようなものがあつただろうか。

いつの間にか、室井は視線を自分の足下に落としていた。なぜ、そうしたのはかは、自分でもわからない。ただ、本能的な何かが告げるままに、室井は部屋の中央にあるものを見ないように、自分の首を下に傾けていた。



魁の呼吸が激しくなり、音がさらに強くなる。間違いない。この音は部屋の真ん中、自分たちにとって目と鼻の先から聞こえてくるものだ。

もう、我慢することなどできなかった。室井は何かを決意したようにして首を上げ、部屋の中央にいたのである。何者かに顔を向けた。音の発生源でもある、何やら正体のわからぬもの。それが何なのかを、この目で確かめるために。

「う、うわっ!!」

軽い悲鳴と共に、室井が魁の肩を握る力を思わず強めた。彼の目の前にあったもの。それは、かつて人間の女であったであろう、一つの物体。天井から下がった縄に首をかけ、そのまま吊り下げられている遺体だった。

青白い顔と剥き出しの目。口からはだらしなく涎を垂らし、ふらふらと左右に揺れている。風などないのに、いや、それ以前に、今まではこんな遺体などなかったのに、これはいったいどういうことだ。

「どうやら、あんたにも見えたみたいだね。そう。あれが、音響の古澤さんに憑いていた幽霊の正体さ」

「しょ、正体？ それじゃあ……この、首吊り女は……」

「もう、気づいているんでしょ？ こいつ、この家に昔住んでた女の自縛霊。何が原因で自殺したのか知らないけど、古澤さんのことが気に入ったみたいだね。だから、家まで一緒に着いて来ちゃったってところかな？」

「じ、自縛霊？ でも、自縛霊ってやつは、その土地に縛られて動けない霊ってやつじゃなかったのか？」

「なんだ、詳しいんじゃない。結局あんた、霊の存在を信じてるの？ それとも、信じてないの？」

青白い顔をした女の霊が、目の前で縄に吊るされて揺れている。そんな光景を目にしても、魁は身じろぎ一つしないで室井に問う。まるで、眼前の霊のことはどうでもよく、むしろ室井の考えの方が、気になると言わんばかりの口ぶりだ。

「わ、わかった！ 俺が悪かった！ だから……頼むから、この変な女を早くどこかへやってくれ！ こんな奴に取り憑かれてスタッフが死んだりしたら、俺は責任問題だ！！」

「はいはい、最後まで自分のことが可愛いつてやつね。まあ、言わなくても、こいつは俺が抜つてやるつもりだったけどさ」

ほとんど呆れたようにして、魁は室井の言葉を軽く流した。別に、お前のためにやってやるわけじゃない。ただ、仕事だからやるだけだ。そんな想いが、魁の表情からも見て取れる。

首吊り女の霊を前に、魁は改めて対峙するような姿勢を取った。もう、これ以上は霊を遊ばせておいても仕方がない。仕事は仕事として、さっさと片付けてしまわないと割に合わない。

「さて……。それじゃあ、まずは軽く、前哨戦と行きますか？」

口元に不敵な笑みを浮かべ、魁は自分の胸元から一羽の折り鶴を

取り出した。その辺の店で売られている安物の折り紙で折ったようなものではなく、いかにも高級そうな和紙を使った、かなり本格的なものだ。サイズは手のひらに乗るほどだが、随分としっかり折り込まれている。

折り鶴の羽を広げ、魁はそれを自分の掌の上に乗せると、そのままふつと息を吹きかけた。放たれた吐息は鶴を宙へと舞い上がらせ、一直線に亡霊へと向かつてはばたかせる。単に吹き飛ばしたのとは違う、やけに生々しい動きだ。

鶴の羽が、鋭利な刃物のようにして、亡霊を吊るしていた縄を切った。実態などないはずなのに、ドサツという何かが落ちたような音がした。

「おいおい……。どうなってるんだ、こいつは……？」

唐突に始まった、魁の幽霊退治パフォーマンス。その、あまりに予想外な展開に、室井は頭の中が混乱していた。

普通、幽霊退治といえば、お札や数珠などを使うのではないだろうか。しかし、目の前にいる陰陽師の末裔を名乗ったこの男は、折り鶴だけで幽霊の首を吊っていた縄を切ってしまった。あの折り鶴に何か仕掛けがあるのかもしれないが、それにしても、これは前代未聞の話だ。室井も今までに様々なオカルト話を番組で取り上げて来たが、折り紙で幽霊を退治するなどという話は聞いたこともない。

天井から落下した亡霊が、忌々しそうな顔をして魁を睨んだ。首から縄を外してやったというのに、その表情は憤怒の色に支配されている。

余計なことをするな。そう言わんばかりだったが、それでも魁は何ら躊躇う様子を見せなかった。

畳の上を這い回る亡霊に、続けて魁はポケットから取り出した小瓶の中身を振りかけた。それは一見してただの水のようだったが、直ぐにそれが水などではないということが、後ろから見ている室井にもわかった。

ひいひいひいっ!!

隙間風が吹き抜けるような悲鳴を上げて、亡霊の姿が瞬く間に消えて行く。全身から白い煙を吐き出しているその姿は、まるで劇薬をかけられて溶かされているようにも見える。

「な、なにをしたんだ、お前……」

状況がわからず、魁に尋ねる室井。対する魁も、小瓶をしまいなから室井に答える。

「ああ、これね。こいつは俺が作った、神水 っていう特別な水なんだよ。キリスト教で言う、聖水に近いやつて言った方が、あんたにはわかりやすいかな？ 霊的な力を持ったものに対して効果を発揮する、硫酸みたいなもんだね」

「聖水だと？ それじゃあ、この幽霊は……」

「当然、このまま放っておけば溶けて消えてしまうよ。成仏させてやってもよかったんだけど、それは俺の仕事じゃなくて、寺の坊さ

んの仕事だから。俺が頼まれたのは、あくまであんた達の除霊のみ。そのやり方までは口出しされたくないし、この家に住んでいる亡霊どもを、残らず成仏させてやる義理もない」

足下で溶けてゆく女の霊を見ながら、魁は実に満足そうな笑みを浮かべた顔を室井の方へと向けた。その笑顔に何やら危険なものを感じ、室井は慌てて魁の瞳から目を逸らした。

なんということだ。目の前の男は、敵を倒すことに対して容赦がない。そればかりか、話を聞いて成仏させようとか、墓や祠を作って供養してやろうという気持ちさえない。敵はただ、排除するのみ。淡々と仕事をこなし、それらの厄介事を捌いている自分に、半ば酔いしれているような節さえある。

まったくもって、恐ろしいものを使っていたと室井は思った。こんな人間を、少タイケメンだからという理由で番組に起用していた自分の判断が何よりも恐ろしい。自分も視聴率のためなら何でもやる人間だが、魁は恐らくそれ以上だ。

やがて、足下の幽霊が完全に溶けてしまうと、魁は何事もなかったかのようにして部屋を立ち去った。もう、この部屋には興味が無い。そう、彼の背中が語っていた。

「おい、陰陽師。次はどこへ行くんだよ!？」

何の躊躇いもなくスタスタと歩いてゆく魁を、室井が慌てて追いかける。魁が次に向かったのは、二階にある比較的大きな部屋だった。あの、撮影の際にやらせの仕込みがされていた、破れた襖のある部屋だ。襖の向こうに仕込まれていた赤い水が汚した床は、今も薄汚い染みの痕が残っている。

「それじゃ、次はあんたの番だ。あるとき、会議室では霊視をしなかったけど……とりあえず、あんたに憑いているもんが何なのか、それは俺も既に見当をつけてある」

部屋の真ん中で、魁が室井の方を振り返って言った。ここに来て、今度は唐突に自分の除霊を始めると言われ、室井はしばし緊張した面持ちで魁を見た。

魁が、室井の頭に手を乗せてくる。身長は魁の方が高いが、その手の先は女のように細い。それでいて、骨ばった感じもなく、どこか上品な雰囲気さえ感じさせるのだから不思議なものだ。

魁の掌から、なにやら室井の知らない力のような物が流れてくる。掌で、直に頭をつかまれているからだろうか。靈感などまったくないはずの室井にさえ、魁が妙な力を使って何かをしようとしているのは見当がついた。

「ふんっ!!」

気合一番、魁が室井の頭から手を離し、何かを引き剥がすようにして放り投げる。その途端、室井は身体の中から何かが抜け出し、なにやら肩が軽くなったような気がした。

「なんだ、こりゃ？ お前、いったい俺に何しやがった!？」

「何しやがったってのは酷いなあ。俺はあんたに憑いていた、幽霊モドキを引つpegがしてやっただけさ。ほら、ちょうど、その部屋の隅に転がってる」

「幽霊モドキだあ？　なんなんだよ、その妙な名前の妖怪は……」

いきなりわけのわからない話を振られ、室井は訝しげな表情のまま部屋の隅へと目をやった。すると、そこには何やら赤黒い色をした、奇妙な塊が転がっていた。

「げえっ!!」

それ以上は、室井は何も言えなかった。

部屋の隅に転がっていたもの。それは紛れもない、人間の生首と呼ぶに相応しいものだった。いや、正確には、あれは生首ではない。

片目を失った落ち武者の首。完全に白骨化した誰のものともわからない首。犬のような猫のような、見たこともない獣の首。ありとあらゆる奇怪な首が、一つのボールのようになって固まっている。その首の隙間からは赤と黒の水を交互に混ぜたような霧が立ち上っており、腐臭のようなものを撒き散らしていた。

「あれは、ちよつと普通の幽霊とは違ってね。説明が面倒臭いんで、会議室では適当に流したんだ」

「普通の幽霊とは違うって……何が、どう違うんだ？」

「そもそも幽霊ってやつは、何かこの世に未練があって現れるものさ。さっきの首吊り女だって、何か死んでも死にきれない理由があって、未練を残したまま自殺したんだろうね。だから、こうして自縛霊になって、この屋敷にずっと残ってたんだよ」

首の塊の動きに油断なく目を凝らしながら、魁は淡々と説明を続

ける。その程度の話であれば、室井も何かの話で聞いたことはあった。

「だけど……幽霊の中には、たま〜に妙なやつもいてね。亜種っていうのか、それとも突然変異って言った方が正しいのか……とにかく、普通の連中とはちよつと違う、線引の難しい連中がいるんだよ」

「それが、あの生首の塊だったのか？」

「ああ、そうだよ。あいつらは、この家の中に充満していた陰の気が作りだした、幽霊みたいな姿をした物体さ。元々が陰の気そのものだから、別に思考や思念なんてありやしない。ただ、本能の赴くままに、人間にひつついて生気を奪ってゆくんだ」

「なんだか、よくわからない話だな。とりあえず、あの妙な塊は、幽霊じゃないってことなのか？」

「そういう認識で構わないよ。あれは、この家に溜まっていた陰の気が、あんたの思念を受けて実体化したようなものさ。あんた、この番組を成功させるために、本当に心靈現象の一つでも起きないかって思ってたかった？　そういうった心……それこそ、悪戯に怖い話を作ろうなんて心と、周りにいある陰の気が共鳴しちゃうとね、あんな意識もへつたくれもない化け物を生みだしちゃうんだよ」

「マジかよ、それ……。だったら、あの化け物は、俺が生み出したって言いたいのか？」

「そういうこと。まあ、滅多にあることじゃないんだけど、今回は運が悪かったね。とにかく、こういった企画をやるときは、今度からちゃんと俺も口ケに呼んでくれなきゃ困るぜ」



わざとらしく両手を広げ、魁は肩をすくめて室井に言った。部屋の隅では未だ例の生首達が、それぞれ好き勝手に口を開けてはわめき散らしている。その度に、口の中からどす黒い陰の気がどろどろと漏れだし、魁や総司郎の鼻先を刺激する。

「とにかく、今はあの化け物を退治しないといけないね。ここは一つ、総ちゃんの出番かな？」

これ以上は、あの生首に近寄りたくない。そう思った魁は、今まで横にいて動かなかった総司郎に全てを任せた。その言葉を聞いた総司郎は何も言わずにアロハシャツの袖をまくり上げる。

中から現れたのは、魁のものとは異なる。力強い腕。日頃から、相当に鍛えられているというのが室井にもわかる。が、それ以上に室井の目をひいたのが、彼の腕に刻まれた無数の刻印だった。

「おいおい、なんだよあの腕は。梵字の刺青なんかしやがって……。あれが、あの男の力ってやつなのか？」

「御名答。実は、総ちゃんは昔、ある事故で両目を失っていてね。その代わりと言ったらあれなんだけど、靈感を含めた六感が、普通の人よりも物凄く発達しているんだ。それに、彼が持っている霊能力も、先天的に高かった。だから俺は、総ちゃんに目の代わりになる力をあげる代わりに、その身体にもちよつと細工をさせてもらったのさ」

魁がにやりと笑う。常に相手より優位に立っている際に見せる、あの自信に溢れた笑みだ。

「総ちゃんの腕の刺青。あれ、本当だったら退魔具なんかに刻むためのものなんだよね。俺はそれを、あえて総ちゃんの腕に施した。だから、総ちゃんにとっては、両腕そのものが武器みたいなもんだよ。この日本でも数少ない、幽霊を殴ることのできる 人間さ」

最後の部分を殊更強調し、魁はまるで自分のことのように室井に聞かせる。その間にも、総司郎はゆっくりと、しかし確かな足取りで生首の塊に近づくと、無言のままそれを鷲掴みにして持ち上げた。

通常、霊的な存在に、人間が素手で触れるなどは不可能だ。例外もあるにはあるが、基本的には幽霊に触れる人間などいない。それこそ、向こうから触ろうと思って接触して来ない限りには、人が霊に触れる術はない。

それにも関わらず、総司郎は何の苦もなしに生首の塊を持ち上げていた。時折、その口から放たれる黒い息に不愉快そうな表情を浮かべてはいたが、それ以外は、特に問題ないようだった。

「先生……。こいつ、どうします?」

生首を持ったまま、総司郎が魁の方へ振り向いた。なんとというか、実に無骨で不器用という言葉が似合う男だ。外見に反して声色はどこか柔らかく、威圧するような雰囲気も今はない。

「とりあえず、適当に潰しちゃってよ。そいつ、この家の一部から生まれたみたいなんだからさ。その辺の天井か柱にでも埋めとけば?」

「わかりました。それじゃ……」

途中まで言いかけた言葉を飲み込んで、総司郎が深々と息を吸い込んだ。その動きに呼応するかのようにして、両腕に刻まれた梵字が赤く発光する。生首達が今までになく騒いで暴れたが、総司郎は彼らをつかんだ手を決して離そうとはしなかった。

「はっ………！！」

軽い気合を入れ、総司郎が手にした生首に右の拳を叩き込む。その途端、何かが弾けるような音がして、生首の塊は部屋の角にあった柱の方まで吹き飛んだ。

ベシヤツ、という何かが潰れるような音がして、生首の塊が柱にめり込む。幽霊の類とはいえ、所詮は特定の意思を持たない、恐怖心そのものが具現化された存在。人間に憑いているときは厄介な相手だが、その身体から引きずり出されてしまった今、さしたる力も発揮できないのだろう。

ずるずると、まるで柱に吸い込まれるようにして、生首たちはその姿を徐々に消していった。いや、より正しく表現するならば、柱に同化されてしまったと言った方が正確か。

生首が消えた柱の中央。こげ茶色の年季の入った木に、見慣れない木目が現れていた。それは、よくよく見ると、あの生首たちに見えなくもない。総司郎の一撃を受けて、そのまま柱と一体化してしまったのだろうか。

「終わったっす………」

仕事を終え、総司郎が両手を払うようにしながら魁の下へ戻って

きた。時間にして、実に数秒。なんというか、見ている方があつという間の、実に無駄のない除霊だった。

「さあ、遊んでないで、次へ行こうか。俺の見立てだと、次は少々厄介な相手が待っていきそうだからね」

こちらに戻ってきた総司郎の肩を叩き、魁の顔が珍しく真剣な表情に変わった。

前哨戦は、これで終わりだ。ここから先は、いよいよこの屋敷に巣食う大ボスと戦うことになる。そのためには、今まで以上に慎重に、かつ確実に事を進めねばならない。

久しぶりに、手強い相手と戦うことになりそうだ。だが、不思議と恐怖は感じない。下らない心靈番組でコメンテーターしかやっていなかった身としては、今回の除霊に一種の高揚感さえ抱いている。

幽霊屋敷に巣食う闇。その根源を断つために、魁は再び総司郎を引き連れて、古びた階段を下って行った。

く 四ノ刻 対峙 く

階段を降りると、相変わらず一階には湿っぽい空気が充満していた。

最初、地元の住民に案内されて、初めてこの家を訪れた際のことを室井は思い出す。あの日、現場の下見とやらせの仕込みを兼ねて家の中に入ったときも、こんな陰鬱な湿気に満ちた空気に歓迎を受けた。あのときは、単に家の造りが古いだけだと思っていたが、もしかすると、この空気もまた、何か霊的な存在が撒き散らしているのだろうか。

一階へ続く階段を降り、魁はそのまま屋敷の奥へと入ってゆく。老朽化の激しい一階の中でも、特に痛みの酷い際奥の部屋。黒カビに覆われ、ところどころに穴の開いた畳が敷き詰められた、なんとも嫌な場所へとやってきた。

「うつ……。なんか、他の部屋にも増して、この部屋の湿気は凄いな。これもまた、お前の言う悪霊みたいなやつの仕事なのか？」

部屋中に溢れたカビの臭いと強烈な湿気。その二つをまともに嗅いでしまい、室井は自分の口元をハンカチで覆って言った。その一方で、魁も総司郎も、何ら動揺することなく部屋を見て回っている。時折、不快な表情を浮かべることはあっても、それは室井ほどではない。

まったくもって、恐ろしいまでにタフな連中だと室井は思った。ホストのような格好をした優男だが、その内に秘めているものは、常人の感覚とは明らかに違う。現に今も、服が汚れることを気にし

つつも、この部屋の中に潜む何かを見つけ出すのを楽しんでいるような雰囲気さえある。

「えっと……。たぶん、俺の勘だとこの辺かな」

突然、そんなことを言いながら、魁が畳の一つに手をかけた。それは部屋の中にある中でも、特に痛みの激しい畳の一つだった。黒いカビが、まるで日食のときの太陽のように円を描いて生えており、虫に食われて穴の開いた表面からは、中身がところどころ露出していた。

「悪いけど、総ちゃんは反対側を持ってくれない？　これ、俺だけでひっくり返すの、ちょっと大変だからさ」

「了解っす……」

魁に言われ、総司郎もまた古びた畳に手をかけた。その動きがあまりに滑らかなので、見ていた室井は思わず自分の目を疑った。

魁の話では、総司郎は既に自分の光を失っているとのことだった。要するに、完全に失明してしまい、今は盲目ということだ。

そんな総司郎が、こうも器用に魁の作業を手伝うことができる。そのことが、室井には不思議でなかった。

本当は、あの男は目が見えているのではないか。サングラスで目を隠しているのは、果たして本当に目を失ったことを隠すためのものなのか。

新たに疑念のようなものが浮かんで来たが、それを室井が魁に尋

ねることはなかった。彼が二人に声をかけるよりも先に、目の前の朽ち果てた畳が取り外されたからだ。

畳を持ち上げて、魁と総司郎はそれを壁に立てかける。なにやら土埃のようなものがパラパラと落ち、畳を剥がされて剥き出しになった床の上では、小さな虫のような生き物が、慌てて隙間に隠れていた。

「あちゃあ……。やっぱ、畳の下にも床があるな。こいつはちょっと、大仕事になるかもしれないぜ」

珍しく困ったような顔をして、魁が茶色く染まった髪の毛に指を絡ませながら頭をかいていた。もつとも、本気で困っているようではないらしく、仕事の手間が増えたことを、純粹に面倒臭がつているようだった。

畳の下から現れた床板を指差して、魁は総司郎に二言、三言で何かを伝えた。それを聞いた総司郎は無言のまま頷くと、音もなく立ち上がり足早に部屋を去って行った。

いったい、魁は総司郎に何を告げたのか。いや、それ以前に、そもそも二人は何の目的で畳など剥がしたのだろう。

傍から見ている室井には、何から何までがわからないことだらけだった。それでも、魁だけは自分の行いを納得しているらしく、独りで勝手に床板についた染みを眺めているだけだ。

それから程なくして、総司郎が何やら物々しい道具を持って戻ってきた。よくよく見ると、それは巨大なバールのような工具の一種。鍵爪のように曲がった先端部分は、叩きつければ老朽化した廃屋の

床程度なら簡単にぶち破るだろう。

「おいおい、何考えてんだよ、お前ら。まさか……その床板を、その物騒な道具でぶっ壊そうってのか!？」

「ああ、そうだよ。俺の見立てでは、この下に隠されているものが、この屋敷に巣食っている亡霊たちの根源だからね。悪い物は根っこから経たないと、雑魚をいくら被ったところできりがない。ここらで潰しておかないと、また変な幽霊どもがあちこちから引き寄せられてやってくるよ」

「しかし……本当に、床板を壊す気か？　いくら廃屋でも、持ち主はいるんだぞ。こういうことは、ちゃんと許可を取ってだな……」

「何を今さら言っちゃってんのさ。今度の番組で流す やらせ 映像作るのに、あんた達、この家の人に許可取って細工したんでしょ？　だったら、今さら床の一つや二つ、ガタガタ言っても始まらないさ」

飄々とした顔で言いながら、魁は総司郎からボールを受け取った。そこまで言われては、室井もこれ以上は何も言えない。

今度の番組で流す映像が やらせ であること。そのことは、魁にも殆ど伝えていない。それにも関わらず、魁は映像に やらせ が仕込まれていることを見抜いている。誰かから情報をもらったのか、それとも本人の持つ不思議な力で察知したのかはわからないが、トリックを仕掛けたことを引き合いに出されては言葉もない。

魁の振りかぶったボールが空を切り、鈍い音を立てて床板に突き刺さった。初めは軽く弾かれてしまったが、そもそものが酷く痛んだ



床板だ。腐っていたことも相俟って、床板は思ったより簡単に崩れ落ちた。

バラバラという音と共に、木製の板が木屑を撒き散らしながら下に落ちる。その下から現れたのは、巨大な暗い空洞だった。床板を剥いたら地面が現れるに違いない。そう思っていた室井にとって、これはあまりにも意外な出来事だった。

床板の下から現れたもの。それは、家の土台などではない。暗く、大きな穴がぼつかりと空き、まるで地獄へ繋がる入口のように、こちらを無意識に誘っているような感じさえ受ける。石を積み上げて作った簡素な造りだが、それいて今もお崩れ落ちていない。遠い昔に忘れ去られた、戦前より存在していたであろう古井戸だった。

「なんだよ、これ……。なんで、家の下に井戸なんか……」

あまりの不気味さに、室井はそう呟くのが精一杯だった。

お化け屋敷と謳われた廃屋の一室で、床を剥いたら下から古井戸が現れた。こんなホラー映画のような展開が、果たして本当にあったよいのだろうか。自分たちは視聴者を怖がらせるためにやらせまで仕込んだというのに、それを越えるほどに薄気味の悪い物が家の下から現れた。正に、事実は小説より奇なりというやつだろう。

「どうやら、当たりだったみたいだね。この井戸が、屋敷に巣食う亡霊どもを集めていた原因さ」

ボールを放り出し、魁は井戸の底を覗きこむようにして室井に説明した。先ほどまでは魁の荒唐無稽な話に半信半疑だった室井も、今度ばかりは素直に彼の力を信じる他になさそうだった。

「しっかしなあ……。まさか、こんな場所に井戸があるなんて、俺は思ってもみなかったぞ。これもお前の、霊能力とやらで探したのか？」

「うーん……。半分正解だけど、半分はハズレだね。確かに俺は、最後に井戸の場所の見当をつけるため、この部屋の中で霊気の流れを探ったりはしたさ。でも、それより前に、とくに気づいていたんだよ。この家が、増築に増築を重ねて作られた、とんでもない欠陥住宅だってことがね」

「欠陥住宅なあ！？ そんなことと、今回の幽霊騒動に、いったい何の関係があるってんだよ！！」

「何の関係って……大いに大ありなんだけどなあ」

室井の言葉を鼻で笑いながら、魁は部屋の壁を拳で軽く叩いてゆらす。他の部屋は脆い板張りの壁もあったというのに、妙にその部分だけ音が違う。なんというか、まるで家の外から壁を叩いているような、固くしっかりとした音がするのだ。

「ここの壁、他の部分とはちょっと音が違うとは思わない？ 他の部屋がうすっぺらい板張りの仕切りみたいな感じなのに、ここだけは、随分と固い壁なんだよね。まるで、家の外と中を隔てる、頑丈な土壁みたいでさ」

「そう言われれば、確かにそうだな。家の中で、部屋と部屋を仕切っているだけなのに、妙に壁が分厚い気がする……」

「でしょ？ まず最初に、俺はこの家の間取りを見て、何か変だと

思っただよね。一階は普通に廊下を行き来するだけで部屋と部屋を渡り歩けるのに、二階に上がるのには二つの階段が必要だ。その上、二階に上がったら上がったで、家の北側と南側を繋ぐ扉なんかない。まるで、一つの家の上に、二つの家が別々に乗っかっている。そんな不自然な造りになっているんだ」

事もなく流すように言っていたが、魁の言葉は的を射ていた。今度ばかりは室井も納得したようで、ただ、魁の話に耳を傾けているだけだ。

通常、一階から二階へ昇る階段など、一つあれば十分だ。一階は一階、二階は二階で、それぞれ廊下や部屋を造り行き来ができるようにすればいい。わざわざ階段を別々に造り、二階を北と南で分断する。忍者のからくり屋敷ならいざ知らず、極一般の民家でしかない家を、そんなややこしい構造にする必要はない。

「この家は、もともとは南側部分しかなかったんだろうね。北側はそれこそ物干し場とか裏庭みたいな感じでさ。この井戸も、最初は家の外にあったんじゃないかな？」

「だとすると、家を改築……いや、増築した際に、井戸の真上に部屋を作っちゃったってことか？」

「そういうことになるね。家主にお金がなかったのか、それとも依頼を受けた業者が悪質だったのか……。とにかく、この家の湿気の原因は、全部床下に放置された井戸のせいなんだよ。幽霊云々は関係なく、井戸の底から溢れ出した湿気が、家全体を蝕んでいたんだ」

「なるほど。じゃあ、このカビやら辛気臭い空気やらは、全部井戸が原因なんだな？」

「その通り。普通、こういった井戸には神が住んでいるって言われているから、ちゃんとした手順を踏んで埋めないと祟りが起きるんだ。それをしないで無理な増築なんかして、更には家そのものを放棄したもんだから……井戸の神が怒って、完全に祟り神になっちゃったんだね」

「祟り神って……。なんか、随分と話が大きくなってきたな……」

相変わらず、魁の口調は軽快なままだったが、室井はその中に出て来た 祟り神 という言葉に妙な恐怖感を覚えて仕方がなかった。

祟り神。本来は祭神として祀られていた神が、何の因果か妖怪のような存在と成り、人間に仇成すようになったもの。神の存在など信じてはいない室井だったが、以前に番組でさびれた神社を心霊スポットとして扱った際に、そんな話を聞いたことがある。

幸い、その神社の撮影を済ませたときは、何の心霊現象も起きることはなかった。が、後日、その神社のある地元の神主から忠告を受け、二度と同じ場所に近づかないようにと釘を刺された。なんでも、祟り神の祟りは相当に強力なものらしく、場合によっては一族が滅びるまで憑いてまわるとか。そんな話を思い出してしまっただけで、いくら室井とて心が安らかではない。

あの時は神主の話など馬鹿にしていたが、今となっては普通に恐ろしい。魁による除霊を目の当たりにした室井にとって、心霊現象は既に空想の産物などではないのだ。

魁の話では、この井戸が全ての心霊現象の大元だということだと、いうことは、彼の言う祟り神もまた、今もなお井戸の奥に影を

潜めているということだろうか。

「さあて……。解説も終わったところで、そろそろ締めと行きますか。今日は久しぶりに大仕事になりそうだからね。俺も、ちよつと派手にパフォーマンスさせてもらおうかな？」

そう言うが早いか、魁は自分の懷に手をつ突つ込むと、そこから小さな水晶玉を取り出した。街頭などでたまに見かける、占い師の老婆が用いているようなものではない。もっと小柄で、それこそ掌に乗ってしまうほどの小さなものだ。

水晶玉に念を込め、魁は井戸の底に潜む邪惡な氣配に意識を集中させる。本当は、こんな道具に頼らずとも、もっと伝統的な手法がないわけではない。しかし、魁はそんな形式よりも、己を格好良く見せることに重きを置く人間だ。

素人目に見てもわかりやすい道具を用い、自分の凄さを強調する。魔を抜う行いというものは、魁にとって、あくまで自分の名声を上げるための手段に過ぎない。そうやって、表の世界を生きる靈能力者としてやっていくのが、御鶴木魁という男の生き方なのだ。

閉じられていた魁の両目がカツと開かれ、水晶玉が妖しい紫色の光を放ちだした。そして、その光りに導かれるようにして、井戸の奥底から白い湯気のような物が立ち上ってくる。

霧とも煙ともつかない、実に奇妙な色をした乳白色の物体。俗に言われる、エクトプラズムと呼ばれる物の類だろうか。室井も以前、霊媒師の女の口から白い煙のような物が伸びている写真を、番組で扱ったことがある。

だが、それにしても、目の前の物体は妙に生々しく感じられた。あれは、ただの霧ではない。増してや、何かのトリックなどでもない。確証はないが、室井はいつしか完全に心霊現象を信じ込んでしまっている自分がいることに気がついた。

やがて、現れた霧が徐々に塊、一つの帯のような姿を成してゆく。人間の胴体ほどもある、実に太く長いものだ。固まった霧の表面には鱗のような斑紋が現れ始め、不快な臭気を放つ一体の巨大な魔物と化す。

「あれは……」

井戸の底から現れし異形の者。それを見た室井は、大きく口を開けたまま動けなかった。

そこにいたのは、一匹の巨大な蛇だった。ニシキヘビを裕に超える巨体を誇る、赤く禍々しい瞳の大蛇。全身を覆う白い鱗は、その所々が黒く朽ち果ててしまい見る影もない。かつては神々しいまでの美しさを誇っていたのだろうが、今となっては、陰の気によって腐り果てた肉体を持つ醜い怪物であった。

「先生……。さすがにこいつ、ちょっとヤバいっすよ……」

梵字の刺青が刻まれた腕を構え、総司郎が魁を庇うように言った。反射的に師を守ろうとしたのだろうが、その声は明らかに震えていた。

「まあ、さっきまでの雑魚みたいに、軽くないすってわけにはいかないだろうね」

水晶玉を掲げたまま、魁が不敵な笑みをこぼしながら大蛇を睨む。この期に及んで、まだ笑っていられるほどの余裕があるというのだろうか。

もし、これが単なるはったりでないのだとすれば、本気になった魁はどこまでの強さを見せるのだろうか。室井の知っている魁の力でさえ、あくまで彼の能力の一端に過ぎない。魁はまだ、室井の知らない切り札を、このときのために隠し持っていたとでもいうのだろうか。

井戸から首を伸ばした大蛇が、その口を大きく開けて威嚇した。間違いない。相手は完全に起こっている。それは、自分の土地に無断で入り込まれたことに対する怒りだろうか。それとも、身勝手な人間によつて床板の底に封じられてしまった、積年の恨みが成せる業なのだろうか。

その、どちらでも、魁にはさして関係はなかった。次の瞬間、大蛇の首が素早く動き、その口の中にある牙を突き立てんと魁に迫る。慌てて総司郎が身構えるが、速さでは相手の方が上だ。

果たして、そんな総司郎の努力も虚しく、大蛇の首は魁の顔目掛けて一直線に伸びていた。このままでは、魁が大蛇に飲み込まれる。その場にいた誰もがそう思ったが、魁はあくまで落ちついた様子で、大蛇の動きから目を離さなかった。

ジュツ、という何かが焦げるような音がして、室井と総司郎は瞑ってしまった目をそろそろ開けた。もしかすると、魁はあのまま大蛇の毒牙にかかってしまったのではないか。そんな最悪の事態が頭をよぎったが、二人の前にあったのは、彼らの予想に反した魁と大蛇の姿だった。

大蛇の頭が、魁の手前で止まっていた。いや、実際には、止められていたと言った方が正しいか。

いつの間にか、魁の手には銀製の扇が握られており、それが大蛇の頭に突き刺さるような形で動きを止めていたのだ。扇を作っている銀の板は、その表面に不可思議な呪文のようなものが刻まれている。単なる飾りなどではない、列記とした魔物と戦うための武器だった。

「せ、先生……」

「大丈夫だよ、総ちゃん。こいつ、確かに強力な霊体だけど、神としては三流だね。長い間、床下の底に閉じ込められて腐っちゃったから、単に他の生き物の命を吸うことだけに特化した妖怪に成り下がっちゃってる。ちゃんとした社に祀られているような神ならいざ知らず、こんな奴に負ける俺じゃないよ」

扇を握った手を軽く振り、魁は大蛇の頭を跳ね飛ばした。どう見ても圧倒的な体格差があったが、魁はさして力も込めず、払いのけるようにしてあしらった。これが、持っている霊能力の差だ。そう言わんばかりの表情で、魁は大きく腕を左右に広げてゆく。

「さて、遊びはお終いだ。さすがに長期戦になるとヤバそうだし……。それに、俺はどうも、生身で戦うのって疲れるから好きじゃないんだよね」

魔を滅することを生業とする霊能者の中には、自ら武器を手にして悪霊や妖怪と戦う者がいる。しかし、そういった肉体派の霊能者に比べると、魁は随分とスマートな戦いを好む男だった。



力押しは望まない。戦いは、あくまで美しく勝利しなければ意味がない。血みどろの肉弾戦でぶつかり合うなど、自分の性には合っていない。

再び大蛇が体勢を整えるよりも先に、魁の着ている服の袖口から無数の紙が飛び出した。それはどれも、高級そうな和紙で作られた折り紙だった。あの、首吊り女の霊を退治したときに使った鶴だけではない。鶴よりも攻撃的な、猛禽類の姿や犬のような姿をしたものまである。

「やれ……」

そう、魁が口にするが早いか、折り紙の獣たちが一斉に大蛇に襲いかかった。鶴が、鷲が、犬が、次々と悪霊と化した大蛇の霊に飛び掛かってゆく。折り紙に爪や牙などないにも関わらず、紙人形に貼り付かれた大蛇は奇声を上げてのたうち回った。

紙の獣が、見るもおぞましい蛇の怪物に挑んでゆく。事情を知らない者からすれば滑稽な見世物なのかもしれないが、室井は何も言うことができず、目の前の光景に目を奪われていた。

「仕上げだ、お前達。トーコちゃんの味わった金縛りの恐怖……その化け物にも、きっちり味わわせてやるんだな!!」

魁の口元が、意地悪そうに歪んで見えた。その言葉が終わりきらない内に、折り紙で作られた魁の下僕しもべが、一瞬だけ光輝いたような気がした。

部屋の中に、何かが弾けたような音が響き渡る。強烈な静電気を

受けたような気がして、室井は慌てて目元を腕で覆った。

「……っ！！ 今度は何をした、陰陽師！？」

「心配は要らないよ。俺はただ、俺の式神を使って、こいつの動きを封じ込めたただけだから」

「式神だあ？ おい……まさか、お前の服の中から出て来たあの折り紙。あれが、お前の言う式神ってやつなのか？」

「ああ、そうだよ。陰陽師は、己の配下として式神を使う。少しオカルトに詳しい人なら、誰でも知っていることだと思うけど？」

事もなさに、魁は室井に向かってさりと流すように言っていた。もつとも、そうは言われても、室井は未だに自分の頭の中が混乱していた。

式神。陰陽師が使役する、下級の神のような存在。通常、その姿は人には見えず、実際には鬼のような姿をしていると言われている。怪奇漫画や怪奇映画などでは、それらの存在が劇中で事件を解決することも少なくない。

だが、そういった類の物に比べると、魁の言う式神は室井の知っているものとは随分と異なっていた。確かに、不思議な力を持っていることには変わりないが、それでも傍目にはただの紙人形なのである。そんな物を見せられて「あれが式神です」と言われても、なかなか信じることは難しい。

「どうしたんだい、室井さん？ 俺の説明、なんか納得言っていないみたいけど……」

室井の訝しげな表情に気がついたのだろう。魁もまた、何やら少しばかり不満そうな顔で、室井に向かって尋ねてきた。

「いや、まあ、ちょっとな。ほら……式神なんて言ったら、普通はでっかい鬼みたいなのやつを想像するじゃないか。だから、ちょっとばかり面食らってな」

「なんだ、そんなこと。言っておくけど、式神ってのはあんたが思っているような化け物じゃないよ。式神ってのは、陰陽師が使役する自分の分身みたいなものさ。要は、自分の力を込めて作った、操り人形みたいな存在だね。一つ一つの力は弱いけど、集まれば、あやって強力な霊体でも金縛りを食らわせることができる」

「なるほど、操り人形とはな……。それなら、あの折り紙どもが、お前の作った操り人形なのか？」

「そういうこと。あいつらは、ただの紙人形じゃない。作るときに、俺の髪の毛と一緒に折り込んで作った特注品なんだよ。紙に髪を入れて神とする……。我ながら、洒落が効いていると思わないかい？」

半分は冗談のつもりで言った魁だったが、室井は笑わなかった。一見して子どもの玩具にしか見えないもので、こつこつ悪霊を圧倒する。そんな魁の姿に、室井もまたいつしか一種の畏敬の念のようなものを抱き始めていた。

「それじゃ、最後の仕上げだな。あいつ、もう自分では動けないみたいだし……後は任せたよ、総ちゃん」

自慢の冗談が受けなかったことに、機嫌を損ねてしまったのだろ

うか。魁は急にぶつきらばうな口調になって、後始末を総司郎に任せてしまった。もう、これ以上は興味もない。普段の魁があまり見せることのない、やけに冷めた瞳が物語っていた。

全身を式神に押さえつけられ、もはや動くことも敵わなくなった大蛇の霊。かつては井戸の神として、慎ましくも人々に畏怖されてきた存在。そんな神霊の一つではあったが、長い年月を経て魂まで腐り果ててしまった今は、これも一体の悪霊に過ぎない。

無言のまま腕まくりをし、総司郎が大蛇の霊へと近づいてゆく。そこには先ほどの、取り乱したような様子はない。まともに戦えば苦戦したかもしれないが、今は相手も完全に動きを封じられている。

魁に言われずとも、総司郎もまた、この大蛇の霊を放つてはおけないことはわかっていた。祟り神と化してしまった井戸の神。その全身から放たれる腐臭のような陰の気が、この家全体に溢れて嫌な者を引き寄せている。ここで大元を断っておかなければ、いくら雑魚を倒したところで、直ぐに以前の幽霊屋敷に逆戻りだ。

それに、魁の話では、どうやら凍呼に取り憑いているのはこの祟り神のようだった。確かに、神としては格下の存在なのかもしれないが、何の力も持たない一般人にとっては十分に脅威だ。

両腕の梵字が赤く発光し、魁は動かなくなった蛇の口に指をかけて大きく広げた。そして、そのままぐつと力を込めると、上下の顎を引き剥がすかのようにして、蛇の身体を真つ二つに引き裂いた。

実体のない、霊的な存在だというのに、肉が裂かれて何かが飛び散るような音がした。引き裂かれた蛇の身体は直ぐに溶けてどろどろとした液状の塊となり、やがてそれも、床や畳に吸い込まれるよ

うにして消えてしまった。

「お疲れさまだね、総ちゃん。やっぱ、最後の締めは、総ちゃんにやつてもらった方が俺も楽だわ」

先ほど使っていた銀の扇で、魁が胸元を仰いでいた。対する総司郎は、これは照れ隠しなのだろうか。癖毛の酷い頭をポリポリと掻きながら、一言、「どうも……」と言っただけだった。

「さて……。これで大元は断ったけど、まだ家には変なのがつうようよいるねえ。これ、全部やつつけるとなると、かなり骨が折れるよなあ……」

「どうします、先生？　なんだったら、俺が一匹ずつ潰しても構わないっすけど……」

「いや、大丈夫だよ。総ちゃんには大仕事を片付けてもらったばかりだし、後は俺がやっておくさ。幸い、式神の連中もまだ使えるからね。あいつらを使って、最後の大掃除と行きますか」

そう言う魁の足下には、いつの間にか、先ほどまで大蛇の動きを封じていた式神たちが集まっていた。一糸乱れぬ隊列を作って並んでいるその様は、やはりどこか滑稽なものがある。

魁が扇を振りかざし、式神たちに無言の命令を下した。その扇の動きに操られるかのようにして、紙で作られた動物たちは、それぞれが屋敷のあちこちに姿を消して行った。

夜のテレビ局にある会議室で、魁が淡々とした口調で話していた。その間、凍呼はただ流されるままに、魁の話を聞いているだけだった。

「……と、いうわけで、俺と総ちゃん、あのお化け屋敷の幽霊たちは一掃したってわけ。君に取り憑いていた蛇の霊も、本体を総ちゃんに潰したから。現に、俺が除霊をした後は、トーコちゃんの霊傷も快方に向かっているんでしょ？」

「はい……。で、でもお……」

魁に事の次第を説明され、さらには総司郎の腕にある刺青まで見せられても、凍呼は不安な表情を変えられないままに言った。

確かに、魁の言う通りであれば、あの家にいた幽霊は一掃されたのだろう。現に、あれから凍呼自信も、妙な夢にうなされることはなくなっている。身体についた蛇の絞め跡のような痣も、だんだんと薄くなってきてはいる。

しかし、では、先日を生放送で起きたというプロデューサーの変死事件。あれは、いったい何なのだろう。全ての霊を抜い終え、祟りの大元を断った今、なぜプロデューサーの西岡が亡くならなければならなかったのか。

西岡の死は、公には撮影機材の転倒及び落下によるものであると説明されている。実際の現場に居合わせたわけではないため、そう言われてしまえば、凍呼にも言い返す術はない。だが、その一方で、西岡の死が本当に単なる事故だったのか、それを証明するための証

拠もないのが現状だ。

自分のことではないにしろ、それでも凍呼は恐ろしくて仕方がなかった。本当は、まだ悪霊による祟りが続いているのではないか。魁の力を信じていないわけではないが、もしかすると、彼の手を逃れた何かが未だ祟りを引き起こしているのではないか。そんな不安が次から次へと湧いてくる。

「あとう……。こんなこと言ったら失礼かもしれませんが……」

「なんだい？　もしかして、まだ何か気になることがあるとか？」

「はい。御鶴木さんの力、私も信じていないわけじゃありません。でも……。本当に、祟りは全部終わっただんですか？」

「それは間違いないよ。君に取り憑いていた蛇の霊もそうだけど……そもそも、あの屋敷にいたのは、その殆どが自縛霊みたいな連中だ。自分は土地に縛られていて、そこから自由に動けない。だから、その代わりに端末……。要は、自分の分身みたいなやつを君たちのところを送り込んで、間接的に祟っていたんだ。その大元を叩いたんだから、もう何も心配は要らないよ」

「そうですか……。だったら、やっぱり西岡プロデューサーが亡くなったのは、単なる事故だったってことなんですか？」

「そうだねえ……。実は、そこが俺も引っかかっているところなぞ」

隣にいる総司郎に軽く目配せし、魁は自分の口元に指を添えて言った。総司郎が、無言で頷いて魁に答える。

あの、生放送の本番中、魁と総司郎もスタジオの中にいた。そして、彼らの目の前で、西岡は見るも無残な変死を遂げた。

眼球がボールのように膨れ上がり、その頭ごとバラバラに吹き飛んで死亡する。局側は機材の転倒、落下による事故と主張しているが、これが事実を隠蔽するための詭弁であることは、魁からしても明らかだった。

プロデューサーが変死したことで、自分の除霊が不完全だったと思われる。それは確かに魁にとって不名誉なことだったが、問題なのは、そんなことではない。

魁にとって最も許せなかったのが、自分の目の前で一人の人間が不審な死に方をしたということだ。もし、彼の死の原因が呪いや祟りによるものであれば、白昼堂々、大衆の眼前で霊的な存在が関わった事件が発生したことになる。しかも、よりにもよって、陰陽師の末裔と称され世間的にも知名度が上がってきた、この御鶴木魁の目の前でだ。

表の世界を生きる霊能力者として、これは決して許してはならない事態だった。このまま妙な噂が立てば、彼の看板番組である 奇跡空間ミラクルゾーン は打ち切りに追い込まれてしまう。それに、事件の犯人が人間であれ悪霊であれ、こちらが一方的に舐められているような気がして腹が立った。

こうなれば、事件の謎は自分が解明してやろう。局側は事態をこのまま隠蔽するつもりらしいが、そんなことは関係ない。このまま出し抜かれて終わっては、陰陽師の末裔としてのプライドにも関わ



（ま、久々に面白いことになってきたってのは事実だね。それに、ここで事件を解決しておけば、俺の名前を売るのにも役には立つか……）

自分の感情を凍呼に気取られないように注意しながら、魁は口元を隠すようにして腕を組んだ。一瞬、部屋から音が消え、無音の静寂だけが辺りを包む。

突然、部屋の隅で音がした。紙が擦れるような、何やら妙に軽い音。部屋が静かだったことも相俟って、それは随分と大きな音のように聞こえた。

凍呼の意識が、音のした方へと向けられる。大方、会議室に忘れられたレジメでも落ちたのだろうか。そんなことを考えながら、何気なく部屋の隅へと目を移す。すると、今まで不安そうに俯いていただけだった凍呼の顔が、見る間に驚きの表情へと変わってゆく。

「えっ……。何、あれ……」

そこにいたのは、一匹の小さな犬だった。いや、正確に言えば、犬の姿をした小さな紙人形だった。

人形が、まるで生きているかのようにして、するすると床を這いながら魁の下へやってくる。歩くというよりは、むしろ滑ると言った方が正しい動きだ。

目の前で起きている不思議な光景に、凍呼はしばし言葉を失ったまま我を忘れていた。もっとも、魁と総司郎は慣れたものなのか、その程度では微動だにしない。

床を滑り、紙人形が自分の足下までやってきたところで、魁はそれをひよいと摘み上げた。そのまま人形の頭の部分を自分の顔に向け、何も言わずに見つめている。

「おやおや……。どうやら、妙なお客さんが来たみたいだな。こいつらに局の中を探らせていたんだが、思わぬ相手に引っ掛かったみたいだ」

勝手に独り納得したような表情を浮かべ、魁は紙人形を自分の懷にしまつて言った。そして、すぐさま席を立ち上がると、スーツの上着を取つて羽織り、部屋の出口へと向かつて歩き出した。

「先生。どこへ行くんすか？」

「ちょっと、野暮用が入つてね。この局に、俺以外にも妙な力を持ったやつが入つて来たみたいだ。こいつは少し、相手の顔を見ておいた方がよさそうだと思つてね」

悪戯っぽく笑いながら、魁は凍呼と総司郎へ、一緒に来るように促した。まったくもつて話の流れがつかめない二人だったが、ここはとにかく魁に従つて着いてゆく他になさそうだった。

夜のテレビ局というものは、思ったよりも静かだった。収録中のスタジオ内は別なのだろうが、廊下は打つて変わつて落ちついた空気が流れている。

思っていた場所よりも、随分と静かなところだと照瑠は思った。高槻に案内され、紅に同伴する形でテレビ局などに来てはみたが、予想外に静かだったので拍子抜けしてしまった。

これが、収録中のスタジオであれば、製作スタッフや出演しているタレント達によって、実に盛り上がった場が提供されていることだろう。場合によっては、観客席に招待された一般人達の黄色い声も聞けたかもしれない。

「ほええ……。初めて来てみたけど、テレビ局って広いんだね。それに、思ったより静かだし……」

照瑠の隣では、やはり同じく紅に同伴して来た亜衣が、妙に感心した表情で辺りの様子を窺っていた。いつもの彼女らしくない反応だったが、これはこれで構わない。少なくとも、どこかで知っている芸能人の一人でも見つけ、勝手に追いかけて行方不明になれるよりはマシだ。

完全に呆けている亜衣を横に、照瑠は高槻や雪乃が案内する方向へと足を進めた。途中、数人の人間と擦れ違ったが、どれも照瑠の知っているような相手ではなかった。

恐らく、この局に務める番組作成スタッフなのだろう。いくら東京のテレビ局だからといって、そう簡単に芸能人と出会えるわけでもない。出演者よりも番組の制作そのものに携わる人間の方が多いことも相俟って、芸能人と鉢合せるようなハプニングには、幸いにして巻き込まれなかった。

いや、それ以前に、雪乃やまゆと言ったテレビに顔を出す人間と

一緒に歩いていることで、照瑠もまた、この局の中では既に部外者として見られていないのかもしれない。高槻からもらった入館許可証のようなタグを首から下げてはいたが、通りすがりの誰しもが、照瑠たちに好奇の視線を向けて来るようなことはない。

（それにしても……）

高槻に案内されて先頭を進む紅を見て、照瑠はふと軽い疑問を抱いた。

先ほどから、紅は何も言わないまま、ただひたすらに高槻の後に着いて歩いている。一見していつもの紅と変わりがないが、それでも照瑠は妙に感心せざるを得なかった。

東京のテレビ局の空気は、照瑠や紅が住んでいる火乃澤町とはまったく違う。それは、彼が育った四国の田舎の村と比べても明らかだ。大都会の中心にある、一種異様とも言える空気の中に、照瑠自身、自分がどこにいるのかわからなくなりそうだというのに。

なんというか、紅はあらゆる意味でタフなのだと思っただ。彼とて、テレビ局の中に入るなど初めてのはず。それにも関わらず、こうまで落ち着き払って行動できるとは、その神経の図太さに敬服してしまう。

「さあ、着いたよ。ここが、例の番組を撮影するのに使っていたスタジオさ」

程なくして高槻が立ち止まり、紅や照瑠の方に向き直って言った。そんな彼の正面には、なにやら重たそうな扉がある。きつと、この扉の先に、例のプロデューサー変死事件が起きたスタジオがあるの

だ。

「なんだ。折角来たのに、鍵かかってるじゃん!!」

扉が封印されているのを目敏く見つけ、亜衣が拍子抜けしたような顔をした。

「それは仕方ないよ。僕も、実際に見たわけではないけど……そこ  
の篠原さんが言うには、相当に酷い事故だったらしいじゃないか。  
そんな事故が発生したスタジオなんて、そう二、三日で使えるよう  
にするってのも、妙な話だと思うけど……」

「でも、それだったら、どうやって調べるのさ。部屋に入れないん  
だったら、ここまで来た意味が全然ないよ」

腰に手を当て、珍しく正論を口にする亜衣。胸を大きく張っているのは、自分の小さな背丈を少しでも大きく見せようとしているためか。小学生と同じくらいの身長しかない亜衣にとって、こういうとき、必要以上に子ども扱いされたくないのかもしれない。

もつとも、現状では亜衣の言うことも確かに正しく、高槻もそれ以上は何も言えなかった。とりあえずは紅を局に案内したものの、いざ現場に入ろうとして、その術がない。なんというか、自分の無計画さに、少々情けなくなってくる。

「どいている、嶋本。扉の封印など、俺にはさしたる問題じゃない……」

目の前で困惑している高槻を見かねてか、今まで黙っていた紅がすっと前に出た。亜衣と高槻。その二人を押しつけるようにして扉

の前に立つと、紅は静かに目を瞑り、自分の影に意識を集中させてゆく。

「ねえ。あの人、何を始めるつもりなの？」

雪乃の後ろから、まゆが怪訝そうな顔をして尋ねた。照瑠や亜衣、それに雪乃や高津にとっては、紅が不思議な力を使うということも当たり前である。しかし、今日初めて紅に会ったばかりのまゆは、他の者とは違い、紅のことをよく知らない。

無言のまま口に指を当てて制する雪乃を他所に、まゆはその後ろから、じつと紅の背中を見つめていた。

いったい、あの少年は、これから何をするつもりなのか。雪乃の話では優れた霊能力者ということだったが、その特異な容姿を除いては、年齢も自分たちとさほど変わらない。そんな少年に、いったい何ができるというのだろうか。

「行け、黒影……」  
こくえい

その目をしっかりと閉じたまま、紅がそつと呟いた。すると、今までは彼の足下で大人しくしていた影が、ゆらゆらと揺れて一気に黒味を増してきた。

紅の赤い瞳が、カッと開かれて正面を見据える。同時に、影は彼の足から音もなく離れ、そのまま流動的な水たまりのように、ずるずると扉の隙間に吸い込まれてゆく。

「えっ……。影が……。消えた？」

人間の足から影が離れ、さらにはそれが、まるで生き物のように動いて姿を消す。照瑠たちにはお馴染の光景だったが、まゆだけは大いに驚いて、その目をしばし丸くさせていた。

己の影に宿りし、犬の姿をした下級の神。時に巨大な犬の姿を象り、術者の思うままに行動する紅のパートナー。代々、犬崎家を始めとする赫の一族に伝わりし、究極の外法である存在、犬神。

今、紅がスタジオの中に向かわせたのは、紛れもなくその犬神であつた。扉を封印され、人間が入ることができなくとも、黒影のような霊的な存在であれば侵入することができる。単に情報を集めるだけであれば、犬神だけを向かわせても問題はない。

十分、二十分、それに三十分。本当はもつと短い時間だったのかもしれないが、まゆにはそれが、まるで数十分もの時間を要した出来事のように感じられた。

程なくして、影が部屋の中から戻つて来た。影はそのまま紅の側にやってくると、再び彼の一部として、その足下に収まった。

これで、調査は終わったということなのだろうか。思わず気になり声を掛けそうになった照瑠と亜衣。が、そう思つて紅の後ろに近づいた途端、あまりに強い殺気のようなものを感じ、ついその場に踏みとどまつてしまった。

いったい、紅はどうしたというのだろう。こんなに張り詰めた空気の紅は、照瑠も早々お目にかかったことはない。普段の眠たそうな様子からは勿論のこと、霊的な存在に係する話をしているときでさえ、こうまで酷い殺気は感じたことがない。

紅が、ここまで強い緊張と警戒を露わにするとき。それは、彼が向こう側の世界の住人と戦うときだけだ。普段のぼんやりした様子からは想像もできないほどに、戦うときの彼は、まるで獲物を狙う肉食獣の如き凄まじさを発揮する。

「ちょ……。どうしたのよ、犬崎君……」

それが、照瑠の口からようやく出て来た言葉だった。もともと、紅はその言葉にも、まったく返事を返そうとしない。ただ、ちらりと廊下の奥に目をやって、その先にいる者を、鋭く光る赤い瞳で睨みつけた。

「そこにいることはわかっている。いい加減、隠れていないで出てきたらどうだ……？」

いつの間にか、紅の影が再び形を変えていた。今度はやけに細長く、しかも不自然な方向に曲がって伸びている。影は何かを捕まえているようで、よくよく見ると、それは紙で作られた小さな人形のようにだった。

「いやぁ……。見つかったか」

廊下の奥、ちょうど曲がり角のようになった場所から、ホストのような格好をした男が姿を現した。その隣にいるのは、何やら派手なアロハシャツを着た筋肉質な男。さらに後ろには、長い黒髪をした痩せ気味の少女が立っていた。

「あつ、あの人……」

白いスーツに身を包んだ男を見て、亜衣が叫んだ。



「亜衣、知ってるの？」

「うん。確か、名前は御鶴木魁。ここ最近で、急に名前が売れだした霊能力者だよ。例の、奇跡空間ミラクルゾーンにも、たま〜に出演することがあったから知ってるんだ」

「霊能力者か……。なんか、それにしちゃ、随分と派手な格好をしてるわね」

亜衣の口から出た職業と、男の格好のあからさまなギャップ。自分の思い描いていた霊能力者との違いに、照瑠は少々面食らった。

「貴様……。さっきから、俺のことを探っていたようだが……何者だ？」

追及の手を緩めず、紅が魁に向かって言った。相手が年上だろうと関係ない。いつも以上に無愛想な表情で、紅は魁に凄むような視線を送っていた。

「おいおい、随分と好戦的だな。俺は別に、君の邪魔をしようってわけじゃない。ただ、ちょっと同業者の気配がしたんで、接触しようと思っただけさ」

「ふん、どうだかな。それにしては、後ろからコソコソと式神なんかで探りを入れていたようだが？」

影が紅の身体に吸い込まれるようにして縮み、紅は足下に引き寄せられた紙人形を拾い上げた。影に捕らわれていたのは、これまた小さな犬の姿をした紙人形。それはしばらく紅の手の中でもがいて

いたが、やがて紅が拳を握ったことで、人形もまた紙の潰れる音を立てて動きを止めた。

「残念だが、こんな物では俺は出し抜けないぞ。それよりも、貴様の目的は何だ？ 何故、俺の後を付け回した？」

「これは、とんだ御挨拶だね。でも、俺から言わせてもらえば、君の方が部外者だ。そういう君こそ、このテレビ局には何をしに来たのかな？」

「答える義理はない。ただ、一つだけ言っておく……」

丸めた紙人形を魁に放り投げ、紅は魁の鼻先に指先を突きつけるようにして言った。

「俺の仕事の邪魔はするな。今後、俺の後を意味もなくつけ回すようならば、次は容赦しないぞ。俺も……それに、黒影もな」

紅の言葉と共に、足下の影が揺れて広がった。それがただの影でないということに気づき、魁は仕方なくその場に踏みとどまった。

「やれやれ、嫌われたもんだねえ……。まあ、別に俺は、どっちでもいいけどさ。俺は俺のやり方で、自分の目的を果たさせてもらうからね」

「勝手にしろ。俺は、端から貴様などに興味はない……」

それだけ言うと、紅は音もなく踵を返し、さっさと扉の前を後にした。その後ろを、慌てて照瑠や亜衣たちも追いかける。後に残された魁と総司郎、それに凍呼の三人は、そんな紅や照瑠の後姿を、

何も言わずに見つめていた。

「さて……。ところで、総ちゃん」

紅たちの姿が完全に見えなくなったところで、魁は大きく腕を伸ばし、改めて総司郎に尋ねた。

「あの、赤い目をした少年……総ちゃんは、どう思った？」

「そうっすね……。率直に言っつて、よくわかんないっす」

「わからない？」

「はい……。あいつの影に憑いているやつ。あれ、只者じゃないっすよ。それこそ、この前の幽霊屋敷の除霊で戦った蛇なんか、比べ物にならないくらい……」

「だろうね。それは、俺も感じていた」

「けど、特に邪悪な感じもしなかったっす。真っ暗で冷たいのに……何か、変な感じでした」

「なるほどね。まあ、総ちゃんが言っただったら間違いはないですよ。どっちにしても、こいつは少々、厄介なことになりそうだけど……」

足下に転がった式神のなれの果てを拾い上げ、珍しく魁は難しい顔をして言った。

いくら単体での力が弱いとはいえ、それでも魁の使役する式神は、

それなりの力を持っている。そんな式神を、いとも容易く捕えて破壊する。これだけのことを行うには、かなりの霊能力が必要とされる。

あれは、恐らくは外法を使う一族の一人だろう。大方、例のプロデューサー変死事件を嗅ぎつけて、さっそく調査に現れたか。だとすれば、とんだ商売敵が現れたものだ。

本当は、自分のペースでじっくり調査をしたかった。しかし、こうなってしまうては、最早のんびりしているわけにもいかなかった。

あの少年が何者であれ、こちらも西岡の変死を放っておくつもりはさらさらない。それに、後からやって来た人間に手柄を取られては、最悪の場合、今後の仕事の進退にも関わってきてしまう。

丸められた式神をポケットにねじ込み、魁もまた静かに後ろを向いた。そのまま踵を返し、今しがた歩いてきた廊下を戻ってゆく。後にはスタジオに続く巨大な扉だけが残されて、静寂の中、ひたすらに封印を守っていた。

照瑠が雪乃の暮らしているマンションに着いたとき、既に時刻は夜の八時を回っていた。

オートロックによつて管理された入口をくぐり、照瑠と亜衣、それにまゆの三人は、雪乃に案内される形でマンションの中に入つてゆく。

普段、このマンションで過ごしている雪乃にとっては慣れたものなだろうが、それでも照瑠は、いつしか尻込みしてしまっている自分がいるのに気がついた。

閑静な田舎町に住む自分は、当然のことながら、こんな凄いマンションの中に入ったことはない。高級というにはいささか物足りないこともあるが、オートロックのマンションなど、照瑠の住んでいる火乃澤町では、駅前くらいにしか見受けられない。

また、それ以上に、照瑠は雪乃がこんなマンションで独り暮らしをしているということに、改めて感心せざるを得なかった。気が弱く、引つ込み思案で大人しい雪乃だが、なかなかどうして芯は強い。

事務所の金で貸し与えてもらっているのだろうが、なんにしても、独り暮らしができるというのは立派なことだ。こんな都会の真ん中で、親と離れて暮らすことを考えると、照瑠自身、寂しさに耐えかねてホームシックにならないとも限らないというのに。

エレベーターを使つて五階まで上がり、照瑠たちは五〇七と書かれた扉の前で立ち止まった。雪乃が持っている鍵で扉を開けると、

そこには落ちついた雰囲気の玄関が広がっていた。

「着いたわよ。みんな、遠慮なく上がって」

そう、雪乃に言われても、どことなく遠慮をしてしまう。それは照瑠だけでなく、まゆもまた同じだった。雪乃と違い、そこまで名の売れているわけでもない彼女にとっては、こんなマンションを事務所から貸してもらえるなど、夢のまた夢である。

「なんか……凄いとこに着ちゃったわね……」

「うん……。汚さないように、気をつけないと……」

同い年の少女の自宅に招かれているだけだというのに、なんだかセレブの暮らす一室を覗かせてもらっているような申し訳なさが湧いてきた。これが、俗に言うカルチャーショックというものか。

目の前に広がっているのは、神社の跡継ぎである自分とは無縁の世界。「お邪魔します……」と言いながら、照瑠は馬鹿丁寧に靴を揃え、そつと部屋の中に足を踏み入れる。もつとも、そんな彼女たちの考えを知ってか知らずか、約一名だけ、まったく畏まらずにはしゃぎまわっている者もいたが。

「わああ！　これが、ゆつきーが東京で暮らしているマンションなんだね！　なんか、すっごいゴージャスじゃん……！」

声の主は嶋本亜衣だ。照瑠やまゆとは違い、亜衣は脱いだ靴をその辺に放り出すと、そのまま部屋の奥に走って行った。なんというか、高二にもなって節操がない。身長もそうだが、頭の中身まで近所の小学生と何ら変わらない。

雪乃の案内も待たず、亜衣はずかずかと無遠慮に部屋の奥へと進んで行く。その、あまりに大胆な行動に、周りの誰もが目を丸くしたまま固まっている。親しき仲にも礼儀ありという言葉を知らないのか、こういうときの亜衣は、とにかく厚顔無恥なので困りものだ。

「ちょっと、亜衣！ そんなに勝手に入ったら、雪乃だって迷惑するでしょ！―」

「むう、相変わらず照瑠は固いなあ！ アイドルの住んでるマンションに泊まるなんて、一生に一度、あるかないかって経験なんだよ！」

駄目だ。照瑠の制止も、亜衣はまるで聞いていない。そのまま更に部屋の奥に入り込むと、亜衣は目敏く書棚にあった一冊の本に目をつけて、それを豪快に引っ張り出した。

「あつ！ そ、それは……」

亜衣が抜き出した本がなんなのか。気がついた雪乃が慌てて駆け寄るが、もう遅い。本の表紙を見た亜衣はにやりと笑い、雪乃が止めるのも構わずにページを大きく開いて中を見た。

夏の砂浜と、青い海。本の中身は文字ではなく、どこかの浜辺で撮ったと思われる写真だった。その写真の中央では、白いワンピースに麦わら帽子を被った少女がこちらを向いて微笑んでいる。妙にカメラを意識した目線で、しかし見る者に癒しを与える爽やかな笑顔。他でもない、雪乃本人を撮ったものだ。

「へえ……。ゆっきー、写真集なんて出してたんだ。歌の方ばっか

り気にしてたから、全然気がつかなかったよ」

「う、うん……。でも、亜衣ちゃんが見ても、あまり面白いものじゃないと思うよ。だから……。もう、しまってくださいかな……」

「なんで？ 別に、私が見たって減るもんじゃないじゃん。それに、まさかエロ写真集ってわけでもないだろうしさ」

隣で恥ずかしそうに俯いている雪乃を他所に、亜衣は慣れた手つきでペラペラとページをめくってゆく。写真は様々なアングルから撮影されており、ページをめくってゆくだけで、まるでちよつとしたスライドショーを見ている気分させられる。

砂浜を背に、こちらに手をふっている雪乃。岩場の影で体育座りをして、少しばかり照れ笑いをしながら丸くなっている雪乃。そんな写真の数々が、流れるように亜衣の目の前を通り過ぎてゆく。なんとというか、アイドルの写真集としては、随分と爽やかだ。ともすれば際どいポーズを惜しげもなく晒し、それによって話題を作ろうとするグラビアアイドル達のものとは赴きが違う。

幼い頃の雪乃を知る亜衣にとって、これはある意味では実に自然な流れだと思った。亜衣の知る限り、雪乃は決して目立ちたがりな人間ではない。今ではステージの上で大歓声に囲まれて歌を歌えるまでに成長したが、本質的に大人しい少女であることは変わらない。

柔らかい物腰と、およそアイドルらしくない地味な性格。そんな雪乃にとっては、この程度の写真であっても、やはり見られるのが恥ずかしいということだろうか。

そんなに恥ずかしがるならば、最初から写真集など出さなければ



よいのではないか。そう、亜衣が思ったとき、ページをめくる彼女の手がぱたりと止まった。

「えっ……。こ、これ……」

今までは流すようにして見ていた亜衣の目が、目の前に現れた写真に釘付けとなる。夏の砂浜を背景にした、先ほどと同じような一枚の写真。だが、背景は同じでも、そこに映し出されている雪乃の姿は、今までのそれとは大きく異なっていた。

そこにいたのは、他でもない水着姿の雪乃だった。水着は身体の前面を覆うようなタイプの物で、決して露出度が高いわけではない。また、そこまでいやらしいポーズを取らされているわけでもなく、浜辺で遊ぶ、年相応の少女を映したものになっている。

水着撮影とはいえ、雪乃の持つ本来のイメージを損ねないよう、最大限に配慮がなされたであろう一枚。だが、問題なのは水着そのものではなく、水着によって際立たされた、彼女のスタイルそのものだった。

「嘘……。ゆっきーって、脱いだらすごかったんだ……」

呆然とした表情で、亜衣がとんでもないことを言つてのけた。別に、ヌード写真ではないにも関わらず、亜衣にそれだけの台詞を言わせてしまう。それほどまでに、雪乃のスタイルは同年代の少女から見ても羨ましくなるものだった。

「うわっ、本当だ！ 雪乃って、意外と着痩せするタイプなのね……」

いつの間に部屋に上がったのか、亜衣の後ろからまゆが写真を覗きこんで呟いた。まゆは雪乃よりも一つ年上であつたが、年齢と体型は必ずしも比例しないということは、目の前にいる亜衣を見れば明らかである。

手足もウエストも細く、それでいて痩せすぎというわけではない。実にしなやかな肢体を持ちながら、出るべき部分はしっかりと出ている。水着姿を売り物にするアイドルの中には、作り物めいた容姿を持つ者も存在するが、雪乃に限って自分の身体に手を加えているようなことはないだろう。

ステージ衣装であればいざ知らず、普段の雪乃は割とゆつたりとした服を好んで着ている印象がある。それこそ、あえて身体のラインを隠してしまえるような、柔らかな服装をしていることが多かった。そんな服に隠されて、今までは彼女のスタイルがどのようなものなのか、周りもまったく意識してはいなかったのだ。

「もう……。だから、見ないでつて言つたのに……。」

数秒の間、食い入るようにして写真を覗きこんでいた亜衣とまゆ。そんな二人に向かつて、雪乃は少しばかり泣きそうな顔になつて言つた。もう、これ以上は我慢できない。そう叫ばんばかりに、彼女の顔は真つ赤に染まつてしまつていた。

やはり、根が引つ込み思案な雪乃にとって、水着の撮影などは少々辛いものがあつたのか。しかし、それではなぜ、彼女はこんな写真集を自分の部屋に置いておいたのだらう。仕事で断れなかつたとはいえ、そんなに恥ずかしいのであれば、最初から置いておかなければよかつたのに。

「ねえ、ゆつきー。そんなに恥ずかしいんだったら、なんでこんな写真集、わざわざ部屋に置いておいたのさ。それに、そもそも何で、水着撮影なんて引き受けちゃったの？」

「それは……お仕事だったから、やっぱり断れなくて……。それに、折角撮ってもらって、本にまでしてもらったんだし……」

「でも、人に見られるのが嫌だったら、そんな写真集なんて捨てちゃえばいいじゃん。だいたい、私たちに見られても恥ずかしいようなもの、ファンの男どもに見られるのは平気なの？」

「うん……。ファンの人は、顔も知らない誰かだから、まだ我慢できるけど……。代わりに、知っている人に見られちゃうのは、やっぱり何か恥ずかしくて……」

別に、やましいことなど何もないのに、既に雪乃は耳の先まで赤くしていた。

赤の他人に見られるのは構わないが、顔見知りに見られるのは恥ずかしい。そんなものなのか、と亜衣は思う。

自分だったら、やはり見ず知らずの男連中に水着姿の写真を見られ、あれこれと妄想される方が気持ち悪い。この写真集を作った側は、別に水着メインで写真を撮ったわけではないだろう。が、手にした者が何を考えるかなど、完全に相手の自由である。

もつとも、雪乃とは違って未だ小学生のような亜衣の体型では、誰も見向きもしないことだろう。考えようによっては一部の人間に需要がありそうだが、それはそれで、やはり亜衣にとっても気持ちが悪いくらい。

「はいはい。お約束のセクハラはそこまでよ、亜衣。私たちは別に、雪乃の家に遊びに来たわけじゃないんでしょ」

なにやら気まずい空気になったのを察してか、照瑠が亜衣の頭の上から手を伸ばし、写真集を取り上げた。本を閉じる際、照瑠の目にも一瞬だけ、雪乃の水着姿が目に入った。

（へえ……。まあ、確かに亜衣の言う通り、ちょっと羨ましくなっちゃうかな……）

心の中で呟きながら、照瑠は何も気にしていないような素振りをしつつ、写真集を書棚に納めた。

照瑠自身、周りからモデルのような体型だと言われることはあるが、それでも雪乃が羨ましい。自慢ではないが、身体のバランスは確かに自分でも良い方だと自覚はしている。が、それでも写真にあった雪乃のように、男女問わず魅了するようなものはない。自分は単にスレンダーなだけで、胸だけならば確実に雪乃に負けてしまう。

気にしないようにとは思っても、照瑠はいつの間にか自分の胸元に手を添えているのに気がついた。そのことを周りに気取られないようにしつつ、照瑠は近くにあったクッションに腰かける。他の者たちも、そんな照瑠につられたのか、次々にベッドやクッションの上に腰を降ろし始めた。

「えっと……。とりあえず、その辺でゆっくりして。四人もいると、なんか狭いかもしれないけど……」

まだ、少しばかり恥ずかしさが抜けないのだろうか。雪乃の声が、

いつもより小さい。色々な意味で気まづくなってしまったのか、照瑠も亜衣も無言のまま頷いただけだ。

「ねえ、ところでさ……」

場の空気の流れを変えるためか、唐突にまゆが切り出した。彼女は別に雪乃の家に泊まる必要などなかったが、気づけば成り行きから同行する羽目になっていた。

「あの、犬崎紅って人、いったいどんな人なの？ 私は初めて会ったから、よく知らないんだけど……。雪乃は、あの人と知り合いなの？」

「えっ……。まあ、確かに、知り合いは知り合いなんですけど……。でも、そんなに詳しくは知らないです。以前、まゆさんみたいに変な事件に巻き込まれたとき、犬崎君に助けてはもらいましたけど……」

最後の方は、少しだけ言葉を濁して答える形になった。

そう言えば、まゆと初めて出会ったときも、雪乃はこのような言い方をしていた。恐らく、本当に思い出しくなくらい、嫌な事件に巻き込まれたのだろう。

雪乃が嘘を吐くような人間ではないことは、今までの流れからしてまゆにもわかる。彼女とのつき合いは浅かったが、それでも雪乃が紅を心の底から信用していることくらいなら、まゆも十分に理解できた。

もともと、単にそれだけの理由で、紅に対する不信感が完全に拭

いされたわけではない。まゆの中では、未だにあの犬崎紅という少年に対し、なんだか妙な違和感のようなものが残っていて仕方がない。

別に、彼の力を信用していないわけではない。雪乃や亜衣、それに照瑠が、嘘を言っていないということもわかっている。ただ、あの初対面での無愛想な印象と、燃えるように赤い二つの瞳。およそ人間離れた容姿と無遠慮な態度が、まゆにとって紅を近づき難い人間にってしまったていた。

「まあまあ。ゆっきーも犬崎君とは去年の暮れに会っただけだし。ここは一つ、私が説明してあげましょう」

ようやく、自分の出番が来た。そう言わんばかりの口調で、亜衣が身を乗り出してきた。

「犬崎君はね、この都市伝説マニアの亜衣ちゃんをも唸らせる、最強の霊能力者なんだよ。自分の影に大神なんてものを飼ってるし、他にも幽霊をやっつける刀とか、凄い武器をたくさん持つてるんだ！ それを使って、悪霊でも妖怪でも鬼でも悪魔でも、バツサバツサと斬り捨てちゃうくらい強いんだよ！！」

「へ、へえ……。なんか、ちょっと普通じゃ信じられないような話だけど……」

「まあね。でも犬崎君の力は、真正銘の本物だよ。この私が言うんだから、絶対間違いないってね！！」

自分のことではないのに、腰に手を当てて亜衣は胸を張った。もっとも、そんな説明の仕方では、返って紅の信用を落としているこ

とに、本人はまるで気がついていない。

このままでは、紅に対して妙な誤解を抱かれたまま終わってしまう。そう思った照瑠は、すかさず亜衣の頭を小突いて、その行動をたしなめた。

「痛っ！ もう、なにすんのさ、照瑠！！」

「なに、じゃないわよ。本物のお化けや幽霊を見たこともない人に、そんな説明したって胡散臭いだけでしょう？」

「むう、失礼な。私はただ、本当のことを言っただけじゃんか！！」

「いや……。むしろ、かなりあなたの主観が入り混じった、誇張入りまくりの説明だったと思うけど……」

あくまで自分が正しいと譲らない亜衣に、照瑠は少々呆れた顔をして呟いた。オカルトや都市伝説に関する亜衣の知識が凄いのは認めるが、ときにこうして話を盛るのは考えものだ。巷に溢れる都市伝説の多くは、きつと亜衣のような人間が、こうして嘘と誇張を織り交ぜて話をした結果、生まれてしまうものではないかと思う。

「とりあえず、訂正の意味も込めて、私の方から説明させてもらうわよ。えっと……篠原まゆさん、でしたよね」

「ええ、そうよ。雪乃とは比べ物にならないけど、一応はテレビに出る仕事をやってるわ」

「九条照瑠です。改めて、よろしく」

まゆの方に向き直り、照瑠は軽く会釈した。そう言えば、東京に来てから色々と慌ただしく、まともに自己紹介さえしていなかったのを思い出した。

「えっと……。それじゃあ、犬崎君について、私の方から誤解のないように説明させてもらいますね。亜衣の言っていることは、半分はホラ話程度に思ってくれても構いませんから」

ホラ話と言われて亜衣がすかさず不機嫌そうな顔になったが、照瑠は無視して話を続けた。ここで亜衣に構っているのは、話がいつまで経っても先に進まない。

「亜衣の言っていたことですけど、とりあえず、半分は本当ですよ。ただ、ヒーロー番組の主人公みたいなイメージとは、ちよつと違いますけど」

「確かにそうよね。こう言っちゃ悪いけど……。あの人、随分と無遠慮で無愛想な感じだったじゃない。なんか、こっちの方が気が引けちゃってさ」

「ごめんなさい。犬崎君、人と話すときは、いつもあんな感じなんです。学校にいるときも寝てばかりだし……。なんていうか、不器用なんですよね」

「不器用、か……。そう言われれば、そんな感じもしないではないけど……。でも、それだけで、あんなに刺々しい感じになれるものなのかな？」

カフェで話をしていたときの姿を思い出しながら、まゆが照瑠に尋ねた。照瑠と違い、まゆは紅のことを殆ど知らない。そのため、



単に不器用なだけだと言われても、どうしても納得がいかなかった。

「まあ、まゆさんの言うことも、確かにわかる気はしますけどね……」

少しばかりの間を置いて、照瑠が続けた。照瑠自身、初めて紅に出会ったときは、嫌悪感の方が大きかった。尊大で、ぶっきらぼうで、口も悪い。亜衣とは別の意味で一般的な常識に欠け、人との関わりを極度に避ける。おまけに、こちらが相談事を持ちかけても、報酬の話をちらつかせて断ろうとする素振りさえ見せる。

正直なところ、照瑠から見ても、紅の態度には色々と問題があるとは思った。こと、初対面の相手に対する横柄な態度には、なんとかしてもらいたいとも思ってしまう。

だが、それでも照瑠は知っている。紅が、本当は誰よりも、人の命を大切に思っているということ。闇の中に蠢く向こう側の世界の住人たちと戦うとき、その優しさと強さの片鱗を垣間見せるということを。

「まゆさんが、犬崎君のことをどう思っているかは、なんとなくわかります。でも、あれでも犬崎君、優しいところもあるんですよ」

「優しいところ？ ああ、幽霊みたいな男が？」

「はい。さっきも言いましたけど、犬崎君は、単に不器用なだけですから。そりゃ、私から見ても、ちょっと改めて欲しいと思う部分がありますけど……。それでも、あれはあれで、色々と考えているんだと思います」

紅が他人に冷たい素振りを見せる理由。それは一重に、自分の立場をわきまえてのことではないかと照瑠は思っていた。

向こう側の世界の住人たちと関わることは、その身に危険を伴うことも多い。何の力も持たない一般人が彼らの領域に踏み込んだ場合、その力に抗える保証は皆無に等しい。

それがわかっていいるからこそ、紅はあえて、人との関わりを必要最小限に抑えようとしているのではないか。自分に関わることで、他の人間が向こう側の世界に深く引きこまれてしまうこと。それを何よりも心配して、あのような態度でふるまっている。そう、思うのだ。

（でも……。それにしては、今日の犬崎君は変だったな。なんだか随分と、苛々しているような……）

そこまで考えて、照瑠は唐突に今日の紅の様子を思い出した。東京に来るまでもそうだったが、あの陰陽師 亜衣の話では、御鶴木魁とか言ったか に出会ったときは、いつになく苛立ちを隠せない様子で対峙していた。なんというか、意味もなく敵対心をむき出しにし、周りに当たり散らしている。そんな風にも受け取れた。

紅の口が悪いのは、今に始まったことではない。しかし、同時に彼は、決して無意味に当たり散らすようなことはしない人間だ。

では、今日の紅のあの態度。あれは、いったい何なのか。あの陰陽師が、今回の事件の重要な鍵を握っているのか。それとも、何かまったく別の理由があるのか。それは、照瑠にもわからなかった。

結局、自分は紅のことを知っているようで、その実、何も知らないに等しいのだ。彼と出会って、そろそろ一年近くが経とうとしていたが、性格以外は何もわかっていないことがない。

心の中に、なにやら寂しさにも似た感情を覚え、照瑠は自分でも意識しない内に自分の手を胸元に添えていた。それに気づいて周りを見ると、他の三人の視線が自分に向けられておりハツとした。

「ねえ、照瑠ちゃん。急に黙り込んだりして……どうしたの？」

「えっ？ あ、ごめんね、雪乃。ちょっと、考え事してただけだから」

「考え事？ それって、犬崎君についてのこと？」

「うん、まあね。あいつ、今回は妙に乗り気で、いきなり東京に行きたいなんて言い出すし……。思い返してみたら、なんだかちょっと、いつもと違うなって思ったのよ」

「ふうん……。ところで、その犬崎君なんだけど……今、なにやってるの？」

「さあね。なんだか、独りで考えたいことがあるとか言って、どこかをほつつき歩いてるわよ。明日になったら連絡するとか言ってたし……。それまでは、雪乃の家で女子会でもしながら、気長に待つ他ないんじゃない？」

両肩をすくめ、照瑠が雪乃に答えた。紅が今、どこで何をしているのか。それは照瑠だけでなく、この場にいる全員が知らなかった。

テレビ局を出た後、紅は照瑠たちに別れを告げて、独りで夜の街に出て行った。泊まる場所は、カフェで高槻に言っていたように、漫画喫茶でもはしごするつもりとのことだった。

だが、それにしても、紅は何を考えているのだろう。彼のことだから、夜の街を一人で歩いていたらとしても、不思議と心配はないと思われる。問題なのは、彼が行き先さえ告げずに自分の前から消えたこと。自分の考えも話さずに、妙に追い詰められたような表情をしていたことである。

自分にとって、犬崎紅とはなんなのだろう。ふと、そんな疑問が照瑠の中に浮かんできた。

紅が火乃澤町にやってきてから、自分もまた妙な事件に巻き込まれることが多くなった。今までは霊的な存在などとは無縁の生活を送っていたが、その価値観は、彼と出会ってからの数カ月で、物の見事に覆された。

もともと、それで紅を恨んでいるかというところ、それは違々と照瑠は思った。時に妙な事件に遭遇することはあっても、彼が照瑠を救ってくれていたのは紛れもない事実。そして、そんな紅のことが、なぜか気になっていいる自分がいるのもわかっていた。

結局、自分は紅に、何を望んでいるのだろう。そして、自分にとって、犬崎紅という存在はどのような意味を持っているのか。

喉元まで出かかった言葉を飲み込んで、照瑠はそれを心の奥にしまいこんだ。本当は、答えなど既に出ているのかもしれない。しかし、簡単な言葉で片付けてしまえるほど、自分の紅に対する気持ちを安っぽくしたものにはなかつた。

夜の東京に吹く風は、東北のそれとはまるで違っていた。季節外れの黒いコートに身を包んだまま、犬崎紅は、ネオンの輝く街中を独り歩いていた。

空気が重い。今の自分の気持ちこそがそう感じさせるのかもしれないが、それだけが原因ではないだろう。夜でも眠らないこの街の空気は、火乃澤町に比べても随分と淀んでいる。

それは、絶え間なく通り過ぎる自動車の排気ガスによるものなのか。それとも、通りに投げ捨てられた煙草の吸殻から、かつては赤い光と共に放たれていた紫煙によるものなのか。

その、どちらも正解であり、どちらも間違いであると紅は思った。田舎に比べて都会の空気が清んでいないことなど、当然のことながら知っている。問題なのは、この街の中に漂う空気が、実に様々な欲望に満ち溢れているということだった。

心病みし者が向こう側の世界に触れるとき、病みは闇となり現実を侵蝕する。

外法使いとして生きる紅にとっては、既にお馴染となった言葉だ。人の荒んだ心、歪んだ欲望、狂気に走るしか他になかった、やり場のない悲しみや苦しみ。そういった感情を抱えた者が、闇の力を持

った忌むべき神霊に関わったとき、心の闇は現実の世界に、具体的な恐怖の形をとって現れる。危険なのは向こう側の世界の住人そのものではなく、それを呼び寄せ、闇を現世に開放してしまう、人間の心の弱さそのものなのだ。

では、そんな闇を心に抱えた人間が、果たしてこの大都會にはどれだけ存在しているのだろうか。そんな疑問が、ふと頭をよぎる。

魔都、東京。初めて訪れたこの国の首都を、紅はいつしか自分の中で、そう呼んでいた。

金や名誉、権力などを求め、それを手にするために手段を選ばない者がいる一方で、生まれながらにして様々な不幸を抱え、この都会のご真ん中で、常に泣きながら苦しい人生を送らねばならない者も存在する。その数は、紅の知る田舎の村や街の比ではないだろう。人が多く集まるが故に、そこには多くの喜びや楽しみと同じく、無数の悲しみや痛み、苦しみもまた集まってくる。

これだけ多くの闇が集うのであれば、向こう側の世界の住人たちは、さぞ獲物に苦労しないことだろう。昔から土地に巢食っていた魑魅魍魎の類は、都市部の発展と共に姿を消して久しい。が、人を魔道に誘う者は、何も古来より存在する神霊だけとは限らない。

人が向こう側の世界に触れるとき。それは別に、禁忌を犯して神の怒りに触れたときだけを指すのではない。人が、その恨みや妬み、悲しみの感情を内に溜めこみ、それを大いなる負の力として一度に開放する。即ち、呪いという忌まわしき行為に手を染めたときこそが、最も恐ろしい闇を呼ぶ可能性がある。

呪いと祟り。この二つは、似ているようでまったく異なるものだ。

祟りはあくまで人間の身勝手な振る舞いに神が怒り、半ば制裁のような形で降りかかる物。それに対し、呪いは人が人に仕掛ける、恐るべき怨念を込めた霊的な攻撃なのだ。

刃物を持つて人を刺すか、それとも呪詛によって呪い殺すか。違っているのは方法だけで、人を傷つけ、場合によっては殺してしまいう行為という点では相違がない。そして、心の病んだ者を言葉巧みに誘惑し、そういった行為に手を染めるように仕向ける者を、紅は一人だけ知っている。

闇の死揮者<sup>コングクター</sup>つて名前、聞いたことある？

昨年の夏、知り合いの退魔<sup>たいまぐし</sup>具師である鳴澤皐月の口から出た言葉だ。この世界には、呪いの道具を作つて心の病んだ人間に手渡し、現世に闇を噴出させようとする者がいる。自分は決して手を出さず、あくまで道具を渡すだけの傍観者に徹していることから、裏で事件を操る黒幕的な意味合いを込め、そう呼ばれている。

あのときは、紅も単なる噂話としてしか考えていなかった。しかし、今となつては紅もまた、いつしか死揮者の存在を強く信じる者の一人になっていた。

実際、本当に闇の死揮者なる者が存在するのか。それは、紅にも断言できない。ただ、今年の二月に起きた鏡さま事件以来、紅が本格的に死揮者の存在を意識し始めたのは確かだ。昨年の夏より立て続けに起きた様々な事件。その殆どが呪いの儀式に起因するものだったことを考えると、死揮者の話を単なる都市伝説として片付けるわけにもいかなかった。

人気のない路地裏へ続く角を曲がったところで、紅は道端に転が

つていた空き缶を無造作に蹴り飛ばした。乾いた金属音と共に、空き缶はビルの壁に激しくぶつかり路地の向こう側へと消えて行く。それを見ながら拳を握り、紅はそれを、齒噛みしながらコンクリートの壁に叩きつけた。

拳の先から、じんわりと痛みが伝わって来た。自分でも珍しく思っってしまうほど、今の紅は湧きあがる苛立ちを抑えきれていなかった。

先ほどから感じている重苦しい空気。それは、この東京の街を抜ける、淀んだ風のせいだけではない。増してや、そこに住んでいる、穢れた欲望を持った住人たちのせいでもない。

自分の苛立ちの原因。それは、自分自身が一番良く知っている。焦りにも似た感情に支配され、自分でも周りが見えなくなっている。そのことが、何よりも許せず、また齒がゆくも思えた。

長谷川雪乃からの依頼として受けた、今回の事件。これが果たして何らかの霊的な存在によるものなのか、紅も確証は持てていない。それにも関わらず、呪いの可能性があるというだけで、わざわざ東京まで足を運んだ。その理由が、あの闇の死揮者にないとすれば、それは嘘になる。

呪いの疑いがある事件に関われば、もしかすると死揮者の足取りをつかめるかもしれない。今までは後手に回るだけだったが、足取りさえつかめれば先手も打てる。敵の正体が判明すれば、こちらから攻撃を仕掛けることも可能となる。そんな感情に支配され、気づけばさしたる確証もなく、東京のど真ん中まで足を運んでいる自分がある。



もしかすると、今回の事件は単なる事故なのかもしれない。仮に何らかの呪いだっただとしても、その裏に死揮者の存在があるかどうか、その証拠もない。

客観的に考えれば考えるほど、今の自分が小さく思えて仕方なかった。相手は存在するかどうかさえ定かではない、都市伝説のような存在だ。その上、存在していたらいたで、その正体も目的も不明。神出鬼没に現れる謎の相手を、いったいどうやって捕まえればいい。

呪いに関する事件を解決し続ければ、いつかは死揮者に近づける。その考えが、八方塞がりの現実から逃げているだけだと、紅も薄々は感づいていた。ただ、それ以外に現状で自分のできることがなく、そのことが、一層の苛立ちと焦りを生んでいる源にもなっていたが。

「くそっ……。いったい、何をやっているんだ、俺は……」

誰に聞かせるともなく呟いて、紅は再び人気のない路地裏を歩き出す。別に、当てなどあるわけでもない。外の空気を吸って頭を冷やさねば、それこそ照溜や亜衣に当たり散らしそいで嫌だったただだ。

外法使いとして、赫の一族の末裔として、自分は今までも様々な相手と戦ってきた。が、こうまでして苛立ちと焦りに支配されたことは、後にも先にもまったくなかった。

自分のやっていることは、本当に正しいことなのか。己に対する贖罪と称して退魔師の仕事をしているが、それにしては、一人の相手にこだわり過ぎているのではないか。そう思い、ビルとビルの合間から、ふと空に浮かぶ月を見上げたときだった。

月明かりに照らされて細長く伸びた影が、急にざわついて紅に知らせた。夜の闇よりも深い黒に染まった影が、辺りの様子を警戒するかのようにして揺れている。その形は既に人のものではなく、いっしか大きな犬の姿を思わせるものに変貌していた。

（誰だ……。誰が、俺を見ている……？）

自分の背後から感じる奇妙な視線。その存在に気づき、紅の赤い瞳が険しさを増した。

後ろから、誰かが自分の後をつけている。この路地裏に入ったときから軽い違和感を覚えてはいたが、もしかすると、かなり前から尾行されていたのかもしれない。

こんな夜更けに、いったい誰が自分の後をつけているのか。テレビ局で出会った陰陽師かとも思ったが、直ぐにその考えは否定した。

背後の気配は、式神のような霊的な存在ではない。あれは間違いなく、生きた人間のそれである。が、ここまで隙のない気を感じたことは、当然のことながら紅にもない。

向こう側の世界の住人たちとはまた違う、戦い慣れたプロの空気が。殺し屋のような人間がいるとすれば、こんな気を発するとも言うのだろうか。百戦錬磨の戦闘のプロを窺わせる、幽霊とはまた違った恐ろしさがある。

油断なく後ろを振り返りながら、紅はそつと背中 of 棒に手を伸ばした。梵字の書かれた白布に封印されし、貪欲な闇を宿した一振りの刀。闇薙の太刀の柄をしっかりと握り、紅は己の背後から迫る、

謎の気配と対峙した。

深夜のテレビ局には、昼とは違い閑散とした空気が流れていた。

喫煙所の一角にある椅子に腰かけて、高槻護は今しがた自販機から買ったコーヒーを飲み干し、ふっと大きな溜息をこぼした。

空腹の胃に、ブラックの缶コーヒーが染み渡る。煙草を吸わない高槻にとって、これは目覚まし代わりになる数少ない刺激の一つだ。

「やれやれ……。こんな時間になったけど、結局は何もわからずじまいか……」

安物の腕時計を見ながら、高槻は誰に言うともなく呟いた。時刻は既に夜の十一時近くになっており、人の気配もまばらだった。

昼間は様々な番組の撮影で賑わうテレビ局も、夜になれば一転して静寂に包まれる空間となる。未だ、ビルに残って仕事をしている者たちもいるが、半数以上の人間が、既に仕事を終えて帰宅している。

飲み終えたコーヒーの缶を傍らに置き、高槻は今日の出来事を振り返ってみた。

犬崎紅を局に案内し、封印されたスタジオの調査をさせてから数時間。高槻は自分なりに、今回の事件に関して調べてみた。

生放送の収録中に、プロデューサーが変死する。そして、関係者は貝のように口を固く閉ざし、局側からも緘口令のようなものが敷かれている。公には目撃者の精神的な面を考慮した措置との話だが、確かにこれは、高槻も疑念を抱かざるを得ない。

テレビ局側が、こうも事件の全容を隠蔽しようとする理由は何か。心霊現象の有無に関係なく、もしかすると、何かとんでもないことが裏で起きているのではないだろうか。だとすれば、それらの件に雪乃たちを巻き込ませないようにすることが、彼女のマネージャーを務める高槻の仕事だ。

もつとも、そう頭ではわかっていても、高槻にできることなど微々たるものでしかないのもまた現実だった。実際、紅と別れてから自分なりに調査を進めてはみたが、これといって進展はない。

やはり、自分だけでは限界がある。警察や探偵じゃあるまいし、そうそう簡単に事件の裏まで探れるはずもない。

今日は、そろそろ引き上げて、明日また紅に話をしてみよう。もし、幽霊のような存在が相手なのであれば、自分にできることなど限られている。そう思い、高槻が立ち上がろうとしたときだった。

「すみません。隣、いいですか」

いつの間にか、自分の横に一人の男が立っていた。年齢は自分と同じか、それよりも少し若いくらいだろうか。線の細い身体つきをしており、どこにでもいそうな平凡な顔をしている。このビルにいるということは局の関係者なのだろうが、芸能界に通じている人間とは違った空気を持っていた。

「なんだい、君は？ 僕はそろそろ帰ろうと思っていたところだし、邪魔だったら退くけど？」

「いや、そうじゃないんです。ただ……少し、お話ができないかと思ひまして……」

いきなり話を振られ、高槻はしばし戸惑った様子で男の顔を見た。いったい、彼は何者だ。なぜ、なんの目的があつて、自分に話など振ってくるのだろう。

「ああ、別に構わないよ。僕に断る理由はないからね」

何やら胡散臭いものも感じたが、それでも高槻は、とりあえず男の話を聞いてみることにした。男の目的は不明だったが、とりあえず話を聞いてみないことには始まらない。

「俺、宮森って言います。例の、生放送がぶち壊しになった番組で、ADやってました」

「生放送がぶち壊し……ってことは、君は 奇跡空間ミラクルゾーンの制作に関わっていたのかい？」

「ええ、まあ……。もっとも、ADの自分ができることなんて、ただの雑用に過ぎないものでしたけど……」

宮森と名乗った男は、最後の方だけ言葉を濁して鼻の頭をかいていた。謙遜などではなく、彼の言っていることは事実なのだと高槻も思った。実際、ADという役職は雑用係のようなもので、何でも

屋のような位置づけにあることは知っていたからだ。

「俺、今日になって、あの番組で起きた事故のことを調べている人がいるって聞いたんです。それで……いろいろと局の中を探しまわって、とうとうあなたを見つけたんです」

「へえ、そうなんだ。局の側としては、あまり公にしたくないみたいなことがあったから、僕もできるだけ慎重に動いていたつもりなんだけど。やっぱり、どこかでドジ踏んだかな？」

「いや、そんなことはないと思いますよ。それに、俺は別に、あなたのことを責めるつもりで探していたわけじゃないですし……」

「だったら、いったい何の用だい？ 番組関係者が僕に直接話をしに来るなんて、正直、口止め以外に考えられないんだけど……」

訝しげな視線を送りながら、高槻が宮森に尋ねた。口止めでないのであれば、いったい何の用だろう。それも、番組のディレクターであればまだしも、ADが個人的に用事など、高槻にはまったく見当もつかない。

「あの……俺の関わっていた、例の番組のことなんですけど……」

徐に、宮森が下を向いたまま話し出した。周囲の空気が急に重たくなった感じがして、高槻は思わず身構えたまま、宮森の顔から目を離すことができなかった。

「あれ、もともとは、心霊物やオカルト物を中心とした番組じゃなかったんですよ。日本に限らず、世界のあちこちで起きている感動的な奇跡。それこそ、奇跡の生還エピソードから、キリスト教の聖

人が起こした神秘まで、超常現象も含めた感動のエピソードを取材して放送する番組だったんです」

「へえ、そうなのか。そいつは、僕も初耳だ」

宮森の話に、高槻は本気で驚いた様子を見せて言った。心霊番組だとばかり思っていたが、ミラクルゾーンは、元々は随分とまとまな番組だったらしい。それこそ、宮森の話を信じるならば、海外取材をさせてくれるくらい、製作費にも恵まれた環境にあったのだろう。

初めは単に、感動的なエピソードを奇跡と称し、それを取材して世に伝えるだけの番組だった。それが、何を間違ったのか、いつしかお化けや幽霊などをネタにした、オカルト番組へと変わってしまった。その理由がなんなのか、もしかすると、宮森は知っているのかもしれない。

「最初、番組が放送され始めたときは、今とはディレクターが違っていたんです。室井さんじゃなくて……神居結衣かみい ゆいっていう、女の人  
がディレクターでした」

「女の人でディレクターか……。きっと、随分と仕事のできる人だったんだろうね」

「はい。この業界では、変な差別意識を持っている輩も、少なからずいますからね。俺も、まだまだ未熟ですけど……それでも、男に生まれただけ、まだマシな扱いを受けていると思います」

途中、言葉を濁しつつも、宮森は最後まで高槻に言っただけ。その言葉の意味するものが何か、高槻もわからないわけではない。

職種や業界によつては、女性が露骨な差別を受ける職場もある。テレビ業界が一概にそうだとは言えないが、中には旧態依然とした考えに縛られている者がいることも確かだ。アイドルのマネージャーを務めている高槻も、それは日々の仕事から、確かに感じていたことだった。

まだ幼い少女たちを一人の人間として見ることをせず、その美貌を用いた商売道具程度にしか考えない。アイドルは使い捨ての駒であり、プロダクションの思い通りにできる物である。そんな考えにとらわれた結果、最終的には己の身の破滅を招いた人物を、高槻も知らないわけではない。

鴨上裕司<sup>かもがみゆうじ</sup>。かつて、雪乃が所属していたプロダクションの社長であつた男だ。表向きは優しく思いやりのある男を演じつつ、裏では雪乃たちのことを、単なる消耗品としてしか考えていなかった。そして、己の歪んだ欲望を満たすために禁じられた術に手を出して、最後は化け物に成り果てた上で、犬崎紅に退治された。

出演者と制作者では立場も異なるのだろうが、やはり、業界内部に差別的な感情を抱いている者がいるのは間違いない。きつと、宮森の言う神居結衣という女性も、かなりの苦勞をしながら仕事をしていたのだろう。それこそ、女性ならではの、高槻などにはわからない苦勞があつたに違いない。

「ここから先は、俺の単なる妄想みたいな話になります。だから、もし気を悪くしたら、適当に流してくれて構いません」

なにやら意味深な言葉を前置きに、再び宮森が話し出した。先ほどと同じように、視線は下に向けたまま、重く静かな口調で話していた。



「もう、二年ほど前の話ですけど……神居さん、自宅で首を吊って自殺したみたいなんです。仕事のストレスが原因ってことで、片付けられてしまったみたいですけど……」

「自殺！？ そいつはまた、穏やかな話じゃないな……」

「はい。俺も、後から番組の制作に関わったんで、詳しいことは知りません。ただ、それからディレクターが今の室井さんになんて変わって、番組の方向性もガラリと変わってしまったんです」

「なるほどね。まあ、感動的な奇跡体験なんてものを探し出して、それを視聴者に訴えかけるのは、確かに女性の方が向いていたのかもしれないな。正直、僕みたいな男でも、毎週のように感動のエピソードを集めて編集するなんてこと、なかなかできそうにない」

暗い面持ちの宮森を励ますつもりで言った高槻だったが、宮森はそれには答えなかった。だが、それでも少しは気が晴れたのか、今までは下にはばかり向けていた視線を、高槻の方へと向けてきた。

「ありがとうございます。ADの俺が言うのもなんですけど……正直、今のミラクルゾーンのやり方って、かなり納得できない部分もあるんですよ。これは秘密なんですけど……やらせなんて日常茶飯事ですし、扱う内容も、なんていうか安っぽい物ばかりで……。亡くなった神居さんが見たら、きっと怒るんじゃないかって思うんです」

「亡くなった神居さんが見たら、か……。確かに、君の言う通りかもしれないな」

「はい。実際、ディレクターが神居さんから室井さんに変わったところで、番組の視聴率もどんどん落ちていましたね。自分の作った番組が、変な形に歪められて……それで、怒らない人っていないと思うんですよ」

だんだんと、宮森の言葉に熱がこもってきた。先ほどまで沈んだ雰囲気が漂っていたが、今の宮森のそれはない。

「こんなこと言うと、馬鹿らしいと思われるかもしれませんが……。俺、今回の事件、起こるべくして起きたんじゃないかって思うんです」

「起こるべくして起きた？ それ、どういうことだい？」

「プロデューサーの西岡さんが亡くなったの、やっぱり俺も、事故だとは思えません。もし、この世に怨念みたいなものがあるなら、西岡さんが亡くなったのは、神居さんの祟りみたいなもんじゃなかった……。亡くなった神居さんが怒って、俺たちを含めた番組関係者を、一人ずつ殺そうとしているんじゃないかって……。そう、思うんです」

「神居さんの祟り、か……。でも、現状では、まだ何とも言えないんだろう？ それに、今になって、その神居さんが君たちを祟るっていうのも、なんだか急な話のような気がするけど……」

「確かに、そうかもしれませぬね。ただ……今回は、ちょっと俺たちもやり過ぎたんだと思います。なにしろ、生放送で流す幽霊屋敷の映像を、大がかりなやらせを仕込んで作りましたからね。そうだった、今までの中でも随分と罰当りな演出をたくさんやったから……神居さんも、堪忍袋の緒が切れたのかもしれない」

事件はあくまで、神居結衣の祟りによるものだ。宮森の言葉から察するに、彼は完全にそう思いこんでしまっているようだった。

心霊番組で やらせ が行われることなど、別に珍しいことではない。視聴者の側も、その辺りは暗黙の了解として、番組を見ている部分がある。

だが、宮森の話では、今回のミラクルゾーンの取材をする際に、随分と罰当りなことをしたようだった。その結果、今までは状況を静観していた神居結衣の霊が、怒って罰を下そうと動き出したと言えなくもない。

結局、プロデューサーの死の原因はなんなのか。それは高槻にもわからずじまいである。ただ、事件の裏に神居結衣の怨念が潜んでいるというのであれば、彼女の祟りによる線も否定はできない。

自分でも、およそ馬鹿馬鹿しい考えであると高槻は思った。どうも、あの犬崎紅に関わってから、お化けや幽霊といった類の存在を、疑うことさえ忘れてしまっていたようだ。霊能力者でもないのに霊の話信じ、果てはそういった類の話に耳を傾けてしまう。一昔前の自分では、およそ考えられなかったことだと高槻は思った。

「すみません。いきなり捕まえて、変なこと話しちゃって。今日のことは、忘れてください」

先ほどから聞き役に徹していた高槻に、宮森が思い出したようにして謝った。いきなり妙な話をして、頭のおかしな人間と思われたら困る。そんな考えが見え隠れしているようだった。

「いや、別に構わないよ。僕も信心深い方じゃないけど、君の言っている話が完全に嘘だとも思っていない。幸い、知り合いにそういった話に詳しい人もいるし……ちよっと、話をしてみるよ」

「ほ、本当ですか！　ありがとうございます！　なんだったら、俺の連絡先も教えておくんで……何かあったら、連絡してください……！」

地獄に仏の姿を見た。そう言わんばかりの表情で、宮森は高槻の手を握ってきた。その、あまりの豹変ぶりに、高槻は驚きを隠せない様子のまま、独り言葉を失っていた。

プロデューサーの変死事件は、果たして宮森の言うように、神居結衣の祟りによるものなのか。その真偽まで高槻にはわからなかったが、新たに解決の糸口となる可能性が開けたのは大きかった。

く 六ノ刻 零系 く

ビルとビルの谷間。大都會の中心に、まるでそこだけ切り取られたかのようにして、その喫茶店は存在していた。

間接照明の多い店内は、昼間でもどこことなく薄暗い。増してや、これが夜ともなれば、少しばかり目が慣れないと足下さえ見るのに苦勞する。

店の奥に置かれているのは、あれは古いレコードプレイヤーだろうか。昼間は昔風のジャズ喫茶として経営しているようだが、さすがに夜では音楽も流していない。ただ、店の中を行き交う店員の足音だけが、やけに鋭く響いている。

店の中でも特に奥の方に位置する席に、犬崎紅は一人の男と並んで座っていた。壁側の、洗面所の近くにありそうな薄暗い席。他人に話を聞かれる心配は、ほとんどないような場所だった。

男の年齢は、既に四十歳に差し掛かろうとしているといったところだろうか。初老というには程遠いが、それでも顔にはところどころ、若者にはない皺が刻まれているのが見てとれる。

「さて……。とりあえず、何から話したものかな……」

グラスの中身を一口だけ飲んで、男が紅に言った。氷とグラスがぶつかる音がして、水面が軽く揺れた。

「そつだな……。まずは、そっちの正体と目的を訊かせてもらおうか」

相手の姿を横目に、紅がぶっきらぼうに答える。未だ相手と顔を合わせることさえしないで、赤い瞳から刺すような視線だけを向けている。

あの、路地裏で感じていた妙な殺気。それは他でもない、この男のものだった。尾行がばれて紅の前に姿を晒したときも、その隙の無さが顕在だったことは記憶に新しい。

この男は、いったい何者か。なぜ、自分の後をつけ、更にはこんな喫茶店まで案内したのか。その理由を聞くまでは、紅も油断はできないと思っていた。

「生憎だが、回りくどい自己紹介は苦手なんだな。こいつを見れば、俺がどんな人間だか、お前にも一目瞭然だろう」

スーツの内側に手を挿し入れて、男がなにやら手帳のようなものを取り出した。カウンターの上を滑らせるようにして、男はそれを紅の前に差し出す。

「これは……」

手帳を前にした紅の目が、一瞬だけ大きく開かれた。彼の目の前にあったもの。それは他でもない、本物の警察手帳に他ならなかった。

正面に葵の紋を備え付けられた、正真正銘の警察手帳。だが、単に警察の人間であるというだけならば、紅もそこまで驚きはしない。以前、火乃澤町で様々な怪事件を解決してきた際にも、紅は警察の人間と接触したことが何度かある。

問題なのは、男の差し出した警察手帳が、現行の警察官が用いるものとは異なっていたということだ。地方の警察署ではおるか、警視庁に務める警察官でさえ使わない、黒い旧式の警察手帳。それが意味するものがなんなのか、紅とてまったく知らないわけではなかった。

「なるほど。あんたは公安の人間ってわけか……」

公安警察。警備警察の公安・外事部門を担当する団体で、極右や極左、果ては外国の諜報機関やテロ集団に対してまで捜査、情報収集を行うことがある。主に、国家の治安や体制を脅かす敵と戦う、極めて特殊な位置づけの警察官である。

要するに、日本におけるスパイのような組織ということだ。その活動の特殊性から一般の警察とは情報共有をせず、極秘に内偵などを行ったりすることが多い。故に、スパイという表現もあながち間違ではない。もっとも、そういった諸々の行動の結果、地元警察や一部の人権擁護機関などと、深刻な対立をすることも少なくはないのだが。

そんな公安警察官が、いったい自分に何の用だ。訝しげに思いながらも、紅は手帳を男に突き返し、初めて彼の方へと顔を向けた。

改めて見ると、男の顔が随分と戦い慣れしているそれだということに気がついた。紅の知る限り、警察官にこのような顔をした人間の姿を見た例はない。しかし、自衛隊や機動隊ともまた違うようで、一種、独特な近寄りがたさを醸し出している。

傭兵。男の見た目を一言で言い表すならば、まさにその言葉が似

合っていた。向こう側の世界の住人を相手にし、時に人知を越えた怪物と戦ってきた紅でさえ、目の前の男を相手にして勝てる自信はない。少なくとも、純粋な肉弾戦においては、男の方が確実に上だろう。

いったい、どれだけの修羅場を掻い潜れば、人間はこのような顔ができるようになるというのか。公安警察などキャリアのエリートがなるものだとばかり思っていたが、どうやら認識を改めねばならないようだ。

「それで……。いったい、公安の人間が、俺に何の用だ？ 俺は別に、国家の機密に関するような事件を起こした記憶はないんだがな」

できるだけ自分の感情を悟られないようにしつつ、紅は男に向かって言い放った。油断したら、その瞬間に相手のペースに飲まれる。そんな気がしたからだ。

「国家の機密か……。だが、お前にその気がなくとも、お前は既に国の機密に触れているとも言えるんだよ。それは、お前たちのような霊能力者の類が裏の世界……向こう側の世界での連中を相手に仕事を始めたときから、必然的にな……」

低く、押し殺すような声で、男は紅に言った。その言葉を聞いた紅の顔が、一瞬だけ震えて強張った。

向こう側の世界。霊だの神だのといった存在と関わる者たちの間で使われる、常世の総称でもある言葉。それを知っているということとは、この男もまた霊的な力を持った人間なのか。だとすれば、自分に接触を試みて来たのは、やはりあのプロデューサー変死事件に関することだというのだろうか。



「俺も、長い話するのは好きじゃない。だから、単刀直入に言おう」

男の目が、紅をじろりと睨む。返答次第では、相手の口を封じることにも厭わない。口では語っていないが、全身から放つ気迫のようなもので、男は紅に告げていた。

「今、お前が関わっているテレビ局の事件。その真相を、決して公にしないでもらいたい」

「いきなりな話だな。それに、公にするなどとはどういう意味だ？」

「そのままの意味だ。お前が事件の真相を探るのは勝手だが、こちらにも事情というものがある。事件の裏に霊だの呪いだの祟りだの……そういった話があったことを、世間一般に、大々的に広めて欲しくはない。それだけだ」

「どうも、何かを勘違いしているようだな。俺は別に、オカルト好きな三流雑誌の記者じゃない。霊感商法まがいの手段で金を稼ごうとしているやつを潰そうってんなら、他を当たるんだな」

グラスの中にある水を少しだけ口に含んだ後、紅は男から顔を背けた。

公安警察が動いている以上、今回の事件に関しては、何か物凄く大きな裏があるのではないかと思っていた。しかし、目の前の男は紅を逮捕するわけでもなく、捜査に協力をして欲しいと頼んできたわけでもない。こちらの仕事の邪魔をされるかとも思ったが、どうやらそれも違うようだった。

いたい、この男の真の目的はなんなのだろう。さすがの紅も、今回ばかりは相手の思惑が読めずにいた。それは一重に、男の隙の無い態度からくる部分も大きい。

店内を再び静寂が支配し、店員が床を歩く足音だけが聞こえてくる。他にも数人の客がいるにはいたが、その誰もが紅たちには興味を示さず、自分だけの時間を過ごしている。

「ところで……お前は、公安四課についての噂を知っているか？」

ほつつ、と溜息をついて、男が唐突に切り出した。

「公安警察にも色々とおつてな。一課は極左、二課は労働組合、三課は極右といった感じで、捜査の対象が決まっている」

「興味はないな。それは、俺が知る必要のある話なのか？」

「そうだな。ここまでは、まあお前にも関係はないだろう。問題なのは、四課の詳細だ」

「詳細か……。だが、そんなことを、俺に話して問題はないのか？ 公安警察つてのは、秘密裏に捜査をすることで有名だったと思うが？」

「問題ない。少なくとも、俺が今からお前に話すことは、傍からすれば、単なる都市伝説のような話に過ぎん」

紅の疑問にも何ら動揺を見せず、男ははっきりと言い切った。

通常、公安警察の捜査内容は、世間一般には極秘とされている。それは民間人だけでなく、同じく犯罪を取り締まる立場の、警察官相手でも同様だ。警視庁内部でも公安部は特殊な位置づけにあり、現場で捜査する警察官とも情報を共有することは極めて稀だ。

そんな公安警察が、自分から仕事の詳細を明かす。ますます男の考えが読めなくなる紅だったが、今度は口を挟まずに黙っておいた。

「公安四課の仕事は、公には資料管理とされている。第一系が統計、第二系が資料整理という具合にな。だが、その他に、四課には隠されたもう一つの顔がある」

「隠された顔だと？」

「ああ、そうだ。公安四課第零系、通称火消しの零系。幽霊だの祟りだの……そういった類の話が絡んだ事件の後始末が、俺たちの主な仕事さ」

「なるほど、火消しか。ならば、例のプロデューサー変死事件に関して情報規制をかけたのも、そちらの差し金ということか？」

「察しがいいな。さすがは、その歳で退魔行を生業にしているだけはある」

愛想笑いさえも見せず、しかし相手のことを認めるような態度。男の言葉が本心から述べられたことくらいは、不器用な紅でも十分にわかる。

「それで……お前達は、なぜ俺に、例の事件を公にしないよう頼みに来た？ 見たところ、随分と向こう側の世界について詳しいよう

だが……自分たちが主導になって、事件を解決するつもりはないのか？」

「それが出来れば苦労はしない。現に、こちらも人員を配備した上で、独自に捜査を行っている。あのテレビ局の中で、なにやら妙な連中が動き回っていると報告があつて、お前の後ろをつけることができたようなものだしな」

ポケットから煙草とライターを出し、男は素早くそれに火をつけて口に咥えた。自分の苛立ちを相手に悟らせないよう、わざと煙草に手を出したようだった。

「俺たちの管轄は、残念なことに資料管理が主な仕事だ。一応、霊的な存在が絡んだと思われる事件に対しての捜査権も持っているが、犯人逮捕も含め、最後は現実的なところで話をつけなくてはならない。俺たちの仕事はあくまで情報管理であつて、犯人逮捕は一般の警察にでも任せておけばいい」

「情報管理か……。まあ、確かに、そちらの言うことも理解はできる」

自分の方に向かって流れて来た煙草の煙を、紅はわざとらしく吹き飛ばした。それを見た男が、これまた無言で煙草の火を灰皿に押し付けて消した。喫煙はするが、嫌煙権を主張する相手に対し、無理強いはいしない。煙草を一種のステータスとしか考えられない、一部の男たちとは違っていた。

公安四課。火消しの第零系。そして情報管理。

先ほど、男の口から語られた言葉を、紅はゆっくりと自分の頭の

中で反芻してゆく。

男の話が正しければ、彼の仕事は警察内部における心霊事件の取締りということになる。ただし、捜査はあくまで現実的な路線で進め、本業はもっぱら心霊事件の後始末。即ち、紅を始めとした退魔行を行う者たちが事件を解決した後に、その後処理をするということだ。

もつとも、この日本における全ての心霊事件が、紅のような退魔師によって解決されているわけではない。中には不幸にも向こう側の世界の住人に弄ばれ、その魂を闇に食われてしまった者もいるだろう。

そんなとき、目の前の男は、果たしてどうしているのだろうか。

答えは、先ほどの問答の中で、既に男がほのめかしていた。

資料管理と情報操作。それらの仕事を本業とする者が、わざわざ高名な退魔師を呼んで事件を解決するとは思えない。恐らくは、犠牲者が全て出揃ったところで、適当な理由をつけて迷宮入りにしてしまうのがオチなのだろう。もしくは、事件を捜査していった結果、その情報を秘匿とする必要が生じた場合にのみ、初めて行動を開始するといったところか。

（火消しの公安か……。確かに、この仕事をするようになってから、そういった連中がいるという噂くらいは聞いていたな……）

警察が、己の意思で事件を迷宮入りにする。にわかには信じ難いことであるが、今の日本の現状を考えると仕方がない。そう、紅には思えていた。

公安警察が情報管理をするのは、一重に霊の存在を国家が認めるわけにはいかないという理由からだろう。紅たちにとっては当たり前前の心靈現象も、一般の市民からすれば想像の世界でしか起こり得ないオカルトの産物だ。そんな話を大々的に認めてしまつては、国の威厳にも関わつてしまふ。

しかし、その一方で、警察が秘密裏に事件を解決するわけにもいかない。そもそも、警察組織は霊能力者の集まりではないため、幽霊や妖怪のような連中と戦うには力不足だ。

仮に、警察が専属の退魔師を募集すれば、それはそれで問題になる。公に人を集めるわけにもいかず、非公式に契約を結んだとしても、安定的に人員が補充できるわけではない。霊場と呼ばれるような場所を全て封鎖するわけにもいかないだろうし、国が率先して霊能力者を養成するわけにもいかない。

国家としては霊の存在を秘匿にしたいが、それと戦うための人材を集めたり、霊的な存在から必要以上に一般市民を遠ざけたりすることは、返つて己に対する疑念を増幅させるだけになってしまう。心靈事件に関わつた人間を拘束、管理しても、あまりにやり過ぎれば、これもまた逆効果だ。

認めたくないが故に隠す。しかし、現実を受け入れなければならぬ。その一方で、自分たちの力だけでは事件を解決できない。だから、後ろめたいとわかつていながらも、情報操作という形で、霊能力者が事件を解決した際の後始末をする以外に道がない。

結局、最良な方法は、霊的な存在が実在するという証拠を隠滅してしまふということなのだろう。証拠さえ消えてしまえば、後は関係者が何を言おうと、単なる夢物語で済ませられる。巷に氾濫して

いる下らない怪談や都市伝説、作り物の心霊ビデオと同じように、ちよつと怖いお伽話程度に思われて、人々の記憶の中で風化してゆく。

正に、国家という巨大な組織が抱えるジレンマだと紅は思った。そういう意味では、自分のように全てを認めて生きている人間の方が、まだ少しだけ気が楽なのかもしれない。

以前、自分も幾度か霊的な存在と大っぴらに戦ったことがあったが、それらの事件が警察内部で大々的に扱われたという話は聞いたことがない。知り合いの警察官、火乃澤署の工藤辺りが上手い具合に報告書をまとめた結果なのかもしれないが、それ以外にも、見えない力が働いていた可能性もある。自分の知らない場所で、上に提出された記録の中から、特に怪奇で説明不能な現象を連想させる内容を、意図して削って保管させていた可能性は十分に考えられる。

「そちらの言いたいことは、俺にもわかった。だが、心配は無用だ。俺は別に、今回の事件を解決して、自分の名前を売ろうなんて考えてはいない。ただ、依頼を受けたからには最後まで仕事をさせてもらうし、場合によっては激しい戦いになることも已むを得ない」

「それは、こちらも承知している。俺としても、お前が必要以上に霊的な存在を人目に触れさせることをしなければ、何も問題視はないさ。むしろ、呪いだの幽霊だのと言った話を先に片付けてくれた方が、こちらの手間が省けるからな」

「本当に、そう思っているのか？ さっきから聞いていたが、そこらも向こう側の世界の話には、かなり詳しいようだ……。あんた達の仲間に、俺のような能力を持ったやつはいないのか？」

「残念ながら、該当する者は一部の者しかないな。しかも、運悪く別件で出払っていて、今は東京にいない」

男の視線が、火の消えた煙草の転がっている灰皿に向かって落ちた。

「先ほども言ったが、俺たちは元々、心霊事件の隠蔽と資料の管理が主な仕事だ。場合によっては霊能力者に仕事を依頼することもあるが、それだって多くはない。互いに不干渉でありながら、利害の一致によつては共闘する。それだけの関係さ」

「利害の一致、か……。だとしたら、当面は対立する必要もなさそうだな。ならば、そちらはそちらで、思うように捜査を進めればいい」

「悪いが、そうさせてもらう。ただ……最後に、一つだけ教えて欲しい」

今までとは打って変わって、男が急に下手に出た。自分から他人に物を頼むようには見えなかったので、これには紅も面食らった。

「今回の事件、霊能力者として、お前はどうか考えている？ やはり、呪いや祟りの線が濃厚なのか？」

「まだ、はっきりしたことは言えない。ただ、あのテレビ局に、何か妙な物があるということはなさそうだ。例の廃屋の映像は……こちらにも、俺が見た限りでは、特に危険なものは映っていないかった。目に見えない幽霊の類は映り込んでいたが、既に霊害封じのようなものを施された後だった」



「なるほど。そちらもまだ、事件の真相には迫っていないというわけか……」

「残念ながら、今のところはな。期待に添えなくて悪かったな」

「いや、構わん。何の能力もないこちらとしては、行動が後手になるのが常だからな。今回の件、例のプロデューサーの変死事件を隠蔽するだけで、正直精一杯だった部分もある。田舎の小さな街で起きた事件ならいざ知らず、まさか、生放送の現場であんなことが起きるとは……」

それ以上は何も語らず、男は再び押し黙った。もともと、彼の言わんとしていることがわかるだけに、紅もあえて追及はしなかった。

公安四課、第零系の仕事は、心霊事件の存在が公になるのを防ぐこと。彼らの立場からすれば、プロデューサーの西岡が変死した事件は、是が非でも事故死という扱いにせねばならなかったのだろう。

仮に、あの事件が生放送ではなく、収録された映像を流した際に起きたとしたら、ここまで問題は大きくならなかったはずだ。本放送の際にカットすることもできるし、西岡の死を単なる事故死として片付けても騒ぎにはならない。単に、ネット上で噂される都市伝説の類として、多くの情報の下に埋没してゆくだけだ。

そもそも、奇跡空間ミラクルゾーンのような番組の存在を容認しているのも、必要悪という考えがあつてのものである。視聴者も、心霊番組で放送されることが全て真実とは思っていないため、ああいった番組がやらせで怖い話を盛り上げてくれることは、返って都合がいい。

嘘を隠すための場所は、二つの真実の狭間である。ならば、その反対に、真実を隠す場所は二つの嘘の狭間ということになる。

作り物の心霊話や心霊映像が適度に流通している間は、本物の心霊事件が起こっても、さしたるパニックを起こさないで済む。「あの手の話は、どれもよくできた作り物に過ぎない」という印象を一般人に与え続けることで、世間一般に霊の存在を深く認めさせずに済むのだ。

だが、今回ばかりは、そんな番組の存在そのものが裏目に出た。なにしろ、生放送の本番中に、プロデューサーが関係者の目の前で変死したのだ。テレビ局側に圧力をかけて緘口令を強いても、当然のことながら、情報は漏れる。

篠原まゆのような関係者が、事件の扱いに疑念を持つこともあるだろう。また、御鶴木魁のような、表の世界にしながら本物の力を持った存在が、妙なやる気を出して積極的に首を突っ込んで来るかもしれない。

心霊事件の存在を認めたくない者たちからすれば、今回の事件はまさに冷水を浴びせられたようなものだったに違いない。今までは干渉の立場を保っていた公安が、ここに来て急に紅と接触したことも気にかかる。それだけ、公安の側も追い詰められているということなのだろうか。

「とりあえず、今日は互いにここまでしか話せないようだな。勘定は俺の方で支払っておくから……次に何かあったときは、こちらに連絡して欲しい」

男がスツと席を立ち、紅の前に一枚の名刺を差し出した。それを

受け取った紅は、名刺に書かれた文字を見て、一瞬だけ怪訝そうな顔をした。

警視庁公安部第四課 死霊管理室所属 香取雄作かとりゆうさく

男の手渡した、名刺に書かれていた言葉である。その、およそ公安警察にあるまじき部署の名前に、紅は苦笑を堪えることができなかった。

「なるほど。資料と死霊をかけているわけか。あんた達の上の人間も、少しは洒落のわかるやつがいるらしいな」

「まあ、そういうことだ。もっとも、俺はその名前も、言い得て妙だと思っているがな」

「確かに、一理あるな。しかし……本当に、構わないのか？ 公安警察ってやつは、もっと疑り深い連中だと思っていたが……」

「普通はな。だが、何度も言っているように、俺たちの仕事は心霊事件の火消しだ。そのためには、今は手段を選んでいる場合ではない。一刻も早く事件を解決しなければ、騒ぎが大きくなる一方だ」

「ならば、俺以外の霊能力者に依頼をすればいい。警察官の中にはいなくても、お抱えの霊能力者ぐらいはいるだろう？」

「残念ながら、それも難しいな。不干渉の立場をとり続けて来た俺たちにとっては、霊能力者の類と頻繁に会うことも問題だ。それこそ、相手の顔が世間に売れているようならば、尚更なんだな」

最後の方は、少し言葉を濁すような感じになった。それが、香取たちの抱えるジレンマの一つであるということに、紅も直ぐに気がついた。

表向き、心霊事件の存在そのものを否定しているはずの警察が、白昼堂々と霊能力者に会う。それも、下っ端の捜査員ならいざ知らず、それなりの地位がある者が。

そんなことをすれば、それは即ち、警察が心霊事件の存在を認めていると言っているようなものだ。心霊事件を一刻も早く解決したのは山々だが、それでも霊能力者との接触は、必要最低限に絞らねばならない。それに、秘密主義を貫き通すためには、信頼できる霊能力者がいなければ意味がない。

信じるが故に情報を隠し、しかし、信じるが故に表向きは存在を否定している者達と会合する。そのようなジレンマを抱えている人間が、あえて自分と接触を試みた。その事実が、相手の窮状をそのまま表しているようで、紅も香取には何も言えなかった。

このまま、香取の話全てを信じるわけにはいかない。状況は向こうも同じなのだろうが、今は互いに手持ちのカードを見せながら、相手の顔色を探っているような状況だ。それでも、互いに反目したまま事件の捜査に当たるよりは、個々に動きつつも情報を交換し合う必要があるだろう。

利害の一致。先ほど、香取が言っていた言葉が頭をよぎる。

目の前の相手は敵ではない。が、別に味方というわけでもない。互いに職務として果たさねばならぬことがあり、その優先順位を保

ちつつ、相手の力を利用し合うような関係だ。その関係が崩れたとき、香取は紅の敵として、容赦なく目の前に立ち塞がることになるのかもしれない。

できれば、そんな状況は招きたくない。そう思いながら、紅は香取から受け取った名刺を懐にしまった。無論、紅としても、ただで相手の要求を飲んだつもりはない。

火消しの零系が心霊事件の隠蔽を行っているのであれば、その中に闇の死揮者が絡んだ事件もあるかもしれない。ならば、闇雲に呪いの話を追いかけるよりも、香取のような人間と接触し、情報を得た方が話は早い。

もつとも、向こう側の目的が心霊事件に関する資料の管理である以上、そう簡単に情報は引き出せないこともわかっていた。ただ、このまま霧の中を彷徨うように死揮者を探すよりは、香取のような男とのパイプも、これからは大切にしていかなければならないと感じていた。

喫茶店の壁際に置かれた大時計が、夜の十時の鐘を告げた。そろそろ、店自体も閉店する。そう急ぐ必要はなかったが、会計を済ませる香取を横に、紅は一足先に店の外へと出て行った。

九条照瑠が目を覚めたのは、時計の針が朝の九時を回ったところだった。

眠たい目を擦りながら、照瑠は大きな伸びをして辺りを見回す。朝の陽射しが射し込む部屋の中には所狭しと布団や毛布が散らかつて、ソファやクッションまで寝床代わりに使われている。

（うう……。昨日はちよつと、夜更かしが過ぎたかもね……）

腰まで届きそうなほどに長い髪を手ぐしで掻き分けながら、照瑠はもそもそと毛布の中から這いずり出た。

周りを見ると、他の人間は未だまどろみの中にいるようだった。ベッドの上では雪乃が軽い寝息を立てており、その直ぐ隣に敷かれた布団の中では、亜衣が大きな字になって広がっている。

篠原まゆは、ソファの上で丸くなっている。彼女は実家に帰ることもできたのだが、なにしろ夜も遅かった。それに、独りでいるのは不安とのことで、なんだかんだで雪乃の家に泊まっていた。

まゆの年齢は、照瑠たちよりも一つ上だ。しかし、こうして見ると、先輩としての威厳のようなものは、あまりない。両手で毛布をつかみ、小動物のように丸まっているを見ると、自分の高校の同級生として見ても違和感がない。

周りにいる友人達を起こさないように気をつけながら、照瑠はそつと枕元に置いておいた携帯電話へと手を伸ばした。

着信、メール、共になし。見慣れた壁紙だけが表示され、照瑠はがつくりと肩を落とす。

結局、昨日の晩から今朝にかけて、紅からは何の連絡もなかった。考えがまとまらなかったのかもしれないが、それにしても、少しは

かり冷たいと思ってしまう。今、どこに泊まっていて、何をしているのか。その程度なら、教えてくれてもいいはずなのに。

「なんか……信用されてないのかな、私……」

ふつと、そんな言葉が口から零れた。

別に、紅が不器用なのは、今に始まったことではない。便りが無いのは無事な証拠。紅の場合、それを地で行っているような節があるのは否めない。

ただ、それでも、やはりどこか寂しく思ってしまうのは気のせい  
か。

自分の力を過信しているわけではないが、照瑠自身、随分と癒し手としては力をつけてきた。父である穂高の話によれば、照瑠の霊能力者としての成長は、極めて早く優れたものだという。親馬鹿を抜きにしても、それは遠からず当たっていると照瑠は思った。

普通、何らかの霊的な力を身につける場合、数年から数十年に渡って、厳しい修業を積みねばならないという話の方が多い。確かに自分は優れた才能を持って生まれて来たのかもしれないが、一年も経たない内に、癒し手としての基本的な力を習得しつつあるというのは異常だ。

自分の両手を広げてみながら、照瑠は自らの中に流れている血の力を、改めて恐ろしく感じてしまった。

今は亡き、母と祖母の二人の癒し手。その二人とて、こうまで早く力をつけたという話は聞いたことがない。今の自分は生前の二人

には及ばないのだろうが、それでも、二人が生きていたなら、今の照瑠を見てなんと云っただろうか。

生まれ持つて授かった、天性の才能。その力を解放してゆくことは、それは即ち、自分が犬崎紅のような存在に近づいてゆくということの意味している。彼のような外法を使う力は持たないが、強い癒しの力を持った霊能力者として、自分は確実に浮世から離れた存在になりつつある。

初めは、自分から望んだこと。人を癒すための力を手に入れ、向こう側の世界の住人とも関われる力を持てば、それで多くの人を助けることができる。紅の世話になりっぱなしということもないだろうし、今までは救えなかったような人でさえ、自分の力で助けることができる。そう、思っていた。

だが、実際に力がついてくると、照瑠は自信と同時に少しばかりの不安を覚えていることに気がついた。

そもそも、霊だの呪いだの祟りだのと言った話は、普通の人間からすれば、眉唾ものの話なのだ。そんな連中に通じる力を持ち、また自分自身がそういった類の存在を強く信じることで、今までの日常が壊れてしまいそうで怖かった。

癒し手として、自分が真の力に目覚めたとき、自分は本当に今までの日常を失わずに済むのだろうか。紅のように、自分の生き方や在り方に疑問を持たず、自分の存在を強く保ち続けることができるのだろうか。

およそ、馬鹿馬鹿しい、下らない不安だと照瑠は思った。照瑠の知る限り、友人達は、他人を偏見の眼差しで見て嫌悪するような人



間ではない。嶋本亜衣などはその典型だし、他の友人達も、なんだからだで変わり者が多い。

（結局……私は犬崎君に、一緒にいて欲しかったただけなのかもね……）

今の自分が、紅に対して求めていること。それが彼に対する甘えだと気づき、照瑠は自分の気持ちを堪え、ぐっと中に飲み込んだ。

自分の日常が少しずつ非日常に侵蝕されてゆく不安。それを、常に非日常の中に生きている人間と一緒にいることで、自分は少しでも和らげようとしていた。紅と一緒にいることで、そうした不安から逃げ出して、知らない間に彼の存在に依存しようとしている自分がいた。

人として、それに、何よりも紅の友人として、照瑠は今の自分の気持ちに恥ずかしく思えて仕方がなかった。

確かに、紅から連絡を貰えなかったのは不安だし、彼の安否も気にかかる。それに、単なる依存心だけでなく、彼に対しては、もっと複雑な感情を抱いているのも事実である。

しかし、それでも自分が紅に対し、一方的に甘えてよいという理由にはならないはずだ。彼は彼で、色々なものを抱えて生きているであろうに、一瞬でも付抜けた考えに身を寄せようとしたことが後ろめたい。

（すっかりしろ、九条照瑠！ 全ては、自分が望んだことじゃない！！）

携帯電話を閉じ、照瑠は自分の頬を軽く叩いて気合を入れ直した。少しばかり痺れた頬に、朝の冷たい空気が沁みる。

「さて……。それじゃあ、そろそろ皆を起こさないといけないわね。いくら日曜日でも、そういつまでも寝ていられるほど、私達も暇じゃないし……」

未だ足下で口を広げて夢を見ている亜衣の顔を覗きこみ、照瑠は誰に聞かせるともなく呟いた。

犬崎紅が、自分のことをどう思っているか。それは、今は考えないことにしよう。紅が何を考えていようと、自分自身が己を強く持たなければ、それが紅の迷惑へと繋がってしまう。

自分の力で、困っている人間を助けること。向こう側の世界の住人と戦う紅のために、少しでも力になれるようにすること。それを叶えるために、自分は巫女の修業を申し出て、ここまで力をつけて来たものではなかったか。

初心、忘れるべからず。ありきたりの言葉だが、照瑠の頭の中にふとそんな言葉が浮かんできた。使い方を少しばかり誤っているような気もしたが、今の照瑠にとって、それはほんの些細な問題にしかならなかった。

葵璃凍呼が宮森良太から連絡を受けたのは、日も少し昇り、昼に近付いた時刻だった。

宮森のことは、凍呼も仕事の関係でよく知っている。例の、奇跡空間ミラクルゾーンの撮影スタッフの一人で、ADとして様々な雑用をこなしていたからだ。休憩中に話をするのも珍しくなく、気さくで話し易い人間という印象を抱いていた。

「いや、ごめんね、凍呼ちゃん。なんか、急に呼び出しちゃって……」

くたびれたワイシャツを少しばかりズボンからはみ出させながら、宮森が頭をかいて現れた。

「大丈夫ですよ。私も、今日はそこまで忙しいスケジュールじゃありませんから」

「そうかい。そう言ってくれと、俺も助かるよ」

そう言いながら、宮森は、はみ出たシャツを乱暴にズボンの中にねじ込んだ。その様子を、凍呼は少しばかり苦笑しながら見つめている。

凍呼が宮森に呼び出された理由。それは他でもない、ディレクターの室井に関することだった。

あの日、例のプロデューサー変死事件が起きてから、室井とは連絡が取れていない。それは凍呼だけでなく宮森も同じようで、彼もまた、あれから室井の顔さえ見ていなかった。

プロデューサーの西岡が亡くなってしまった以上、番組スタッフに指示を出せるのは室井しかない。ディレクターとは、即ち番組

制作における現場監督のようなもの。室井の指示がない間は、宮森たちは自分の好き勝手に動くわけにはいかないのだ。

今後、番組の行く末がどうなるのか。せめて、それだけでも聞いておきたい。継続するにしろ、打ち切りになるにしろ、そろそろ次の話をしてくれなければ困ってしまう。

「それにしても……室井さん、大丈夫なんでしょうか……」

室井の自宅であるマンションに向かいながら、凍呼はぼつりと呟いた。

今後、自分の仕事がどうなるのか。凍呼にしてみても、それは気になるところである。だが、それだけであれば、別に自分が出向く必要などない。

そもそも、心霊番組のレギュラーなど、凍呼は好きでやっているわけでもない。この程度の要件であれば、彼女の事務所のマネージャーが、室井と話をすれば済む話だ。

今回、凍呼が宮森の呼び出しに応じた理由。それは一重に、室井の身を案じてのものだった。もともと、室井に対して何か特別な感情があるわけではなく、どちらかと言えば、自分の中にある妙な不安を払拭したいという気持ちが強かった。

西岡の変死の真相は、あの御鶴木魁でさえわかってはいない。局内には緘口令のようなものが敷かれているようだし、マネージャーに頼んだところで、真相は教えてもらえないに違いない。こうなると、後はディレクターの室井から、知っている限りの話を聞く他になくなってしまう。

テレビ局や事務所は、凍呼を不安にさせないという配慮をしたつもりなのかもしれない。が、それはそれで不安を煽る。既に、心霊事件の当事者となっている凍呼にとっては、己の目で見て、己の耳で聞かなければ、西岡の死について納得のゆく答えを出せそうになかった。

「しっかしなあ……。この大変なときに、室井さん、なにやってんだろう」

「そう、ばやかないで下さいよ。室井さんだって、色々大変なんだと思います」

「でもさ。せめて、連絡くらいくれたっていいじゃないか。あんな事件があつて、俺たちだって不安になつてゐるって言うのに……。この数日間、音信普通つてのは、さすがに酷いと思うけど?」

「そうですね。でも、室井さん、あの日も風邪ひいていたみたいですし……。無理を言つてもしかたないんじゃないですかあ?」

収録の前日、室井と携帯電話で話をしたときのことを、凍呼は思い出していた。

電話越しの室井は、露骨に凍呼の体調を心配する素振りを見せていた。もっとも、本心から心配しているというよりは、どちらかと言えば妙な下心がありそうな口調だった印象が強い。

室井が女好きなこと。それは、凍子も今までの付き合いから知っている。今回の訪問も、室井がディレクターという立場でなければ、宮森が同伴してくれなければ、特に好き好んで行きたいとは思えな

かった。こちらにも事情があるとはいえ、さすがに一人で大人の男の暮らしているマンションを訪問するのは怖い。

ただ、それにも増して印象に残っているのが、電話越しに聞こえてきた湿った咳だ。室井は風邪だといっていたが、あんな切れの悪い咳は、凍子もあまり耳にしたことはない。少なくとも、自分が風邪をひいたときに比べても、室井の体調が芳しくないことくらいは想像がついた。

待ち合わせの場所から数分ほど歩いたところで、凍呼と宮森は室井の住んでいるマンションに到着した。

室井の住んでいるのはオートロック式のマンションであり、暗証番号を入力して自動ドアを解錠するタイプのものだ。その他に、カードキーなどはないようだったが、番号を知らねば解錠できないことに変わりはない。

「あれ……？ 宮森さん、室井さんのマンションの暗証番号、知ってるんですかあ？」

手慣れた様子で暗証番号を入力した宮森を見て、凍呼が怪訝そうな顔をしながら尋ねた。

「うん、まあね。前に、ちょっと仕事の関係で、何度か尋ねたことがあるから」

「へえ……。宮森さんも、大変なんですね」

「そうでもないよ。仕事とは言っても、半分は飲み会みたいなもんだっただしね。後は、俺の持つてるエロDVD貸して欲しいなんて、

個人的な要求の方がメインだったこともあるし……」

「なっ……！ さ、最っ低……」

自分の前で躊躇いもなく下ネタを語る宮森に、凍呼は赤面しながら言葉を切った。

別に、宮森が最低なわけではない。男のたしなみとして、エロビデオの一本くらい、家に置いてあっても普通のこと。そのくらいは、凍呼とて理解していることだ。

問題なのは、仕事にかこつけてADを呼び出し、公然とエロDVDを借り受ける室井の態度である。職場の上司という立場を利用して、わざわざそんな下らないことで宮森を呼び出していたのだ。半分は仕事の話もしていたのだろうが、それでも凍呼は室井に対する嫌悪感を拭いされない。そして、行き場のない彼女の感情は、どうしても目の前にいる宮森の方に向けられてしまう。

なんだか妙に気まずい空気になって、二人は無言のままエレベーターに乗り込んだ。別に、自分は何も恥ずかしいことなどしていないのに、凍呼は自分の顔が赤くなっただまなのを、どうしても抑えきれないでいた。

エレベーターのランプが点滅し、四階に到着したことを示す。ドアが重たい音を立てて開き、二人は流れるようにして外に出た。

「こっちだよ、凍呼ちゃん。迷わないように、気をつけて」

宮森の案内で、凍呼は長く伸びたマンションの廊下を歩いて行った。この歳で迷子になるとは思っていなかったが、しばらく歩いて

いると、宮森の言わんとしていることがなんとなくわかった。

室井の住んでいるマンションは、扉の造りや廊下の造りが極めて似通っている。外付けの階段の場所も含め、どうにも似ている場所が多くて困る。別に、迷うというほどでもなかったが、知っている者が一緒にいなければ、室井の住んでいる部屋を見つけ出すのは難しそうだった。

灰色のコンクリートで覆われた廊下を歩き、二人は建物の東側に出る。突き当たりから数えて三番目の部屋の前で、宮森は足を止めてインターホンを押した。

「室井さん。俺です。A Dの、宮森です」

返事がない。ちょうど、昼食時だったことも相俟って、入れ違いに外出されてしまったのだろうか。

「室井さん。いるんだったら、返事くらいしてくださいよ。あれから連絡なくて、俺達も困ってるんですけど!!」

最後の方は、少しばかり乱暴な口調になって声を荒げた。そんなに叫んだら、室井だけでなく他の住人にも聞こえてしまうのではないか。そう思った凍呼だったが、やはり返事は何もなかった。

「おつかしいなあ……。室井さん、昼飯でも食いに出かけちゃったのか？」

訝しげな顔をして、宮森は何気なく扉の取手に手をかける。室井が留守ならば、絶対に開くはずはない。が、果たして、宮森の予想は外れ、ドアは静かに開け放たれた。



「えっ……？ ドアが……開いてるの……？」

怪訝そうな顔をして、凍呼は扉と宮森を交互に見つめた。大方、鍵がかかっているとはかり思っていたのだろう。これには宮森も驚いた様子で、しばし言葉を失って固まっていた。

「ねえ、宮森さん。室井さんって、家の鍵を閉めないような人なんですか？」

「んっ……！？ ああ、まあね。マンションがオートロックだからつてのもあるけど……自分が部屋にいるときは、鍵を閉めないことが多い人だよ。さすがに、外出するときは鍵を閉めるみたいだけど……」

「だったら、室井さんは、まだ部屋の中にいるってことですよね？  
なんで、返事がなかったんだろっ……」

不安そうに俯いて、凍呼は自分の足下に目を向けた。

宮森の話を信じるならば、室井は普段から不用心な人間だったと言える。当然、鍵がかかっていないことは、室井に限っては不自然なことではない。

では、そんな室井が、凍呼や宮森の再三の呼び出しに答えなかったのは何故だろう。携帯電話も繋がらないし、果てはインターホンの呼び出しにも出ない。普通に考えれば外出していると思いがちだが、室井の部屋の鍵は開いていた。

いったい、これはどういうことか。まさか、室井の風邪は思った

より深刻で、電話やインターホンにも出られないくらい酷いのではないか。

だとすれば、これは二人にとっても一大事である。室井に倒れられたら仕事にならないというのもあるが、自力で立てないくらい酷い風邪なら、放っておけば大事に至る場合もある。

「ねえ、宮森さん」

「ああ、わかってる。こいつは、許可を気にしている場合じゃないな」

皆まで言わずともわかる。そう、頷いて凍呼に答え、宮森は部屋の扉を勢いよく開け放った。

扉が開くと、そこには狭苦しい玄関が広がっていた。無造作に転がった靴が目に入り、奥へと続くキッチンの床には、ゴミを詰めた袋があちこちに転がっている。

一瞬、部屋に入るのが躊躇われたが、宮森が中へと踏み入ったことで、凍呼も意を決して彼に続いた。瞬間、なにやら饅えた臭いが鼻をついたが、口で息をして我慢した。

そろそろと、どこか遠慮がちになりながらも、宮森と凍呼は部屋の奥へと進んで行った。リビングに入ると、これまたあちこちに色々な物が散乱しており、室井が自堕落な生活を送っていたことが容易に想像できる。

部屋の隅に転がっている本の中に女性の裸を見つけ、凍呼は思わず顔を背けてキッチンへ戻った。ゴミ屋敷と呼ぶのは大袈裟だが、

それでも少々汚すぎる。それに、エロ本やエロビデオの類を堂々と部屋に転がしている時点で、室井の私生活がいかに節操のないものなのか、嫌でもわかって仕方がない。

いったい、自分はここで何をしているのか。ふと、そんな虚しさが湧いてきたとき、凍呼は目の前に白塗りの扉があるのに気がついた。

（あれ、この扉……）

目の前の扉は完全に閉じてはおらず、半開きのような状態になっていた。奥の部屋がリビングならば、ここは恐らく寝室か何かだろうか。

くすんだ山吹色の取手を握り、凍呼は扉をそつと開ける。もしかすると、室井は身体の具合が悪く、この部屋の中で寝ているのではないか。そう思って扉を開いた瞬間、なにやらむっとする、酷く生臭い臭いが溢れて来た。

「うつ……。な、なによ、これ……」

流しの下と言っても物足りない。腐った卵というのも違う。なにやら、物凄く濃厚で、それでいて胸やけを引き起こしそうな酷い悪臭。ちょうど、浜辺に打ち上げられて死んだ魚が、真昼の陽射しにやられて腐ったような臭いだ。

「どうしたんだい、凍呼ちゃん？」

扉の前で動けなくなっている凍呼に気づいたのだろう。宮森が、リビングから出て凍呼の開けた扉の前に立った。

瞬間、扉の隙間から漏れた酷い匂いが鼻をつき、宮森もまたハンカチで鼻を抑えて後退さる。いったい、この臭いは何だろう。いかに室井が自堕落な生活を送っていたとはいえ、この臭いはあまりにも酷過ぎる。

「あの……。宮森さん……」

「わかってるよ、言わなくても。ここ、室井さんの寝室だからな。中で、何かあったのかもしれない……」

それ以上は、宮森も何も言わなかった。寝室の中から漏れてくる悪臭の正体は何なのか。それは、宮森だけでなく、凍呼もまた薄々感づいている。ただ、それを認めてしまうのが酷く恐ろしくて、どうしても口に出せないでいた。

ハンカチで鼻先を抑えたまま、宮森が凍呼に変わって扉を開ける。途端に、今まで以上の物凄い生臭さが二人を襲い、宮森と凍呼はしばし部屋の中に入るのを躊躇った。

いったい、この部屋で何が起きた。この部屋の奥に、何が待っているというのか。

壁伝いに探るようにして、宮森は部屋の中に足を踏み入れた。凍呼も後ろに続く。宮森の背中に隠れるようにして、時折、その顔を覗かせながら、いつになく怯えた様子で部屋の中に入る。

寝室として使われている部屋は、これまた酷く散らかっていた。脱ぎ捨てられた下着が転がり、他にもいくつか衣服が散乱しているのが見てとれる。が、今の宮森と凍呼にとっては、そんな物は取る

に足りない些細な物でしかなくなっていた。

「い、嫌あああつ……！」

宮森の後ろから、凍呼の甲高い悲鳴が聞こえてきた。宮森自身、その悲鳴を聞きながら、まったく動けずに部屋の中に立ち尽くしていた。

「そ、そんな……。室井さん……」

そこにいたのは、室井だった。いや、かつては室井と呼ばれていた、一人の男の成れの果てと言った方が正しいか。

ベッドの上の死体は仰向けに横たわり、苦しそうに胸元を抑えていた。口は大きく開かれており、その頭部の半分程が既がない。ベッドの上に置かれた枕を中心に、部屋の壁、床、そしてシーツの上にも、ありとあらゆる場所に血が飛び散っている。それだけでなく、赤黒い血や肉の塊に混ざって、砕け散った脳漿までもが室井の顔の周囲に散らばっていた。

「あ……ああ……」

掠れた声と共に、何かの倒れる音がした。慌てて宮森が振り返ると、そこには白目を向き、完全に失神している凍呼の姿があった。

「と、凍呼ちゃん!?」

倒れた凍呼に駆け寄って、宮森は彼女を抱きかかえて名前を呼んだ。しかし、あまりに壮絶な室井の死に様を目の当たりにしてしまったからだろうか。いくら呼べども、叫べども、凍呼は一向に目を

覚まそうとはしなかった。

その腕の中に凍呼の細く、しかし柔らかい身体を抱えたまま、宮森は改めて室井の方へと顔を向けた。が、直ぐに凍呼の方へと向き直り、彼女を抱えたまま急いで部屋を後にした。

先ほどから漂っていた酷い臭いは、きっと室井の遺体が発していたものだろう。室井と連絡が取れなくなったのは数日前。恐らくは、その際に、既に室井はこの世を去っていた可能性もある。

死亡したのが早くとも金曜の夜だったとして、そこまで酷く腐敗しているわけではないはずだ。もっとも、あんな死に様では、部屋を開けた際に漂ってきた生臭さにも頷ける。飛び散った肉と血の臭いが部屋に充満し、それが悪臭の原因になっていたということは、想像に難くない。

その臭気に吐き気を覚えながらも、宮森はなんとか凍呼を部屋の外へと運び出した。本当は、今直ぐにでも部屋の外に出て新鮮な空気を吸い込みたい。そんな衝動にかられたものの、なんとか気を取り直して携帯電話を取り出した。

このまま凍呼を放っておくわけにはいかないし、それは亡くなった室井に対しても同じだ。動ける人間が自分しかない以上、まずは警察に、次には消防にも連絡を取る必要がある。

額の汗を拭い、宮森はぎこちない手つきで携帯電話のボタンを押した。警察に電話をすることなど初めてだったが、何故か妙に高揚した気分になっていた。

く 七ノ刻 闇捜 く

照瑠が高槻からの呼び出しを受けたのは、その日の昼を過ぎた辺りのことだった。

雪乃の家で、紅からの連絡を待っていた際、照瑠は雪乃の携帯電話を通して高槻から連絡を受けた。なんでも、今度は 奇跡空間ミラクルゾーン の作成に関わっていたディレクターが、プロデューサー同様に変死したとのことだった。

同じ芸能界に関わる人間とはいえ、いったい高槻は、どこからそんな情報を仕入れてきたのだろう。一瞬、怪訝に思った照瑠だったが、紅に取り次いで欲しいという高槻の話を受けて、直ぐにそんな考えは吹き飛んだ。

昨日の夜、照瑠たちの前から姿を消した後、紅とは一度も連絡が取れていない。向こうから連絡をくれるのを待つてはいたが、昼を過ぎても何の音沙汰もない。

このまま紅を信じて待つていようか。そう思っていた照瑠だったが、さすがにそんなことは言っていられなかった。

高槻の話を信じるならば、例の番組の関係者が、既に亡くなっているということになる。当然、事件との関連性を疑うのが普通であり、それは紅に伝えておかねばならないこともある。

放っておけば、事件はますます迷宮入りするばかりだ。警察内部にまで顔見知りのいる火乃澤町とは違い、ここは大都会のど真ん中。味方になってくれる人間も少なく、協力者も数えるほどしかない。

変死の真相が呪いにしろ祟りにしろ、完全に敵地であることに変わりはないのだ。アウェイ

一端、電話を切る形で、照瑠は高槻との話を終えた。そして、亜衣と交互に電話をする形で、何度も紅の携帯電話に連絡をすることになったのである。

結局、紅が捕まったのは、それから三十分ほどしてからのことだった。五分おきくらいに、何回もしつこく電話をしたからだろうか。照瑠の方から再度の電話をかける前に、紅の方から連絡があった。

「九条か……。こう、何度も連絡をよこすとは……。何か、急ぎの用事でもできたのか？」

電話の向こうの第一声が、これだった。いつにも増して不機嫌そうな様子だったが、照瑠はあえてそれを無視した。今は、とにかく高槻から言われたことを紅に伝えなければならない。その上で、紅と改めて合流し、高槻の話を聞く必要がある。

ディレクターの変死を端的に伝え、照瑠は紅との話を終えた。初めは適当に話を聞いていた紅も、新たな犠牲者が出たということで、最後はやけに慎重になっているようだった。

「さて、と……。それじゃあ、私はちょっと出かけるね。犬崎君とは連絡が取れたけど……。あいつに全部押し付けて、私だけ遊んでいるってわけにもいかないし」

部屋の隅に置いておいた鞆を拾い、照瑠はそう言って立ち上がった。その後ろから雪乃や亜衣がついてきたが、照瑠は直ぐに振り返り、彼女達を制するようにして右手を突き出した。



「ごめん。悪いけど……今回は、私一人で行かせてくれない？　なんだか、ちよつと嫌な予感がするから」

「むう、友達がいがないですなあ……。折角ここまで一緒に来たのに、今さら抜け駆けですか、照瑠どの？」

同行を拒否されて、亜衣があからさまに不満そうな顔をした。

「本当にごめんね、亜衣。だけど、さすがに今回は、私達も迂闊に動けないわよ。高槻さんの話を聞く限り、人が一人亡くなっているみたいだし……。それに、あまり大人数で行っても、雪乃やまゆさんの立場だってあるだろうし……」

最後の方は、少しばかり言葉を濁す形になった。

自分や亜衣とは違い、雪乃やまゆは芸能界の人間だ。そんな人間が、奇怪な変死事件を追いかけて動き回っているということが、三流週刊誌の編集者にでも知られたらどうなるか。その先は、照瑠でなくとも簡単に予想がつく。

変死事件と絡め、あることないことを書き立てられた挙句、場合によっては芸能人としての生命線を断ち切られるかもしれない。決して大袈裟な話ではなく、それは十分に考えられることだ。

火の無いところに煙は立たぬというが、それはあくまで一般人を相手にした場合の話。火の無いところに、あえて煙を立てることを仕事にしている連中がいることくらい、業界内部の話に疎い照瑠でもなんとなく想像はできる。

それに、照瑠はなによりも、高槻に余計な心配をさせるのが嫌だった。

変死したディレクターの謎を追うということは、それは即ち事件の核心に近づくということだ。確かに、事件を解決するためには必要なことなのだろうが、核心に近づけば、それだけ危険も増す。紅と自分がいる限り、そう簡単に雪乃の身に何かが起こるとは思えなかったが、高槻はあの通りの男だ。雪乃の身を案じ、余計な気苦労を変に背負い込まれるのも申し訳ない。

なんだかんだで、自分は結局世話やきなのだと照瑠は思った。火乃澤を離れ、わざわざ東京にまで出てきても、観光をそっちのけで他人の心配ばかりしている。それが他人を癒すことを生業とする、癒し手の性だと言われれば、それまでな気もするが。

「それじゃあ、私はもう行くね。これ以上、犬崎君を待たせると、どんな文句言われるかわからないし」

「しょうがないですなあ……。でも、本当に一人で大丈夫なの？ やっぱり、せめてもう一人くらい一緒に行った方が、なんとなく安全な気もするけど……」

名残惜しそうに、亜衣が探るような視線を照瑠に向けてくる。話の流れで、このまま自分も一緒に連れて行ってもらえないだろうか。そんな淡い期待を抱いているのが見え見えだ。

亜衣が照瑠と一緒にいきたい理由。それは一重に、好奇心から来るものだろう。勿論、友人として照瑠のことを心配しているのもあるだろうが、半分は興味本位ということの間違いない。

このまま亜衣を連れていけば、きつと面倒なことになる。かとい  
つて、ここで強引に振り切つて出掛けたとしても、下手をすればこ  
ちらを尾行しかねない。紅とは別の意味で感覚のずれている亜衣の  
こと。その程度のことであれば、絶対にする。

果たして、この流れをどう切り抜けるか。そんな照瑠に救いの手  
を差し伸べたのは、意外なことに、まゆだった。

「仕方ない。それじゃあ、私が一緒に行つてあげるわ。一応、この  
中では最年長つてことだし……別に、構わないわよね？」

明らかに同意を求める視線を照瑠に向け、まゆは早くも玄関に出  
て靴を履いていた。断ろうにも断れない。そんな空気を、あえて自  
分から作りだしているようだった。

「えっ……。で、でも……まゆさん、本当に大丈夫なんですか？」

「大丈夫つて、何が？」

「だって、まゆさんだって雪乃と同じ、テレビに出ている人なんで  
しょう？　それが、呪いだの祟りだのが絡んでいそうな心霊事件を  
追いかけているなんてことが知られたら、やっぱりまずいんじゃない  
……」

「ああ、なんだ、そんなこと。だったら、無用な心配つてところか  
な。私、雪乃と違って、そんなに顔が売れているわけじゃないから  
さ。スタジオ用のメイクをしているわけでもないし、普段着で歩い  
ていれば気づかれないでしょ」

自分と雪乃は別格だ。だから、照瑠と一緒に歩いても大丈夫。そ

れが、まゆの告げた理由だった。

確かに、彼女の言っていることも一理あると照瑠は思う。しかし、本当に平気なのだろうか。本人から保証されても未だ不安な照瑠だったが、まゆは気にすることもなく、照瑠の手を引いて外に出た。

「それじゃ、ちょっと行ってくるからね。二人とも、とりあえず留守番よろしく!!」

これから凄惨な事件の現場に向かうというのに、まるで買い物にでも出かけるような言い方だった。その、あまりに場違いなまゆの行動に、照瑠はしばし首を傾げながら雪乃の部屋を後にした。

廊下を曲がり、エレベーターの扉の前に立つ。ボタンを押して呼び出すと、エレベーターは直ぐに二人の前にやってきた。

開かれた扉の向こうには誰もいない。日曜日だが、外出する者は少ないのだろうか。それとも、日曜日だからこそ、住民たちはそれぞれの部屋で、ゆつくりと余暇を過ごしているということだろうか。

無機質な個室に入ったところで、まゆが壁にもたれかかったまま溜息をついた。なんだか、随分と気を張った。そんな風にも受け取れる様子だった。

「はあ……。とりあえず、なんとか抜けられたわね。雪乃と一緒に来るって言いださなくて、本当に助かったわ」

「ええ、まあ……。でも、それにしても、今日はいったいどうしたんですか？ 急に、私と一緒に犬崎君や高槻さんに会いに行くなんて言い出して……」

先ほど、雪乃の部屋を出る際に見せたまゆの態度。それがどうにも気になって、照瑠は思わずまゆに尋ねていた。

「ああ、それね。一応、私だって当事者だし、そもその依頼人みたいなものじゃない。だから、いつまでも年下のあなた達に甘えられないかなって……そう思っただけよ」

「そうだったんですか。なんか、返って気を使わせたみたいじゃないですか」

「別に、九条さんが気にすることはないわよ。真相を知りたいっていうのは、私だって同じだからさ。確かに、ちょっと怖いのもあるけど……ここは、お互い様ってやつでしょ」

親指を立てて、まゆがにやりと笑って見せた。強がっているのか、それとも本心からなのか。それを照瑠が確かめようとしたとき、エレベーターの扉が重たい音を立てて開かれた。

駅前の大通りを抜け、閑静な住宅街に入った直ぐの場所に、そのマンションは建っていた。

連絡用の携帯電話を片手に、照瑠とまゆは互いに顔を見合せながら歩いてゆく。二人一緒に行動しているとはいえ、土地勘の無い場所を歩くのは、なぜかどうしても気後れする。

電柱の横を曲がったところで、照瑠は見慣れた白金色の髪を見つけた。黒いコートと、その色とは対照的な白い肌。そして、燃えるような赤い瞳が、こちらを横目で睨んでいた。

「遅いぞ、九条。既に、高槻さんも到着しているんだからな。少しは時間というやつを、気にして動いたらどうなんだ？」

出会ったそうそう、いきなりの憎まれ口。その横柄な態度に、早くもまゆが辟易したような顔をしている。が、照瑠にとっては、これも普段の日常の一コマ。すかさず紅の前に歩み寄ると、彼を正面から見据えて言い返した。

「悪かったわね、犬崎君。でも、女の子の身だしなみてのは、時間がかかるものなのよ。いいかげん、そのくらいのことは理解してもいいんじゃない？」

「興味はない。人が死んだ現場に出掛けるのに身だしなみを気にするなど、俺には理解できない感情だ」

「その言葉、そっくりそのまま返すわよ。昨日の夜、連絡も無しにほっつき歩いていた人に、常識なんて語って欲しくないんだけど」

昨晚、連絡一つよこさずに、散々心配をかけたこと。それを引き合いに出した照瑠だったが、紅にはあまり響いていないようだった。

「とにかく、今は時間が惜しい。既に警察の連中も来ているみたいだ。高槻さんとは、現場で合流しよう」

そう言うが早いか、紅は照瑠とまゆを置いて、さっさと先に歩き出した。相変わらずの愛想のなさだが、これはもう仕方ない。喉ま

で出かかった言葉を飲み込んで、照瑠とまゆも、その後を追う。

現場に到着すると、既にそこは警察の人間でごった返していた。マンションの入口には黄色いテープが張られ、住民たちが何やら聞きこみを受けている。そこから少し離れた場所で、高槻が現場の様子を遠巻きに窺っていた。

「待たせたな。とりあえず、現場の状況はどうなっているんだ？」

出合いがしらに、紅は高槻にいきなり質問をぶつけにいった。こういうときは、まずは挨拶からするものではないか。つい、そんな言葉を口に出しそうになった照瑠だったが、現場の片隅に丸まっている者の姿を見て、出て来た言葉を飲み込んでしまった。

（あれは……？）

そこにいたのは、照瑠よりも一回り小柄な一人の少女だった。何やら相当に恐ろしいものを見たらしく、両手で口元を隠すようにして震えている。

隣にいるのは、あれは彼女の付添いの男だろうか。震える少女に代わり、現場に駆け付けた警察官の質問に答えていた。

「いったい、あれは誰だろう。警察官と一緒にいることからして、事件の関係者なのだろうか。そう、照瑠が考えていた矢先に、彼女の隣にいたまゆが、スタスタと歩きだして少女に近づいて行った。

「ねえ……。あなた、大丈夫？」

少女の側に寄るなり、まゆは腰を屈め、目の前で震える彼女に話

しかけた。その言葉に、少女の顔が一瞬だけ上を向く。いきなり声をかけられたのが不思議だったのか、怪訝そうな様子でまゆの顔を覗きこんでいる。

「あの……。あなたは？」

「篠原まゆよ。あなたと同じ事務所にいて……。ほら、例の番組の代行を引き受けた」

「えっ……。！？　そ、それじゃあ、あなたが私の代わりに、ミラクルゾーンに出演してくれた……」

「そういうこと。まあ、あなたと違って私は売れてないからね。顔を覚えてもらっていなくても、仕方ないと思うけど……。改めてよろしくね、葵璃凍呼さん」

自嘲気味に笑い、まゆは凍呼の横に並ぶようにして腰を降ろした。そして、優しくその肩に手を回すと、そのまま諭すようにして話を続けた。

「とりあえず、今は場所を移さない？　こんなところで丸まっても、警察の人の邪魔になるだろうし……。後のことは、あそこにいる宮森さんが、なんとかやってくれるわよ」

まゆの視線が、一瞬だけ宮森に向けられる。凍呼に代わり、警察の質問を受けていた男だ。番組に出演したのは一度きりだったが、打ち合わせの段階で、まゆも宮森の顔は知っていた。

宮森の方は、未だ警察からあれこれと訊かれている。本当は、彼にも事情を尋ねたかったが、今はさすがに無理そうだ。そうになると



後の話は宮森ではなく、ここにいる凍呼に尋ねる他にない。

とにかく、まずは凍呼を落ちつかせ、それから話を訊くしかないだろう。まゆは凍呼に立ち上がるよう促すと、そのまま彼女を連れて照瑠たちがいる場所へと戻った。どうやら紅も高槻との話を終えたらしく、戻ってきたまゆに三人の視線が向けられた。

「お前は……確か、篠原まゆとか言ったか？ いきなり現場に踏み込んで関係者を引っ張ってくるなんて、随分と大胆なことをするものだな」

赤い瞳を向けるや否や、紅のぶっきらぼうな台詞が口から飛び出す。照瑠の手前、露骨に嫌な顔はできなかったが、それでもまゆはやはり紅の出すこの雰囲気とは、どうしても相容れないものがあると感じてしまった。

「ま、仕方ないでしょ。別に、警察の捜査を邪魔しに行ったわけでもないし……。ただ、事務所の後輩に、ちょっと助け船を出してあげただけよ」

「事務所の後輩？ そう言えば、その女……昨日のテレビ局でも会ったな。確か、あの陰陽師と一緒にいたやつじゃなかったか？」

「ええ、そうよ。彼女、ミラクルゾーンのレギュラーだからね。私が例の事故のあった生放送に出演したのは、あくまで彼女の代理ってことだし」

「そういうことか。なら、話は早い。お前……あの、マンションの中で何を見た？」

紅の瞳が、まゆの隣にいた凍呼に向けられた。あくまで自然に接したつもりだったが、それでも今の凍呼には、いささか刺激が強過ぎたのだろうか。幽霊のような紅の外観も相俟って、彼女は一言、短い悲鳴を上げただけだった。

「ちよつと、犬崎君！　いきなりそんな訊き方ってないんじゃない！？」

後ろから、照瑠が紅の背中を小突いて言った。話の腰を折られてむっとする紅だったが、照瑠はそれに取り合わなかった。

「なぜ止める、九条？　俺はこの女に、ただ目の前で起きたことを尋ねただけだぞ」

「だから、そういう言い方がまずいんだってば！　彼女、怯えているじゃない。もっと、こう……優しく思いやりのある訊き方ってものができないの！？」

「残念ながら、俺はそういった類の感情を持ち合わせていないんだ。お前の期待には答えられそうにない」

ざっくりと、斬り捨てるような言い方だった。もっとも、その半分が嘘であることを、照瑠は当に気づいているが。

犬崎紅は、不器用なだけだ。今の言葉とて、彼の本心などではない。ただ、自分をさらけ出すことを良しとしない部分もあるため、時にこういった誤解や衝突を招いてしまうことがある。

まったく、相変わらず世話の焼ける男だと照瑠は思った。紅は頭も切れるのだが、たった一人では警察や探偵の真似ごとなど決して

できない。確かに、事件を解決する際に見せる彼の才能は素晴らしいものがあるが、こつも聞き込みが下手糞では先が思いやられる。

探偵は、あくまで事件を解決する最終兵器。本当に必要な情報は大概は助手が集めて来ることが多い。以前、どこかで見た探偵物のテレビ番組を思い出し、照瑠は自分と紅の關係に、彼らの姿を重ねていた。

「ねえ、あなた……。もしかして、まゆさんの知り合いの人？」

紅とは違う柔らかい口調で、照瑠が凍呼に尋ねた。まだ、少しだけ緊張しているようだったが、それでも同年代の少女に話しかけられて安心したのだろうか。今度は悲鳴を上げることもなく、凍呼は照瑠に自分の見て来たものを語りだした。

金曜日から連絡の取れなくなったディレクターに会おうと、ADの宮森と一緒にマンションを訪ねたこと。そのマンションで、無残にも頭部を粉砕された、室井の死体を見つけたこと。死体を見て気を失い、気がつけば宮森に介抱されていたこと。

全てを話し終えたとき、凍呼は掠れた声で泣いていた。あの、室井の寝室で見てしまったものが頭に蘇り、自分の感情を抑えきれなくなっているようだった。

「なるほどねえ……。まあ、確かに、そんな物を見たら気絶の一つや二つだってするわよね」

凍呼の前で、照瑠が大きく首を振って頷いた。そして、目元を赤くしながら泣き腫らしている凍呼の頭に手を乗せると、すつと息を吸い込んで、意識を彼女の心に集中させた。

この歳の少女にしては小柄な凍呼と違い、照瑠は随分と背が高い。170?を越える身長は、それこそ知らない者が見れば、雑誌のモデルやバレーボール部のエースと見紛う程だ。

「あ、あの……」

自分よりも一回りも背丈の高い少女に、いきなり頭に手を乗せられる。意味がわからないという表情で、凍呼は照瑠の顔を、覗き込むようにして見上げている。

どれくらい、そうしていただろうか。時間にして、物の数分の出来事だったのかもしれない。

気がつくと、凍呼はいつしか泣き止んで、呼吸も随分と落ちついたようだった。ほっと溜息をつき、照瑠は満足そうに凍呼の頭から手を離す。隣にいた紅も、横目でその様子を窺いながら、自嘲気味な笑みを浮かべていた。

「やるな、九条。さすがは九条神社の跡取りと言ったところか？以前に比べ、随分と力を増したようだな」

「まあね。犬崎君ほどじゃないけど、これでもちゃんと、修業だけは続けてたから」

「そいつは頼もしいな。お前のような芸当、俺には到底真似できん。こういった面倒事の際は、今度からお前が先に話を聞け」

「それはどうも。でも、犬崎君も、少しは人と話すときの作法ってものを、勉強した方がいい気がするけどね」

多少の皮肉を込めたつもりで、照瑠は紅に言ってやった。嫌味というよりは、自分の中にあつた驚きの気持ちを隠そうという方が強かった。

あの紅が、よりもよつて他人を認め、誉めるような発言をする。なんとも珍しいこともあるものだ。そんなことを思いながら、照瑠は再び凍呼に話しかけていた。

「少しは落ち着いた？　なんか、とんでもない目に遭っちゃったわね」

「えっ……。は、はい……」

いったい、自分に何が起こったのか。肝心の凍呼は、わけがわからないという顔をして突っ立っている。まあ、何の靈感もない凍呼にしてみれば、照瑠が癒しの氣を送り、彼女の気持ちを鎮めたことなど知る由もないのだが。

とりあえず、この場はなんとか落ちついたか。そうこうしている内に、照瑠や紅たちの下に、先ほどまで警察の質問に答えていた宮森がやってきた。宮森は紅たちの中に高槻の姿を見つけると、何やら慌てた様子で小走りに駆け寄ってきた。

「あつ、高槻さん！　来てくれたんですね……！」

「宮森君か。君から連絡を受けたときは、こっちも自分の耳を疑ったよ」

「すみません。なんか、変なことで呼び出しちゃって……」

宮森が、申し訳なさそうに頭をかいていた。どうやら今回の件は、宮森が高槻に連絡をよこして話が伝わったようだ。と、いうことは、宮森と高槻は、顔見知りの関係ということだろうか。

「それで……何か、僕たちに協力できそうなことはあるのかい？ さつき、随分と警察に色々訊かれていたようだけど？」

「ええ、まあ……。俺と、そこにいる凍呼ちゃんが、室井さんの遺体の第一発見者でしたからね……」

「それじゃ、君たちが警察に疑われているってことなのかい？」

「いや、それはないと思います。ただ……室井さんの死に方が死に方なんで、色々と詮索されるのは仕方ないですけどね……」

宮森の眼が、一瞬だけ高槻から逸らされた。高槻は室井の死に様を目の当たりにしたわけではなかったが、それでも先ほどの凍呼の様子と、今の宮森の口調からはつきりとわかる。ディレクターの室井が、通常では考えられない様な、酷い死に方をしていたということとは。

「それよりも、高槻さん。実は……俺、さつきやバいもん見ちゃったんですよ」

急に小声になって、宮森は高槻だけに囁くように言った。照瑠や紅も耳を澄ませたが、宮森が出来る限り他人に話を聞かれないと思っているのは明白だった。

「俺、高槻さんに、神居さんの話しましたよね。例の、奇跡空間

ミラクルゾーン を、以前に担当していたディレクターの……」

「そう言えば、そんな話も聞いたね。で、その神居さんが、どうしたって言うんだい？」

「はい。実は、警察の……あれ、鑑識官って言うんですか？ そんな人が袋に入れて持って来た物の中に、血まみれになった女物の指輪があっただんです。」

「女物の指輪？ でも、そんなもの、警察の人がわざわざ見せてくれるものかな？」

鑑識官が、現場で上がった証拠を一般人に見せる。そんなことは考えにくいと首を傾げた高槻だったが、目の前の宮森は、至って真面目な顔だった。

「たぶん、半分は偶然みたいなもんだと思います。本当は、俺に質問して来た刑事さんの方に見せるつもりだったんだらうと……」

「なるほどね。それで、その指輪は誰の物だったんだい？ まさか……」

「その、まさかですよ。神居結衣さんの話、覚えてますよね？ 発見された指輪、その神居さんがつけていた物でした。それも、発見された場所が、またおかしくて……」

「発見された場所？」

「そうです。指輪のあった場所、どこだったと思います？ 警察の人の話だと……室井さんの碎け散った頭の中から見つかったってこ

とでした」

「なっ……。あ、頭の中って……。どうして、そんな場所に指輪なんか……」

「それは、こつちが聞きたいくらいですよ。お陰で、俺も警察の人から長々と話を訊かれることになったし……。正直、何がなんだか、さっぱりわからないです」

一瞬、場の空気が凍りついた。

神居結衣のことは、当然のことながら高槻しかその存在を教えてもらってはいない。しかし、今までの話の流れから、その人物が故人であることは容易に想像できる。宮森の言っていた 生前 という言葉を信じるならば、既に神居結衣という女性は、この世に存在してはいない。

そんな人間の指輪が、砕け散った室井の頭部から発見された。これはいいよ、話が怪奇な方向に傾いてきた。照瑠も紅も、そんな宮森の話を聞いて、ただならぬ事態が起きていることだけは理解していた。

（しかし……。それにしても、まさか人間の頭の中から指輪が出て来るなんて……。そんなことが、本当に起こり得るのか？）

話を全て聞き終えて、高槻は改めて腕を組み考えた。

今回の事件は、先代ディレクターの神居結衣による祟りである。



以前、宮森と初めて会ったときのことが、高槻の頭の中で再生される。だが、その一方で、一抹の疑念も捨てきれではない。

自分の番組が穢され、低俗な物に変わってゆくことに怒りを覚え、とうとう番組関係者に死の制裁を加え始めた女性ディレクターの怨霊。確かに幽霊が犯人の事件としては、整合性の取れている話でもある。

しかし、仮に本当に神居結衣の霊が今の番組の在り方を嘆いているとして、いきなり祟りなどという行動に出るだろうか。世界中から奇跡の感動エピソードを集め、高視聴率を記録するような番組を作っていた女性が、そんな身勝手な理由から、人殺しに走るだろうか。

生前の神居結衣がどんな女性であったのか。それは高槻も知らないが、さぞ聡明な女性であったことは想像できる。そんな彼女のイメージと、人間の頭を砕いて殺すという残虐な手口。それが、どうにも結びつかない。

「神居さんの祟り、か……。僕には正直、何が真実なのかわからないな。犬崎君、君は今の話を聞いて、どう思う？」

「そう、いきなり言われても困る。今の俺たちには情報が少な過ぎだ。その、神居結衣というのがどんな女だったかということ含め、きちんと話を聞かせてもらわないとな」

「ああ、そうだったね。それじゃあ、それは僕の方からしておこう。できれば宮森君にも同行してもらえると嬉しいんだけど……大丈夫

かい？」

高槻の顔が、宮森に向けられる。本当は、彼の口から話をしてもらうのが一番いい。そう思った高槻だったが、宮森は首を縦には振らなかった。

「すみません。俺、これから凍呼ちゃんを送っていかなくちゃならないんで……。あんな事件の現場に居合わせちゃったことだし……事務所の方から変な難癖つけられても、彼女が可哀想ですから」

「確かに、それもあるな……。だったら、僕は僕で、残る女の子たちを送ってゆくことにするよ。犬崎君と話をするのは、その後になるけど……。それで、構わないかな？」

「問題ない。俺の方でも少しばかり、調べたいことがあるんでな。しばらくは、一人で行動させてもらうが……。そこにいる二人を送ったら、改めて連絡をよこせ」

赤い瞳が、睨むようにして高槻を見てきた。苛立っているというよりも、何やら色々と考え込んでいる。そんな風にも受け取れる様子だった。

現世の常識しか知らない高槻にとって、霊だの呪いだの祟りだのといった、常世の常識はまるでない。紅が何を考えているのか、そんなことは、今の高槻では知る由もない。

今回の事件が、本当に神居結衣の怨霊によるものなのか。もし、そうだとすれば、これから先も番組関係者が殺され続けるのではないか。それこそ、目の前にいる宮森は元より、果ては凍呼やまゆの命でさえ危険が迫っているのではないか。

室井の変死のことを考えると、事態は決して樂觀視できるものではないと高槻は思っていた。しかし、自分にできることが限られている以上、ここから先は、全てを紅に委ねて見守る以外に方法が見つからなかった。

扉を開けると、むっとした血の臭いが鼻をついた。

思わずハンカチで口元を抑えたものの、香取雄作は気を取り直し、改めて部屋の中へと入って行った。

仕事柄、凄惨な殺人事件の現場に出くわすことも少なくはないが、やはり、血の臭いというものは慣れるものではない。臭気にやられて嘔吐するような醜態を見せることはないものの、この臭いを好んで嗅ぎたいとまでは、さすがに思うは至らない。

部屋の奥に入ると、そこでは未だに現場検証が続けられているようだった。血飛沫の飛び散った現場の部屋では、鑑識の男と担当刑事が、なにやら色々と話をしている。今回の変死事件が、あまりに奇妙で説明がつかない。そんなことを互いに愚痴っているようだった。

固く、やけに周りに響く足音を立てながら、香取はつかつかと二人の男の側へと歩いて行った。途中、その足音に気づいたのだろう。鑑識の方がこちらを向き、刑事の袖をつついて促した。

「あん？　なんだ、お前は？」

明らかに不機嫌そうな顔をして、担当刑事が香取に睨みを利かせてきた。見るからに柄の悪い、悪人面をした男だ。何も知らない者が街中で出会ったら、刑事ではなく暴力団の一味と思われるかもしれない。

「公安第四課、警視正の香取雄作だ。これより本件は、警視庁公安部の管轄に入る。よって、そちらには捜査の担当から外れてもらうことになるが……異論はないだろうな？」

懐から旧式の警察手帳を取り出し、香取も自分の身分を明かして男に言った。相手の気迫に負けず、至って冷静な口調で言ったつもりだったが、香取の階級を聞いても男は引き下がらなかった。

「公安だあ？　こっちはそんな話、上からは何も聞いてねえぞ！？」

「当然だ。公安部の仕事は秘密裏に行われるのが常だからな。こちらの事情を説明する義理は、初めからない」

「ああ、そうかい。だがな、こっちだって、身体張って仕事してんだ。公安だかなんだか知らねえが、後からやってきて、勝手に人の手柄を横取りしようってのかい？」

男の凄むような声が、部屋の中に響き渡る。手を伸ばせば届く距離にいるというのに、こうまでして大きな声で話さねばならない理由はなんなのか。そう思ってしまうほどに、担当刑事の男は荒れた声を香取にぶつけて来た。

仕事上、仕方のないこととはいえ、この手の輩の扱いは本当に困

る。目の前の男は、恐らくは現場からの叩き上げ。香取のようなキヤリア組のことを、殊更嫌悪しているタイプの人間だ。それが、公安のような秘密組織に属するものであれば、尚更執拗に突っかって来る可能性もある。

先ほど、こちらの階級を聞いても尻込みしなかったことからして、階級を盾に男を黙らせることは不可能だろう。目上の人間に立てついても、始末書の数枚を仕上げて提出すればよい。そんな風にしか考えていない、短絡的な相手かもしれない

折角現場に到着したのに、これでは捜査が進まない。なんとか男を現場から追い出したいと香取が考えた時、目の前の男のポケットから、携帯電話の呼び出し音が鳴り響いた。

「あんだあ？ この、クソ忙しいときに……」

周りにいる全ての人間に聞こえるように悪態を吐きながら、男はしぶしぶ携帯電話を取り出して耳に当てた。しばらくは、男は実に不満そうな顔で電話の向こう側の声に耳を傾けていたが、やがて、用件も済んだのか、電話を無造作に折り畳んでポケットにねじ込んだ。

「おい、ついてたな、あんだ。俺は署長に呼ばれて、これから署に戻ることになった。ついでに、現場の指揮も、あんたら公安に任せろって命令だ」

「そいつは助かるな。賢明な判断に、感謝しよう」

「へっ、良く言うぜ。後からのこのこ来て、その上で根回しするなんぞ、随分と汚ねえ仕事がお得意のようだな、公安さんはよー!!」

喉の奥で不快な音を鳴らし、男は痰唾を香取の足下に吐き捨てた。現場がマンションの一室であることなど、まったく気にしていないようだった。

ドスドスと、まるで地鳴りのような足音を立てて、男は部屋を出て行った。後に残された鑑識官に、香取は場所を外すようにだけ指示を出す。まだ、現場の検証さえしていないというのに、なんだか随分と興醒めしてしまった。

軽い溜息を吐いた後、香取は目の前に転がっている変死体に改めて目をやった。報告にはあったものの、こうして見ると、その余りの酷い死に様に異様なものを感じざるを得ない。

肉体の酷く損傷した遺体はこれまでも数多く見てきたが、その臭気と同じく、やはり慣れるものではない。仕事柄、顔にまで露骨な嫌悪感を露わにすることそないものの、死んだ人間を目の当たりにするというのは、決して気分の良いものではない。

遺体は頭部を激しく損傷しているが、逆にそれ以外の外傷は見当たらなかった。いったい、何をどうすれば、ここまで激しく人間を破壊できるのか。最も有力なのは爆発物の類を用いたという線だが、これは今回の事件には当てはまらないような気がした。

「やれやれ。到着早々、変なのに絡まれて災難でしたね」

突然、後ろから声がした。聞き覚えのある声に、香取はゆっくりと振り返る。見ると、そこには眼鏡をかけた細身の青年が、腕組みをしたまま壁にもたれかかっていた。

「氷川か……。相変わらず、人の背後を取ることが趣味のようだな」  
「そいつはどうも。まあ、俺たちの中で香取さんの背後を取れるのは、この俺くらいの者ですけどね」

「下らない前置きは不要だ。それよりも……この現場を管轄している警察署に根回しをしたのは、お前か？」

「ええ、そうですよ。香取さんと違って、そういう仕事は俺向きなんでね。面倒事が起きる前に、さっさと済ませておきました」

指先で眼鏡の位置を少しだけ上げて、氷川と呼ばれた男がにやりと笑った。

氷川英治。ひかわえいじ香取と同じく、彼もまた公安四課に所属する死霊管理室のメンバーである。巧みに己の気配を消して相手の背後を取ることを得意とし、同時に情報戦のエキスパートという側面も持つ。同じ死霊管理室の中でも、香取がもっとも信頼している部下の一人だった。

香取が現代を生きる傭兵に例えられるならば、氷川は正真正銘のスパイと言うに相応しい男だった。それこそ、ハリウッドのスパイ映画にでも登場しそうな、絵に描いたような工作員のイメージが強い。映画のような常識外れのアクションはできないだろうが、その頭脳はときに、死霊管理室の大いなる助けとなる。

スツと伸びた背をまったく曲げず、氷川は室井の変死体に近づいた。香取同様に、その顔に嫌悪の色は現れていない。不快な臭気は感じているだろうが、精神状態のコントロールという点でも、氷川は香取より上だった。

脳漿をぶちまけ、その頭部の上半分を失っている無残な死体。腰を屈めて覗きこむと、氷川は首だけを香取の方へと少し向け、遺体と交互に見比べながら口を開いた。

「ったく、こりやまた酷い死に様ですね。やっぱり今回も、例のテレビ局で起きた事件と同じ手口ってことですか？」

「ああ。断言はできないが、死んだのが例の番組を作成していたディレクターだからな。死亡の原因は未だ不明だが、恐らく死因が同じことは間違いない」

「そうですか。まあ、その死因がわからないんじゃ、さすがにこれ以上は俺もお手上げですけどね。現場から、火薬の類でも発見されりや、直ぐにでも捜査権を通常の警察に返せますけど……」

「残念ながら、それは無理そうだな。ショットガンで頭を碎いたのとも違う。こいつは明らかに、内部から頭を粉碎されている」

「へえ……そいつは興味深い。まさか、犯人は中国秘伝の暗殺拳の使い手だった、なんてことにはなりませんよね？」

「ふっ……。いくらなんでも、それはないと思いたいがな」

両手の人差し指と中指を立てて冗談を言う氷川に、香取も思わず苦笑して答えた。

もし、氷川の言うように、相手が人間だったのであればどれほど楽か。例え漫画の世界から飛び出してきた暗殺拳の使い手であっても、相手が人間であれば、まだ勝機はある。



だが、目の前に転がる室井の遺体は、その死の原因が明らかに向こう側の世界の力によるものだと言語っていた。その力の正体は、果たして呪いか祟りか、それとも香取の知らぬ超能力の類なのか。靈感のような力を持ち合わせていない香取にとって、そこまではわからない。

やはり、これ以上は自分たちでは限界か。後は鑑識の人間たちに現場を任せ、監察医の検死解剖結果を聞く他にない。無論、こちらで子飼いにしている、信頼できる法医学者に依頼をしなければ駄目だろうが。

そこまで考えたとき、今度は香取の携帯が唐突に鳴り始めた。取り出して画面に映し出された文字を確認すると、香取は一言、「少し頼む……」とだけ残して部屋を出た。

血の臭いが充満している部屋の中とは違い、外の空気は爽やかだった。下から吹き上げるような風がマンションの廊下を抜け、香取の服の裾を揺らした。

「俺だ。こちらは今、現場で取り込み中なんだが……用件は何だ？」

開口一番に、香取は自分の名前も名乗らず尋ねた。相手が誰であろうと、香取は電話越しに自分の名を名乗ることをしない。自分に電話をかけてくる人間は、即ちこちらの正体を知っている人間でもある。それがわかっていいるからこそ、あえて面倒な社交辞令など避けて通る。

こちらの要件など、そっちもわかっているだろう？ あんた達、警察の人間が封鎖していて、俺はそちらに入れない

電話越しに聞こえて来たのは、まだ若い少年の声だった。声の主が先日の夜に出会った外法使い、犬崎紅であることは、電話に出たときから知っていた。

あんたは言ったな。俺たちは、利害の一致から協力する必要があると

「ああ、そうだ。そちらが連絡をくれたことは、俺も感謝させてもらう。お陰で、地元の警察が色々と動く前に、うまく騒ぎが広がるのを止められた」

そいつは結構なことだったな。だったら、代わりに一つだけ教えて欲しい。そのマンションで死んでいる男の状態なんだが……例の頭が砕け散ったプロデューサーと、死因は同じと見て間違いないのか？

「司法解剖に出していないから、まだなんとも言えん。ただ、男の死因が銃機や爆発物によるものでないことだけは確かだ。部屋には弾痕も、火薬を使用した形跡もない。俺も今しがた現場に到着したばかりだが……他に、不審な点は見当たらなかった」

そうか……。こちらも、何かわかったら、また連絡をさせてもらう。その代わり、重要だと思った情報は、随時提供してもらわないと困るがな

「配慮させてもらおう。もつとも、お前の行動次第では、こちらも協力を打ち切らせてもらうぞ」

構わない。そうなったら、そうなったで……こちらも勝手にやら

せてもらう

電話が切れた。自分も他人のことは言えないが、香取は電話越しに話した紅に対し、随分と愛想のない人間だと感じていた。

紅の口調には、あの年頃の少年が持つていそうな明るさや快活さはない。外法使いとして、闇の中に巢食う向こう側の世界の住人たちを、常に相手にしているからだろうか。こちらの感情を見せない喋り方に臆することもなく、向こうもまた、端的に自分の言いたいことだけを述べてきた。

この関係は、事件が解決するまでの一次的なものに過ぎない。本来、自分たちは、紅のような人間が関わった事件の後始末をするのが主な仕事だ。それまでは、互いに腹の探り合いのような会話を続けながら、それぞれが事件の真相に迫って行く他にはないのだろう。

まったくもって、不便な立場であると香取は思った。この仕事を続けて長いが、単に心霊事件の痕跡を隠すだけでなく、ときに自分たちが前面に立って、事件の解決に努めねばならないときもある。その際に、紅のような人間が部下として常駐できないのは、やはり問題があると感じていた。

自分たちは、真実を突き止め、それを隠すことが仕事である。そのためには、迂闊に人前で真実を晒すような行動はできず、それ故に霊能力者との接触も、極力避けるように言われている。

だが、それならば、何の霊能力も持たない捜査員が、本当に呪いや祟りのような力と対峙せねばならなくなった際はどうするのか。この辺り、上の人間はもしかすると、自分たちを使い捨ての駒としてしか考えていないのかもしれない。

ふっ、と自嘲気味な溜息を吐きながら、香取は携帯電話をしまつて現場であるマンションの一室に戻って行った。

こんなことは、考えていても仕方がない。公安四課第零系の仕事を請け負ったときから、自分の生き方というものは決まっている。真実を突き止め、それが表沙汰になった際の混乱を防ぐことで、この国の秩序を守ること。それが、死霊管理室とも呼ばれる、自分たちの部署の職務なのだ。

現場に戻ると、未だ消えぬ血と肉の臭いが再び鼻先に漂ってきた。濃厚な死臭に一瞬だけ顔をしかめたものの、香取は直ぐに平静を保ち、部屋の奥へと消えて行った。

加瀬順平が室井の死を知ったのは、その日の夕方になったときのことだった。

生放送の本番中に、プロデューサーの西岡が変死してから早数日、いったい、何が起きているのかもわからないまま、今度はディレクターが死亡した。しかも、彼に連絡をよこしてきた宮森の話によると、室井の遺体はスタジオで西岡が死んだときの状況を思わせるようなものだったという。

宮森が、なぜこんなときに室井のマンションを訪れたのか。そんなことは、今の順平にとってはどうでも良いことだった。

室井との連絡が金曜日から途絶えていたことは、順平とて知らないわけではない。本番中は風邪をひいていた様子もあり、恐らくは見舞いにでも行ったのだろう。そして、そこで頭部の砕け散った室井の遺体を発見し、慌てて警察に電話をしたということだ。

いつたい、自分たちの周りで何が起こっているのか。あれこれと考えてはみるものの、順平にはどうにも説明できそうにない。

本当にあつた呪いの館。そんなタイトルを番組に冠し、やらせ映像を撮影したことがよくなかつたのだろうか。あの、撮影現場となつた廃屋に入つた際に、全員が強力な呪いのようなものを受けてしまつたのではないだろうか。

だが、仮にそれが本当だとしても、それらの霊的な障害は、全て御鶴木魁によつて祓われたはずだ。自分は現場に同行しなかつたが、彼と一緒に再び屋敷を訪れた室井は、その目の前で魁の力の片鱗を目の当たりにしたという。心霊現象には懐疑的な室井だつたが、そんな彼の口から語られた話だけに、返つて信憑性が高いと言えた。

もつとも、その室井自身が、今では物言わぬ肉の塊になつてしまつた。わざわざ番組子飼いの陰陽師に除霊までしてもらつたというのに、これではさぞ室井もやりきれない気持ちでいっぱいだろう。

（除霊は失敗だつたのか……。いや、そんなはずは……。そんなはずはない！！）

いつの間にか、順平は自分の震える身体を抱きかかえるようにして、独り毛布にくるまっていた。

魁の除霊が失敗だつた可能性。それは、確かに考えられなくもな

い。が、もしも除霊が失敗だったならば、その後もスタッフの間で怪奇現象が続いていたはずだ。

御鶴木魁の話によれば、あの屋敷でカメラを回していた順平は、目に見えない様々な霊を映像に収めていたという。その結果、それらの霊的な波動を受けて、身体に変調をきたしたとのことだった。そんな身体の不調も、魁が除霊を行った後にはすっかり消えていたのだが。

では、そんな除霊が済んだ後に、西岡と室井が亡くなった理由はなんだ。それも、頭部が砕け散って死亡するなどという、どう考えても不可解な死に方で。

やはり、あの屋敷の祟りは終わっていなかったのか。魁の除霊をくぐり抜け、番組スタッフの誰も気がつかないところで、息を殺して潜んでいた大悪霊。そんなものが、今になって動き出したのではないか。

考えても考えても、どうどうめぐりをしてしまう。呪いなどあるはずはない。祟りなど、この世に存在しない。そう、わりきってしまえば、どれだけ楽だろう。

いや、本当は、順平にもわかっていているのだ。今回の一連の事件がある一人の人物の怨念によって引き起こされているということを。幽霊屋敷の祟りとは関係なく、もっと何か別の存在によって、恐ろしい連続殺人が行われているということ。

そう、殺人だ。今回の事件は、ある人物の怨霊が、ミラクルゾーンのスタッフを地獄へ引きずり込もうとして行った殺人なのだ。

幽霊が人を殺すことを、果たして殺人と言つてよいのか。その言葉の是非は、今の順平には関係なかった。ただ、次は自分の番なのではないかと思うと、それだけで気が狂いそうだった。

西岡は、生放送の本番中に、スタッフの目の前で変死した。室井に至つては、自室に籠っていた状態で、原因不明の死を遂げた。これは即ち、こちらを狙っている怨霊の力からは、どこにいても逃げられないということを示している。

「い、嫌だ……。俺は死にたくない……。死にたくない……」

頭から毛布を被り、その端をしっかりと両手で抑え、順平は一人部屋の中で震えていた。気がつくと、窓の外が既に暗い。食事を摂ることも忘れて引き籠っていた結果、知らずに夜を迎えていたようだった。

突然、部屋の中に軽快な電子音が流れだした。一瞬、肩を震わせる順平だったが、それが自分の携帯電話から発せられる音だと知り、恐る恐る手に取った。

「は、はい……」

震える声で、順平は相手に返事をした。電話番号は非通知で、誰がかけているのかはわからなかった。

加瀬君だね……。久しぶり……

電話の向こう側から、何やら奇妙な声が出た。機械によって、声色が変えられているのだろうか。これでは相手が男なのか女なのか、まったく判断できない。

「だ、誰だ……！？」

酷いなあ……。忘れ……とは言わせ……。いよ

雑音が酷い。ザリザリと、なにやら鑢で削るような音が混じり、  
声がよく聞こえない。

「おい、お前は誰だ！ 誰なんだ！？」

ふふふ……。あなた……。ても……。私……。忘れ……。いよ……

「わ、忘れないって……。ま、まさか！？」

思い……。した……。？ そう……。あなた……。考え……。通り……

声が、不敵に笑って言った。ノイズに混じって聞きとりにくい部分もあつたが、順平には、既に電話の相手が誰なのか、当に見当はついていた。

心臓の鼓動が、普段よりも激しくなっているのが自分にもわかる。携帯を握る手がじつとりと汗ばみ、自分の意思とは無関係に震えている。

電話越しに、相手が声を殺して笑っているのがわかった。

嫌だ。これ以上は聞きたくない。相手の名前を聞いてしまえば、それだけで自分の精神は決壊を迎えてしまう。

私は……。かみ……。い……。あなた……。ち……。された……。神居結衣



よ……

そこまで聞いたとき、電話が順平の手からするりと抜け落ちた。

嘘だ。そんなこと、あるはずがない。神居結衣は、前任のディレクターは、半年以上前に死んでいるはずだ。

「は……ははは……」

乾いた声が、喉の奥から漏れた。やはり、今までの一連の事件は、神居結衣の怨念によるものだったのだ。認めたくない。怨念など、この世にあるはずがない。彼女の怨念の存在を認めてしまえば、それは即ち、自分が死の運命から逃げられないことを認めてしまうことに等しい。

「俺は……俺は認めないぞ……。怨念なんて……。幽霊に復讐されるなんて……。絶対に認めないぞ!!」

自分に言い聞かせるようにして、順平は独り、部屋の中で叫び声を上げていた。その瞳に、既にまともな人間の輝きはない。どんよりと光りを失って、正常な判断ができなくなっていることは明白だった。

顔を震わせ、ひきつらせながら、順平は先ほどの電話について考える。あの電話の声は、本当に神居結衣のものだったのか。機械によつて変声されたような声では、男なのか女なのか、よくわからない。

そうだ。あれは、神居結衣の怨霊などではない。あれは、神居結衣の怨霊を語る、何者かの仕業なのだ。そんな人物に、順平は一人

だけ心当たりがある。あいつならば、変声機を使って声を変えることも、造作なくやってのけるはずだ。

「あいつだ……。あのとき、俺達と一緒に仕事をした、あいつが犯人だ……」

亡くなった西岡と室井、それに自分に共通する秘密を抱える者。その相手の顔を思い浮かべ、順平はにやりと笑って立ち上がった。

「待つてろよお、古澤……。俺は、絶対に殺されねえ……。お前みたいな裏切り者に、殺されてなんかやるもんかよお……」

ふらふらと、まるで何かに取り憑かれたようにして、順平は台所の方に向かって歩いて行つた。焦点の合わない目で、時折、同僚の古澤正昭の名を呟きながら、乾いた笑い声を上げていた。

ハノ刻 刹那

都会の外れ、住宅街の中に佇む小さなアパートの一室で、古澤正昭は自分の携帯電話を重苦しい面持ちで見つめていた。

正昭に奇妙な電話がかかって来たのは、今から一時間ほど前のことだ。ノイズが酷く聞きとり難かったが、声の主は、正昭の知る女性の名前を騙っていた。

神居結衣。半年ほど前に亡くなった、以前に 奇跡空間ミラクルゾーン のディレクターを務めていた女性だ。彼女が亡くなってから、番組のディレクターは室井が引き継ぐ形となり、自分たちはそのままスタッフとして残留した。

そんな彼女から、今になって電話をもらう。常識では、およそ考えられない話である。普通に考えて、誰かが彼女の名前を騙っている。そう思わなければ、正直なところやっていけない。

だが、そんな考えとは別に、正昭は自分に電話をかけてきた声の主が、本物の神居結衣ではないかという疑念も捨てきれないでいた。

数日前、西岡が亡くなるきっかけとなってしまった、あの生放送あれで使う予定の幽霊屋敷の映像を撮影しに行った後、正昭は奇妙な女の霊に悩まされることになった。天井から、ロープで首を吊った黒髪の女が現れて、じつとこちらを見つめてくるのだ。そんな悪夢を見た翌日、番組のレギュラーの一人である陰陽師、御鶴木魁の霊視を受けたことは記憶に新しい。

魁の霊視によれば、女の霊は幽霊屋敷の中で自殺した自縛霊との

ことだった。魁は室井と共に再び屋敷へと向かい、そこで様々な幽霊を除霊し、悪夢は完全に終わったかに思われていた。

自分の夢に現れた、あの首吊り自殺をした女。あれが神居結衣であつた可能性は、ほぼゼロだ。なぜなら、あの女の幽霊は、正昭が知る生前の神居結衣とは似ても似つかないものだったのだから。

除霊は成功した。首吊り女の霊はいなくなり、自分は悪夢から解放された。そう信じていた矢先に、プロデューサーとディレクターが相次いで変死。果ては、亡くなった女の名前を騙る、謎の電話までかってくる。

これはもう、間違いないだろう。自分たちは、神居結衣の霊に崇られている。なぜ、今になって彼女の霊が行動に出たのか、それは正昭にもわからない。ただ、このまま放っておけば、いずれは自分も西岡や室井のように、無残な変死体になる可能性は否定できない。

「しかし……。仮にこれが祟りだったとして……いったい、俺たちに何ができるよ……」

ふっ、と力なく息を吐いて、正昭は携帯電話を机の上に置いた。

自分には、幽霊と戦う力など何もない。御鶴木魁のような陰陽師に頼るという手もあるが、今から連絡をしたところで、この夜更けに果たして彼が来てくれるだろうか。

駄目もとで、警察にでも相談しようか。一瞬、そんな考えも頭をよぎったが、正昭は直ぐに首を振って、今しがた浮かんできた考えを否定した。

警察なんか話をしても、頭がおかしくなったと思われるだけだ。それに、もしも警察に話をしてしまえば、それは自分たちが過去に行ってきた所業までも、白昼の下に晒すことになってしまいかもしれない。自分と西岡、それに室井や順平たちの中に秘められた、忌まわしき過去の大罪を。

やはり、警察に話をするのは駄目だ。ここは一つ、今晚をなんとか無事に乗り切って、明日の朝一番で魁に連絡をしよう。

そう、正昭が思ったとき、唐突にインターホンの音が鳴り響いた。一瞬、肩をすくめ、恐る恐る後ろを振り返る。インターホンの音は止むことなく、ひっきりなしに鳴っている。

まさか、神居結衣の霊が、自分を直接殺しに来たのか。そんなことはないと思いつつも、気づけば正昭の右手には、愛用のゴルフクラブが握られていた。

こんなものが、幽霊相手に役に立つのか。はっきり言って保証はないが、気休め程度にはなるだろう。

ゴルフクラブを片手に、正昭はそつと玄関の扉に足を忍ばせた。しかし、覗き窓から外の様子を窺うと、果たしてそこに立っていたのは、正昭の考えていたような女の幽霊などではなかった。

「加瀬……」

扉の向こうに同僚の姿を見て、正昭は思わず呟いた。

覗き窓から見たのは、カメラマンの加瀬順平だった。こんな夜中に、いったい何のようだろう。少々訝しく思ったものの、正昭は

扉のチェーンロックを外し、順平を部屋の中に招き入れた。

「おい、どうしたんだよ。こんな夜中に……いきなり、連絡もなく来るなんてさ」

玄関の扉が閉まると同時に、正昭は順平に向かって問い質した。まさか、彼も自分と同じように、神居結衣からの電話をもらったのではないか。そう思ったからだ。

「へへ……。どうした、だつて？ お前だつて、わかってんだろ？ 俺が、わざわざこんな夜更けに、お前のところまでやってきた理由を……」

「な、なんだよ、それ。そんなこと、急に言われたつて、わかるわけ……」

「とぼけんじゃねえよ！ 今日、俺のところに神居結衣の名を騙って電話をしゃがったのは、お前だろう！ いや、お前に違いねえんだ！――」

いきいなり怒鳴りつけられて、正昭は何が何だかわからなかった。

自分が神居結衣の名を騙り、順平に電話をかけた。そんなこと、当然のことながら思い当たる節はない。

そもそも、神居結衣からの電話をもらったのは、こちらも同じなのだ。それなのに、何を勘違いして、順平はそんなことを言うのだろ。慌てて説明しようとする正昭だったが、順平の口が、それを許さなかった。

「俺にはわかってんだよ。あの電話越しの声が、お前だったってことぐらいはな。あの時の秘密を握っているのは、もう俺とお前しかいねえ。だったら、お前が俺を殺しちまえば、もう誰も秘密を喋る可能性のあるやつはいなくなる……。そう思っつて、西岡さんや室井さんも殺したんじゃないのか？」

「ちょ、ちよつと待てよ！　いったい、何の話だ、加瀬！」

「何の話だあ？　てめえ……。俺がまだ、お前の仕組んだトリックに、気づいてないとも思っただかあ？」

首を横に傾け、順平の身体がゆらりと揺れた。内気で温厚なカメラマン。そんな印象は、既に順平の中から消えていた。

「俺のどこにかかってきた電話の声……。あれ、変えたのお前だろ？　音響やつてるお前なら、自分の声をかえて電話するなんて、簡単だろうからなあ……」

「電話の声！？　それじゃあ、やっぱりお前も、あの電話を……」

なんとということだ。神居結衣からの電話をもらったのは、自分だけではなかったのだ。あの声の主は順平のところにも電話をかけ、しかも順平は、その犯人が正昭ではないかと疑っている。

「お前が俺を殺そうつてんなら、俺だつて考えがあるんだよ……。どんな手を使ったか知らねえが、西岡さんや室井さんみたいな殺され方するのは、まっぴらごめんだからなあ……」

「お、落ちつけ、加瀬！　あの電話をかけたのは、俺じゃない！　誰か、俺たちを陥れようとしている人間か、あるいは神居結衣の霊

そのものが……」

「黙れよ！ だったら、その手に握ってる獲物はなんだ！ そいつで俺の頭をかち割ろうって……そう思ってたんじゃないのか！？」

順平に言われ、正昭はハツとした面持ちで、自分の右手に握られたゴルフクラブに目を向けた。その瞬間、冷たく鋭い何かが腹に突き刺さり、正昭の身体に恐ろしいまでの激痛が走った。

「あつ……があああつ！！」

ゴルフクラブを取り落とし、身体をくの字に曲げて、正昭はその場にへたり込んだ。腹が熱い。生温かい感触が両手に伝わり、目の前の床に赤いものが広がってゆくのが見える。

「死ねよ、古澤！ 俺は絶対に死なねえ！ 俺は絶対に殺されねえ！ 俺は……俺は生き残るんだあ！！」

焦点の合わない目で、順平は手にした包丁を何度も正昭の背中に降り降ろした。その度に、赤い鮮血が辺りに迸り、順平の身体を徐々に染めてゆく。

やがて、目の前に倒れている正昭が完全に動かなくなったところで、順平はがつくりと腰を折ると、実に満足そうな表情になって笑っていた。光りを失い、灰色に淀んだ瞳で天井の一点を見つめ、その口からは乾いた笑い声が漏れている。

自分はもう、誰かに殺されることなどない。神居結衣の霊を騙る者は死に、自分は助かった。そう、助かったのだ。



「は……はは……。俺は勝った……勝ったんだ……」

これから先、正昭を殺したことで、自分がどうなってしまうのか。そんなことは、今の順平にとってはどうでもよかった。ただ、目の前で冷たくなっている元同僚だった物を横目に、自分だけが死の連鎖から逃げられたと思い、ひたすらに笑い続けていた。

月曜日になると、街は急にいつもの顔を取り戻す。祝日の、親子連れや恋人たちからなる人混みとはまた違う、ビジネスマン達が行き交うそれに姿を変えるからだ。

都会の真ん中では、その傾向は特に強い。祝日の人混みの中にある顔の多くが楽しい笑顔であるのに対し、平日のそれは、実に無機的で機械的なものになってしまう。お得意の取引先に見せる営業スマイルは持ち合わせていても、自分自身が、仕事の最中に本気で笑うことなど考えられない。そんなビジネスマン達の生き様が、如実に反映されている。

窓辺から、時折聞こえる車の走行音。それに、どこか遠くから断続的に響いてくる、工事現場の作業音。それらの音を聞きながら、犬崎紅は険しい表情を崩さないままに、部屋の中をぐるぐると回っ

紅が今いるのは、雪乃のマネージャーである高槻のマンションである。休日が終わわり、月曜日になっていたが、紅は照瑠や亜衣と共に、火乃澤町に帰るという選択をしなかった。二人は紅の出席日数のことを気にしていたが、そんなことは、今の紅には些細なこと

しかなかったのだから。

呪いの館の潜入映像を生放送で流し、プロデューサーの変死によって放送中止となった番組、ミラクルゾーン。そのカメラマンを務めていた加瀬順平が、同僚の音響スタッフ、古澤正昭を殺害した。そのことを紅が知ったのは、今日になってからのことである。

事件をニュースで聞いたとき、紅は直ぐに、事態が最悪の方向に向かっていることを理解した。プロデューサーの変死に始まる一連の騒動。その関係者が、とうとう呪いや祟りとは関係なく、自ら手を下すという形で人を殺したのだ。

順平が正昭を殺した理由。それは、紅にもわからない。呪いの中には人間の精神を錯乱させ、正常な判断力を喪失させるものもある。そういった類の呪詛を受けて、順平が発狂してしまった可能性。これも、まったくくないと言えは嘘になる。

だが、それ以上に紅が心配していたのが、呪いの伝染とも言える自己暗示だった。

呪いや祟りは伝染する。呪詛の話に詳しい者にとっては、これは別に不思議なことでもなんでもない。ただ、病気のように感染するわけではなく、ましてや霊的な何かによって伝染するわけでもない。

呪いの伝染。それは、強烈な自己暗示により、呪いに関わった者達が自ら破滅の道を選択してしまうことである。自分は呪われている。自分は祟られている。そう、勝手に思い込むことで、一種の強迫観念のようなものに取り憑かれ、最後は自ら命を経ったり精神崩壊を起こして奇行に走ったりするようになる。

今回の事件の発端は、心霊番組の生放送中にプロデューサーが変死したことだ。田舎の村で起きた変死事件であればいざ知らず、全国ネットで放送されるようなテレビ番組の関係者が、収録中に変死した。しかも、その後を追うようにしてディレクターまでもが変死し、果てはカメラマンが同僚を刺殺するという凶行に出た。

ここまで異常な事態が頻発していれば、人々の間に呪いが伝播するのは時間の問題だ。ここに来て、公安の香取が気にしていたことが、改めて現実味を帯びて来た。

公安四課第零系。別名、死霊管理室。彼らの仕事は心霊事件の隠蔽だが、それは何も、国家が幽霊の存在を認めたくないというだけではない。

霊的な存在の有無に関係なく、オカルトな事件の類によって、社会に無用な混乱が起きることを防ぐこと。それこそが、彼らが結成された本来の目的ではないだろうか。呪いの伝染によるパニックが懸念される今、紅にはそうと思えなかった。

「それにしても……」

部屋の中を歩き回る足を止め、紅は口元を隠すようにして手をやった。

今回の事件は、色々とわからないことが多過ぎる。昨日、室井のアパートを訪れた際に、ADの宮森が口にしていた神居結衣という女。高槻から改めて話を聞かされたが、彼女がかつてミラクルゾーンの制作に関わっていたことと、既にこの世を去っていること以外には、これと言って目ばしい情報も得られなかった。

今回の事件は、果たして本当に、その神居結衣という女の祟りなのか。高槻の話では、宮森は彼女の霊が復讐を始めたのではないかと、本気で勘繰っている様子だったという。現に、死亡した室井の頭部から神居結衣の指輪が発見されたことから、彼女が事件に何か関わっているのは間違いない。

だが、それにしても、やはり今回の事件は色々と腑に落ちない点が多過ぎる。神居結衣の指輪にしても、なぜ今になって、室井の頭部から発見されたのだろう。室井の死因が西岡の死因と同じならば、西岡が亡くなった際にも、彼の身体の中から神居結衣の遺品が発見されてもおかしくはない。混乱の中、それどころではなかったのかもしれないが、二人の死に方は似ている部分と異なる部分を併せ持っている。

また、それ以前に、そもそも神居結衣の遺品が被害者の体内から発見されたという事実。これが、紅にはどうにも理解し難いことだった。

普通、死んで悪霊になった存在が人を祟るのであれば、対象者の身体に憑依するのが手っ取り早い。その上で、体内から魂を削り殺し、徐々に衰弱死させてゆくのが普通のやり方だ。今回の事件のように、いきなり頭をふっ飛ばして殺害するなど、そんな殺し方のできる霊などそういない。

仮に、生前の神居結衣が一種の超能力的な力を持っていたとしても、それでは対象を殺すのに時間がかかり過ぎている。

自分の駆る犬神、黒影も、呪殺に用いようと思えばいくらかでも用いることは可能だ。その気になれば、憑依対象の内臓を体内から破壊してしまうような酷い霊傷を与えたり、魂そのものを焼き尽くし、

肉体には一切の傷をつけずに殺したりすることもできる。

だが、それに比べて、神居結衣の怨念はどうだろう。確かに、二人の人間の頭を吹き飛ばしたのが彼女の力なのであれば、その力は下級の神にも匹敵する恐るべきものだ。しかし、それにしては、あまりに場所を選ばずに、無節操に殺戮を繰り返しているようにしか思えない。わざわざ目立つ人前で、第一の犠牲者である西岡を殺した理由がわからない。

それに、室井の体内から発見された指輪。しつこいようだが、あれがいったい室井の死と何の関係があるのか。今まで自分が見たり聞いたりした、呪いや祟りの話を全て合わせて考えたが、紅にはやはり納得のゆく答えが見つからなかった。

「くそっ……！ この不自然なまとまりのなさ、いったい何なんだ！！」

苛立ちを隠しきれず、紅は側にあつた本棚に向かって無造作に拳を叩きつけた。ゴツ、という鈍い音がして、本棚が揺れて拳に痛みが走る。自分でも思った以上に強い力で叩いてしまったのだろう。思わず手を引っ込めると、なにやら本棚の直ぐ下の方に、一冊の本が転がっているのが目に付いた。

先ほど、本棚を叩いたとき、その衝撃で落としてしまったのだろうか。何気なく手をとってみると、どうやらアイドルの写真集のようだった。

「これは……長谷川の写真か」

本の中身を開き、紅は適当に読み流すようにしてページをめくつ

た。アイドルの写真集などに興味はなかったが、写真そのものは、よく撮れていると思う。アイドルの写真集など、水着や際どい場面ばかりを収めたものだと思っていたが、この写真集は、そこまでいやらしい印象を与えるものではない。

そういえば、自分も故郷の村にいたときに、主に野山の生き物を中心にカメラに収めていたことがある。もっとも、今ではその写真やカメラを紅が与えてやった少女も、既にこの世に生きてはいない。彼女の死は、自分が闇の世界の住人と本格的に戦う決意をさせたものであり、今もなお自分の心を縛りつけている。

気がつくと、紅は両目を閉じたまま、本を片手に回想に浸っていた。が、部屋の扉が開く音がしたために、直ぐにそれは終わりを告げた。

「やあ、犬崎君。ちょうど、お茶が入ったんだ。少し、休憩したらどうだい？」

扉の向こう側から、ティーカップを乗せた盆を持った高槻が姿を見せた。いつもは雪乃と一緒にテレビ局へ出かけているが、今日の仕事は家でもできる事務的なものばかりだから。そう言って、紅と一緒に事件の謎を追うことに協力してくれていたのだ。

ちなみに、肝心の雪乃は、今日は体調不良ということで休みを貰っている。まあ、これも方便のようなものだが、少しでも自由に動きたいのだから仕方がない。春先で、特番の収録などが立て続かないことで、なんとか休みを取れたのは幸いだった。

「おや……？ それ、雪乃の写真集じゃないか。犬崎君も、そういうのに興味があったのかい？」

紅が手にしている本を見て、高槻が意外そうな顔をした。同じ高校男子でも、紅はアイドルに夢中になるような人間ではない。そう思っている部分があったからだ。

「いや、別に興味があったわけじゃない。ただ、さっき本棚から落としてしまったな。ちょっと気になったんで、少し中身を見てみただけだ」

「なんだ、そうだったのか。僕はてつきり、君が雪乃のファンの一人として、彼女を応援する気になってくれたのかと思ったのに」

「期待させて悪かったな。だが、心配するな。俺は長谷川達の曲を進んで買うようなことはしないが、何か変な事件が周りで起きたら、その解決には全力を尽くさせてもらう。それが俺にできる、あいつらに対しての最良の関わり方だからな」

「そうか……。でも、そう言ってくると、僕も嬉しいよ。熱狂的なファン……っていうのとは少し違うんだろうけど、純粹にありがたいことは確かだしね」

相変わらず、愛想のない少年だ。そう思った高槻だったが、あえて口には出さなかった。

紅の言葉が、照れ隠しから来るものなのか、それとも単に不器用なだけなのか。そのどちらかは、高槻にもわからない。ただ、紅が雪乃に何かあった際、力を貸してくれるということだけは確かである。今回のような事件があったときには、何の力も持たない高槻にとって、この申し出は素直に嬉しかった。

「それにしても……」

再び写真集をめくりながら、紅が何の気なしに口を開いた。

「意外と、よく撮れている写真だな。こうして見ると、スライドシヨールを見ているような気にさせられる」

コマ送りの映像を見るようにして、紅はパラパラとページをめくる。最後の方は夜の場面になっており、花火を背景に縁側に佇む浴衣姿の雪乃が映っていた。

「これは……？」

突然、紅がページをめくることを止め、本の中から白い紙きれを取り出した。どうやらコンビニのレシートのようで、日付は随分と前のものになっていた。

「こんな物が間に挟まっていたんだが……これは、あんたが挟んだのか？」

例の如く、ぶっきらぼうな口調で紅が言った。レシートを受け取った高槻は、しばらくそれを眺めていたが、やがて急に何かを思い出したようにして手を叩いた。

「あつ、思い出したよ。これ、僕がしおり代わりに使ったレシートだ。こんなところに挟んだまま、忘れて本を片付けていたんだな……」

「しおり代わり？」



「そうだよ。昔から、僕はその辺にある物をしおりに使ってしまう癖があつてね。いつのことは詳しく思い出せないけど……たぶん、雪乃の写真集を眺めていたときに、仕事の電話か何かが入ったんだと思う。それで、適当にその辺にあったレシートを挟んで、本を閉じたまま本棚に戻してしまつたんだ」

「なるほど。仕事に追われて、しおりを挟んだ事実を忘れてしまつたというわけか。まあ、よくある話だな」

「まっただよ。人間の記憶なんて、曖昧なものだからね。こうやって間に挟んだまま忘れてしまつと、意外と自分でもわからなくなつてしまうものなんだな。」

テーブルに紅茶の入ったカップを並べながら、高槻はすこしばかり苦笑しながら語っていた。それを見た紅も、軽く笑って本を閉じた。

このまま考えていても、今はどうどう巡りで話にならない。時間が無尽蔵にあるわけではないが、ここは一つ、高槻の勧めに乗っておき、休息を取ることも大事だろう。

ページを閉じた写真集を目の前の本棚に戻そうと、紅はそつと手を伸ばす。だが、写真集が本棚の所定の位置に戻ろうとしたその時、赤い二つの瞳の奥に、何かに閃いたような輝きが宿った。

突然、本を引き抜いて、紅は再びページを開いた。先ほどと同じように、いや、それよりも更に早く、何度も写真集のページをめくってゆく。

「ちょ、ちよつと犬崎君!? いったい、どうしたって言うんだ!

？」

紅茶を並べる手を止めて、高槻も紅に尋ねた。が、紅はそんな高槻の言葉など完全に無視し、ひたすらに本のページをめくっているだけだ。

様々な角度から撮影された、実に多彩な長谷川雪乃の写真たち。ページを素早くめくること、一種のスライドショーを見ているような感覚に陥ってくる。白いワンピース姿で砂浜を駆けまわる姿から、数枚の水着写真を経て、最後は浴衣で夕涼みをする姿まで。夏の日の一日の様子が、誰かの走馬灯でも覗いているかのように現れては消えて行く。

やがて、全てのページを閲覧し終え、紅はそつと写真集を閉じた。そして、目の前で呆気にとられている高槻を他所に、確信めいた様子で頷いた。

「なるほど……。写真……間に挟む……。その手があったか!!」

「な、なんだい、急に。写真がどうか、間に挟むとか……。それ、今回のことに、何か関係があるのかい？」

「ああ、大ありだ。プロデューサーの変死した原因……。そいつが何なのか、少しつかめた気がする」

「ええっ！ ほ、本当かい!？」

「嘘を吐いてどうする。だが、それでもまだ、こいつは俺の想像に過ぎない。俺の考えをはっきりさせるためにも、今はもう少しだけ証拠が必要だ」

閉じた本を落ちついた様子で本棚に戻し、紅は赤い瞳だけを高槻に向けた。あまりに急なことで、高槻の方は紅の話についていけないようだった。

出された紅茶を無視し、紅は携帯電話を取り出すと、そのアドレス帳から嶋本亜衣の番号を探しだす。恐らく、今は授業中のはずだが、事態が事態だけに急を要する。

数秒の間、耳元でコール音を聞かされた後、電話の向こうから聞き覚えのある声がした。忘れようにも忘れられない、やたら甲高くテンションの高い声。知っている者からすれば、名乗らなくとも相手が誰なのか直ぐにわかる。

どうも〜！ 亜衣ちゃんです！！

「嶋本か。今は授業中だと思ったが……話をしても、問題ないか？」

うん、平気だよ。こっちも今、授業が終わったところだしね

「だったら、話は早い。俺は今、高槻さんのマンションにいるんだが……そこに、一つ送ってもらいたいものがある」

送ってもらいたい物？ それ、何なのさ

「お前が録画していた、例の心霊番組のビデオだ。速達で、着払いにしてくれても構わない。できれば明日までに、東京に着くよう手配しろ」

明日までえ！ そんな、無茶苦茶なあ！！

「文句を言うな。プロデューサー変死事件の謎を解く鍵は、そのビデオにある。事態が最悪な方向に流れている以上、そちらに戻ってビデオを確認している暇はないんだ!!」

いつになく焦った口調で、紅は電話の向こうにいる亜衣に向かって叫んでいた。できることなら、今この場で亜衣の録画したビデオを確認したい。そう言わんばかりの空気を漂わせていた。

むう、仕方ないですなあ。それじゃあ、悪いけどそっちの住所を教えてくださいませんか？ 後、本当に着払いで送りますから、その辺は恨みっ子なしですよ

「問題ない。では、今から住所を言う。一度しか言わないから、ぼんやりして聞き逃したりするんじゃないぞ」

最後まで念を押す形で言い、紅は亜衣に高槻の家の住所を告げた。送り先を言い終えた後、紅は無造作に電話を切り、それをポケットの中に押し込んだ。

これで、第一の準備は整った。後は映像を確認するだけだが、それだけでは事件を解決に導けない。自分の予想が正しいと信じるならば、もう少しの下準備が必要となる。

「高槻さん。悪いが、車を出してくれないか？」

コートかけにあった黒い外套を身にまとい、紅は外出の準備を整える。折角、紅茶を入れたのに。そんな抗議の声が聞こえてきそうだったが、今は一刻の時間も惜しかった。

「犬崎君。今度はいつたい、どこに行くつもりなんだ？」

「わからない。だが、探さねばならない相手がいる。そいつに会えば、今回の事件が呪いなのか祟りなのか、全てがはつきりするはずだ」

「探さなければならぬ人かい？ それ、いつたい誰なんだ？」

早くも玄関に向かって歩き出した紅を、高槻が慌てて止めた。紅が振り返り、血の様に赤い瞳で見据えてくると同時に、その口がゆつくりと開かれる。

「神居結衣だ……。あんたが言っていた……。例の番組で以前にディレクターをやっていた女だよ」

昼下がりという時刻は、時に言い様のない気だるさを運んで来ることがある。

自分の自宅を兼ねる事務所の一室で、御鶴木魁はいつもの通り、至福の一時を楽しんでいた。海外から取り寄せた高級な紅茶と、行きつけの洋菓子屋で買ったケーキを食べるのが彼の日課だ。

陰陽師などという仕事をしているが、緑茶に和菓子など古臭いと魁は思っていた。自分のやりたいことを、やりたいようにやって生きる。太く短い人生を楽しむというのが、彼の性分である。

唯一、気になることと言えば、甘い物の食べ過ぎによる生活習慣病である。もつとも、そんなことを気にする必要もなく、魁の身体は至って健康そのものだった。生まれつき、なぜか太らない体質の人間がいると言われているが、もしかすると、彼自身もそういった者の仲間なのかもしれない。

「ふう……。しかし、どうも大変なことになってきたみたいだねえ」

紅茶を飲む手を休め、魁が傍らに置いてあった新聞を片手にして言った。彼の前には、弟子の弓削総司郎が座っている。魁と同じく紅茶を楽しんでいるようだったが、こちらはともすれば遠慮がちに様子を窺うようにして飲んでいる。

「先生……。いったい、何があつたんつすか？」

サングラスの奥に、二つの暗い闇を佇ませ、総司郎は魁に尋ねた。世界を見るための光りを失った彼にとっては、外界の情報は感覚的な物を通してしか得られない。テレビのような音が出るものならば話は早い、新聞に書いてある内容は、当然のことながら読むことができない。

「総ちゃん、俺たちが追ってる今の事件なんだけど……。どうやら、ディレクターの室井さんも亡くなったみたいだね。昨日、自宅のマンションで亡くなっているのを、仕事仲間が見つけたってさ」

「ほ、本当っすか！？ それじゃあ、まさか室井さんも……」

「ああ、そうだよ。新聞には変死としか書いていないけど、プロデューサーの西岡さんと同じ死に方だった可能性は十分にあるね。しかも、今回はそれだけじゃなくて、もう一つ悪いニュースがある」

「もう一つ……ですか？ まさか、他の番組スタッフの人も、軒並み変な死に方したってんじゃない……」

「その、まさかに近い事態だよ。どうやら、俺たちがまったりしている間に、事件はマズイ方向に動き出したみたいだね」

新聞を置き、魁は珍しく難しい顔になっていた。普段の飄々とした表情からは想像もできない、瞳の奥で光る鋭い眼光。視力を失った総司郎でさえ、今の魁を包む空気から、彼が本気になっているのは容易にうかがい知ることができる。

御鶴木魁が本気になるとき。それは即ち、彼が自分のプライドをかけて、己の敵と認めた者と戦うことを決意したときだ。いつもは冗談のような態度ばかり取っているが、本気になった魁の恐ろしさは、何よりも総司郎自身がよく知っている。

彼がここまで本気になることなど、奇跡空間ミラクルゾーンの撮影で心霊スポットに赴いたときでさえなかった。それは、あの幽霊屋敷の探索のときでさえ例外でない。あの時も、魁はその力の半分程度しか見せぬまま、巨大な蛇の霊を軽くいなして見せたのだから。

「この、新聞記事に書いてあるんだけどさ。なんでも、カメラマンの加瀬さんが、音響スタッフの古澤さんを刺殺したってさ。加瀬さんは、ほとんど錯乱に近い状態にあるみたいだから、警察でも目下取り調べ中ってところかな」

「なっ……そ、そんな！ それじゃあ、俺たちが幽霊屋敷の幽霊を除霊したのって、なんの役にも立たなかったってことっすか！？」

「残念だけど、そう言うことになるね。まったく……今回の事件の黒幕とやら、随分とこつちを馬鹿にしたことをしてくれるじゃないか……」

下唇を噛んだまま、魁は口元を覆い隠すようにして両手を組んだ。

自分の関わった心霊番組で、立て続けに三人の死者が出る。しかも、幽霊屋敷に巣食う自縛霊を除霊して、安心していた矢先の隙を突く様にして。

プライドの高い魁にとって、これは放ってはおけない問題だった。今回の件、あの幽霊屋敷の幽霊どもとは、恐らく何の関係もない。屋敷に巣食っていた幽霊たちは、しがない浮遊霊も含め、完璧に除霊を終えたはずだ。

だが、噂というものは、こちらの意思など関係無しに囁かれるものである。テレビ局側が緘口令のようなものを布いているとはいえ、ここまで騒ぎが大きくなったのだ。被害者の全員が心霊番組の撮影スタッフであり、しかも魁自身が除霊に関わった人間であるとすれば、予期せぬ風評被害まで起こりかねない。

こうなったら、もう手段を選んではいられない。向こうがその気ならば。こちらにも考えがある。現代を生きる陰陽師の力を舐めたこと。事件の黒幕が何者なのかは知らないが、そのことを、身をもつてわからせてやる。

「出掛けるよ、総ちゃん……」

顔の前で組んでいた手を両膝に置き、魁はスツと立ち上がった。



行く当てなど決まっていなかったが、ここでいつまでもお茶を飲んでいられるわけにもいかない。まずは情報を集め、事件の裏に潜む何者かをいぶり出す。こちらの力を見せつけてやるのは、その後でも十分だ。

久々に、本気で仕事にかからねばならないこと。目の前の魁の様子から、それは総司郎もわかっていた。テーブルの上に慌てて食器を置くと、総司郎もまた出掛ける仕度を整える。目で物を見ることはできなかったが、感覚を頼りに動くことは、勝手を知る部屋の中では楽だった。

「それじゃ、行こうか、総ちゃん。でも……その前に、どうやらお客さんが来たようだ」

スーツの襟を直したところで、魁がふっと窓辺に向かって呟いた。その言葉に、総司郎もまた窓の方へと顔を向ける。そこには誰の姿も見えなかったが、予期せぬ客人の来訪を、二人はしっかりと気づいていた。

「いいかげん、出てきなよ。さつきから、俺たちのことを見張っていたんだろう？」

懐から退魔の呪文が刻まれた鉄扇を取り出し、魁がそれを窓に向けた。すると、窓からなにやら黒い影のような物が染みだして、それは瞬く間に流動的な球体の姿を形作る。

「先生……。こいつは……」

総司郎が、腕をまくって身構えた。その腕に刻まれた梵字の刺青が、彼の感情に呼応して赤く光った。

「ああ、間違いない。こいつは、あの少年が使っていた犬神だね。どうやら、俺の式神を捕まえたときに、俺の臭いも記憶していたらしい」

「犬神っすか……。確か、四国の方には、そんな神霊を使う連中がいるって話を聞いたことがあります。外法を使って人を守る連中もいるみたいっすけど……。中には、呪いの代行をするような連中もいるって噂っす」

「詳しいね、総ちゃん。でも、安心して構わないよ。どうやら今日は、こいつも俺と戦いに来たってわけじゃなさそうだからね」

鉄扇を閉じ、それを懷にしまい直すと、魁はそつと手を伸ばして黒い球体に触れた。一瞬、球体の表面がどろりと歪んだように思われたが、直ぐに元通りの形となり、ゆらゆらと部屋の中で揺れていた。

「先生……。そいつ、何て言ってるんっすか？」

黒い球体と霊的な交感を続ける魁の横で、総司郎が不安そうに見つめている。もつとも、彼の場合は既に瞳を失っているため、見つめるというのは正しくない。霊的な力、魂の有無を感じ取る第六感。それを最大まで用いて意識を拡張し、周りの空気を感じ取っているに過ぎない。

一方、そんな総司郎の不安を他所に、魁は実に楽しそうな笑みを浮かべていた。やがて、その指を引き抜いたところで、魁は顔だけを総司郎の方へと向ける。そこには先ほどのような怒りや苛立ちはなく、いつもの魁の見せる余裕に満ちた笑顔があった。

「なるほど、こいつは面白い。あの少年、どうやら今回の事件のトリックに気がついたみたいだね」

「ほ、本当っすか!？」

「彼が自分の犬神を使って、わざわざメッセージを運ばせたくらいだ。恐らく、信憑性は高いだろうね。それに、何やら俺にも手伝って欲しいことがあるみたいだし……。今回の黒幕、こっちで探そうと思ってたけど……このまま彼の話に乗って、美味しいところだけいただくのも悪くないね」

同意を求めるような視線が、総司郎に向けられた。相手の魂の揺らぎから、いち早くそれを察した総司郎は、無言のまま魁に頷いて答えた。

翌日は、生憎の雨だった。

スタジオでの収録を終え、篠原まゆは局内にある会議室の一つへと向かっていった。もっとも、これから番組の打ち合わせというわけではなく、雪乃を通して犬崎紅に呼び出されたからだだったが。

紅の話では、例の連続変死事件について、今から話したいことがあるということだった。急な話だとは思ったが、まゆも当事者の一人ではある。事件の行末が気にならないと言えば、それは嘘になっってしまう。

「すみません。遅くなりました……」

遠慮がちに会議室の扉を開ける。つい、敬語になってしまふのは、仕事の空気が未だ身体から抜けていないからだ。それと、紅に対する遠慮のような気持ちも、少しだけ含まれている。

「遅かったな。まあ、これで今回の関係者が、一部を除いて頭を揃えたわけだ」

横を見ると、部屋の隅の壁にもたれかかるようにして、紅が腕組みをしたまま立っていた。その赤い瞳でにらまされると、思わず委縮してしまいそうになる。照瑠から、紅は本当は優しい人間だと聞かされてはいたが、やはり苦手意識というものは、そう簡単に抜けるものではない。

「とりあえず、適当な場所に座れ。話は全て、それからだ」

腕も指も一切動かさず、紅は目だけでまゆに訴えた。愛想のない言われ方するのは腹が立ったが、ここで口論をしても仕方がない。言われるままに椅子に腰かけ、まゆは辺りの様子を見回した。

部屋の中にいる人間は、自分も含めて全部で九人。事件当日に知り合った雪乃と、そのマネージャーの高槻。自分に代行を頼んで来た少女、凍呼もいる。

陰陽師の御鶴木魁と、その弟子の弓削総司郎の姿もあった。彼らもまた、この事件には少なからず関係がある。紅と初めて出会った日の夜、テレビ局のスタジオで互いに険悪な雰囲気になっていたのは、記憶に新しい。

一方、紅の側に座っている男は、まゆも初めて見る顔だった。年齢は、三十代後半といったところだろうか。紅や総司郎とはまた違う、なんだか近寄りがたい雰囲気を全身から放っている。不良やチンピラ、それにヤクザなどが持っているものとは、まったく異質で強烈なものだ。

いったい、あの男は何者なのだろう。男の正体が気になったまゆだったが、残念ながら、それを本人に問うほどの勇氣はなかった。男と視線が合いそうになったところで、まゆは思わず顔を背け、残る一人に目をやった。

最後の一人はADの宮森だ。番組スタッフの三人が死亡し、一人は殺人罪で塀の中。そんな混沌とした状況に置いて、一番下っ端の人間だけが生き延びる。なんというか、随分と皮肉な話もあったものだとまゆは思った。

「さて……。とりあえず、何から話したのかというところだが……」

壁から身体を離し、紅が頭を掻きながら背を伸ばした。その場に  
いる全員の視線が、一斉に紅に向けられる。

「まず、最初に言っておこう。今回の事件の全貌だが……こいつは、決して祟りなんかの類じゃない。幽霊屋敷の霊どもの仕業でも、神居結衣とかいう女の霊の仕業でもな」

一瞬、部屋の中にいた何人かの目が丸くなった。雪乃とまゆ、それに凍呼の三人は、思わず顔を合わせて固まってしまった。

魁と、それに先ほどの名前を知らない男だけは、随分と落ち着き払った様子で話を聞いている。もしかすると、ここに来る前に紅の方から、ひとしきりの説明を受けていたのかもしれない。

「そもそも今回の事件は、生放送の本番中にプロデューサーが変死したことが発端だ。しかも、聞くところによれば、いきなり眼球が膨らんで、頭が吹っ飛ぶという凄まじい死に方だったようだな」

「そいつは俺も知っているよ。なにしろ、番組の収録中に目の前で見たんだからね。君たちも、あのときは一緒のスタジオにいたけど……あれ、やっぱり見ていたんだろ？」

A Dの宮森が、魁とまゆの方を交互に見て尋ねた。魁は何も言わなかったが、まゆは軽く首を縦に振って返事をした。

「この話を聞いたとき、俺は妙に引っ掛かる物を感じていた。人間の頭を吹っ飛ばすような力を持つ者など、そうどこにでもいるものじゃない。それが、幽霊であつても、人間であつても同じことだ。呪いにしろ、祟りにしろ……たかだか一人の人間の怨念で、ここまで激しく人を破壊することなど不可能なんだ」

「怨念の力で頭を吹っ飛ばせないって……。だったら、君はプロデューサー達の死因が、祟りなんかじゃないって言うのかい？」

高槻が、意外そうな顔で紅を見た。心霊現象に対しては肯定的になつていたものの、高槻は所詮素人である。紅の言う、向こう側の世界のルールなど、その殆どが未知の世界の話だった。

「そこだ。俺が最も疑問に思ったのは、あんたの口から祟りの話が出たときだ。確か……神居結衣とかいう女の霊が、番組関係者に復

瞥して回っている。そんな予想を立てていなかったか？」

「そりゃ、確かにそんな話もしたけど……。でも、別の僕だって、自分で勝手に予想を立てたわけじゃない。そこにいる、ADの宮森君。彼から話を聞いて、そう思ったんだ」

「そうか……。まあ、そんなことは、今はもうどうでもいい。仮にこの話が本当だったとして、そうになると生前の神居結衣は、とんでもない力を持った超能力者ということになる。だが、そんな話はどこにもなかったし、そもそも犯人は神居結衣の怨霊なんかじゃなかった」

「怨霊じゃない！？ それじゃあ、今回の事件の犯人ってやつは、いつたい……」

それ以上は、高槻も言葉を発することができなかった。

今回の事件の犯人。それは神居結衣の怨霊などではないという。では、合わせて二人もの人間を変死に追いやった、真の黒幕とは何者なのだろう。そんな強大な力を持った相手とは、いつたいどんな存在なのだろう。

昨日、紅に言われるままに、街中をあれこれと引つ張り回された記憶が蘇った。雪乃の写真集を見て何かを閃いた後、紅は高槻に車を出させ、今回の事件に関係した者の家の何件かを尋ねてまわった。その際、何やら探っている様子だったが、何をしているのかまでは告げてくれなかった。

あれはきっと、今回の事件の証拠になるものを探していたのだろう。もっとも、それはなにも、目に見える物証のようなものではな

いのかもしれない。幽霊が足跡や指紋を残すなどという話は聞いたことがないため、紅にしかわからない、何か霊的な痕跡のようなものを探っていたのかもしれなかった。

「今回の事件の全貌。それを知るためには、まず先に見てもらいたいものがある。昨日、俺が嶋本に頼んで送らせた、例の番組を録画したものだ」

部屋の隅の台にあたりリモコンを取り、紅がテレビの電源を入れた。チャンネルを合わせて操作すると、画面が数日前に放送された、奇跡空間ミラクルゾーンのものに切り変わった。

「これが、問題の番組だ。スタジオの映像には問題ないんだが……重要なのは、この後だ」

リモコンの早送りボタンが押され、映像が流れるように去って行く。スタジオの場面は全て飛ばし、やがて画面は、番組の目玉とも言える記録映像のシーンになった。あの、凍呼が主役の廃屋探索レポート。本当にあった呪いの館の名を冠したやらせ映像だ。

屋敷の扉を開け、画面の中の凍呼が恐る恐る中に入っていく。昼だというのに室内は薄暗く、カビと埃の臭いが画面越しにも漂ってきそうな雰囲気である。

廊下を抜け、凍呼が部屋に入ろうとしたところで、紅は唐突に映像を止めた。一時停止の指示を出し、画面の中の世界で時間が止まった。

「とりあえず、こいつを見て欲しい。番組の撮影班が訪れた時、ここは浮遊霊や自縛霊の巣窟だった。俺や、その陰陽師なら、普通



の人間には見えないものが映っているのもわかっただろう。それに、霊感を持っていない人間であっても、よく見れば変な物が映っているのに気がついたはずなんだがな……」

止まった画面の一部を指差し、紅はそこを軽く指先で叩いた。まゆがじっと目を凝らして見ると、隣にいた凍呼が軽い悲鳴を上げて口元を抑えた。

そこにあつたのは、紛れもない人間の目玉だった。暗い、部屋の隅の影になった場所。およそ人間が隠れるスペースなどない部分に、実にはつきりと人の目玉が映っていた。

「確かにこの屋敷は、本物のお化け屋敷だった。やらせで映像を撮影しても、これだけ色々な霊が映るんだからな。こんな場所に足を踏み入れて、霊を刺激するようなことをすれば……後で変なことが起きても、何ら不思議じゃない」

悪戯に、霊を刺激するな。そう言わんばかりの口調で、紅は凍呼の方に目をやった。別に、凍呼自身が好き好んで屋敷に足を踏み入れたわけではなかったが、屋敷の霊にしてみれば、そんなことはどうでもいい。中途半端な気持ちで霊の巣窟に土足で上がったという点では、凍呼にもまったく非がないわけではない。

「この映像を撮影した後、スタッフの一部は怪奇現象に悩まされたらしいな。残念ながら、再現映像を流す前に番組が中断されてしまったみたいだが……家に帰ったお前達が、何がしかの恐怖体験をしたこと。これは、間違いないな？」

念を押すようにして、紅が凍呼に問う。いきなり話を振られ、凍呼はしばし緊張した面持ちで、その場に固まって動けなかった。

「は、はい……。あの……確かに、変なことは起きました……。夜中に金縛りに遭って……。それから、全身にも蛇に絞められたような痕が残って……」

震える声で、凍呼が胸元を抱えるようにしたまま紅に語った。できれば、あのときの記憶はさっさと忘れたい。そんな風に思われる言い方だった。

「でも……。最後は、その蛇のお化けも、御鶴木先生が退治してくれたいなんです。だから、もう、お化けに怯える必要もないって……。そう、思ってたのに……」

金縛りの記憶と、全身に霊傷を残された記憶。そして、室井の遺体を目の当たりにしたときの記憶。色々な物が頭の中で蘇り、凍呼は今にも泣き出しそうになっていた。

自分は別に、好きで心霊番組のレギュラーをやっているわけではない。お化けとか、幽霊とか、妖怪とか……。そういった類の物が出る話は、実のところ大の苦手だ。話を聞くだけなら耐えられるが、いくらなんでも、自分が当事者になってしまっってはやってられない。

もう、いい加減に終わりにして欲しい。そんな凍呼の、心の叫びが聞こえてきそうだった。

さすがに、これ以上は凍呼に話をさせるのも無理だろう。仕方なく、紅は再び画面に顔を向け、先ほどの解説の続きを始めた。

「さて……。その陰陽師が、この屋敷に巢食う霊を退治したこと。それは、俺も薄々感づいていた。普通、これだけの霊が映り込んだ

映像を直に見たら、大なり小なり何らかの影響がある。霊の持っている負の波動を受けて、気分を悪くする人間だっているかもしれない」

「負の波動、か……。でも、その映像の幽霊たちは、御鶴木先生が退治したのよね？ だったら、今回の事件には、その映像は何も関係がないんじゃない？」

「ああ、お前の言う通りだ、篠原。実際、俺も最初の方は、映像に關してはそこまで注意を払っていなかった。ただ、もしかすると編集の際にカットされた部分に、何かまだ被い損ねたものがいたんじゃないかとは疑っていたが……」

「えっ、違うの？ だったら、その映像と今回の事件の関係性について、いったい何なのよ!？」

「そう慌てるな。物事には、説明するための順序がある。まずは手始めに……この映像に隠された本当の悪意を、俺がお前達に見せてやる」

リモコンを画面に向け、紅の瞳がスツと細くなった。その場に居る全員の視線が、否応なしに画面に集中する。

「見ていろよ……。こいつが今回の諸悪の根源……二人の人間を変死に追い込んだ、忌まわしき 呪い の正体だ!！」

そう、紅が叫ぶのと、彼が映像のコマ送りを始めたのが同時だった。先ほどの、早送りの映像とはまた違う、ストップモーションの繰り返し。ビデオではなく、スライドショーか何かを見せられているような、実に遅々としたコマ送り作業。

いつたい、これは何の意味があるのだろう。紅は何を考えて、こんな奇妙なことを始めたのだろう。

そう、まゆが訝しく思ったとき、彼女の視線は画面の中に映し出されたものに釘付けとなった。

「ちよっ……な、なによ、これ……」

それ以上は、何も言葉が出なかった。まゆだけでなく、その場にいた殆どの人間が、画面の中に映し出された物を見て絶句していた。

そこにあつたのは、幽霊屋敷の探索映像の一場面などではない。未だかつて誰も見たことのない、実に奇妙で不可解な映像。暗闇に包まれた、どこかの高台のような場所にある、三本の足を持った奇怪な鳥居が映し出されていた。

く 九ノ刻 禍崇 く

時間の止まったような静寂の中で、全員の視線が一点に集まっていた。

本当にあつた呪いの館と称して作られた、廃墟となつた屋敷の探索映像。やらせを抜きにしても、確かにそこには無数の霊が存在していた。制作者の意図とは別に、本物の心霊映像として、様々な霊が映り込んでいた。

だが、それらのことを抜きにしても、今、目の前の画面に映し出されている映像は、あまりに奇妙だった。

暗い、決して開けない夜を思わせる空間の中に立つ、奇怪な三本足の鳥居。ちょうど、真上から見ると三角形の形になるように、三本の柱の上部が繋がっている。三方向、どこから見ても鳥居の姿となるような、そんな不可思議な作りになっている。

三柱鳥居と呼ばれるこの鳥居は、実はそこまで珍しいものではない。確かに、まゆや凍呼のような人間からすれば奇異に映ったかもしれないが、少しでも民俗学や神社などの話に詳しい者にとっては、それなりに名の知られているものである。

問題なのは、この鳥居が日本各地に点在する三柱の鳥居の、どれにも当てはまらないということだった。作られた目的さえ不明な三柱鳥居だが、目の前の画面に映っているそれは、どこに立てられたものなのかさえ定かではない。背景には鬱蒼とした森のような物が映っているだけで、神社の境内の中にあるものなのかさえわからない。

そして、この映像を見て、御鶴木魁のような人間までもが我が目を疑った理由。それは、この鳥居から放たれる、恐ろしいまでの悪意に他ならなかった。

霊的な負の波動。呪いのオーラ。呼び方は様々だが、それが意味しているところは一つ。触れた者に災いを成し、闇の世界に引きずり込む。最終的には死という形で、関わった人間に破滅を呼ぶ。

いったい、この鳥居は何なのか。なぜ、こんな物が、例の廃墟探索映像の中に入っていたのだろう。そして、そもそもこの鳥居は、どこの誰が何の目的を持って立てた物なのだろう。

あまりにもわからないことが多過ぎて、その場にいる誰もが次の言葉を出せなかった。ただ、静寂の中で時だけが流れ、不気味な沈黙が辺りを支配していた。

「さて……。そろそろ、本題に入らせてもらいたいんだが……構わないか？」

水を打ったように静まり返った部屋の中に、紅の声だけが響いた。その声につられるようにして、何人かの人間が顔を上げた。

「こいつの正体は何なのか、正直なところ、俺にもわかってはいない。ただ……この鳥居の画像から放たれる、凄まじいまでの悪意。それが、番組のプロデューサーとディレクター……二人の人間の命を奪ったのは間違いない」

「えー？　ちょ、ちょっと待ってよ……。だったら、そんなものを直に見ちゃって、私たちは大丈夫なわけ！？」

目の前の鳥居の画像が、西岡と室井の二人を殺した。それを知ったまゆが、慌てて抗議の声を上げる。二人の死の原因がああ映像ならば、そんな物を直接凝視して、果たして本当に大丈夫なのだろうか。

「心配するな、篠原。確かに、普通の心霊映像なら、こいつは危険極まりない代物だ。霊害封じの類を施さない限り、まともに直視すれば、祟りを受けることは間違いない。あくまで、普通の心霊映像だったらな……」

「普通の？　ってことは、それ、何かの細工でもしてあるってわけ？」

「鋭いな。お前の考えている通り、こいつには悪意の予先を特定の人間に向ける細工が施してある。いったい、何をどうやったのかは俺にも不明だが……とにかく、本来であれば無差別に撒き散らされるはずの負の波動を、どこか一点に集約するようにして放っている」

「どこか一点に集約？　ま、まさか、それって……！！」

頭の中で、様々な物が一つに繋がって行く感覚がまゆを襲った。紅の話を信じるのであれば、西岡と室井の二人の命を奪ったのは、この鳥居の映像だ。そして、本来であれば無差別に撒き散らされる呪いのようなもの。それを一点に集約して放っているとすれば、話は見えてくる。

「この映像を細工したやつは、最初からターゲットをプロデューサーとディレクターの二人に絞っていた。だから、その二人だけに霊傷が現れるように、負の波動の予先を特定の人間に対して集約し、

凝縮させたんだ。他の者が見ても影響を受けず、かつ決して怪しまれないように……あくまで、コマとコマの間に挟むようにして、誰にも気づかれずに対象を殺せるようにな」

「へえ、こいつは面白いね。君の犬神を通して話には聞いていたけど……要は、幽霊屋敷の映像の間に呪いの映像を紛れ込ませて、誰にも知られずに西岡さんたちを呪った……。そういうことかい？」

「そうだ。この仕掛けを企んだやつは、最初からわかって廃墟探検の映像を選んだんだろうな。何の変哲もない映像に紛れ込ませれば、いくら対象を指定したとはいえ、俺たちのような人間に気づかれるかもしれない。だが、幽霊だらけの屋敷の映像に紛れ込ませれば、それは上手い具合に隠れ蓑になる」

木を隠すには森の中。そして、呪いを隠すには幽霊の中。そう言わんばかりの口調で、紅は言い切った。

この映像に罠を仕掛けた者は、実に巧妙な手口で二人の人間を殺した。恐らくは、幽霊屋敷の幽霊たちが、御鶴木魁によって除霊されること。そこまで読んで、仕掛けを施すに至ったのだろう。

幽霊屋敷の幽霊たちが放置されていれば、それは隠れ蓑となって真実を隠す。その一方で、幽霊が退治されてしまえば、おのずと映像に対して疑いを持つ者がいなくなる。もとより、除霊の済んだ映像という認識を周りに与えることで、二人の人間が亡くなった原因が、別のところにあるのではないかと錯覚させることも可能だ。

どちらにせよ、廃屋探索の映像が、二人の人間を殺したわけではないと思われる。そうなれば、この罠を仕組んだ者のたくらみは、決して明るみに出ることはない。



「呪いを廃屋探索の映像に隠した、か……。なかなか面白い推理だね。でも……だったら、何で西岡さんと室井さんは、あんな唐突に死んだりしたんだい？ 仮に、君の言っている話が本当だったとして……そんなに強力な力を持った映像なら、試写の際に亡くなっているもおかしくないじゃないか」

解が紅に、挑戦的な目を向けて来る。興味半分、しかしともすれば、話の主導権を他人に握られているのが、あまり面白くないといった気持ち半分といったところか。

「確かに、そっちの言うことにも一理ある……」

珍しく、紅も魁に同意した。この場に照瑠がいたならば、普段の彼との違いに言葉を失ったことだろう。もっとも、紅としても今は事を荒立てる気はなく、あくまで説明の方を重視しているだけだったが。

「しかし、考えても見る。いくら凝縮された負の波動を受けたからといって、たったの一瞬……三十分の一秒に満たない時間しか目にしないんだぞ。潜在意識の中には刷り込まれるだろうが、一瞬の映像が与える影響は微々たるものだ。だから、当然のことながら死ぬまでに時間がかかるし、何度も見なければ即死もしない」

「なるほど。それじゃあ、番組の放送中に西岡さんが亡くなったのは、試写に加えて本番でも映像を見たからってことか」

「そういうことだ。室井とかいうディレクターが、プロデューサーよりも遅れてなくなっただのは……まあ、個人差みたいなものだろう。霊的な攻撃に対する耐性みたいなものは、個々人によって異なるから

な」

紅が、横目でちらりと雪乃の方を見た。彼の言わんとしていることが何なのか。それを知って、雪乃も軽く頷いて答えた。

以前、紅が初めて雪乃と関わった事件で、彼は雪乃のことを耐霊体質であると言っていた。要するに、霊的な感性が極めて鈍く、故に霊の攻撃に対しても強いという体質のことである。

心霊スポットなどに行ってもまったく霊を感じない代わりに、呪いや祟りといった霊的な攻撃にも強い。長期間、ツ攻撃を受け続ければその限りではないが、去年の暮れの事件では、その体質が雪乃の命を繋ぐ鍵となった。

雪乃が耐霊体質ならば、恐らく西岡は、その反対だったのだろう。室井に比べても霊的な攻撃に対する耐性が低く、それ故に、本番で映像を見終えた際、その身体に蓄積していた負の波動による影響が加速度的に高まったのだ。

### 刹那の魔。

そんな言葉が、紅の頭をふつとよぎった。

誰にも気取られないよう、瞬きするよりも短い時間の中に、恐るべき呪いを忍び込ませて相手を殺す。巧妙に真実を欺き、あらゆる者の目を巧みに誤魔化し、人知れず目的を遂行する悪魔の罫。

こんな恐ろしく、かつ巧妙な罫を仕掛けた者は、いったい誰なの

だろう。その答えは、紅の中では既に予想がついていた。

「今回の事件の真相……。それは、呪いの館の幽霊どもの祟りでもなければ、ましてや神居結衣なんていう女の祟りでもない。全ては西岡と室井……。二人の男の死を望む人間が、巧妙に仕組んだ罠だ！」

赤い瞳が、その場にいた全員に向けられる。罠を仕掛けた犯人は、ここにいる人間の中にいる。そう、紅の瞳が語っている。

「そろそろ、黒幕の正体を暴いてやってもいいだろうな。廃屋探索の映像に仕掛けを施して、プロデューサーとディレクターを殺した人物……。それは他でもない、貴様のことだ!!」

紅の指が、部屋の隅に座っている男の顔に向けられた。その動きに合わせ、全員の視線が一齐に男の方へと向けられる。

彼の指差した方向で、青い顔をして唇を震わせている一人の男。それは他でもない、A Dの宮森良太だった。

「そ、そんな……。！ 宮森さんが……。あの人が、今回の事件の黒幕だったって言うんですかあ!？」

突然、凍呼が叫んで立ち上がった。今まで信頼して来た人間が、唐突に全員の前で犯人呼ばわりされる。その現実が、どうしても信

じられないようだった。

「ふう……。残念だけど、そいつは事実だよ、トーコちゃん。俺も、その外法使いから大まかな話は聞いていたけど……。まさか、本当にここまで話を繋げて、呪いの正体を暴くとは思わなかった。揚足を取って、俺が代わりに主役になってやろうかと思っただけど、どうやらお呼びでなかったようだね」

「真実って……。それじゃあ、御鶴木先生は、最初から今の話を知っていたんですか!？」

「ああ、そうだよ。昨日、こいつの犬神が、わざわざ俺のところまで来てメッセージを伝えてくれたからね。それに乗って動いたお陰で、ある女の人の幽霊を、あちこち探し回ることになっちゃったけど……」

飄々とした口調で、魁が両手を広げて喋っていた。もう、これ以上の茶番はお終いにしたい。さっさと犯人を捕まえて、家に帰って休みたい。そんな空気を醸し出している。

「今回の事件、そもそも神居結衣の名前を最初に出したのは、貴様だったようだな。確か、最初は高槻さんに、神居結衣の祟りである可能性をほのめかしたはずだ」

上から見下ろすような目線で、紅は宮森を睨みつけた。もっとも別に弁解するでもなく、宮森はただ、紅の話を聞いているだけだったが。

「俺のような霊能力者が現れたことで、貴様は相当に焦ったんだろ。うな。予定外の登場人物は、シナリオを大きく狂わせる可能性がある」

る。だから、貴様はあえて神居結衣という女が存在を出すことで、捜査の目を廃墟探索の映像から離れさせようとした。何が何でも、今回の事件を神居結衣のせいにしたい。そう思わせるために、色々と自分から動き回ったんだ」

「くっ……」

宮森の口から、舌打ちのような低い声が毀れた。固く歯を食いしばり、両肩を震わせて、なんとか屈辱に耐えている。傍から見ても、宮森が紅の言葉に対し、何か思うことがあるのは明白だった。

「決定的だったのは、室井とかいうディレクターの頭から発見された、神居結衣のものとされる指輪だ。あれだつて、お前がそこにいる女……葵璃とか言ったか？ 警察が現場に来るまでに、彼女の間隙をついて細工することはいくらでも可能だ。素人を怖がらせるだけなら問題なかったが……俺たちのような、本物の力を持った人間には、返つて妙な疑念を植え付けたただけだったようだがな」

反論の余地はない。確かに、状況証拠だけしか揃っていないとはいえ、現状で映像に細工できるのは宮森しかない。雑用のような仕事を全て請け負っていた宮森ならば、ドサクサに紛れて映像の入ったデータを回収。それに細工を施すことなど、造作もないことだろう。昔のように全てをテープに録画していた時代ならいざ知らず、今ではコンピュータの力を少し借りれば、かなり容易に映像の編集作業だつてできてしまう。

番組制作スタッフの内、二人は変死で一人は殺害。残り一人は堀の中で、未だに軽い混乱状態にある。消去法で考えて言った場合でも、やはり宮森しか残らない。事件が神居結衣の怨念によるものではなく、人為的に仕組まれたものだと考えた場合、宮森以外に犯行

に及べる人間はいないのだ。

もう、さすがに年貢の納め時か。そう思ったのかは定かではないが、宮森の口から軽い溜息と共に笑いが漏れた。

「はは……。そうさ……。そうだよ……。全ては俺が仕組んだこと……。俺が、やったことなんだ……」

普段の明るく、それでいてどこか間の抜けたような空気は、完全に失われていた。やつれた頬と、ひきつった笑顔。未だ誰にも見せたことのないような病んだ表情で、宮森は静かに語りだした。

宮森良太が神居結衣と初めて出会ったのは、陽射しのまぶしい夏の日のことだった。

当時、まだ大学生でしかなかった彼らは、試験の帰りに研究室で顔を合わせて知り合いとなった。宮森は、大学では主に映像に関する科目を専攻しており、結衣とは同じ研究室で共同制作に携わっていた。

「あら、今日も遅くまで頑張ってるわね。でも、あまり無理して身体を壊したら駄目だぞ、宮森君」

まだ、研究室を訪れて日が浅かった宮森にとって、結衣は憧れの先輩の一人だった。その飾らない、男勝りな風貌とは反対に、結衣は後輩に対する気遣いも忘れない女性だ。そして、そんな彼女に宮

森自身が惹かれてゆくのに、そう時間はかからなかった。

仕事もできて、気遣いも上手い。才色兼備のような理想の女性。当然、先輩たちからは、「止めておけ」と釘を刺された。現に、当時の結衣には浮ついた噂の一つもなく、難攻不落の城として、学生の間では有名だった。

このまま待っていて、時間が解決してくれるはずもない。気持ちを伝えるにしても、なんとかして結衣に、相応しい男として認めてもらわねば意味がない。

以来、宮森は一心不乱に彼女の共同制作に協力し、その手腕を少しずつ認めてもらえるようになっていた。

この調子で行けば、もしかすると自分の想いを受け入れてくれるかもしれない。そう思っていた宮森だったが、時間というものに残酷である。

先輩である結衣は、当然のことながら、卒業時に大学側へ提出する制作物を完成させた時点で、研究室を去ってしまった。宮森も彼女の手伝いはしていたものの、結局最後まで想いを告げるには至らなかった。

学生時代の恋心など、所詮は儚いものなのか。なにやら踏ん切りのつかない思いではあったものの、こうなっては仕方がない。彼女のことを早く忘れるためにも、宮森は自分自身の卒業制作に没頭することにした。彼女が去り、学年が上がった今、次は自分が卒業のための制作物を作る番だった。

本当は、想い人を忘れるために作っていただけの、逃避のような

製作行為。しかし、例えどのような物であれ、人の想いが込められたものは、時に他人を魅了する力を発揮するのだろうか。

宮森の作った卒業制作物は、その出来栄を研究室の教授も認めてくれるほどだった。なんというか、一つの大仕事をやりきった感じがして、宮森は正に感無量という心持だった。

それから程なくして、宮森は今のテレビ番組作成会社に就職が決まった。もつとも、いかに大学で優秀な成績を残したからといって、現場の仕事はそこまで楽ではない。加えて、昨今の就職難も相俟って、宮森はADから下積みを経ざるを得なかった。

映像の世界、制作の世界で、自分はもつと大きな仕事がしたい。そう思っても、やはり現実はなかなか上手くはいかないものだ。

職人気質の古株社員たちからは、宮森のような人間は、現場の空気も知らないゆとりの御坊ちゃまとしか見てもらえない。その程度ならまだわかるが、テレビ番組作成とはいえ、腐っても企業。会社組織の負の側面である、上司の嫌がらせなども日常茶飯事だった。

どう考えても一人では運べないような荷物を、ひたすら運搬させられるだけの日もあった。自分の中で温めていた、いつか出世したら使ってやろうと思っていた企画書の案を、休日の際にデスクの中を漁られる形で盗まれたこともある。しかも、その後に上司がそっくりそのまま自分の企画に盗用しており、なんとも言えぬやるせなさを抱いたものだ。

自分はいつたい、ここで何をしているのか。こんなことが、本当に自分のやりたいことだったのか。何度心も折れそうになったが、そんなとき、彼のことを支えてくれた人が一人だけいた。



「あら、相変わらず遅くまで頑張ってるわね。学生時代から、ずっと変わらないわね、宮森君」

あの日、卒業を境に会えなくなっていた、結衣の言葉だった。彼女もまた宮森と同じ道に進んでおり、なんの偶然か、同じ会社に勤めていた。

もつとも、宮森とて、別に狙って彼女の就職先に応募をしたわけではない。たまたま就職した先に、彼女がいたというだけだ。それに、昔は単なる先輩と後輩の関係だったが、今では上司と部下の関係でもある。以前のように、気さくに自分から声をかけることなど、なかなかどうして難しい。

しかし、それでも宮森が、この再会に何らかの運命を感じていたのは間違いない。今度こそ、今度こそ自分は想いを告げるんだ。そう思って、ひたすらに仕事を頑張った。

当時、彼が入社して間もなく、結衣はディレクターの職に就いていた。大学を卒業したての、しかも女性とあつては、これは異例の出世である。そんな彼女に追いつくのは、いかに宮森が歯を食いしばって頑張ろうとも、なかなか難しいことだった。

自分だって、同期の中では優秀とされている人間の一人なんだ。だから、頑張って結果が出せないはずがない。今はしがないADでも、いつかは必ず……。

そんな想いを胸に秘めつつも、宮森は結衣が、いったいどのような番組を作っているのか気になった。彼女が制作に関わっていたのは、奇跡空間ミラクルゾーンと呼ばれるバラエティ番組。一見

して怪奇番組と見紛うようなタイトルだったが、その中身を見たときに、宮森はそれが誤解と偏見であると知った。

世界中を飛び回り、毎週、様々な奇跡と感動のエピソードを紹介する。しかも、決して安っぽいお涙ちょうだいストーリーばかりではなく、時に人として、深く考えさせられるような物語も多かった。

自分の小ささと、尊敬してきた結衣の大きさを、改めて感じさせられた瞬間だった。今の自分では、逆立ちしても結衣には敵わないもう、いいかげんに、学生時代の片想いを引きずるのは止めよう。そう、思ったこともある。

しかし、そんな宮森の気持ちを知ってか知らずか、結衣は職場でよく彼に絡んで来た。気がつけば、帰りに居酒屋で酒の友として誘われることも多く、恋人未満であるが友達以上であるような、奇妙な関係が続いていた。

このまま、こんな時間がずっと続けばいい。柄にもなく、そんな感傷的な気分に戻ってしまったこともある。例え、今は恋人として側にいることができなくても、自分は十分に幸せだ。こうして、自分のことを理解してくれる女性と、少しでも片を並べて話ができるのであれば。

このときは、そんな他愛もない毎日が、ずっと続くものだばかり思っていた。

宮森が結衣の訃報を聞いたのは、彼が今の会社に入ってから一年ほど経ったときのことだった。

彼女が亡くなったという話を聞いたとき、宮森は自分の耳が信じられなかった。警察の発表では自殺ということだったが、そもそも結衣には自殺に至るような動機がない。仕事も順調に軌道に乗っており、こと彼女の担当する番組、奇跡空間ミラクルゾーンの視聴率は、うなぎ昇りだったというのに。

いったい、彼女はどのようにして自殺などしてしまったのか。なぜ、一言自分に相談してくれなかったのか。こんな頼りない自分であっても、話をしてくれば、何か力になれたかもしれないのに。

結局、自分は彼女にとって、何の力にもなれないのか。虚しさだけが心を支配し、宮森は自分の目の前が真っ暗になるのを感じていた。

おしまいだ、なにもかも。大袈裟と言われるかもしれないが、結衣は自分にとっての生きる糧だった。いつか、彼女に相応しい男になって、彼女に自分の気持ちを伝えたい。それだけを糧に、今まで頑張ってきたというのに。

自分の信じていた物が音を立てて崩れて行くのを感じながら、宮森は気がつくと橋の上にいた。

夕暮れ時、街外れの橋の上には、遠くからカラスの鳴く声だけが聞こえてくる。下を除けば、そこには列車の線路が見える。この上から、列車が走り込んで来た時に合わせて飛び下りれば、痛みを感じる暇もなく死ねるだろう。

そうだ。どうせ生き甲斐を失ってしまったんだから、これ以上は生きていても仕方がない。なぜ、結衣が自ら命を経ってしまったのか。その理由はわからないが、彼女の気持ちだけは自分にもわかる。死んで、楽になってしまおう。弱い男だと笑われても構わない。情けない人間だと馬鹿にされてもいい。希望を失ったのにも関わらず、情性でダラダラと生き続けるよりは、はるかにマシだ。

淀んだ闇をその瞳に宿したまま、宮森は電車が下を通るのを待った。やがて、風を切る微かな音と共に、橋の下に特急列車が近づいてきた。

このまま落ちれば、全ては終わる。そう思い、宮森は手すりに手をかけた。が、彼が飛び降りようとした、正にその瞬間、後ろから唐突に呼び止められ、思わず動きを止めた。

「やれやれ、自殺ですか……。夕暮れ時に、橋の上から飛び込み自殺なんて、あまり感心できませんよ?」

振り向くと、そこには知らない男がいた。今まで、誰も橋の上になかったというのに、いったいどこから湧いて出てきたのか。いや、それ以前に、この男はいったい何者で、なぜ自分に構うのだろうか。

「余計なお節介は止めてください……。どうせ、俺はもう生きる意味を失ったんです。だから……。放っておいてくれませんか?」

「おやおや……。まだ若いのに、随分と悲観的な考えを持っているようですね?」

「お節介は止めるって言っただろ？それに、若いつて……あんたも、俺と年齢は、そう変わらないように思えるけどな」

「これは失礼。ですが……僕は別に、ただの気まぐれであなたの自殺を止めようとしたわけではありません。今日はあなたに、少しばかり伝えておきたいことがあります……」

青年の顔が、にやりと笑う。この世の全てを知っている。そんな人間が見せる、一種の余裕とも言えるような表情だ。

「あなたの尊敬していた女性……確か、名前は神居結衣さんでしたか？ 彼女の自殺の原因を、僕は知っているんですよ」

「なっ……！？ どうしてあんたが、神居さんの名前を……！」

「それは、企業秘密というやつです。ただ……もし、あなたが真実を知りたいというのであれば。あなたがそれを知って、新たに生きる希望を見出すというのであれば……僕はあなたに、僕の知る全てを教えましょう」

不敵な笑みを浮かべたまま、青年がゆっくりと宮森に近づいてきた。彼の手に握られているのは、一冊の古びた日記帳。目の前に差し出されたそれに目をやると、そこには宮森の良く知る筆跡で、結衣の名前が書かれていた。

「それから……俺は、その日記帳を読んで真実を知ったよ。彼女が

……神居さんが、なんで自殺なんかしてしまったのか。彼女をそこまで追い込んだのは、いったい誰なのか……」

会議室の片隅で、宮森良太は紅たちを前に静かに語っていた。その声は震え、かつての宮森の面影はない。ただ、自分の感情を吐露することで精一杯な、小さく掠れた声だった。

「彼女の日記に書いてあったことを、俺は今でも忘れない。彼女が死んだ原因を作ったのは……否、彼女を殺したのは、あの会社でミラクルゾーンの制作に関わっていた連中だったんだからな……」

宮森の顔が上がり、その瞳が全員を睨むようにして見た。

神居結衣は、自殺ではなく殺された。しかも、その犯人はミラクルゾーンの制作スタッフ。あまりに衝撃的な事実には、その場にいた誰しもが言葉を発することができなかった。

「あの当時……神居さんは、本当に頑張っていたんだ。ミラクルゾーンみたいな、一見して低俗な番組で、あそこまでの視聴率を叩き出す。それだけ彼女の才能は非凡で、仕事のできる女性だったんだ……」

「確かにな……。貴様の話を効く限りでは、神居結衣はやり手の人間だったらしいな」

紅が、宮森に同意した。もともと、その目は常に正面に向けられ、首を縦に振ることはない。油断なく相手を見据えつつ、彼の懺悔に耳を傾けている。

「でも……そんな神居さんのことが、プロデューサーの西岡は気に

入らなかった。ディレクターの癖に、自分よりも後輩達から支持を受ける。女の癖に、自分よりも仕事ができる。そんな風にしか、神居さんのことを見ていなかった……」

宮森の顔が、再び下に向けられた。その瞳は、いつしか涙で滲んでいる。尊敬していた人に対する。差別と偏見の眼差し。その、あまりに理不尽な扱いに、悲しさを覚えずにはいられないようだった。

「だから、あいつは……西岡は、ミラクルゾーンのスタッフを抱き込んで、番組を完全に私物化することを考えたんだ！ カメラマンの加瀬と、音響の古澤……それに、子飼いの部下だった室井を抱き込んで、彼女の尊厳をズタズタに踏みにじったんだ！！」

「尊厳を踏みにじる？ だが、いくらパワハラの酷い上司でも、下手をすれば逆に訴えられるんじゃないか？ それこそ、貴様の話にある神居結衣なら、そのくらいの行動力はあるそうなものだがな」

「ふふふ……。確かに、そうかも知れないさ。ただの、ちょっとした嫌がらせ程度なら……神居さんは、絶対にあんなクズどもに屈したりはしなかったさ……」

宮森が、肩を震わせながら呟いた。鳴いているのか、それとも笑っているのか。恐らくは、その両方だろう。

「だけど、それは連中もわかっていた。だから、絶対に彼女が逆らえないようにするために、あいつらは手段を選ばない行動に出たんだ！」

「手段を選ばない行動だと？」

「そうさ！ あいつら、彼女に全員で乱暴して、その様子を記録しやがったんだ！ その上で、西岡の野郎……あの下衆は、神居さんに言い寄ったんだよ！ 俺の女になれば、今よりいい思いをさせてやる。番組をよこせば、この映像も他所には流さないってな！！」

最後の方は、怒りに任せてまくし立てているような感じだった。一瞬、部屋の中の空気が破れるような感じがして、さすがの紅も、それ以上は言葉を失っていた。

謎の青年が、宮森良太に渡した神居結衣の日記。そこに書かれていた、西岡達による非道な行いの真実。衝撃に次ぐ衝撃の連続で、頭を追いつかせるのが精一杯だ。

たかだか仕事の主導権を握るために、犯罪と知りながら手段を選ばぬ行動に出る。およそ、紅には理解し難い心情だったが、目の前の宮森が嘘を言っているようには思えなかった。

「このことを知ったとき、俺でさえ自分の目を疑ったさ。でも、現実ってやつは残酷なんだ。彼女の日記は確かに本物だったし、彼女が自殺したのも本当のことだ。そして……彼女が亡くなった後、西岡と室井が番組を私物化して、その手柄を全て横取りしやがったのもな！！」

「なるほど……。それが貴様が、今回の復讐計画を思いついたきっかけか」

「ああ、そうだよ。もつとも、事実を知っても、そう簡単に計画を実行するわけにもいかなかったけどな。ただ……運命の神様ってやつは、やっぱりいるんだな。あいつら、下っ端のパシリが欲しかったから、よりにもよって、俺を番組のスタッフに選びやがったんだ。



まったくもって、間抜けな連中だよ」

今は亡き西岡と室井に対し、宮森が軽蔑するように鼻で笑った。同じ死者であっても、結衣に対するような追悼の念などない。ただ、復讐を遂げたという満足感だけが、今の彼の中を満たしていた。

「あいつらの下で仕事をするようになってから、俺は機会を窺った。すると、あいつがまた、俺の前に現れたんだ」

「あいつ？」

「俺に、神居さんの日記を渡してくれた男だよ。あいつは俺に、今回の復讐計画を持ちかけて来た。やらせ映像の中に、邪神の祟りを歪ませた、特殊な映像を紛れ込ませる。そうすることによって、特定の人間にだけ祟りが起こるようになって、一種の呪いみたいな効果を発揮する。そう言って、俺に必要な物を全て渡してくれた」

「なるほどな。だが、お前がそうまでして、犯行を神居結衣のものと認めさせたかった理由はなんだ？ やはり、彼女のされたことを、連中に忘れさせないためか？」

「ああ、それもあるね。俺は何度か家に行ったから、そのときに隙をついて中を物色させてもらったりしたけど……西岡と室井の家には、神居さんを脅迫するのに使った映像ディスクなんかは見当たらなかった。だから、この二人にはさっさと死んでもらって、残る二人を脅かすことにしたんだ。その上で、映像の入ったディスクを回収して、連中を始末するつもりだった」

「だが、それはカメラマンの加瀬を暴走させ、古澤を殺害させるに至った。そういうことか……」

「その通りだよ。最後の最後で、予定が狂って少しだけ焦ったけどね。でも、俺はこれでも満足だよ。連中の内、三人は死亡で一人は塀の中。もう、あいつらが神居さんの……結衣の映像を外部に流すような心配もない。俺の復讐も、ここで終わっただ……」

ほつと最後の溜息を吐いて、宮森が力なく項垂れた。

気が弱く、いつも肝心なところで自分に自信が持てず、好きな女に想いを告げることさえできなかった宮森。そんな彼にとって、結衣のような存在は、正に生きるための糧だった。彼女が支えてくれたからこそ、今の自分がある。そう、宮森は信じていた。

今回の復讐を決意したのも、そんな宮森の想いがさせたことだ。

確かに、証拠として謎の男から預かった日記帳を警察に渡せば、西岡たちに捜査の手が回ったかもしれない。が、それは即ち、結衣が乱暴された際の光景が収められた映像が、表の世界に出回る危険を意味している。

捨て鉢になった西岡たちが映像をネットにでも流してしまえば、もう宮森に止める手立てはない。それ以前に、彼らがしらを切り通せば、そこで警察の追及も終わる。むしろ、結衣の日記を持っていたことで、こちらに変な疑いが掛からないとも言い切れない。

死して尚、想い人が映像の中で辱められる。宮森にはそれが、どうしても許せなかった。どんな手を使ってもいい。最悪、自分が警察に捕まることになってもいい。なんとかして、あの四人に復讐してやろう。そう思って、今日まで生き長らえて来た。

その復讐も、今日で終わる。全ての真実が明るみに出された今、

自分に言い逃れをする術はない。もつとも、果たして呪いによる殺人が、法的にどのような処罰を受けるのかは、宮森自身もわかってはいないのだが。

「やれやれ……。これで、説明は終わりかい？　なんか、ちょっと待ちくたびれちゃったんだよねえ……」

部屋に籠る陰鬱な空気を払うようにして、魁が大きく伸びをした。そして、待っていたかのように懷に手を伸ばすと、その中から一枚の紙人形を取り出した。

「ねえ、宮森君。君の言っていた神居さんって人なんだけどさあ……。別に、復讐とか望んでなんかいなかったと思うんだよね。君が勝手に思い込んでいるだけでさ」

魁が苦笑しながら紙人形を机に置く。人形はそのままスーッと動き、宮森の前まで来ると音もなく止まった。

「俺、その外法使いから連絡受けて、総ちゃんと一緒に神居結衣って女の幽霊を探したってわけ。本当に彼女が人を呪い殺しているのかどうか、それを確かめるために……とりあえず、今回の事件の関係者の家に、ありったけの式神を放って搜索させたんだ」

「さ、探したって……。それじゃあ、結衣の魂は、まだ……」

「ああ、そうだよ。彼女の魂は、まだ現世に留まっていた。しかも、彼女を見つけた場所が、どこだったと思う？」

自分の手柄を見せびらかすようにして、魁はあえて勿体をつけるような話し方をする。先程まで、紅に主導権を握られていたことに

対する憂さ晴らしだろうか。こんな時でさえ、あくまで自分のペー  
スでしか物事を考えないのが、彼らしいと言えば彼らしい。

突然、ボツという音がして、宮森の前に置かれた紙人形に火がつ  
いた。一瞬、それに驚いて、宮森が立ち上がり後ろに下がる。

紙人形は、紫色の炎を上げて燃えていた。その炎から出た煙は、  
徐々に固まって人の姿を形作る。うつすらと白く、それでいて生前  
の面影を残した、女性の姿へと変わってゆく。

「あ……あ……」

全員の目が、人形から出た煙に集中していた。紅と総司郎は、既  
にこういった状況に慣れているからだろうか。別段驚きはしなかつ  
たが、それでも静かに事の行く末を見守っていた。

「か、神居……さん……」

そこにいたのは、紛れもない神居結衣だった。もつとも、生前に  
宮森に見せていた、気丈な瞳はそこにはない。ただ、目の前で全てを  
吐露した男に対して、憐みとも取れる視線を向けていた。

「彼女の霊がいた場所。それ、他でもない君の家だったんだよねえ。  
靈感の鈍い君にはわかんなかったみたいだけど……彼女、ずっと君  
を見守っていたみたいだね。復讐なんかに手を染めて、何もかもを  
失ってゆく。そんな君の姿を、ずっと憐れんでいたんだよ」

「そ、そんな……。だったら、どうして神居さんは、俺に何も言っ  
てくれなかったんだ！ いや、俺なんかじゃなかったいい！ あ  
んな達みたいなのは、靈感の強い人間に言えば、真実だって告げられた

のに――！」

「残念だけど、そいつは無理な相談だ。人間、死んで幽霊になったところで、そう簡単に超能力が使えるわけじゃないんだから。特に彼女みたいに自分よりも他人を心配する人ってやつは、怨念なんかにも成り難い。だから、必然的に力も弱く、現世に訴える方法も限られてしまっただけ」

死んだ者が、幽霊となって目の前に現れる。それだけならば、よくある怪談話として、あちこちで囁かれているものだ。

問題なのは、その幽霊が、果たしてどこまでの力を持っているかということだろう。死んだ人間の誰しもが、人知を越えた超能力を持っているわけではない。そもそも霊とは人間の残留思念のような側面も持つ。そのため、本来であれば酷く不安定で、弱々しい存在なのだ。

「俺だって、式神を君の家に送って隅々まで調べさせなかったら、彼女の霊の存在なんて気づきもしなかったさ。無論、彼女の口から君の所業を聞くこともね。だから、俺は彼女の霊を紙人形の中に宿らせて、こうしてここまで運んできてやったってわけ」

飄々とした口調で、魁はさらりと言つてのけた。本人にしてみれば、ただ、自分の思うことを言っただけのこと。しかし、それでも宮森にとっては、彼の心を砕くのに十分過ぎる言葉だった。

「は……はは……。神居さん……。ずっと、俺の側にいてくれたんっすね……。俺なんかのために、死んでからもずっと、あの世にも行かないで……。俺のこと、見守ってくれてたんっすね……。」

「そういうことさ。これで、君にもわかっただろう？ 呪いってやつは、割に合わない。復讐なんてもんに力を入れても、それは意味がないってね」

魁が指を鳴らし、その音と共に煙が消える。後に残されたのは、焼けて失われた紙人形の残骸のみ。依代よりしろとして使っていた人形を失ったということは、神居結衣の霊は、もうここにはいないのだろうか。

「ふう……。どうやら、これで事件は解決のようだ。それでは、後は全て、こちらに任せてもらおうか？」

今まで、部屋の隅で沈黙を保っていた男が唐突に口を開いた。あの、全身からただならぬ気を発していた、厳つい風貌の男だ。

警視庁公安部第四課、第零系担当、香取雄作。彼もまた、紅によつてこの部屋に呼ばれた人間の一人だった。お互いに情報を交換し合うという約束があるため、彼にも真実を知る権利はある。

その結果、事件が闇に葬られたとしても、それはあくまで紅の預かり知らぬこと。ただ、最初から宮森を問答無用で連行されてしまつては、後味の悪い結果になる。そう思い、彼には魁と違い、最後まで真実を伝えてはいなかったが。

「待て。その前に、一つだけ教えてもらいたい」

男が宮森に近づいたところで、紅がそれを制した。宮森には、まだ聞きたいことがある。今回の事件の真の黒幕は、宮森だけというわけではない。

「貴様に神居結衣の日記を渡した男……。その男について、詳しく教えて欲しい。名前や……。あるいは、風貌だけでもいい。何か、手掛かりになるようなものはないか？」

「名前か……。今となつては、本当の名前かどうか怪しいけど……一応、俺に名乗った名前ならある」

「本当か！？ そいつの名は、いったい何と言う！？」

「まあ、そう慌てないでくれよ……。俺が聞いた、やつ……。名前は……」

そこまで言つて、宮森は急に咳込んで言葉に詰まった。勢い余つて、つい舌を嚙んでしまったのか。そう思った紅だったが、状況は少しだけ違つていた。

「あつ……。かつ……。はつ……」

だんだん咳が酷くなり、宮森の顔が見る見る青ざめてゆく。胸を抑え、喉に手を伸ばし、呼吸さえままならない状態なのが素人目にもわかる。

「み、宮森さん……！」

突然の変調に、凍呼が慌てて駆け寄つた。その肩をつかみ、香取が宮森に近づこうとする凍呼を押さえる。

「待て！ 様子が変わだぞ……！」

香取の声に、その場にいる全員が一斉に立ち上がった。宮森は、

既に頭を抱えて部屋の隅にうずくまり、ガタガタと小刻みに震えている。時折、湿った咳を吐き出しながら、明らかに不自然な動きで揺れている。

「う、嘘……。これって……」

口元を押さえ、まゆが下がりながら言った。彼女の脳裏に、数日前の生放送で目にした光景が蘇る。あのときも、亡くなった西岡と室井が、湿った咳をしてはいなかったか。だとすれば、この後、宮森に起こることは、まゆでなくても容易に想像がつく。

「あつ……があああつ……！」

突然、奇声を発して宮森が身体を大きく仰け反らせた。その顔を見た高槻と、残る三人の少女たちの顔が、瞬く間に驚愕の色に染められた。

野球ボールのように大きく膨らみ、その頭部からはみ出した眼球。既に顔面の半分を覆うほどにまで肥大化したそれは、鮮血をほとばしらせながら、徐々に宮森の顔面を崩壊に導いてゆく。見難く膨らみ、原型を留めぬまでに変形した頭は、既に人の物ではない。

バンッ！！

次の瞬間、風船の破裂するような音がして、宮森の頭が粉々に砕け散った。赤黒い肉片が辺りに撒き散らされ、まゆは思わず吐き気を催してその場にへたり込む。



隣で何かの倒れる音がした。見ると、そこには惨劇を目の当たりにした凍呼が、白目を向いて気絶していた。

長谷川雪乃は、その顔を高槻の胸にうずめて震えている。その高槻も、あまりの出来事に、何をしてよいのかわからない。雪乃のこを受け止めることも忘れ、ただ茫然と立ち尽くしている。

「せ、先生……。これ、いったい何なんっすか！？　なんで、いきなり、こんなこと……」

魁の横では、総司郎も信じられないといった様子で固まっていた。さすがの彼も、いきなりこのような展開になるとは思っていなかったのだらう。視力を失い、霊的な感覚からしか物事を見ることができなくなっていたのは、不幸中の幸いか。もともと、それでも人の死を肌で感じるというのは、決して気持ちのよいものではなかったが。

「なるほど……。どうやら今回の黒幕は、かなり頭の切れるやつらしいね」

珍しく、魁も複雑な顔をして、宮森であったものの遺体を見つめていた。それは紅も同様で、震える拳を握り締め、怒りに顔をゆがませるのが精一杯だった。

今回の事件に用いられたのは、邪神の祟りを歪めたもの。呪いであれば呪い返して宮森が死ぬ危険性があつたが、祟りであれば、宮森本人に危険はない。事件のカラクリを暴いたところで、宮森が代わりに死ぬという可能性はなかったはずだ。

では、それにも関わらず、宮森が亡くなってしまった理由は何か。

答えは簡単だ。彼は謎の青年の正体を隠すため、口封じとして殺されたのだ。そう考えて、間違いはない。

恐らく、この仕掛けを青年に教わった際に、身体に何か細工のよ  
うなものをされたに違いない。西岡や室井に与えた負の波動による  
障害が、そのまま宮森の身体にも現れるよう、何らかの霊的なスイ  
ッチのような物を植え付けられていたのだ。

スイッチが発動する条件は、宮森が男の素性を語ろうとすること  
だろう。これにより、宮森は嫌でも男の正体を告げられなくなり、  
その足取りは完全に消える。最初から最後まで、あらゆる面で、完  
璧に仕組まれた話だった。

絶望の淵に立たされた人間に言い寄り、言葉巧みにその人間を闇  
の道へと誘って、用済みになれば何の未練もなく使い捨てる。嘘と  
真実を巧妙に絡み合わせ、自分の正体が決して他に知られないよう、  
闇の狭間を暗躍する恐るべき呪殺師。

闇の死揮者<sup>コンダクター</sup>。その存在の影を、紅は今回の事件の裏に感じざるを  
得なかった。毎回、あと一步のところまで追い詰めながら、最後は  
尻尾さえつかませずに逃走する。そして、今回も例の如く、死揮者  
の情報は何も得られないまま終わってしまった。

結局、自分は踊らされていただけだ。いや、自分だけでなく、宮  
森も、魁も、そして香取でさえも、全員が死揮者に踊らされていた。  
彼の操る闇の旋律に沿う形で、破滅のステップを踏まされていた。

悔しさと怒り。その二つが、なんとも言えないやるせなさとして  
襲ってきた。果たして自分は、本当に闇の死揮者を追い詰めて、彼  
と対峙することができたのか。赫<sup>あか</sup>の一族の末裔として、彼と決着を

つけることができるのか。

最後の惨劇の場となった会議室で、紅は無言のまま、自分の爪をひたすらに掌に突き立てていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1919x/>

---

獵闇師 ～ 刹那の魔 ～

2011年11月27日22時48分発行